

BULLETIN

金城紀要

OF KINJO

COLLEGE

NO. 50

2026

金城大学  
短期大学部



# 金城大学短期大学部紀要 第50号

## 〈目 次〉

金城紀要第50号の発刊にあたって — 金城紀要レビュー (第1号～第49号) —	加藤 博	1
---	------	---

### 第50号記念企画 「白山市 地域とのかかわり」

#### 芸術的制作

地域文化コンテンツ デジタル紙芝居制作の試み — 加賀藩と金沢城下の暮らし —	新井 浩	37
--	------	----

#### 原著論文

「おやこの広場あさがお」でのアート体験 — 23年間の変遷と不変 —	森田ゆかり	43
観光資源としての手取キャニオンロード自転車道とその可能性の再発見	矢澤 建明	53
地域を支える若者グループの一考察 — 鳥越ワカモノの会を事例に —	若月 博延	63

#### 研究ノート

加賀一の宮アートプロジェクト — 芸術的制作と地域連携の実践報告 —	大場新之助	73
「KINJO おやこひろば「たんぱりん」」と白山市のつながり	米川 祥子	81
白山市及び能美市における学生ボランティア活動 — 三浦ゼミと地域間交流研究会 —	三浦 哲志	85

#### その他

金城美術 × 白山ロータリークラブ — 地域の特性を活かした作品制作 —	堀 一浩	95
はくさんに きいろいしんかんせんがやってきた — 白山市での読み聞かせ活動の取り組みと新幹線の写真絵本制作 —	石野 友子	99

#### 芸術的制作

金城紀要第50号表紙デザイン案	大場新之助	107
金沢民景	山本 周	111
対象(モチーフ)との対話を通じた、日本画制作	坂井亜也子	113

#### 原著論文

地域資源発信における機能マンガと AI 支援 — 概念的枠組みと初期分類 —	新井 浩・井戸 健敬・瀬戸 就一	117
---	------------------	-----

#### 研究ノート

天然藍の灰汁発酵建ての記録 (2)	権田 宜子	125
幼児期の音楽教育を支える教科書比較 — 掲載楽曲の比較分析から —	上野 高裕	135
保育内容「言葉」の領域に関する一考察	喜多志穂美	143
乳幼児の非認知能力 — 非認知能力を育成する保育者 —	村上 知子	151



## 金城紀要第50号の発刊にあたって — 金城紀要レビュー (第1号～第49号) —

加藤 博\*

### On the Publication of *The Kinjo Bulletin*, Issue 50: A Review of *The Kinjo Bulletin*, Issues 1-49

KATO Hiroshi

#### I はじめに

研究と教授の両輪が、併行することを本質とする大学の性格にかんがみ、わが金城短期大学においても「金城紀要」第一号を、本学創立初年度から発刊することにした。

今後「金城紀要」は、毎学年一号ずつ刊行する予定であるから、本「金城紀要」の発行巻数は、本学遍歴の年令と同じ年数を数えることになるであろう。

これは、金城紀要の創刊にあたり、初代学長・大平勝馬氏が記したことばである。1976（昭和51）年に開学した金城短期大学（現 金城大学短期大学部）は、初代学長の強い意向により、開学初年度に紀要を創刊した。時を経て2026（令和8）年、創立50周年を迎える金城大学短期大学部は、初代学長の予言通り、第50号の金城紀要を発行することとなった。紀要というのは、通常の学術雑誌とは異なり、分野が幅広く、そのため必ずしも査読は行われず、質にばらつきはあるものの、独創的なアイデアを自由なスタイルで発信することができ、また地域や当該学校特有のテーマを取り扱うことも可能であって、まさに玉石混交の様相を示す。金城紀要はどうか。本稿は、創刊50周年記念号の発刊に寄せて、この半世紀にわたる金城紀要の歴史を振り返り、今後のあり方について考察するものである。

#### II 金城紀要の歴史

創刊号が発刊されたのは1976（昭和51）年12月8日であった。投稿内容は、論文4件、芸術的制作3件の合計7件であった。以降、49号に至るまでの発行年、投稿件数およびおもな出来事を表1にまとめた。投稿件数の合計は804件、うち芸術的（美術的）制作は128件であった。

---

\* 金城大学短期大学部ビジネス実務学科

表1 金城紀要1～49号の発行年、投稿件数、おもな出来事

号	発行年*1)		投稿 件数	芸術的 制作 (内数)	おもな出来事
1	1976	昭和51	7	(3)	冒頭に大平勝馬学長の「創刊のことば」が掲載される
2	1977	昭和52	6	(2)	
3	1978	昭和53	9	(1)	
4	1979	昭和54	6	(1)	
5	1980	昭和55	7	(2)	
6	1982	昭和56	9	(2)	発行日が年度末の3月となる(1981年の発行は無し)
7	1983	昭和58	13	(2)	
8	1984	昭和59	9	(2)	
9	1985	昭和60	7	(2)	
10	1986	昭和61	28	(4)	創立10周年記念号として発刊される 冒頭に大平勝馬学長の「紀要記念号出版にあたって」が掲載される 投稿内容が、論文、解説、報告、随筆に分類される 裏表紙に英文タイトルによる目次が記載される
11	1987	昭和62	9	(1)	裏表紙の裏に「金城短期大学紀要投稿規程」が掲載される
12	1988	昭和63	9	(4)	
13	1989	平成元	5	(0)	
14	1990	平成2	10	(1)	芸術的制作が挿画的扱いではなく投稿扱いとなる
15	1991	平成3	11	(2)	
16	1992	平成4	10	(2)	
17	1993	平成5	14	(2)	
18	1994	平成6	11	(3)	
19	1995	平成7	10	(3)	
20	1996	平成8	25	(9)	創立20周年記念号として発刊される 冒頭に加納金幸学長の「20周年記念号の発刊に寄せて」が掲載される 表紙デザインが変更される
21	1997	平成9	22	(5)	
22	1998	平成10	22	(2)	
23	1999	平成11	24	(3)	表紙の色が変更される(以降、39号まで毎年変更される) この号のみ4月に発行(1998年度の発刊は無し)
24	2000	平成12	27	(3)	
25	2001	平成13	17	(2)	
26	2002	平成14	18	(3)	
27	2003	平成15	21	(4)	
28	2004	平成16	22	(4)	
29	2005	平成17	21	(3)	データによる原稿提出が可能となる
30	2006	平成18	26	(4)	
31	2007	平成19	20	(3)	
32	2008	平成20	22	(1)	電子化による学内公開がスタートする
33	2009	平成21	23	(3)	
34	2010	平成22	17	(3)	原稿内容が6分類(論文、研究ノート、書評、翻訳、芸術的制作、随筆)となる 本文中に著者の所属が記載されるようになる 本文中に英文タイトルが記載されるようになる
35	2011	平成23	26	(2)	原稿内容が精査され、論文、研究ノート、書評、翻訳、芸術的制作、その他の6分類となる
36	2012	平成24	20	(2)	
37	2013	平成25	22	(3)	倫理的配慮についての規定が追加される
38	2014	平成26	20	(2)	
39	2015	平成27	21	(2)	

40	2016	平成28	20	(2)	表紙デザインが変更される 教員の過去10年間のおもな研究・制作・活動が掲載される 投稿規程が全面的に見直され新規制定される 投稿内容が4分類(原著論文、研究ノート、芸術的制作、その他)となる 執筆要領が別に制定される
41	2017	平成29	22	(2)	投稿内容ごとに分類して編集されるようになる
42	2018	平成30	26	(2)	
43	2019	令和元	18	(2)	
44	2020	令和2	12	(2)	本文中のヘッダーに、受理日、著者、タイトル、文献名と掲載ページが記載されるようになる
45	2021	令和3	15	(3)	必要に応じて研究倫理委員会による受審の審査が規定される
46	2022	令和4	13	(4)	
47	2023	令和5	15	(2)	「金城紀要 研究奨励賞」が試行される
48	2024	令和6	19	(4)	「金城紀要 研究奨励賞」の本格実施が始まる
49	2025	令和7	18	(3)	
合計			804	(128)	

\* 1) 1980年までは発行年度、1981年以降は発行年となっている。

発行年について、1976～1980年度までは12月(または1月)発行であったが、1981年度からは年度末の3月発行となった。表紙に記載される年は、1976～1980年までは「発行年度」を記載していたが、1981年度からは「発行年」が記載されるようになり、したがって、5号(1980)の次は6号(1982)となっている。また、1999年のみ4月発行となっており、1998年度は発行されず、1999年度に2号分発行されている。とはいえ、原則、毎学年1号ずつの発行は継続しており、創立50年目の今年度3月、第50号の発行に至った。

投稿件数の推移について、創刊当初は10件に満たない件数であったが、創立10周年記念号では28件と急増した。その後14号以降はおおむね10件を超え、20号以降は20件を超える投稿がしばしばあった。ただし、43号以降は20件を割っている。

おもな出来事を見ると、まず原稿の種類について、当初(11号掲載の規程で確認)は「原著論文」「資料(試験研究、調査報告、解説、芸術的制作等)」「随筆」に3分類されていた。その後、34号において「論文」「研究ノート」「書評」「翻訳」「芸術的制作」「随筆」の6分類となった。さらに35号では、このうち「随筆」が消えて「その他」となり、40号において現在の4分類(「論文」「研究ノート」「芸術的制作」「その他」)に整理された。「その他」には、批評、翻訳等が例示されている。なお、芸術的制作は、当初は挿画的な扱いであったが、14号以降投稿扱いとなった。英文タイトルは、10号以降、裏表紙の目次として記載されるようになった。表紙デザインは定期的に変更されている。23～39号までは毎年表紙の色が変更されていた。40号にはデザインが一新され、今回の50周年記念号を機に再びデザイン変更となる。データによる原稿提出は29号以降可能となり、32号以降は電子化による学内公開がスタートした。50号以降はいよいよ学外にも公開される予定である。投稿に当たって倫理的配慮が求められるようになったのは37号以降である。当初は紀要編集委員会が審査をしていたが、45号には必要に応じて研究倫理委員会による審査の受審が規定された。投稿ルールは40号に全面的に精査され、現在の形に規程化された。47号以降、学内研究の活性化を図る研究奨励賞制度がスタートし、今日に至っている。

### Ⅲ 金城紀要の内容

金城紀要の内容を整理するため、第1号～第49号に掲載された804件の投稿内容をすべて確認した(13号以前の美術的制作26件を含む)。詳細は付録1～4のとおりである。芸術的(美術的)制作以外の676件については、内容の要約を試みて記載した。ただし、特に理工系分野の投稿は、浅学にして理解が及んでいない可能性が高い。その上で、これらのデータをもとに分析を試みた。

まずページ数について、11号以降確認できる規程(または執筆要領)には、原稿の長さは10ページ以内と記されている。集計したところ、やはり最も多いのが10ページで124件であった。ただし、11ページを超える投稿も少なくない。20ページを超える投稿は合計54件あり、最大は82ページであった。これは付録データが大量に添付されたものであった。

執筆者について、投稿できる者は、現在の規程によると、原則、本学の専任教員もしくは非常勤講師となっている。実際には圧倒的な割合で専任教員が投稿している。例外として、金城大学をはじめ他大学の教員等が、共著者となっている場合もある。また、事務職員による投稿も数件あった。投稿者数は合計で213名(連名を含む、同一人物で別名を使用している場合は1名としてカウント)であった。投稿件数が最も多かった者は矢澤建明氏の32件(単著26件、連名6件)、また20件以上の投稿件数がある者は合計8名いた。

原稿の分類について、1～9号は分類がなく、10～14号において「論文」「解説」「報告」「随筆」等に分類されて掲載されていた。15～40号においては分類されず、41号以降、現在の形で4分類(「論文」「研究ノート」「芸術的制作」「その他」)の掲載となっている。41～49号までの全投稿158件について、各分類の件数をみると、芸術的制作24件(15%)、原著論文66件(42%)、研究ノート66件(42%)、その他2件(1%)となっている。

投稿内容は多岐にわたる。本学には幼児教育学科、美術学科、ビジネス実務学科、留学生別科が設置されている。1998(平成10)～2016(平成28)年度には、介護福祉士を養成する専攻科福祉専攻が設置されていた。専任教員は、留学生別科を除くいずれかの学科に所属している。ただし、一般教養系の教員もいることから、専門分野も研究活動もさまざまである。必然的に紀要の内容も多岐にわたる。実際には、各学科の専門分野以外に、文学、哲学、歴史学、法学、生物学、工学、物理学、化学等、千差万別であった。ただし近年は、学生を対象とするアンケート調査や教材研究、あるいは地域連携活動などにより、教育の改善や改革を志向する内容が多い。41～49号に投稿された芸術的制作24件を除く全134件の内訳をみると、本学教育の検証や改善をテーマとしたものが61件(46%)、専門分野の知見の向上や技術開発研究をテーマとしたものが32件(27%)、調査研究による提案や提言が27件(20%)、各種活動報告14件(10%)という割合であった。なお、1～49号の芸術的(美術的)制作全128件の内訳は、絵画が最も多く47件である。そのほか、工芸、彫刻、染色、紙芝居、グラフィックデザイン、イラスト、ゲーム、作詞・作曲などがあり、かつては短歌の投稿もあった。

#### IV 金城紀要の今後

金城紀要の1～49号を通読して感じたことは、やはり分野と質の多様性である。専門性の高い投稿は、専門外の者にはなかなか理解が及ばない。一方で、体験記や授業の講義ノートのような投稿は、一般雑誌を読むような感覚で読めてしまう。近年多い本学教育の検証や改善をテーマとする投稿の多くは、本学にとっては非常に有意義な内容ではあるが、あまり普遍性が想定されていない。芸術的制作は、鑑賞対象のようであって、そこにどのような知見が潜んでいるのか見出しにくい。これらすべてに共通するものは何か。そして、これらを包摂する金城紀要の本質はどこにあるか。

まず、あらためて研究について考えてみる。松村<sup>1)</sup>によると、研究とは、論文を書くことでも学会発表をすることでもなく、「ああでもない、こうでもないと考えをめぐらせ、試行錯誤するプロセス」であり、また研究者とは、「つねに過去の研究に学んで最新の理論や基礎研究を参照しながら、自分の知識をアップデートし、さらなる新しい「理解」に向けて試行錯誤するプロのこと」だという。そして、こうした試行錯誤の方法論こそが、学生の教育のなかで生かされ、これからの不透明な時代を生きていく知恵として涵養されていく。だからこそ、研究は教育のためにあり、教育は研究のためにあるといえる。

こう考えると、われわれ教員が研究活動において求めるべきは、新しい知見という成果よりも、新しい知見を求め続ける姿勢とはいえまいか。そして紀要とは、こうした姿勢を形にして、教育という場で生かすためのコミュニケーションツールとはいえまいか。

専門性の高い論文であれ、自省の随筆であれ、授業研究であれ、作品制作であれ、これらはすべて、われわれ教員の試行錯誤の過程であり、果てしなく悩み、考え、高みを求め続ける生きざまそのものである。さらに金城学園では教育理念として「教育とはしている事である」を掲げ、この生きざまを教育として昇華することを謳っている。これらを考え合わせると、金城紀要は、決して玉石混交の冊子ではなく、金城学園の教育理念が潜む、可能性に満ちた「原石の詰め合わせ」といえそうである(無論、玉も含まれる)。ここに金城紀要の本質があると考えられる。

ただし、だからといって何を投稿してもいいというわけにはいかない。一定の質の保証は必要であろう。質を高めるためには査読制度の導入が最も効果的ではあるが、金城紀要はあまりに分野が広く、実質的に査読は機能しない。次策としては、より多くの人に読まれる環境づくりが挙げられよう。金城紀要では、47号から学内「研究奨励賞」制度を開始した。これにより原則、専任教員は、すべての投稿論文等を読み、一定の評価を行うこととなった。さらに、本50号から、金城紀要は本学ウェブサイトにおいて一般公開されることとなる。大げさに言えば、世界中の方々が容易にアクセスできることとなる。こうして多くの目に触れる環境を整備することにより、今後は一定の質向上が図られるであろう。

高橋<sup>2)</sup>によると、紀要の充実は、所属教員間の「競争や切磋琢磨」のきっかけとなり、また「協調の基盤」にもなるという。これは金城紀要にも期待したい。そしてもうひとつ。金城紀要の投稿に、われわれ教員の生きざまが潜んでいるとすれば、やはり想定すべき最重要読者は学生ということになる。今後は、学生がより読みやすいスタイルを目指したい。

付録1 「金城紀要」掲載投稿一覧（1～20号）

号	タイトル	著者・作家	内容
1	「ボンベイの好日」	高光一也	絵画
	唐草 —その形成と美への試考	才田健治	装飾文様としての「唐草」文様について、その源流を探るとともに、日本における普及展開を歴史的に概観し、あわせて日本人の曲線美への愛着について考察した。
	Daphnia magna の生活環に関する実験的考察	大口真次	Daphnia magna（オオミジンコ）の耐久卵の出現に関し、実験的に様々な条件下で飼育観察を行い、温度変化や光の照射周期の変化による影響を認め、これらの環境要因としての可能性を示唆した。
	「さる」	長谷川八十	塑像
	教育権論争の課題	門田 浩	旭川学力テスト事件の最高裁判所判決（昭和51年5月21日）をめぐる教育権論争の課題を概観した上で、公教育が依って立つ教育観として、世界共同社会化に参加する教育を提言した。
	「幼児の文字教育はどうあるべきか」—実態と考察—	加納金幸	小学校入学前の幼児に対する文字指導のあり方について、園児（5歳児）のひらがな、カタカナ、漢字のそれぞれの書く能力の調査を実施して実態を把握し、発達過程に応じた文字指導が必要であると考察した。
風のように雲のように	吉田久子	作詞・作曲	
2	「独りのスペース」	中村秀雄	絵画
	子どもの質問に対する一考察	加納金幸	子どもの質問に対する答え方について、園児（3・4・5歳児）の質問内容を調査し実態を把握した上で、適切な答え方について考察した。
	バルメット波状文	才田健治	バルメット波状文の発生年代、伝播した地域および経路、形の変化について概観し、特に東アジアで展開したS字状の曲線造形（半バルメット）の形成過程におけるエトルリア人の影響について考察した。
	石川県の政治風土	門田 浩	戦後、石川県における衆議院選挙、参議院選挙、知事選挙の結果を概観し、県民の政治意識は固定化の傾向が強く、石川県は「保守政治の安泰的な風土が展開している地域」であると考察した。
	「紅のトリオ」	中山治男	絵画
加賀古陶創始過程への仮説 —白山修験との関連性—	上野与一	南加賀における「加賀古陶」の創始について、傍証的資料を読み解き、12世紀中ごろに白山修験などを媒介として常滑系の中世陶器の技術がもたらされたのではないかと推論した。	
3	「出を待つ」	丹羽俊夫	絵画
	16ミリ映写機（その1） —保育系学生の物理学—	松田俊克	幼児教育学科における物理学の授業において、視聴覚教材としての16ミリ映写機を取り上げ、その構造や仕組み、使用方法などを講義した実践記録をまとめて紹介した。
	言語活動に関する特異児の指導の一考察	加納金幸 磯上 剛	言語活動と関係のある特異児（12類型）について、それぞれの特徴と支援・指導のあり方について考察した。
	しつけの担当者についての一考察	月輪開昭	子どものしつけのあり方について、戦前の地域共同体による組織的なしつけから、現代の母親主担のしつけへの変化を概観し、今日、家庭外に所属する集団や親が持つべきしつけ担当者意識の重要性について考察した。
	「就学猶予・免除」の考察 —障害児の教育権保障をめぐる—	門田 浩	就学困難と認められる者の保護者に対して就学義務を猶予・免除を可能とする学校教育法の規定について、日本国憲法26条等の解釈から疑念が生じることを指摘し、規定の改正案を提示した。
	御陣乗太鼓 —特にそのリズムについて—	中村外治	輪島市に伝わる御陣乗太鼓について、録音テープやレコード等からリズム譜の採譜を試み、その演奏の魅力と西洋音楽（合唱）との共演の可能性について考察した。
	漢代の環頭の三葉形とバルメット文	才田健治	漢代の環頭柄頭（かんとうつかがしら）にみられる三葉形の装飾について、バルメット文との関係や古墳時代前期の日本への伝来について考察した。
	吸坂焼再検討	上野与一	加賀市に伝わる「吸坂焼（すいさかやき）」について、その創起の年歴を、考古学、民俗学、文献史料を横断的に渉猟し、検討を行った。
ECE（OPEN EDUCATION）	Korefumi Amakawa	1970年代にカリフォルニア州で導入され、親の参加と個別指導を重視した幼児教育（ECE：early childhood education）について紹介した（英文）。	
4	森のうた	高野 実	絵画
	北陸地方における消費生活についての一考察（第一報 —消費生活の基礎となる気温の変動について）	北野良子	北陸地方における合理的な消費生活の推進に向けて、第一報として、消費生活の基礎となる気温変動について、金沢の特徴を抽出した。
	大日川ダム貯水池の水温について	大口真次	岩渕町（小松市）地域における水稲の生育悪化の原因とされる萍上川（取水源）の水温の低さについて、上流にある大日川ダム貯水池および大日川第一発電所の水温の現状を調査し、原因を推測した。
	16ミリ映写機（その2） —保育系学生の物理学—	松田俊克	前報に引き続き、幼児教育学科における物理学の授業において、視聴覚教材としての16ミリ映写機を取り上げ、使用するフィルムや映写の方法、映写機の保守などを講義した実践記録をまとめて紹介した。
	バリ島民と音楽	吉田久子	バリ島を訪れ、島民の生活、風習、宗教、教育、音楽、舞踊などを紹介した。
	「定本九谷」「苳憩紀聞」「江沼志稿」に記載された、九谷焼以前の焼物について	上野与一	九谷焼以前の南加賀における窯業を総説した「定本九谷」の記述について、「苳憩紀聞」「江沼志稿」との照合および実地調査により検証し、記述の不正確さを指摘した。
5	コンドル	長谷川八十	塑造
	文様の美とこころ —波状曲線文を中心に—	才田健治	原始の生活から表現されてきた様々な文様のモチーフや変遷を概観し、特に地域や民族を超えて流通する曲線造形の様式美について考察した。

5	一般教育と「現代の理解」	門田 浩	現代の市民社会を理解するための一般教育の主題として「人間の尊厳」を設定し、現代文学および憲法分野からの接近を、事例を挙げて試みた。
	「独りのスペース」	中村秀雄	絵画
	「ことは遊び」の歴史的考察	加納金幸	古代のことは遊びとして、早口ことは、さかだちことは等を多数収集・紹介し、これら遊戯文学の歴史は、国語に対する反省や吟味の歴史であると考察した。
	石川県下の下層社会の成立について	加藤 恒	石川県における下層社会の成立について、明治維新前後に焦点を当て、農村の分解、武士・士族の崩壊、商工業者の没落など、封建的な身分制度の撤廃過程の中で構成されてきたと概観した。
6	美術科の教育実習について	北濱 淳	美術科の「教育法」の実施にあたり、教育実習を終えた学生を対象にアンケート調査を実施し、授業の計画立案等について、今後の講義改善のための資料として紹介した。
	9世紀における蔭位制度の実態的考察	加納金幸	大宝令で8世紀に成立した蔭位（おんい）制度について、9世紀以降の遵守状況の実態を文獻的に精査し、特に規定に拠らない優遇叙位を受けた賜姓源氏と藤原三平（時平・仲平・忠平）を取り上げ、その背景を探った。
	スライドの自作 一実践報告—	松田俊克	保育系の学生を対象として、スライドの自作、上映、合同批評会までの実技指導（2コマ分）を行った実践記録をまとめて紹介した。
	「悪魔払い」	高野 実	絵画
	北陸地方における消費生活についての一考察（第2報 ----- 幼児期における衣生活について）	北野良子	幼児の心身の発達と衣生活との関係に着目し、金沢・札幌・名古屋の幼児を対象に冬期の着衣状況を比較した結果、室温を一定温度に保ち、できる限り薄着で、敏速な運動力を養うことが重要であると考察した。
	収納家具におけるノックダウン方式とジョイントについて〔グリッド（格子）構造におけるノックダウン方式のパターンの展開とジョイントへの研究〕	八木 茂	ノックダウン方式（分解式）の収納棚として、板とジョイントを使用したグリッド構造となるデザインを分類・考案し、2作例を制作した。
	子どもの行事の色模様（上）	加納金幸	日本の年中行事について、子どもとのかかわりの視点から整理して、取りまとめた（1月～6月まで）。
	BANTAM	丹羽俊夫	絵画
	最近彫刻考	上田和則	彫刻に携わる者として、自身のこれまでの作品鑑賞や考察を踏まえ、作家としての方向性を内観して記した。
	ミラノ・ベルディー音楽院 声楽特別コースを受講して	遠藤伊津子	ミラノのベルディー音楽院にて、3週間の声楽特別コースの講習を受講し、学びの内容および成果を取りまとめた。
7	晩夏 I	中村秀雄	絵画
	地域社会と教育の関係	門田 浩	地域社会の活性化に向けて、潜在する教育力（教育機関）の統合、学校教育における地域の教材化の推進、自主的・主体的な社会教育の発展など、地域に根差した教育との関係と、その重要性について考察した。
	福祉の経済的側面に関する小考	加藤 恒	福祉が求める経済政策として、生存権保障としての基礎的な部分だけでなく、生活権保障としての基礎的部分を超える部分の保障に対する財源的負担の必要性和その程度について考察した。
	子どもの社会的発達と人間関係	月輪開昭	子どもの社会的発達を促す要因として、家庭における人間関係と地域社会における人間関係を取り上げ、それぞれの現状と課題を概観し、解決に向けて検討すべき視点を考察した。
	風力エネルギーの利用（その1）	松田俊克	風力エネルギーの利用に向け、校舎屋上において風速観測を行いデータを収集・分析し、実際の利用に当たっての課題を整理した。
	職場に於ける「話しことば」の考察	加納金幸	話ことばの適切なあり方について、その特徴や使い方を概観したうえで、職場、店頭、接客、交際、家庭の各場面を想定し、具体例を挙げて考察した。
	教育（保育）実習前の指導について—実習前の学生の「不安感」—	三沢忠子	幼児教育者を志す学生に対し、4年間にわたりアンケート調査を実施し、教育実習（保育実習）に入る前の不安感と実習後の感想を比較し、学生の変化を確認するとともに実習指導のあり方について考察した。
	鎮魂の譜	九谷興子	陶壁
	高齢化社会における年金制度のあり方—現行年金制度の諸問題を中心に—	山田 厚	近年の高齢化社会における年金制度について、給付と負担との関係、給付水準、女性の年金権、出生率の低下等の観点から問題点を指摘し、改革の必要性を論じた。
	初心者・初級者を対象にした卓球指導に関する一考察（その1）	矢吹嘉昭	初心者・初級者を対象にした卓球の指導として、玉遊び等のラケット操作の練習の効果を実験的に調査し、バックショットに一定の上達効果があったと考察した。
	メキシコのアート教育 一海外研修報告—	中山治男	メキシコ・ベラクルス大学美術学部特別研究生として2か月間滞在して授業等を参観し、アート教育における感性の流露や全人的なかかわりの重要性について受けた啓発を、日誌風にまとめた。
	感性歳時記	上田和則	日々の生活のなか、作品制作のヒントとなるような現象に對峙したときの感性の流露を5例まとめた。
オペラ「フィガロの結婚」について	朝倉喜裕	モーツァルト作曲のオペラ「フィガロの結婚」について、その成立過程、台本、初演の様子、登場人物を整理し、全体の楽曲解説を行った。	
8	「夢鎮守Ⅱ」	高野 實	絵画
	私の日本画考	丹羽俊夫	創作表現としての絵画、特に日本画について、材料や道具を確認し、また古代から江戸期に至るまでの歴史を紐解き、日本画家としての制作姿勢や精神性を取りまとめた。
	女性社員から女性秘書への発展	北潟克輔	北陸三県の第3次産業における女性社員および女性秘書の実態を調査し、ドラッカーの経営理論から経営者のあり方を取りまとめた上で、女性秘書の積極的な経営管理への関与が重要であると考察した。

8	ガムラン残響	吉田久子	バリ島を訪れ生活に密接に関連する伝統芸能であるガムラン音楽の楽器や演奏スタイル、ケチャの特徴について紹介した。
	『マリボウサ』	鈴木治男	絵画
	初心者・初級者を対象とした卓球指導に関する一考察（その2）—卓球マシンの効果—	矢吹嘉昭	初心者・初級者を対象とした卓球の指導として、卓球マシーンを使用した演技練習の効果を実験的に調査し、バックショットに一定の上達効果があったと考察した。
	近代文学と「家」の関係	門田 浩	戦後、廃止された「家」制度の問題について、近代文学（明治後期から昭和初期）において描写された作品群を渉猟し、新しい価値観の提起までは至っていない状況を確認した。
	子どもの行事の色模様（下）	加納金幸	日本の年中行事について、子どもとのかかわりの視点から整理して、取りまとめた（7月～12月まで）。
9	白い世界から後退速度まで	上田和則	作品（彫刻）制作にあたり、日々の生活の中で見聞き体験した事象に対する雑感を取りまとめた。
	『マリボウサー石の蝶』	鈴木治男	絵画
	女子の職業行動に関する一考察 —ホランドのSDSを中心として—	北野栄正	女子学生の就職意識に着目し、短大生を対象に、意識の高さで3群に分けて、職業の6領域について、仕事への認識（活動性、能力、職業興味、自己評価）を調査し（日本版SDS）、就職意識が高いほど、能力や職業興味に高い得点を示す傾向がみられた等の結果を得た。
	秘書理論の生成と推移に関する考察	梅田和子	日本の秘書教育の歴史をたどり、秘書理論の研究が始まった1976年以降について、『秘書教育研究年報』および『秘書学論集』の研究論文を渉猟し、レビューを行った。
	計算機による点字の虫食い文復元Ⅰ	下村有子 水野 舜	点字の虫食い文（全体の1%）を用意して機械辞書による復元を試み、復元率の向上のためには、特に活用のある品詞の辞書づくりと構文解析を行うことが有効であると考察した。
10	『LAKUGAKEI』	楊 景天	絵画
	本学学生の体力・運動能力に関する5年間の推移【Ⅰ】—体格の推移—	矢吹嘉昭	昭和55～59年までの5年間について、本学の女子学生の身長および体重について、全国平均との比較を行い、昭和55年と58年が肥満型、昭和56年と57年がやや肥満型であったと報告した。
	9年間という時を共有した3人の作家	上田和則	ジャン・ドビュッフェ、エゴン・シーレ、フランシス・ベーコンの3人の作家を取り上げ、自身の受けた示唆を取りまとめた。
	『マリボウサー蝶の門』	鈴木治男	絵画
	我国の道徳性に関する研究について	大平勝馬	日本における道徳性の研究資料437編を渉猟し、道徳意識、道徳実践、研究方法、指導方法、育成過程の分野に分類しレビューを行った。
10	初期「参議」に関する一考察	加納宏志	大宝2年に創設された「参議」の基本的性質として、文献的な検討を行い、政治顧問官的性質、采爵的性質、地方監察官的性質があり、のちに議政見習官的な性質が加わったのではないかと推察した。
	本学学生の体力・運動能力に関する5年間の推移【Ⅱ】	矢吹嘉昭	昭和55～59年までの5年間について、本学の女子学生の体力と運動能力について調査・分析した結果、総合的にみて年々劣ってきており、また全国平均と比較しても劣っていると報告した。
	石川県の民謡	石本一雄	石川県に残る1000曲以上の民謡について移入経路や労作業歌の類型による分類を行い、主要な17曲について解説し、歌詞や譜面を紹介した（縦書き）。
	バランスからY級センスへ	上田和則	形質の異なる物質のバランスについて、物理的（重量的）バランスと視覚的バランスを比較し、彫刻における素材との距離感について考察した。
	歴史的体験と日中友好への道	楊 英鏢	中国大陸での生活や体験、来日後の日中友好に資する芸術活動や、創作活動、教育活動などをまとめて綴った。
	幼児の親子関係と性格について—親子呼称を中心として—	北野栄正	親子間の呼称と幼児の性格形成との関係について、幼児（3～5歳児）を対象に調査した結果、両親からの呼称が嫌いとす幼児に反抗的性格がある等の結果を得た。
	Conversation Practice in Junior Course English	Tomokichi Nakagawa	ジュニア英語コースにおいて2種類の英会話練習法を実践した後、受講した生徒への評価を行い、好き嫌いとその理由、メリットと難易度について調査を行った（英文）。
	コンピュータによる会計処理の普及と簿記教育の変化について。	加藤 恒	パソコンによる会計処理の普及による経理業務の変化や、簿記の内容や会計学の変化に伴う簿記教育の今後のあり方について考察した。
	シーグフリードの秘書観再考	梅田和子	文明評論家シーグフリードが著した『現代』（1955年）にける秘書観（機能および職能、仕事の役割、職務内容、職業的特性、専門教育の必要性など）を取り上げ、日本における引用状況と、現代的な見直しの必要性について論じた。
	『鎮守記（1）』	高野 実	絵画
蕪村鑑賞の三つの視角	門田 浩	蕪村の残した発句について、貧しさ、灯火の視覚、遠きものの三つの視覚から捉え、蕪村の思いを推察し、発句の志向性について考察した（縦書き）。	
太陽エネルギーの利用—日射量の測定—	松田俊克	太陽エネルギーの利用にあたり必要となる日射量データについて、気象庁の観測データを用い、金沢における全日射量、水平面直達日射量、水平面散乱日射量の月平均年値を算出した。	
人の健康—健康観—WHOの憲章とは	竹 ハル子	1948年に発効したWHO憲章に定義された健康観について、健康の性格および健康の三要素について解説し、各自の健康管理の重要性を説いた。	
Phases of Natural Dyes - with my experiment	Tamotsu Nakagawa	古くから日本で使われてきた天然染料のひとつ紫根（Lithospermi Radix）を取り上げ、紫根染めの色調変化を起こす技法を解説し、また染色温度の違いによる色味の変化について実験的に確認した（英文）。	
『黒飛天』	楊 英鏢	絵画	

10	本学幼児教育科のピアノ指導について	中村外治	本学幼児教育科の学生に対するピアノ指導の状況について、テキストや授業の進め方、また指導上の留意点を取りまとめ、合わせて学生の学習意欲を高める重要性を説いた。
	幼児の自由表現の指導について —「音楽リズム」授業時における表現指導—	三沢忠子	幼児の身体自由表現の指導における留意点を取りまとめ、指導方法を学んだ学生たちの実習後の体験談を引用し、実際の指導の難しさや楽しさについて報告した。
	石川県にある変な言葉(上) —金沢地方の方言を中心とした調査と考察—	加納金幸	金沢地方(口能登から北加賀の範囲)における方言について調査を行い、地区ごとの方言の強弱や年齢別の使用状況を確認し、また方言の特徴をとりまとめ、方言の今後のあり方について考察した。
	A TRIP TO CANADA	Tomokichi Nakagawa	22人の学生の2週間にわたる留学(カナダ・プリティッシュコロンビア大学)について、出入国、授業等の学校生活、ショッピング、観光、ホームステイ、送別会など様々なシーンにおける英会話記録を取りまとめた(英文)。
	= 判例研究 = 労働者に不利益な就業規則の変更とその効力 大曲市農業協同組合事件(仙台高裁秋田支部判決昭59・11・28)	大屋恵子	就業規則における不利益変更も合理性の観点から適用される判例を取り上げ、不利益と合理性を比較評価する価値判断は不可能として、信義誠実の原則による合理性判断に絞って論ずるべきと考察した。
	『三笠宮高仁殿下』	楊 景天	浮彫肖像彫刻
	教育考	大口真次	近年のいじめ問題に鑑み、家庭教育に焦点を当て、本学学生の家族構成を確認しつつ、特に母親の子どもに対する行動や言葉の働きかけの重要性について考察した。
	随想 高齢化社会に向けて ~年金制度における“福祉”の移り変わり~	山田 厚	高齢化社会に向かう日本の年金制度について、伝統的家族・社会制度を土壌とし、自助・自立精神を生かした日本独自の社会保障・福祉制度の発展を望むと随想した。
	随筆	楊 景天	日々の生活を随想し、詩1編と随筆4編に記した。
	地球を歩こう	丹羽俊夫	本学の「地球を歩こう」の設立理念に呼応し、世界各地にわたり、本学との姉妹校提携、現地の作家との交流、スケッチ取材、展覧会の開催などの様子と随想を取りまとめた。
(随想)「造林かダム築造か」	斎藤晃吉	森林の水涵養効果を考慮し、水害対策として造林とダム築造を比較し、短期的にはダム築造、長期的には造林が有効であると考察した。	
11	労働協約の私的自治に関する拘束力	大屋恵子	労働組合が締結する労使協約による集団的規制が個人の権利と自由を拘束するかについて、年次有給休暇、時間外労働、ユニオン・ショップ協定の3つの視点から検討を行った。
	幼児の記憶における社会心理学的研究	北野栄正	幼児の記憶について、高凝集性・低凝集性(仲良しかどうか)×共同事態・競争事態(グループで競うか個人で競うか)の4グループにわけて画像再認実験を行った結果、高凝集性グループの方が再認率が高いなどの結果を得た。
	児童画に学ぶ 一絵画論のために一	鈴木治男	児童画を造形上の発達過程の視点からとらえ、作品を分析しつつ、情動の源泉や変化について論じ、現代の画家としての創作活動のあり方について考察した。
	秘書科の英語カリキュラム	中川友吉	本学秘書科の英語教育のカリキュラムについて、一般教育の「英語」および専門教育科目の「英会話」「実用英語」で使用している教科書を紹介し、英語教育全体の構成を整理して論じた。
	正課体育の中での10分間走の影響 一全身持久力の変化一	矢吹嘉昭	本学秘書科1年の女子学生106名に対し体育実技における10分間走の取入れによる全身持久力への影響について調査した結果、全身持久力の劣る者は大幅に上昇するという結果を見出した。
	『囚われて』	鈴木治男	絵画
	風力エネルギーの利用(その2)	松田俊克	風力エネルギーの利用に向け、風車制作を行うにあたり、風車の種類やその性能を取りまとめ、また制御装置や設置場所について考慮すべき点を整理した。
12	一造形実習課題一 立方体の展開による陳列台の考案	楊 景天	学生へのデザイン課題として、11種類ある立方体の展開図を用いて自由に陳列台を制作させ、創造力を高めるデザイン教育のあり方を探った。
	漱石文学の いま 響くもの	門田 浩	漱石文学が現代社会に余韻を響かせている要因として、作品群を通して流れる「善」、「美」、潔癖な倫理・道義観に基づく「正義」の原理を指摘した(縦書き)。
	『飛翔』(金城学園80周年記念像)	楊 景天	立像彫塑
	ルーージュは誘導抵抗	上田和則	被写体をデフォルマシオン(変形・歪曲表現)するアルゴリズムを模索することで、現代の姿を未来の姿に置換する可能性を問うた。
	組合分裂と財産の帰属	大屋恵子	労働組合の集団的脱退に伴う新組合の結成を分裂として認めるかどうか、その際、組合財産は分割されるかどうかについて、諸学説・判例を通して検討した。
	幼児の保育における教育心理学的研究	北野栄正	幼稚園と保育所の幼児に知能検査(5項目)と性格検査(4項目)を実施し比較を行った結果、いずれも差は僅少であったが、項目ごと比較では、一部の項目に男女間で有意差を認めた。
	自然言語処理における談話理解の研究	瀬戸就一	自然言語の理解システムのモデル化に向けて、喫茶店における会話を例にプロトタイプングを試みた。
龍上聖観音	楊 英鏢	絵画	
『肅肅』『霊峰白山乃図』	丹羽俊夫	絵画	
能登の山・加賀の山 一林制史から一	斎藤晃吉	藩政期以降の石川県の山林の姿について、元和2(1616)年に定められた七木の制による保全の歴史や、海岸砂丘の砂防林造成によるクロマツ林の形成過程について文献資料をもとに取りまとめた(縦書き)。	
短歌作品 南米紀行百首	津田嘉信	短歌(縦書き)	
13	C. I. とベーシックデザインマニュアルについて	東田修一	C.I.(コーポレートアイデンティティ)のデザインマニュアルのあり方について、具体例を挙げ、クライアントの理解やマニュアルの明快さの重要性について考察し、これからのC.I.の可能性を展望した。

	労災補償と民事賠償責任	大屋恵子	労災補償制度の歴史を踏まえた労災補償の問題点として、社会保障的な性格と民法上の損害賠償的な性格を併せ持つことによる競合の有無について、これまでの判例や学説を取り上げて検討した。
13	英日ことば始め比較考 —500 words to grow on—	笠間弘美	ランダムハウス社刊行の子供向け単語集『500 Words TO GROW ON』を取り上げ、17分類された語義範疇の単語について、他の子供向け英辞典、日本の英和辞典、中学校用検定教科書 6種の掲載語と比較し、傾向を分析考察した。
	記憶に及ぼす保育の効果について	北野栄正	保育経験をととした言語記憶への影響について実験的に調査した結果、保育経験を経ることで、特に保育に関する好意的ステートメントの記憶再生率が高くなり、記憶への影響を認めた。
	能登灘浦の山林	斎藤見吉	明治初期の能登灘浦の山林の姿について、村ごとの林相を文献資料から取りまとめ、臨海の村々の半漁半農の生活との関連から考察した(縦書き)。
	保育経験に関する心理学的研究 一態度の効果への吟味—	北野栄正	保育経験をととした職業意識への影響について実験的に調査した結果、保育経験を経ることで、「働く目的」や「職業勤務」の意識に変化があり、強い影響を認めた。
	ある米国の英語教科書に見られる時制の取り扱いについて 一中学校用英語教科書との比較—	笠間弘美	中学校用英語教科書 6種および米国の英語リーダー用教科書における時制の取り扱いについて、用例を収集して導入学年を比較して取りまとめ、日本の英文法教育における時制指導の更なる可能性について検討した。
	日本の法意識の根底にあるもの(1) 日本国憲法とアメリカ合衆国憲法の比較をととして	寺西哲秀	日本の法意識の根底を探るため、日本国憲法とアメリカ憲法の刑事手続の規定および判例を比較した結果、農耕民族に由来する和の精神と権威主義を挙げて考察した。
	わが民法の届出婚主義	大屋恵子	民法における届出婚主義について、ヨーロッパの婚姻制度との比較、法律婚の成立過程、残存する家族制度意識との関係などを取りまとめ、事実婚にかかる内縁問題解決への考え方を整理した。
14	DIAGRAM of ALGORIZUM by FINE ART 一美術による算法図表—	上田和則	創造における「或る目的に向かっての方法」を考察するにあたり、カンディンスキーから示唆を受け、キーワードと、パラメーターを含むアルゴリズムとの組み合わせの相乗効果について随想した。
	宙'89—II—	高野 實	絵画
	一水墨肖像画の研究(一)—	楊 景天	水墨肖像画の芸術性について、自作を紹介するとともに、肖像画の「六要」「六法」および水墨画の9つの要点を整理して、取りまとめた。
	美術館のある風景	鈴木治男	地方美術館のあり方について、公立、私立の性格や役割の違いを整理し、個人的に魅力を感じる3館を紹介した。
	美術と工芸 (美しいとは何かについての—考察)	寺西一敏	学生への美術指導にあたり、「美しさ」について、極端なものが整然と存在する自然の姿のなかに捉え、それを伝える術について随想した。
	西ドイツにおける右翼政党	西 義之	1983年、西ドイツにおいて結党された共和党について、右翼勢力としての台頭の状況と、支持者の考え方を、既存資料から引用して報告した(縦書き)。
	初期環境条件が社会的行動の発展に及ぼす影響に関する実験的研究 一早成性鳥類を中心とした比較心理学的アプローチ—	奥田裕紀	発達初期における環境条件がその後の社会的行動に及ぼす影響について、早成性鳥類のウズラを被験体として、ふ化前の聴覚刺激に対し、ふ化後に接近行動を取ることを実験的に確認し、胚時期の環境刺激の影響の重要性を示した。
	LIMASY (総合点字図書館システム)の構築と実用化研究	下村有子 水野 舜	点字図書館のシステム開発をすすめ、事務をコンピュータ化し、視覚障害者職員が図書館業務を行うことのできるシステム構成を開発し紹介した。
	オラトリオ「メサイヤ」における装飾音についての—考察	朝倉喜裕	バロック時代のヘンデル作曲のオラトリオ「メサイア」について、歌唱時における装飾音トールの歌唱法の整理を試みた。
	「広場の孤独」	鈴木治男	絵画
	ヘミングウェイ『老人と海』とスタインバック『赤い小馬』に見られる心理文法	笠間弘美	表題2作品における心理描写を、時制に焦点を当てて整理し比較した結果、両作品において動的展開部分で過去時制の効果的使用等の特徴が見出され、英語教育における文学教材の必要性を示唆した。
15	The Life of Hemingway	Joy Hutton	アーネスト・ミラー・ヘミングウェイ(1899-1961)の生涯とその作品を紹介した(英文)。
	わが国における届出婚主義の展開	大屋恵子	日本の届出婚主義について、届出が婚姻の法律上の成立要件として確立してきた過程を整理し、昨今の結婚観の変化や事実婚のあり方について考察した。
	一天空—	徳田明美	陶芸
	DIAGRAM by TRANSFORMATION	上田和則	視覚的なアートの成立について、ヒューリスティックサーチ(知識や経験に基づく探索)によるアルゴリズムやパラメーターの確立について随想した。
	スケッチ	丹羽俊夫	本学学生と実施しているスケッチ合宿の意義や内容、スケッチ方法について、実例を挙げて紹介した。
	ゲーテと病氣 —「紹介」の紹介	西 義之	Frank Nager が著した『医学に通じた詩人 ゲーテと医学』(1990)の内容について、シュペーゲル誌における紹介をもとに、ゲーテの病歴や生への執心等を紹介した(縦書き)。
	アンティークの部屋	円地信二	絵画
16	石川県における皮脂厚指数を用いた幼児の肥満判定 一東京都・北海道との比較および発育評価について—	松下高信 伊藤巨志 井手岡達朗 深澤 健	幼児857名を対象に、皮脂厚指数による肥満判定を行った結果、加齢とともに肥満の出現率が低下、BMIによる肥満判定とは若干異なる等の結果を得た。
	初期環境が社会的行動の発達に与える影響について 一早成性鳥類における聴覚刺激の影響—	奥田裕紀	早成性鳥類のウズラを被験体として、ふ化前の聴覚刺激に対し、遺伝的要因ではない直截的な影響を受け、ふ化後に接近行動を取ることを実験的に確認し、胚時期の環境刺激の影響の重要性を示した。
	日中ことば始め比較考	笠間弘美	中国国定の英語教科書『初級中学課本・英語』と日本の中学校用検定教科書6種の掲載語を比較し、傾向を分析した結果、中国教科書の方が取り扱い語彙が多く、編集の構成にも差がある等の結果を得た。

16	訪問着「臘月」	中町博志	染織
	ファジ理論 一集合、関係、推論、制御一	下村有子 金田千恵子	ファジ理論の考え方、ファジ集合、ファジ関係、ファジ推論等について、具体例を挙げて紹介し、課題や今後の可能性について考察した。
	ニューロとニューラルネットワーク	下村有子 市原圭子	脳のニューロンとニューラルネットワークの仕組みおよびその情報処理機能の実現を目指すニューラルコンピュータのモデルや開発の現状を紹介し、課題や今後の可能性について考察した。
	一水墨肖像画の研究 (二) 一	楊 景天	「工筆画」と「写意画」の技法を合わせ独自に開発した水墨肖像画の表現方法や理念などを、実例を挙げて紹介した。
	球面におけるパノラマ性への可能性	上田和則	円の中心から円外の17の点を眺めた際に、円周上に投影される17点の位置関係について、円の位置を変えて11パターンを試みて変化の具合を観察し、作品への展開の可能性を考察した。
17	ジークムント・フロイト 一その死への道行き	西 義之	ジークムント・フロイトについて、晩年の口腔癌の病状や治療の過程、人生や宗教に対する考え方等を、家庭医であったシュールの日誌やフロイト本人の手記などから引用して整理し、紹介した(縦書き)。
	Fermi系の径路積分における変分法	川辺弘之	径路積分法を多電子系の分配関数に適用し、得られる自由エネルギーについて変分原理が成り立つことを証明した。
	'92夏の思い出	林 可耕	絵画
	民族衣装サリーの考察	林 可耕	民族衣装サリーについて、インドにおける変遷、着用の手順やスタイル等を整理し、巻き方の工夫、和服との相違点等を考察した。
	本学学生の体力・運動能力5年間の推移(Ⅲ)	矢吹嘉昭 松下高信	本学学生(新入生)の体力・運動能力について、5年間にわたり測定した結果を分析した結果、総合的にみて年々低下傾向がみられ、また全国学生平均値より大幅に劣っていることを報告した。
	定規ガイド付きカッターマットの考案	東田修一	定規ガイド付きのカッターマットを考案し、その構造と実施例を図面に基づいて解説した。
	中国の国定英語教科書にみられる時制の取り扱いについて 一日本の中学校用検定英語教科書との比較一	笠間弘美	中学校用英語教科書6種および中国の国定英語教科書における時制の取り扱いについて、用例を収集して比較した結果、導入順序に相違がみられ、それぞれ改善の余地があることを示した。
	顔認知研究のための新アプローチ 一多義刺激応用に関する基礎的研究一	奥田裕紀	人間の顔認知の仕組みに関する研究を整理し、顔多義図形を刺激として用いた実験を試行的に行って顔認知プロセスのモデル構築に資する研究としての可能性を探った。
	のれん	玉作榮三	染織
	ファジ理論による贈答品検索システムについて	下村有子 市原圭子 金田千恵子	ファジ理論を利用して贈答品を検索するシステムの構築を試みた。
	置換に関する等価性への手段	上田和則	過去の紀要投稿作品9編を集約した。
18	離婚による親権と監護	大屋恵子	親権の法的性格を整理し、離婚後の「身上監護」と「財産管理」の分離帰属を認める現行制度に対する課題を提示した。
	大奥と奥御殿	今村文男	歴史風俗画の制作に向けて、大奥や奥御殿の発生の歴史、内部構造、職制、風俗について、文献、物的資料、絵画などから取りまとめ、考察した。
	一水墨肖像画の研究 (三) 一	楊 景天	水墨肖像画の適切な表現について、実例を挙げ、描かれる人物と画家の二重価値観として現れる肖像画を美的創作とするための追究とし、その先の自己の教育・研究職への責務について随想した。
	創造力開発訓練課題の研究 (一)	楊 景天	本学美術科学生に対し、創造力を啓発するための課題(4種)と学生による作品例および学生の成長の様子を紹介し、創造力育成の意義と必要性について考察した。
	GUI + タッチパネル環境の利用について	上田宏一	タッチパネルを備えたパソコンを用いてGUIによる検索システムを開発し、評価を行った結果、操作性や移植性に利点があったものの、反応速度や導入価格に課題がある等の結果を得た。
	子の監護	大屋恵子	未成年の子を持つ父母が離婚した際の親権者と監護者をめぐる課題について、法令と学説を整理して検討した。
	「傘立て」	八木 茂	工芸
	一創造力開発訓練課題の研究 (二) 一	楊 景天	本学美術科学生に対し、創造力開発のための訓練課題16種と学生による作品例を成果資料として紹介した。
	一水墨肖像画の研究 (四) 一	楊 景天	水墨画と東洋絵画の技術を駆使して表現する女性水墨肖像画について、その芸術性を高める創作過程や留意点を、実例を挙げて詳述した。
	能「紅葉狩」(鬼女)	今村文男	絵画
	不確実性、多義性、ファジネス 一ファジ集合論、U-不確実性、Shannon entropyによる視覚図形刺激の2義性規定について一	奥田裕紀	不確実性の一要因となる多義性の定量化について、顔2義刺激の認知評価について、実験的にファジ評定を求め(被験者371名)、データ分析を通じ、顔2義性を規定する指標設定および今後の応用の可能性を示唆した。
ファジ積分を用いた贈答品検索システムについて	下村有子 金田千恵子	ファジ理論を利用して贈答品を検索するシステムの改良型として、商品データ属性の検索範囲の縮小およびファジ積分(シヨク積分)の利用により再構築して評価を行い、さらに今後の課題を提示した。	
私のデザインワーク C.I.(VI)からパッケージ(3D)デザイン置換に関する等価性への手段	西川征輝	デザイン	
径路積分法による相関エネルギーの取り扱い	川辺弘之	多電子系の波動関数を近似するHartree-Fock近似の改善を試み、有効性を確認するとともに今後の課題を提示した。	
「卯翁自叙伝」(独り語り)	上田和則	大聖寺藩医であった渡辺卯三郎(1831-1881)の自伝として、1994年3月に加賀の実性院において行われた独り語り「卯翁自叙伝」のシナリオを紹介した(縦書き)。	

19	プラトン「国家」におけるフュシスとミーメーシス	関村 誠	プラトン「国家」におけるミーメーシス（模倣）の多義性について、アイデアの観照に通じるミーメーシスと、第10巻におけるソフィスト的なミーメーシスの違いを「哲学者のフュシス（素質）」との関連から整理した。
	「兼見御亭・能舞台・鏡板絵」	丹羽俊夫	鏡板絵
	新研究法による不確実性の検討 ―認知の不確実性の分類と測定、ファジィ測定―	奥田裕紀	多義図形の認知度について、自由記述と認知度評定を組み合わせた「記述対象評定法」を用いて記述・評定を求め（被験者170名）、不確実性を測る方法としての有効性を検討し、あわせてデータ処理におけるファジィ理論の応用可能性について検討した。
	径路積分表示された多電子系の分配関数の数値評価アルゴリズム	川辺弘之	径路積分表示された多電子系の分配関数について、Monte Carlo 積分法を採用し、数値評価のアルゴリズム作成を試みた。
	海外研修が学生の外国人と日本人に対するイメージに及ぼす影響 ―本学幼児教育学科のオーストラリア研修について―	松下高信	本学幼児教育学科のオーストラリア研修の成果として、質問調査を行い比較した結果、研修参加者は、非参加者との比較、研修前との比較のいずれにおいても、オーストラリア人に肯定的・好意的印象を強く持つ傾向にあること等を明らかにした。
	「槽の海」	磯村建雄	染織
	ファジィ贈答品検索システムⅡ ―課題点の検討と改良―	下村有子 金田千恵子	ファジィ推論を利用して贈答品を検索するシステムの再改良型として、データ検索に要する規則数の削減およびデータを構成する項目の削減（目的ごとのシステム化）を行ったところ、わずかではあるが処理時間の短縮を達成した。
	色絵磁器「茂る」	朝井仁美	磁器
	判例に見る身分行為意思	大屋恵子	身分行為の成立（創設または解消）に必要とされる届出と意思の関係について、2件の判例を紹介し、届出という形式と意思の実態とのずれが生じる場合の課題について論じた。
	独り語り「卯翁自伝」一 渡辺卯三郎物語	上田和則	大聖寺藩医であった渡辺卯三郎（1831-1881）の自伝として、1994年5月に加賀の実性院において行われた独り語り「卯翁自伝」のシナリオを紹介した（縦書き）。
20	児童と福祉施設について ―第1回「児童の権利」他―	飛田金次郎	児童の権利として、日本国憲法（1946）、児童の権利に関する条約（1989）、児童憲章（1951）等の内容を確認し、また児童福祉施設の現状とその役割について考察した。
	冬の街	円地信二	絵画
	トキソカラ症の感染と小児への影響	岡田 茂	イヌ蛔虫やネコ蛔虫の幼虫を病原体とするトキソカラ症について、蛔虫の生活環、非固有宿主体内での寄生状況、症状、感染源と予防法等について取りまとめた。
	私の日本観光学再入門	中谷重之	日本における観光学が普及浸透しない理由を、体験談を交えて解説するとともに、観光産業の可能性を論じ、今後の観光政策について提言を行った。
	神景（黄金の光）	丹羽俊夫	絵画
	QCD dual Ginzburg-Landau 理論によるスピン依存バリオンポテンシャル	矢澤建明	QCD（Quantum Chromodynamics）低エネルギー有効理論であるDGL（Dual Ginzburg-Landau）理論を用いたクォーク3体のスピン依存ポテンシャルを数値的に解析した。
	活字に強い子に育てるには 付・推薦絵本の数々	加納金幸	幼児にとっての絵本の重要性や絵本のあたえ方を整理し、推薦絵本を紹介しながら絵本選びのポイントを取りまとめた。
	「渡る人」	鈴木治男	絵画
	日本画とそして……	丹羽俊夫	本学美術学科日本画コースの教育の特色、画家に至るまでの遍歴や影響を受けた先達、社会活動状況などを整理して取りまとめた。
	幼児教育の現状と問題点	大口真次	少子化が進むなか幼児教育が抱える問題を取りまとめ、特に自由保育における教師の役割の重要性やより良いやかかわり方について考察した。
	‘95宙一何処へI	高野 實	絵画
	子守歌	岩本静香	晩年に懐かしむほどに、母から子への願いが込められた子守歌をイメージして作曲した「こもりうた」を紹介した。
	奥能登マリーナ開発へのコンセプト	北潟克輔	ウォーターフロント開発におけるマリーナの役割や、プレジャーボート不係留の課題などを踏まえ、奥能登マリーナを想定し開発コンセプトを提案した。
	「楽しくコラボレーション」	東田修一	デザイン
	OA時代のビジネス文書	加納宏志	OA時代におけるビジネス文書について、文書作成の基本原則を踏まえつつ、ワープロの使用を前提とするより機能的・合理的な書き方について、具体例を挙げて検討した。
	GUI指向に改良した贈答品検索システムⅢ	金田千恵子 下村有子	これまで開発してきた贈答品検索システムの改良型として、キー入力ではなくGUIを取り入れた操作環境の開発等を行った。
	染色室	林 可耕	絵画
	多義的刺激における同時的複数対象認知	奥田裕紀	多義的図形が同時認知される可能性について、被験者106名に対して刺激評定を求めた実験を行った結果、多義性の意味や評定法の妥当性を考慮し、従来の認知モデルの修正の必要性について考察した。
場の量子論による分子系の断熱近似を越えた取り扱い	川辺弘之	分子を電子と原子核からなる量子力学的集合体とみなし、場の量子論を適応して近似ハミルトニアンへの導出を試みた。	
一海一	権田宜子	工芸（染色）	
プラトンの「芸術論」とミーメーシス	関村 誠	プラトンの美学的解釈について、アリストテレスの芸術論との比較から、『国家』におけるミーメーシスの解釈に限定せず、哲学的思想全体の中の位置づけを考慮した意義づけの必要性について論じた。	
「女性学」実践と課題	越野迪子	1960年代に成立した女性学について、学問的な視座や普及・啓発活動の現状を紹介し、今日の実践的な問題や今後の課題を取りまとめた。	
「狭い部屋」	堀 一浩	絵画	

20	新しい女「青鞥」伊藤野枝 一女の「言葉」一	原田節子 (青司子)	明治末期、伊藤野枝が『青鞥』に投稿した文章から、権力による性差別への強い抵抗と、こうした言説から生じうる権力の危険性を論じた。
	短歌作品 海彼百首	津田嘉信	短歌 (縦書き)

付録2 「金城紀要」掲載投稿一覧 (21~30号)

号	タイトル	著者・作家	内容
21	筋疾患患者の社会参加	岡森正吾	脊椎強直性候群症例T氏との面接を通じ、筋疾患患者の社会参加や社会自立には、地域における対人関係や信頼関係のほか、ボランティアヘルパーの存在が重要であると考察した。
	視覚的図形刺激認知に関する発達の研究—認知対象評定法による検討—	奥田裕紀	多義的な図形刺激の認知の発達の変化について、10歳以下児童122名と短大学生100名を対象に刺激評定を求める実験を行った結果、発達の変化は認められたが、認知の未熟さや硬直性とは分けて考える必要があると考察した。
	戸籍制度	大屋恵子	現行の戸籍制度について、明治の戸籍法が立脚した家制度は廃止されたものの、家族関係を公証する制度として継続しており、婚外子差別などの問題が現存している状況を詳述した。
	青鞥—伊藤野枝—を読む	原田節子 (青司子)	明治期に定着した「家—近代家長制」のなか、伊藤野枝が『青鞥』に残した言説から、女性が近代的自我の確立を希求し模索する姿を論じた。
	デジタル制作による「伝統工芸のためのポスター」	高田 巖	ポスターデザイン
	「絵描き歌」	岩本静香	作詞・作曲
	現代ビジネス文書の作成に関する諸問題について	加納宏志	ビジネス文書における第一行目の「文書番号」と最終行の「以上」について、それぞれの目的や役割を確認し、より適切な使用方法について考察した。
	中小零細製造企業主の資金繰りと販売強化—戦略経営の発想と基本理解へ—	北潟克輔	近年の経営を取り巻く環境変化のなか、中小零細製造企業等の経営者にとって必要な戦略経営導入のための基本理解として、経営のはたらきや資金繰りと販売力強化の発想を取りまとめて紹介した。
	ファジィ贈答品システムについての検索手法の比較と検討	下村有子 金田千恵子	これまで開発してきた贈答品検索システムの改良型として、検索結果が不満足な場合の再検索できるシステムの開発を行った。
	「伝統工芸品の技術を生かした商品開発事例」	八木 茂	工芸
	マルチメディア時代の情報処理教育について—美術教育との融合—	藤元宏一	本学美術学科の特性を生かし、マルチメディア時代のプレゼンターを育成する新コースのカリキュラムを作成し、提案した。
	本学の演習用コンピュータにおけるWindows95の利用について	矢澤建明	本学の演習用コンピュータ40台にWindows95を導入するにあたり、システム構築、インストール、ネットワークの設定等、各段階で生じた課題とその解決に至る試行錯誤の経緯を取りまとめた。
	Construction of Closure Relation	川辺弘之	新しいClosure Relationsを導出し、ファインマン経路分析に適用を試み、有用な結果を得た (英文)。
	報告「ふれてみる美術館」1994—1996	鈴木治男	1994—1996年にかけて小松市において3回にわたり開催した「ふれてみる美術館」の企画、開催状況、今後の課題と展望について取りまとめた。
	女子短期大学生の食生活状況と体型意識に関する研究 (第1報) —食生活状況について—	岡田 茂 林 宏一	青年期女子の食生活等について、本学幼児教育学科の学生305名を対象にアンケート調査を行い、好ましくない食生活を送っている学生が多く存在することを確認した。
月と太陽の子より『SMILE』	作内宣夫	石彫	
女子短期大学生の食生活状況と体型意識に関する研究 (第2報) —体型意識と食生活状況との関連性について—	岡田 茂 林 宏一	青年期女子のやせ願望について、本学幼児教育学科の学生305名を対象にアンケート調査を行い、標準的な体重よりもかなり低い体重を理想としていること等を確認した。	
日本画とそして……PART II	丹羽俊夫	美術教育や創作活動、日本画界の現状等について、新聞や雑誌に掲載された文章を集約し、あわせて受賞歴や個展等の活動履歴等を整理して取りまとめた。	
本学学生の体力・運動能力5年間の推移 [IV]	矢吹嘉昭 松下高信	本学新入生の体力・運動能力について、1991年～1995年までの5年間の推移および全国大学平均値と比較を調査分析した結果、顕著な経年変化は見られず、総合的に全国平均より劣る傾向があることを確認した。	
Creating and Implementing a Successful Study Abroad Program	マーク・ウイ リアムズ	日本の大学生 (短大生) が2か月以上のアメリカ研修プログラムを企画・実施するに当たっての留意点を取りまとめた (英文)。	
立—風が運ぶもの—	徳田明美	陶芸	
風土と福祉を行う心	飛田金次郎	日本人の福祉を行う心の源について、風土の特色と、縄文人の宗教観、仏教、宗教学の教えなどから探り、今日の霊場巡礼者の心に受け継がれる様子をまとめた。	
22	観光私見1997年末	中谷重之	複合産業としての観光開発がもたらす経済成長が目ざされ、世界の観光市場が拡大する「大旅行時代」にあって、日本の観光市場が抱える課題を多角的に整理して指摘した。
	実習生にとっての障害児・者について—入学直後における調査結果に基づく検討—	奥田裕紀	保育資格取得を希望する短大生40名に対し、入学直後 (実習前) の障害児・者のイメージについて、文章完成法を用いて調査した結果、ハンディキャップに関する記述が最も多く見られたことを報告した。
	実習生の高齢者に関する認知—文章完成法による調査を中心とした検討—	奥田裕紀	高齢者福祉施設での実習を予定する短大生40名に対し、実習前と実習後の高齢者に関する認知について、文章完成法を用いて調査した結果、行動に関する認知は好転し、健康に関する認知は悪化したことを報告した。

	ポリ容器による藍の醗酵建ての記録(1)	権田宜子 堀 一浩	天然の木材汁を利用して藍の醗酵建てを試み、その経緯を記録して報告した。
	本学学生の体力・運動能力の変化 —1 年次前期と2年次後期の比較—	矢吹嘉昭 松下高信	本学学生(1991~1993年入学)の体力・運動能力について、1年次前期と2年次後期に測定し変化の状況を比較したところ、総合的にみて全国平均と逆行し、低下傾向がみられたことを報告した。
	現代ビジネス文書論	加納宏志	現代社会にふさわしいビジネス文書のあり方について、ワープロによる文書作成を想定しながら、前付けと本文に分けて、より合理的な理由を意識しながら論述した。
	看護学生と福祉コース学生の社会的スキル度の比較	小林千恵子 吉本通子	看護学生と福祉コース学生を対象に、社会的スキル尺度を用いて質問調査を行い比較した結果、差は見られず、いずれも平均的な社会的スキルが身につけていることを報告した。
	歴史風俗画研究Ⅱ「能の中の女」	今村文男	三鬼女と称される能『葵上』『黒塚』『道成寺』の後シテに現れる怨念の女性の表現を試み、その過程と方法を記録して紹介した。
	労働契約と就業規則	大屋恵子	労働契約により発生する労働指揮権と、労働内容が特定化される就業規則や業務命令との関係について、過去の判例を挙げて課題を整理した。
	女子短期大学生の食事内容に対する留意点とその背景	岡田 茂 林 宏一	本学幼児教育学科の学生を対象に、日常の食事に対する意識についてアンケート調査をした結果、過半数が留意していると回答し、理由としては、健康配慮、太りすぎへの心配などが多かったことを報告した。
	短大生における社会福祉に関する意識因子とその潜在的構造	守田尚史	社会福祉に従事する可能性の高い本学学生を対象に、社会福祉に関する意識調査を行った結果、全般的にネガティブであり、社会福祉に接する年齢段階の遅延が一因ではないかと考察した。
22	創生—A	高野 實	絵画
	ファジィ AHP による贈答品検索システム	金田千恵子 下村有子	これまで開発してきた贈答品検索システムの改良型として、ファジィ AHP (階層化分析法) を用いて評価処理を行った結果、検索時間の短縮を達成した。
	SU (2) 格子 QCD における $Z_0$ ゲージ固定とモノポール	矢澤建明	QCD (量子色力学) におけるクォーク閉じ込め問題を考える方法として、 $Z_0$ ゲージ固定の手法を検証し、吟味した。
	Taeko Dolls	中野多恵子	人形
	学生情報検索における CGI の利用	金田千恵子 矢澤建明	学生情報をデータベース化し、インターネットを介してホームページ上から検索するシステムの構築を試みた。
	径路積分法の電子・光子相互作用系への応用	川辺弘之	電磁場を量子化し、電子・光子相互作用を含む系に対して多電子系における径路積分法を適用し、電子系の電磁応答の計算を行った。
	大衆芸術	丹羽俊夫	大衆文化から生まれ無限に広がる大衆芸術について、新聞や雑誌に掲載された文章を紹介し、随想した。
	音楽における「3」と「2」	岩本静香	活動の単位としての「2」と生命の神秘としての「3」を意識して、「ピアノの為の「3」と「2」」を作曲し、紹介した。
	大店法と松任市および周辺地域での小売業の現状 —新たな視点での都市開発と街づくりのために—	北潟克輔	大型店舗面積の占有率の高い松任市において、これからの地域振興に向け、大規模小売店舗規制法の規制緩和の流れのなかで、商業集積を都市システムの機能とした都市開発の必要性を論じた。
	ベルクソンにおけるプラトニズムの問題	関村 誠	ベルクソンの哲学におけるイデア論批判について、プラトンの哲学の一面をとらえた見方であり、両者には相通じる面もあることを論じた。
	筋ジストロフィーの在宅調査	岡森正吾	筋ジストロフィー患者の在宅ケアについて、11事例の実態調査を行った結果、介護者の負担への不安や葛藤はあるものの、家族の一員としての生活に QOL を見出しつつと推察した。
	水あそび体操 (作詞・作曲)	朝倉喜裕	子どもたちが水あそびを想起して楽しめる楽曲を作詞・作曲した。
	音楽における「4」	岩本静香	「2の対」として「4」を意識して、4分の3拍子の楽曲「Four」を作曲し、紹介した。
	労働関係について	大屋恵子	個々の労働関係は、就業規則ではなく、労働契約に基づくことを確認し、労働契約の見直しについて論じた。
	女子短期大学生の減量経験に関する一考察	岡田 茂 林 宏一 辻 昌美	本学幼児教育学科の学生を対象に、減量の経験や方法、結果等についてアンケート調査をした結果、6割強に減量経験があり、多くは健康のためではなく美容のために試みていること、また好ましくない自覚症状を呈している者もあり、支援の必要性を論じた。
23	高齢者・児童における生活の質への関与要因	奥田裕紀	高齢者40名および児童40名に対して、記述対象評定法を用いて、自身の QOL (生活の質) の主要要因を尋ねた結果、高齢者にとっては健康、入浴、宗教等、児童にとってはゲーム、学習等となり、両者の相違について論じた。
	高齢者・児童における QOL の評定過程の検討	奥田裕紀	高齢者と児童に対して自身の QOL の主要要因を尋ねた結果から、QOL を規定する各要因の満足度と重要度に基づき、総合的な QOL が評定される過程について、多次元的な要因の関与を想定し、12モデルを設定し検討を行った。
	分子系における仮想光子	川辺弘之	仮想光子場と相互作用する分子を理論的に取り扱い、仮想光子場の空間分布の計算を試みた。
	「黄金乃郷」	丹羽俊夫	板絵
	中小小売店の経営者評価とストア・コンパニオン	北潟克輔	小売業をめぐる環境が大きく変化するなか、中小小売店の経営力強化について、経営者の意識や行動、企業属性といった条件を考慮しつつ個性を発揮するためのプロセスを提案した。
	実習指導における内容の検討	小林千恵子	本学幼児教育学科の学生の実習前の事前学習のあり方について、実習終了後の学生に対してアンケート調査を行った結果、事前学習として追加すべき内容として、医学的な内容、保育技術、実習記録の方法を取り入れる必要があることを報告した。

23	ポリ容器による藍の醗酵建ての記録(2)	権田直子 堀 一浩	天然の木灰汁で藍を建て、仕込み後20日後、40日後、60日後の染める力の推移について、段落ちの色標の変化を記録して比較した。また藍の維持には、pH、栄養分の量、液温の条件を整えることが必要であることを確認した。
	近代ホテル産業の基礎を創った男 エルスワース・ミルトン・スタットラー小伝上	中谷重之	近代ホテル産業の基礎を創ったエルスワース・ミルトン・スタットラーの生涯について、生い立ちからホテルマンとしての修行を経て、経営者としての芽生えが生まれるまでを紹介した。
	美を求めて点から宙へ	丹羽俊夫	日本画における絵具や材料、自身の手がけた舞台絵の制作過程、務めた総合美術展の審査運営等を紹介し、自身の日本画との向き合い方について随想した。
	本学学生のゴルフに対するイメージ I 一経験・所属学科・男女の差について一	松下高信	本学学生444名に対し、SD法を用いてゴルフに対するイメージ調査した結果、肯定的・好意的なイメージは、経験を積むほどに強くなり、また男子の方が女子よりも強く、幼児教育学科学生の方が美術学科学生よりも強い傾向があること等を明らかにした。
	QCD Dual Ginzburg-Landau 理論における Meson-Meson 相互作用	矢澤建明	QCD (量子色力学) の低エネルギー有効理論として実用的な Dual Ginzburg-Landau 理論を用いて、meson-meson 相互作用-inter-meson ポテンシャルを調べた。
	マルチメディア情報提供端末 MEDIASTAFF SS モデル	大田信市	デザイン
	ホームページを利用した検索システムの提案	矢澤建明 金田千恵子	PostgreSQL データベースと PHP/Perl を用いて、本学紀要の検索システムの構築を試みた。
	精神保健における臨床社会学をめざして	櫻村愛子	精神保健において必要な社会学的認識について、医療社会学やコミュニティ心理学の先行研究を踏まえ、生活世界の自明性を相対化しうる臨床社会学の枠組みを提示した。
	メディアによる場所イメージの形成 一金沢の事情一	柴田紀子	金沢の場所イメージについて、歌謡曲 2 曲、映画 1 本、小説 2 作を用いて調査した結果、イメージが市外在住者によって形成されており、メディアによる影響が小さくない可能性を示した。
	社会福祉専門職養成における「対人援助技術」の実際と課題	杉山正樹	社会福祉専門職養成において、相談援助と施設における生活援助を統合した援助技術としての「対人援助技術」に注目し、その役割と課題を整理し、標準カリキュラムの再編の必要性を論じた。
	シングル・女性・表象 一明治44年一	原田節子 (青司子)	女性は結婚すべきとの思想について、明治44年前後の婦人論争における言説を取り上げ、良妻賢母論や女性解放論においても、女性の生き方として固定化されていることを論じた。
	視覚障害者のための感覚代行技術と教育について	堀江正子 下村有子	視覚障害者の感覚代行技術の現状を取りまとめ、技術活用のための支援体制の充実の必要性を論じた。
	Tel/Tk におけるマルチプラットフォームアプリケーションの開発とインターネットへの拡張	小坂英洋	OS (オペレーションシステム) に依存せず、ネットワーク上で利用可能な点訳システムを、スクリプト言語 (Tel/Tk) を用いて構築し、インターネットへの拡張を試みた。
障害者ツアーの課題	岡森正吾	障害者海外旅行ツアーの実態を調査し、課題を整理し、旅行社等に対するノーマライゼーション推進のための啓発活動の必要性について論じた。	
24	ライオンのみみつ (作曲)	朝倉喜裕	作曲
	児童・幼児のための「器楽合奏の歩み」	岩本静香	教育現場における西洋音楽の導入・発展について、明治期以降の唱歌や童謡等の広がり、戦後の器楽合奏の導入、音楽コンクールの開催などを整理して取りまとめ、情操教育の重要性を論じた。
	離婚給付 (1)	大屋恵子	離婚に伴う財産分与をめぐる問題について、清算的性質と扶養的性質の観点から学説を整理して取りまとめた。
	女子短期大学生の減量経験に関する一考察 (第 2 報) 一体型意識について一	岡田 茂林 宏一 辻 昌美	本学幼児教育学科の学生を対象に、自分の体形に対する判断等についてアンケート調査をした結果、医学的な適正体重よりも低い体重を希望している回答が多く、科学的な知識の教育の必要性を論じた。
	女子短期大学生の減量経験に関する一考察 (第 3 報) 一減量に対する意識について一	岡田 茂林 宏一 辻 昌美	本学幼児教育学科の学生を対象に、減量意識として動機や選択方法等についてアンケート調査をした結果、美容上の理由が多く、マスメディア情報を受けて減量方法を選択している状況を明らかにし、支援の必要性を論じた。
	生活の質の評定過程と自己記述について 一改変記述対象評定法のカウンセリング・セラピー等への応用一	奥田裕紀	学生 180 名に対して、総合的な「生活の質」の評定項目と重要度・満足度について尋ねた結果、多くの被験者は重要度と満足度を考慮して評価したと回答し、用いた記述対照評定法の臨床的応用の可能性について考察した。
	Application of Fuzzy Theories To Measurements of Multi-meaning Stimulus Ambiguity	奥田裕紀	視覚的多義図形の見え方評価について、ファジィ理論を用いた分析を試み、その応用可能性について論じた (英文)。
	角運動量に制限のない分子積分コードの実装	川邊弘之	角運動量の制限のない分子積分コードについて、C 言語によるプログラムと Fortran77 によるプログラムによる実装結果を比較し、課題を考察した。
	変容	鈴木治男	絵画
	小規模小売業の地域密着型販売促進戦略 一地方における商店経営の集客と売上アップ一	北潟克輔	小規模小売業の経営戦略として、特に販売促進戦略の具体的な手法として、シェア重視、顧客満足と客数重視、客層の差別化と情報誌の活用などを紹介した。
	保育士を目指す学生のボランティア活動に対する意識調査	小林千恵子	本学幼児教育学科学生を対象に、ボランティア活動に対する意識調査を行った結果、活動に対して肯定的な考えが多かったが、実際の活動にはつながっておらず、コーディネーターの必要性を論じた。
音声ホームページの作成	下村有子 瀬戸統一 吉浦真由美	音声ホームページの制作を試み、ファイルサイズ、プログラミング、キーボード操作性、立ち上がり時間等について、評価と今後の課題をまとめた。	
CD-ROM 版 構図法入門 一セザンヌ絵画の魅力一	鈴木治男	セザンヌの絵画を題材にした「構図法入門」の授業を、データとして記録し CD-ROM の制作を試みた。	

24	近代ホテル産業の基礎を創った男 エルスワース・ミルトン・スタットラー小伝中	中谷重之	近代ホテル産業の基礎を創ったエルスワース・ミルトン・スタットラーの生涯について、レストランの開店や一般大衆が利用できる高級ホテルの建設等のエピソードを紹介した。
	美を求めて 一私の顔―	丹羽俊夫	自他が描くさまざまな自分の「顔」の絵を集めて紹介した。
	本学における校内美化運動の実践と報告	能 雄司	本学における教室内の整理整頓と美化について、点検項目の設定と状況調査および改善に向けた取組をまとめた。
	本学学生のゴルフに対するイメージⅡ ―各群の授業受講前後の変化について―	松下高信	本学学生444名に対し、SD法を用いて、ゴルフの授業の受講前後のゴルフに対するイメージの変化について調査した結果、総じて受講後に肯定的・好意的な方向へ変化する傾向にあること等を明らかにした。
	陶板「チューリップの芽」	朝井仁美	陶板
	Linuxを使用した情報教育演習環境の構築	矢澤建明 金田千恵子	オープンソースのOSであるLinuxを利用して情報教育環境を試験的に構築し、演習環境やメール環境を確認して、今後の可能性について考察した。
	講義を通してみた短大生にとってのメンタルケアの重要性	吉本通子	本学学生に対し、健康管理に関する講義の受講前後で、心身の状態の自覚の変化を調査した結果、身体的・精神的の両面において一定の向上は見られたものの、精神面のサポートが必要な学生が多いことがわかったと報告した。
	シングル・女性・表象 ―1913年の「新しい女」―	原田節子 (青司子)	1913年の『青鞥』1月号に始まる「新しい女」論争の中、恋愛が女性の個の確立に必要な要件とされ、恋愛・カップル神話の形成やシングル差別につながっていく過程を記した。
	ソーシャルケースワークの原則「受容」再考	梅崎 薫	ソーシャルワーカーに求められる「受容」について、バイスティックの理論を参考とし、現代の社会福祉援助技術を学ぶ学生を指導するうえで留意すべき点について考察した。
	「恋愛結婚イデオロギー」の成立と「男女交際」の作法 大正期女性メディアの言説分析を通じて	高島智世	大正期の女性メディアの記事を題材として、近代日本における恋愛結婚イデオロギーの成立から大衆化への変遷を概観し、結婚前の男女交際におけるジェンダー化された行動様式について分析した。
	上肢作業時の呼吸・循環系応答と主観的作業強度 ―上肢―下肢の作業効率の比較―	平下政美 請田芳恵 能 雄司 平田耕造	健康学生を対象に、上肢作業と下肢作業を遂行させ、呼吸・循環系の応答および主観的運動強度(RPE)を測定した結果、上肢作業の方が多くのエネルギーを必要とし、RPEは心拍数の最大値等との相関が高いことを確認した。
	話し言葉教育の問題点 ―敬語を中心に―	平野美樹	本学学生を対象に、敬語に関する意識と知識についてアンケート調査をした結果、敬語への無関心や基本語彙不足が確認され、国語教育における「話す」能力の習熟に初等段階から取り入れる必要性について論じた。
	北魏孝文帝と長楽信都・馮氏の関係についての一考察	蘇 哲	北魏の改革を担った孝文帝と馮太后の関係について、太和年間(477-499)の宮廷闘争史から文献的に探った。
	教養教育としての英語(1)	加藤真一	日本の大学における一般・教養教育科目のあり方について、大学設置基準の大綱化(1991年)以降の変容の状況を踏まえて将来を展望し、英語によるコミュニケーション能力の養成の必要性について考察した。
25	松任市石立町の石の木塚と浦島太郎伝説について(その1)	佐々木弘明	松任市石立町の史跡「石の木塚」に伝わる石立の浦島伝説について、文献的に6種類の伝説を取り上げて、一般的な浦島伝説と合わせ、内容を比較した。
	ビジネス実務教育とビジネス・コミュニケーション的行動の研究課題	北潟克輔	これからのビジネス実務教育について、特にビジネス・コミュニケーション的行為における高度情報化や高度デジタル化への対応と、経営戦略への貢献を考慮した実践の必要性について論じた。
	美を求めて 一私の中の美術は武術に通ず―	丹羽俊夫	昭和57年以来、ヨーロッパをはじめ世界各地を取材訪問し、描いた作品の展覧・展示履歴およびスケッチの方法、武術とのかかわり等について、既出の記事等から紹介した。
	女子短期大学生の朝食習慣と朝食に関する学習経験の記憶について	岡田 茂 林 宏一	本学幼児教育学科学生に対し、朝食習慣の状況等を調査した結果、朝食欠食のある学生の割合が23%となり、栄養教育のあり方の必要性について論じた。
	「大奥の上臈」	今村文男	絵画
	本学学生用モバイル Web サイトの検討	瀬戸就一 下村有子	モバイルコンピュータ用の本学 Web サイトとして、iモード用のC-HTML言語を用いて試作した。
	金沢の観光魅力度 その一 都市観光と都市旅館	中谷重之	金沢における都市観光を構成する資源として「日本旅館」を取り上げ、宿泊体験者(外国人家族、本学学生、首都圏の学生)による要望や改善点についての報告を紹介した。
	短期大学の低用量ビールに関する知識度と意識に関する一考察	能 雄司	本学学生に対し、ビールに関するアンケート調査を実施した結果、避妊薬としての認識はあるものの、使用方法などについての知識は少なく、正しい教育の必要性について論じた。
	専攻科学生が実習記録に生かすための検討会の効果	小林千恵子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に、実習記録の内容について学生同士の検討会を実施した結果、その後の実習後の実習記録は改善され、技術指導と同じく記録指導の重要性について論じた。
	絵本「チンチンドン」	新井 浩	絵本
	3次元Georgi-Glashow模型における格子モノポール作用	矢澤建明	3次元Georgi-Glashow模型によるクォーク閉じ込めの解析について、Abelian projectionと格子モノポール作用を使って検証し、Coulomb希ガス仮定の下で成立していることを明確にした。
「荒城の月」によせて	岩本静香	瀧廉太郎が作曲した「荒城の月」(作詞:土井晩翠)について、誕生の経緯を紹介し、曲解説を試みて作曲家・作詞家の心情にせまり、音楽におけるコンソレーションについて随想した。	
気液2相流内の気泡速度計測手法について	藤元宏一	気液2相流内の気泡速度ベクトルについて、可視化画像から粒子画像の測度計測法(PIV)により計測し、その有効性について論じた。	

25	本学学生に対するゴルフに対するイメージⅢ —各群の授業受講後の比較について—	松下高信	本学学生に対して、ゴルフの授業の受講前後のゴルフに対するイメージの変化についての調査を行い、その結果について、学科、性別、経験の有無による群間比較を行った結果、複数のイメージ項目に有意差が見出され、今後の授業展開の参考となることを示した。
	(a + y) 二相ステンレス鋼の研磨加工層における X 線のマクロ・ミクロ残留応力測定	廣瀬 元 鷹合滋樹	二相ステンレス鋼における研削加工後の残留応力について、X 線応力測定法を用いて実測した結果、両相の相応力の大小関係が表面域と深部で逆転し、塑性ひずみに関係している可能性等を明らかにした。
	離婚給付 (2)	大屋恵子	婚姻中の夫婦財産関係について、法定財産制における別産制を確認し、内助の功の評価をめぐる学説および判例を取り上げ、実質的不平等がもたらされている問題を解消する必要性について論じた。
	狂言についての考察	ガート・T・ウ エスタハウト	狂言を英語授業に取り入れた実践記録と、狂言台本に脚色して創作した狂言ミュージカルの上演について報告した。
26	集団法による人物描画の活用について	佐々木弘明	本学学生に対して集団法による人物描画を実施し、描画の全体評価を通して、クラス全体の雰囲気や一人ひとりの性格傾向、生活指導に注意を必要とする学生の把握に活用した実践記録を紹介した。
	ブラウザのキー入力による音声ストリーミング配信の研究	瀬戸就一 川辺弘之 下村有子	キーボード入力のみで Web サーバから擬似ストリーミングにより直接音声や動画を配信する方法を検討し試作した。
	美を求めて —日本の美の根源について—	丹羽俊夫	古代日本における天地創造の神話を、自身の作品群と記紀等から紹介し、日本の美の根源について随想した。
	児童・幼児のための「リード合奏」における研究課題	岩本静香	戦後、幼児・児童が演奏可能な楽器として普及したリード楽器を用いたリード合奏について、指揮・指導者や作曲の必要性を論じた。
	「ある群像」	円地信二	絵画
	離婚給付 (3)	大屋恵子	家事労働を評価する考え方および離婚による財産分与の際の清算における共有説について、学説や判例を挙げて検討し、夫婦生活の多様性を加味した財産分与の解決策を検討した。
	専攻科学生が実習記録に生かすための検討会の効果 —第二報—	小林千恵子 山根淳子 五十嵐峰子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に、実習記録の内容について検討会を実施し、アドバイスをを行った結果、その後の実習後の実習記録において特にまとめの記述に変化が見られたことを報告した。
	ミュージカルを通じた英語教育と国際交流	ガート・T・ウ エスタハウト	小学生における英語教育において、英語劇の製作・上演を実践したことによる教育効果および主催する大杉ミュージカルシアターによる海外公演 3 件と八雲国際演劇祭での公演による成果をまとめた。
	女子短期大学生の食品購入に関する考察	岡田 茂 林 宏一	本学学生に対し、食品購入に関する実態を調査した結果、栄養ではなく、価格や嗜好を優先して購入している学生が多く、栄養教育の必要性について論じた。
	3 次元格子モデルにおけるモノポール描像と 4 次元高温 QCD	矢澤建明	4 次元の高温 QCD (量子色力学) において、時間成分モノポール作用と、3 次元 Georgi-Glashow モデルのモノポール作用が連続極限で一致していることを明確にした。
	専攻科学生の介護に対する学習意欲と学習イメージ —入学前の教育課程の相違から考察する—	山根淳子 五十嵐峰子 小林千恵子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生の学習意欲と学習イメージについて、入学前の学習履歴の相違から比較した結果、専門学習の既習者の方が学習に対してマイナスイメージを持つ傾向にあることを明らかにした。
	スノーボード実技指導の転倒傷害防止対策とリスクマネジメント —本学スノーボード実習の取り組み—	能 雄司	本学が実施しているスノーボード実習の参加学生に対し、転倒傷害防止のための対策を行った結果、ヘルメット着用には一定の効果があり、講義の実施等により安全意識が向上し、転倒情報カードの提出の義務付けにより安心感が向上したことを報告した。
二相ステンレス鋼の X 線フラクトグラフィ	廣瀬 元 鷹合滋樹	二相ステンレス鋼の疲労破面に対し、X 線フラクトグラフィ (破面解析) により応力測定を行った結果、塑性ひずみと破壊力学パラメータとの対応関係を認めた。	
「箱」	堀 一浩	絵画	
おむつ内排泄体験から思いやりの気づきと実習への応用	五十嵐峰子 山根淳子 小林千恵子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に、おむつ内排泄体験を実施した結果、高齢者に対する気づきが得られることを明らかにした。	
幼児教育学科におけるボランティア活動の意義と課題 —福祉ボランティアを中心として—	中村明成	本学学生のボランティア活動について、活動実践の記録を取り上げ、問題点やコーディネーター等の支援体制の必要性、プライバシーの問題、単位化に向けての課題等を考察した。	
教養教育としての英語 (2・完)	加藤真一	大学における一般・教養教育科目に位置づけられる英語教育のあり方について、目的や教授方法を整理し、将来展望として、学生の変化、通信技術とマルチメディアの発達等に対応した英語教育研究の必要性を論じた。	
金沢・日本 2001	東田修一	デザイン	
27	姓名のローマ字表記に関する考察	北川昭栄	日本人の姓名のローマ字表記について、学生の考え、文化庁の認識、歴史厳経緯を概観し、国の文化政策としての決定が必要であると論じた。
	介護実習における学生の心情の変化	小林千恵子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、介護実習前後の心情の変化についての自己評価を質問した結果、準備段階の自己評価は低く、実習を経て意欲が向上すること等を明らかにした。
	美を求めて —論ずる世界と実践するの世界—	丹羽俊夫	美術を学ぶ上で、理論よりも実践、実技、体験を積み重ねることの重要性を体験的に記した。
	ビジネス実務教育における社会的スキルの指導に関する一考察	岡野絹枝	ビジネス実務教育における社会的スキルとして、聴き取る力、読み取る力、伝える力の 3 点を習得させる授業指導案を作成・実践し、受講者の自己評価により指導成果を確認した。
大学生の生活習慣病に対する認識について	岡田 茂 林 宏一	社会福祉学および食品栄養学を専攻する大学生 254 人に対し、生活習慣病の認識についてアンケート調査を行った結果、言葉としては知っていても詳細な知識は持たず、また学習意欲は高い傾向にあることを明らかにした。	

27	ナインイレブんと観光 一新ミレニアムの指標：軍事力から観光力へ	中谷重之	2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ後の観光産業の凋落を取り上げ、軍事力による支配のあり方への疑問を呈し、人心を惹きつける観光の力を示唆した。
	児童・幼児期の音楽における「編曲」の定石	岩本静香	児童・幼児期向けの音楽編曲について、原曲のアナリーゼ（楽曲分析）の重要性を具体例を挙げて論じた。
	「響一喇叭」	高野 實	絵画
	スノーボード実習における身体負荷に関する一考察	能 雄司	本学が実施しているスノーボード実習の参加学生に対し、自覚する身体的負荷の状況を調査した結果、特に初心者・初級者は、上級者・中級者よりも負荷が大きく、原因は筋肉痛、部位は臀部が最も多い割合であったことを報告した。
	IPおよびCT理論を用いた残留応力測定	廣瀬 元	IP（イメージングプレート）を用いたX線応力測定を、二相ステンレス鋼の研削加工解析を適用して検証し、またCT（コンピュータトモグラフィ）理論を用いて、二相ステンレス鋼の引張後の二次元的な残留応力分布の測定を行い、有効性を確認した。
	安心して話せる談話室の必要性 一学生の相談室要望把握のアンケート調査一	五十嵐峰子	本学学生に対し、相談要望把握のためのアンケート調査を実施した結果、相談要望は多いが学内談話室の利用には至っておらず、環境整備の必要性について論じた。
	離婚給付（4・完）	大屋恵子	離婚後の財産分与に扶養または補償的要素を認める考え方について、また離婚慰謝料が財産分与に含まれるかどうかについて、学説を渉猟して問題点を整理した。
	ライフデザイン（生活の中のデザイン）・私の仕事 視覚伝達/タイポグラフィ	西川征輝	デザイン
	育児用品の実地調査学習の検討	山根淳子	本学幼児教育学科学生に対し、育児用品の実地調査を課題とし、調査内容や調査方法についてアンケート調査をした結果、内容としては紙おむつ、方法としては店舗での調査が多く、また調査後の興味関心の向上につながったことを報告した。
	千代女の俳句：音楽的な解釈	ガート・T・ウエスタハウト	作曲
	障害者の職業的自立のための総合的支援 一総論的考察一	和泉美智枝	障害者雇用にかかる施策がすすむ中、雇用現場における諸問題を整理し、ジョブコーチ（職場適応支援者）の配置、障害者マネジメントによる支援、障害者就業・生活支援センターの設置等の必要性を論じた。
	Abelian Projection に依存しない格子上の Monopole	矢澤建明	トフフート（t'Hoof）による連続理論においてAbelian projection に依存しないモノポールが、格子上で依存する問題について、依存性を改善する定式化を試みた。
	幼児教育学科におけるボランティア活動の意義と課題 2 一実習教育との関係性から一	中村明成	本学幼児教育学科の学生のボランティア活動状況を実習教育との関係性から整理し、課題として、自主性の向上、継続性の確保、グループ活動への支援、トラブル対応の体制整備等を挙げた。
	「母の歌」	相河喜美子	舞台衣装
	28	ベトナムのストリートチルドレン医療援助に参加して	小林千恵子
集団法による人物描写と樹木描写を拒否した学生の一事例		佐々木弘明	本学学生に対して集団法による人物描写および樹木描写を実施した際、描写を拒否したある学生に焦点を当て、支援の経緯と支援体制の課題について取りまとめた。
教科外国語「英語」の変遷についての考察 一戦後高等学校学習指導要領に沿って一		北川昭栄	戦後の高等学校英語教育として、8回にわたる学習指導要領の変遷を概観し、教育方針の一貫性の欠如、話すコミュニケーション指導方針への不徹底、実践的・総合的な英語力重視への方向転換の3点を特徴として挙げた。
介護実習における学生の心情の変化 ～第2報・年度間の比較～		小林千恵子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、実習に関する満足度や意欲等について質問した結果、意欲の高い者は実習体験の機会も多く、満足度も高い傾向にあること等を明らかにした。
美を求めて		丹羽俊夫	釈尊仏陀の生涯の伝記、仏伝を題材に描いたスケッチ72点を紹介した。
プレゼンテーション・スキルに関する一考察（1）		岡野絹枝	プレゼンテーションの特徴およびプレゼンテーション・スキルの要素を整理して、スキル向上のためのトレーニング方法を取りまとめた。
「私の教授法 ～肩に小鳥を～」		岡野絹枝	全国大学実務教育協会主催の「ベスト・エデュケーター・オブ・ザ・イヤーズ」全国大会における発表内容を紹介した。
大学生の生活習慣病に対するイメージについて		岡田 茂 林 宏一	社会福祉学および食品栄養学を専攻する大学生254人に対し、生活習慣病のイメージについてアンケート調査を行った結果、ネガティブなイメージを持つ学生が多いことを明らかにした。
「窓辺 2003」「窓辺・春の雪」		林 可耕	絵画
スノーボード実習の安全を目的としたプログラムの一考察 一初心者・初級者を対象として一		能 雄司	本学が実施しているスノーボード実習における初心者・初級者対象の実習指導プログラムについて、特にボード片足装着でのリフト降車時と、ゲレンデ連絡コース滑走時における安全上の指導ポイントをまとめた。
格子上の改良された Abelian Projection		矢澤建明	トフフート（t'Hoof）によるAbelian projection モノポールがゲージの取り方に依存する問題について、U（1）部分の取り出し方を検討し、数値計算を行った。
実習施設で生かせる介護技術演習の習得について		五十嵐峰子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、現場実習前の介護技術演習における学習成果についてアンケート調査を実施し、基礎から応用に至る技術習得を効果的に支援する実習指導のあり方を考察した。
離婚と子ども（1）		大屋恵子	有子離婚に伴う未成年の子の生活安定にかかる問題について、自主的解決性の高い協議離婚における子への福祉への配慮の確保が実現できる制度改善の必要性について論じた。
育児用品の実地調査学習の検討（第2報） 一平成14年度受講性と平成15年度受講生の比較から一		山根淳子	本学幼児教育学科学生に対し、育児用品の実地調査について調査方法について教示を与えたのち課題に取り組みさせた結果、学生はより円滑に調査を実施できたことを報告した。
よくばり天狗 一ミニ紙芝居一		ガート・T・ウエスタハウト 新井 浩	紙芝居

28	知的障害者の就労支援 一知的障害のある人の3級ホームヘルパー養成研修講座開講をめぐって一	和泉美智枝	知的障害者が受講できる「3級ホームヘルパー養成研修講座」について、先行事例を参照し、石川県における開講に向けて企画書の作成を試みた。
	牛飼う人の肖像「Image of herdsman」	作内宣夫	彫刻
	幼児教育学科におけるボランティア活動の意義と課題3 一実習教育との関係性から一	中村明成	本学学生のボランティア活動について、活動実践の記録を取り上げ、今後の課題の一つとして、障害者福祉サービスにおける「支援費制度」における有償ボランティアの取り扱いについて論じた。
	青年期における自己嫌悪感と自己肯定感一保育職を目指す学生の場合一	米川祥子	本学幼児教育学科の新入生に対し、自己肯定感・自己嫌悪感に関するアンケート調査を実施した結果、特に「他者への過剰意識」が「自己信頼」「自己受容」と負の関係になること等を明らかにした。
	西南幼稚園の共同製作活動報告	佐々木賢二	近隣の西南幼稚園において、3学年合同による共同製作活動を行い、作品展を実施した記録を取りまとめた。
	アートブック「SEVEN STARS」	高田 巖	アートブック
	「美術」に対する苦手意識が生まれる要因およびそれを崩す試みについての一考察	森田ゆかり	本学幼児教育学科学生に対し、美術に対する苦手意識を持つ要因を分析し、ビデオ視聴によって苦手意識を崩す実践記録を取りまとめた。
	近代ホテル産業を創り上げた男 エルスワース・ミルトン・スタッター その三	中谷重之	近代ホテル産業の基礎を作ったエルスワース・ミルトン・スタッターの生涯について、各地のホテル建設、ホテル協会の仕事、マネジメント哲学等を紹介した。
	歌唱指導における簡易伴奏は是か非か?	岩本静香	子どもの歌における簡易的なピアノ伴奏について、具体例を示し、詩を生かして原曲の雰囲気を生かす伴奏の必要性について論じた。
	29	精神介護実習前後における学生の精神障害者に対する認識の変化	山根淳子
学童スポーツ選手の夏季活動における健康管理の実態		能 雄司 佐々木賢二 平下政美	石川県内の学童スポーツ選手を対象に、夏季の健康管理状況についてアンケート調査を行った結果、被服の調整不足、朝食の欠食、脱水回復（水分補給）の不足、クーラーの頻用等の課題を明らかにした。
離婚と子ども（2）		大屋恵子	有子離婚に伴う未成年の子の生活安定にかかる問題について、離婚や女性の生き方に関する国民意識の変化の状況を概観し、また親の未成年子に対する養育義務について学説を引用して整理した。
2005年観光学事始		中谷重之	世界で大衆観光が一般化した今日、日本における観光産業の滞滞状況を憂うとともに、観光力を高める必要性を論じた。
実習時の介護実践における疑似体験学習の活用 一学習を想起する段階とその内容一		舞谷邦代	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、片麻痺体験学習の実習における活用状況についてアンケート調査を行った結果、約半数が実習場面において疑似体験学習を想起しており、知識・技術の定着に有効であることを明らかにした。
知的障害者の就労支援Ⅱ 一石川県におけるホームヘルパー3級養成研修の実態<その1>一		和泉美智枝	石川県における「知的障害者ホームヘルパー資格取得講座」について、開講に至る経緯、カリキュラム、募集、運営、修了者の動向を取りまとめ、総論的な考察を行った。
プレゼンテーション・スキルに関する一考察（2）		岡野絹枝	社会人を対象とするプレゼンテーション・スキル向上のための研修として、技術的技法と精神的技法の双方を取り入れたセミナーを実践し、指導方法の具体的構築を試みた。
美を求めて 一魚が私になって「丹羽俊夫 魚で描く展」一		丹羽俊夫	企画展「丹羽俊夫 魚で描く展」の出品作品の中から212態を紹介した。
「又左の間」「富樫の間」		丹羽俊夫	ふすま絵
WebDAV と Samba を利用した学生用ファイルサーバ		矢澤建明	学内での利用可能なファイルサーバをインターネット上で利用可能とするシステムの構築を試み、あわせて同システムのモニタリングとしての利用可能性について検討を行った。
創造性教育 レッジョ・エミリアの幼児教育 一白山市N保育園での実践教育に向けて一		森田ゆかり	レッジョ・エミリアの幼児教育の実践に向けて、学習会を行い、具体化に向けての検討過程を取りまとめた。
「経済」という言葉のバブル現象 一現代中国語の「XX経済」を中心に一		林 文嬋	「経済」という言葉の起源から現段階の用法までを概観し、特に中国語にあって日本語にはない「美女経済」「休日経済」等の語の発生や展開についてその背景を探った。
保育者に求められる資質についての意識形成（1） 一幼児教育専攻学生の保育者を志した動機一		米川祥子	本学幼児教育学科1年生に対し、保育者を志す動機についてアンケート調査を行った結果、小さい頃からの子どもとの関わり、子どもが好き、職場体験、幼児期の保育者の記憶等が上位に挙げたことを報告した。
漆ペンダント（携帯用ルーペ）		八木 茂	工芸
幼児教育学科におけるボランティア活動の意義と課題4 一実習教育につながる活動をめぐって一		中村明成	本学学生のボランティア活動について、活動実践の記録を取り上げ、実習前の自主活動を促したところ、件数・人数ともに大幅に増加し、今後は質の向上を目指す重要性について論じた。
9月における保育活動の安全性への検討 一暑熱障害予防の観点から一		佐々木賢二	9月の某保育園における環境温度と、園児の発汗量・飲水量・体温との相関を調査した結果、わずかに自発的脱水が観察されたが高い体温上昇は観察されなかったことを報告した。
猛暑期（8月）における保育施設内での安全な保育活動への検討 一暑熱障害予防の観点からその2一	佐々木賢二 能 雄司 平下政美	夏期（8月）における某保育園の環境温度を計測したところ、園庭・プールテラスは非常に高く、乳児保育室はエアコンによりかなり低い温度で調整されている実態を報告した。	
コミュニケーション能力を高めるための効果的指導	五十嵐峰子	本学幼児教育学科の学生に対するコミュニケーション能力の効果的指導について、非言語コミュニケーション、受け入れ姿勢、相手との信頼関係、体験学習などの観点から考察した。	
LANDSCAPE	徳田明美	磁器	

29	私の授業報告 ～嫌いな英語が好きになった～	穴戸 温	本学ビジネス実務学科において、学生の英語嫌いを英語好きに改善させた授業の実践記録をまとめた。
	北陸プライダル事情 ～プライダルに関する学生の意識調査より～	下口治美	北陸エリアのプライダル事情について、学生の意識と現状を比較し、今後、多様化する結婚スタイルとのプライダルビジネスのあり方について考察した。
30	保育教材 パネルシアター作品	佐々木賢二	石川県の昔話「ふうふう ぼんぼん あっちち」と「カンチン茶釜」を保育教材パネルシアター作品として製作し、台詞を付けて紹介した。
	まちづくりと美術・考	中山治男	美術活動を通じたまちづくりの取組を紹介し、都市の魅力を高める市民文化活動としてのまちづくりの重要性について論じた。
	「高考経済」について 一現代中国における教育産業化の実態一	林 文娟	中国における高考（全国統一試験）ブームのなかで生まれた用語「高考経済」について、高考の前・中・後それぞれに発生する経費と、高校段階における投資額を事例紹介し、過剰な教育負担となる現状の問題点を整理して指摘した。
	私のアメリカ体験記（アメリカ・カナダ理解の一助として）	穴戸 温	アメリカ25州およびカナダ2州の訪問経験を踏まえ、習慣や制度など日本との違いを取り上げ、またopenでpositiveな心性や行動を紹介し、国際理解の一助とした。
	保育士養成校としての「福祉サービス第三者評価」の活用	和泉美智枝	全国保育士養成協議会が実施する「児童福祉施設福祉サービス第三者評価事業」による評価や課題を、保育士養成に生かす方途について検討した。
	幼児教育学科におけるボランティア活動の意義と課題 5 一実習教育につながる活動をめざして一	中村明成	本学学生のボランティア活動について、活動実践記録を取り上げ、今後の可能性として、本学独自の特化教育プログラムとの連携や、地域協働への試みについて論じた。
	新会社法及び改正商業登記法等に関する論点整理その1	岡野大輔	新会社法（2005年公布）および改正商業登記法等について、会社の目的、会社の商号、会社の公告方法等18点について、論点を整理した。
	離婚と子ども（3・完）	大屋恵子	有子離婚に伴う未成年の子の生活安定にかかる問題について、離婚における養育費の現状、算定方式の考え方、支払確保制度（履行確保制度）を概観し、適切な養育費のあり方について論じた。
	「実践的総合キャリア教育」推薦プログラムに関する試案	岡野絹枝	2003年、関係5閣僚がまとめた「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」に示された「実践的総合キャリア教育」推進プログラムに基づき、本学ビジネス実務学科が実践した3プログラムを紹介し、今後の可能性を展望した。
	ジュニア期の夏季野球練習時における熱中症発生と水分摂取法の関係	能 雄司 佐々木賢二 平下政美	石川県内の学童スポーツ選手を対象に、夏季のスポーツ活動中の水分摂取の状況等についてアンケート調査を行った結果、特に学童野球の練習時間が長く、水分補給の回数を増加させる必要があることを論じた。
	卒業生による記念植樹目録を通じた金城大学キャンパス植栽の歴史	加藤 博	本学卒業生による卒業記念植樹の歴史を概観し、キャンパス緑化について、これまでの推移を踏まえ、今後のあり方について提言を行った。
	専攻科学生の生活体験の実態	舞谷邦代	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、生活経験の実態についてアンケート調査を行った結果、一人暮らしかどうかによって経験の頻度に相違があることを明らかにした。
	Moonlight Mischief	ガート・T・ウ エスタハウト 新井 浩	狂言の演目「附子（ぶす）」と「吹取（ふきとり）」の内容を合わせた英語ミュージカル「Moonlight Mischief（満月のいたずら）」を創作し、紹介した（英文）。
	階層型PTV再配置法の開発	井戸健敬	粒子追跡流速測定法（PTV: Particle Tracking Velocimetry）について、離散的なデータに修正を加えず再配置する手法を提案し検証した。
	Abelian Projection と格子上でブロックスピン変換	矢澤建明	トーフト（t Hooft）によるAbelian projection モノポールがゲージの取り方に依存する問題について、U（1）部分の取り出し方を検討し、F12ゲージ固定、モノポールのブロックスピン変換による数値計算を行った。
	日本の外国文化・言語受容の歴史に関する考察 漢字文化～南蛮文化	北川昭栄	わが国が外国文化や外国言語を受容してきた歴史的背景について、漢字文化の確立から南蛮文化との交易が発達した安土桃山時代までを概観した。
	訪問介護実習教育内容の検討 ～訪問介護実習アンケート調査から～	山根淳子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、訪問介護実習の実施状況についてアンケート調査を行った結果、介護課程展開につながる学習が不足しており、体験の意味付けに関する連携指導の重要性について論じた。
半導体ガスセンサを用いた高齢者の振舞い認知について	瀬戸就一	高齢者の安否確認サービスとして、半導体ガスセンサを用いて口臭を測定し、解析データから食事や歯磨き等の振舞いの認知を試みた。	
触角を育むことの意義その1	森田ゆかり	本学幼児教育学学生から、子どもが何かに触れる体験の状況とそのときの感想についての言説を集め、触れることの意義と触れる体験の重要性について論じた。	
美を求めて 一くわがたむし編一	丹羽俊夫	企画展「クワガタ相撲百態展」への出品作品等クワガタを描いた171点を紹介した。	
「蟻の城」 「蟻姫」	瀬川陽子	衣服	
共生の森	鈴木治男	絵画	
携帯型色認識装置カラートーク	大田信市	工業デザイン	
コミュニケーション能力を高めるための効果的指導（2）	五十嵐峰子	本学幼児教育学科の学生に対するコミュニケーション能力の効果的指導について、ロールプレイやサイレントトークによる体験学習指導を行い、実習における意欲の向上を確認した。	
すずめ・おたまじゃくし	岩本静香	作詞・作曲	
国際観光と政治 I	中谷重之	国際観光市場の発展を阻む要因、海外旅行における安全性の確保、国際観光発展のための政治的認知にかかる諸問題を、事例を挙げて論じた。	

付録3 「金城紀要」掲載投稿一覧（31～40号）

号	タイトル	著者・作家	内容
31	知的障害者の就労支援Ⅲ（研究ノート）	和泉美智枝	「知的障害者ホームヘルパー資格取得研修プログラム」受講者の受講後の感想やその後の状況を報告した。

	地域特性を利用した大学の地域貢献活動 —県立公園を利用した地域社会ネット ワーク作成の事例—	若月博延	大学が教育資源を利用して行う地域貢献活動について、湘南工科大学が取り組みを取り上げ、地域社会ネットワーク形成の可能性について論じた。
	幼児教育学科におけるボランティア活動 の意義と、「障害理解」についての一考 察 特化「障害児保育」への期待	中村明成	本学学生のボランティア活動について、活動実践の記録を取り上げ、特化「障害児保育」等の授業につながるきっかけとしての有効性について論じた。
	「救貧事業団設立以前のプリストルにお ける救貧施設」	井上克洋	17世紀のイギリスプリストルにおける救貧施設について、ワークハウス、矯正院、ホスピタル、義捐養護ハウスの状況を概観し、長期にわたり継続した背景について論じた。
	女子学生のスノーボード実習時における 痛みの出現部位と技術レベルの関係	能 雄司	本学が実施しているスノーボード実習の参加学生に対し、自覚する身体的負荷の状況を調査した結果、技術レベルが高いほど痛みを感じる部位が四肢より体幹部に移動すること等を観察した。
	美を求めて —描き続けて— 平成15年 ～17年3年間での新聞に取材された記 事より	丹羽俊夫	2003～2005年までの3年間における創作活動のうち、取材を受けて新聞記事となった60点を集約して紹介した。
	メディア造形と環境デザイン	黒川威人	メディア造形および環境デザインについて、それぞれの歴史や特質を概観し、自身の制作品と授業教育の成果を踏まえ、両者の有効なコラボレーションのあり方について考察した。
	ウィリアム・アダムズ（日本名三浦按針） と17世紀の日本	北川昭栄	1600年、日本に漂着し幕府に召されたウィリアム・アダムズ（三浦按針）による日英交渉の歴史と、朱印船貿易が終了し鎖国に至る日本の状況を重ねて取りまとめた。
	短期大学における持続可能な職業教育に ついて	加藤 博	短期大学における持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）について、特に職業教育との関わりから考察した。
31	実習記録からみた食事介助技術の学習内 容 ～効果的な授業と実習のために～	舞谷邦代	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、実習時における食事介助の計画と実施結果についてアンケート調査を行い、結果を踏まえ、食事介助技術のより効果的な学習の組み立てについて検討した。
	介護実習におけるプロセスレコードによ る学生の学び ～介護場面の再構成を試 みて～	山根淳子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、実習時にプロセスレコード（かかわりの経時記録）の作成を求め、その活用状況についてアンケート調査を行い、結果を踏まえ、より自己洞察が深まる指導の必要性について論じた。
	“よくばり天狗Ⅱ：もどったぞー！” —うたものがたり—	ガート・T・ウ エスタハウト 新井 浩	ミュージカル
	情報科学における理科教育的手法	矢澤建明	本学の講義科目「情報科学」について、実験・実演を取り入れる理科教育的手法により実施し、その教育的効果について論じた。
	対人援助の教育方法の試み	五十嵐峰子	本学幼児教育学科の学生に対し、対人援助の知識・技術・態度の学習を深める教授法として、ロールプレイングの体験学習を開発して実施し、その効果を検証した。
	キャリア教育に関する一考察（1）	岡野絹枝	若者に対するキャリア教育について、諸外国の教育制度を参考とし、日本における課題を整理して、若者の自立を支援する今後のキャリア教育のあり方について検討した。
	新会社法・商業登記法に関する論点整理 その2	岡野大輔	新会社法（2005年公布）および改正商業登記法等について、機関設計および株主総会に関する論点を整理した。
	企業・大学・行政・NPOによる協働事業 「みんなおいでよ！ ちびっこアート体 験」4年間の記録概要 子ども・保護者 との美術活動を通して育ててきたもの	森田ゆかり	企業・大学・行政・NPOによる協働事業として、4年間にわたり実施した子育て支援事業「みんなおいでよ！ ちびっこアート体験」の記録から、保護者の意識の変容、学生と保護者の信頼関係の向上について論じた。
	絵本「キャロットのおるすばん」	新井 浩	絵本
	保育者に求められる資質についての意識 形成（2） —実習を通しての変化—	米川祥子	本学幼児教育学科学生に対し、保育者を志す意識の変化について経時的にアンケート調査を行った結果、1年次の実習後には意欲は高まるも、2年次の実習前には自信のなさから意欲が低下する傾向が明らかとなり、自己効力感養成のための指導の必要性について論じた。
少年少女合唱（女声合唱）とピアノのた めのタプルー「北陸の子ども歌」より 「穂つき歌」によるパフォーマンスコー ラスへの取り組み	朝倉喜裕	パフォーマンスコーラス	
32	保育人材養成に係る特化教育のあり方 に関する研究 ～SLOs 査定サイクル及び 保育現場との協働を通して見つめる～	和泉美智枝 米川祥子 中村明成 青山幸司 朝倉喜裕 遠藤伊津子 水上和子 森田ゆかり	本学幼児教育学科において開発した「特化教育」について、各分野の教育活動について実施後の教育の成果を測定し、保育現場と協働しつつ、教育課程の改善に生かす仕組みの構築について検討した。
	対人援助の教育方法の試み（その2）	五十嵐峰子	本学幼児教育学科の学生に対し、対人援助の実践力を高める教授法として、ロールプレイングの体験学習を実施し、有効性を確認するとともに、状況設定や振り返り方法の重要性について論じた。
	知的障害者の就労支援Ⅳ（研究ノート）	和泉美智枝	「知的障害者ホームヘルパー資格取得研修講座」を実践して課題を整理しつつ、施設就労やグループ就労など現実的な就労モデルやネットワーク形成の可能性を示し、上級資格開講への展望を提示した。
	PTV データ再配置法における重み係数の 影響	井戸健敬	PTV（粒子追跡流速測定法）における離散データの再配置に際し、時空間係数（重み係数）を考慮した評価を行い、また離散PTV データから重み係数を求める手法を提案した。

	18世紀第3四半期のイギリスにおけるワークハウス救済者 —1776年「イギリスにおける貧困者の雇用・救済・生活維持、浮浪者の逮捕および通過、そして矯正院に関する調査委員会報告書」より	井上克洋	18世紀第3四半期イギリスのワークハウス救済の実態を、1776年議会報告書の数量的に分析した結果、ワークハウスは必ずしも抑圧的施設ではなく、収益性のある労働を通じて救済費用を補い、施設内救済と在宅救済を併用する柔軟な制度として機能していたことを明らかにした。
	離婚と子ども・再論	大屋恵子	離婚後の子の福祉確保を中心に、親の扶養義務の法的根拠と養育費確保の実態を整理し、ひとり親家庭への就業支援施策については、実効性に乏しく制度改善の必要性があることを論じた。
	オランダ通詞から蘭学興隆に至る内外情勢	北川昭栄	17～18世紀の鎖国日本における対外関係と知的受容の実態を、オランダ通詞制度と蘭学の成立を軸に論じた。
	メディア造形と環境デザイン（2） —現代GPへの挑戦と学科改編—	黒川威人	2007年度、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に、美術学科が申請した「白山の遺産を生かした文化芸術創造への挑戦」を紹介し、不採択ながらも得られた波及効果を論じた。
	聴覚障害学生の聴講支援システムについて —入力データの整列処理と抽出—	瀬戸就一 川辺弘之 下村有子	聴覚障害学生の授業支援におけるノートテイク不足の問題に対し、熟練者に依存せず、多人数の初心者ノートテイクを活用する支援システムを構築し、提案した。
	近代ホテルの父 エルスワース・ミルトン・スタットラー 最終章 その一	中谷重之	近代ホテルの父エルスワース・ミルトン・スタットラーの生涯について、ニューヨークにおけるホテル経営の成功、不幸な家庭生活、後進育成のための大学教育の受け入れについて紹介した。
	8月の金沢市南部地域における屋外暑熱環境に関する研究 一市街地歩行者の熱中症予防の観点から—	能 雄司 平下政美	真夏の金沢市南部において、晴天時および日陰の熱環境を観測し、アスファルト表面が高温となること、樹陰がクールスポットとなること等を明らかにし、熱中症予防の観点から、歩道や交差点周辺に多数の樹木植栽が重要であると論じた。
	重症心身障害児（者）の理解を促す学習方法の検討 一学習初期に実施した施設見学前後に学生が抱いたイメージの変化—	舞谷邦代	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、重症心身障害児（者）の施設見学前後のイメージを比較分析した結果、短時間の見学でも、否定的・漠然とした印象から、肯定的で具体的な理解へと変化しており、今後の実習・授業設計への示唆を得た。
32	触覚を育むことの意義 その2 一触れることのインパクトによる認知の変化—	森田ゆかり	「触れる体験」が感覚や意識に与える影響について、本学幼児教育学科学生の美術授業におけるワークシート分析やアンケート調査により検討し、触れる体験によって、汚れへの抵抗感から楽しさや解放感に変化することを明らかにし、保育者養成における意義について論じた。
	格子状でのアーベリアン射影とU（1）部分によるクォーク閉じ込め	矢澤建明	トフーフト（'t Hooft）によるAbelian projection モノポールがゲージに依存せず、またゲージ固定も必要ないことを数値計算によって示した。
	Ability and Nobility: The Heculean Image in Hamlet	山田美幸 井戸健敬	シェイクスピア「ハムレット」において、ハムレットの人格が、天賦の才能と心の気高さを兼ね備えるヘラクレスのイメージに重ねられていることを論じた(英文)。
	介護実習第一段階での認知症のある人の理解について ～平成21年度からの新しいカリキュラムの編成にむけて～	山根淳子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生による認知症高齢者の理解について、初期実習における実習記録の分析から、言語・非言語コミュニケーションを工夫し、利用者の気持ちを推測・尊重しながら関わっていることを示した。
	保育者に求められる資質についての意識形成（3） 一保育実習による自己意識の変化の受け止め方に関する分析—	米川祥子	本学幼児教育学科学生に対し、保育実習前後における自己意識の変化について、自己概念測定尺度を用いて質問調査を行った結果、実習後は肯定的な自己変化を自覚していることを明らかにした。
	能登半島地震の災害支援公演報告	佐々木賢二	2007年能登半島地震を受け、幼児教育学科の学生が主体となって被災地の親子を対象に実施した「着ぐるみ劇公演・わくわく広場」の経過と意義をまとめた。
	私の授業点検	佐々木弘明	「ピアヘルパー資格試験」を受験し合格させることを目標として授業を構成し、「受験率と合格率」および「職業選択と職業意識」で学習意欲をはかり、学生中心の授業のあり方について考察した。
	幼児教育学科におけるボランティア活動のあり方と実習教育の課題	中村明成	本学学生のボランティア活動について、活動実践の記録を取り上げ、実習教育の補完にとどまらず、社会経験の広がりにつながる役割の重要性について論じた。
	“よくばり天狗Ⅲ：天狗惑星の大冒険！” —うたものがたり—	ガート・T・ウ エスタハウト 新井 浩	ミュージカル
	美を求めて 一描きつけて— 平成18年1月～19年12月までの新聞に取材された記事より	丹羽俊夫	2006～2007年までの2年間における創作活動のうち、取材を受けて新聞記事となった104点を集約して紹介した。
33	保育人材養成に係る特化教育のあり方に関する研究Ⅱ ～保育現場との協働を通して見つめる～	和泉美智枝 米川祥子 中村明成 青山幸司 朝倉喜裕 遠藤伊津子 水上和子 森田ゆかり	本学幼児教育学科において開発した「特化教育」について、実施2年目の各分野の教育活動を整理し、教育の成果を測定した結果を踏まえ、実践との関係性を視野に入れつつ、今後の展開について論じた。
	対人援助の教育方法の試み そのⅢ	五十嵐峰子	本学幼児教育学科の学生に対し、対人援助の実践力を高める教授法として、ロールプレイングと振り返りの体験学習を繰り返し実施し、コミュニケーション能力と学習意欲の向上に有効であることを示した。
	「ウェット夫妻『イギリス救貧法史』以降の旧救貧法研究の進展」	井上克洋	ウェット夫妻以降のイギリス旧救貧法研究の展開を整理し、救貧法が当事者間の「やりくり」によって機能していたことを示し、現代社会保障への示唆を提示した。
	「清の女皇」	今村文男	絵画
	ひとり親家庭についての一考察	大屋恵子	離婚増加に伴い拡大するひとり親家の深刻な貧困問題の現状を明らかにし、子どもの福祉を中心に据えた所得保障と制度改革の必要性を論じた。
	キャリア教育に関する一考察（2） —女性に対するキャリア支援の視点から—	岡野絹枝	若年層の早期離職や女性の就業継続の困難さを背景に、国のキャリア教育施策を整理し、本学ビジネス実務学科におけるキャリア形成支援の在り方を検討した。

	Rediscovering Post Wheeler : Folklore and other Writings Post Wheeler の民話撰の論考	ガート・T・ウエスタハウト	日本の口承等を500語集めて書き直し『宝談蔵』を出版したポスト・ウィーラー(1869-1956)について、その人生と作品を紹介した(英文)。
	「月と木」	梶本良衛	工芸
	ロシアとイギリスの異国船に揺れる江戸幕府 ~19世紀初頭のナゲジユダ号とフェートン号~	北川昭栄	18世紀末から19世紀初頭にかけての日本を取り巻く国際情勢について、漂流民を通じた日露接触、フェートン号事件に象徴される英日の緊張、オランダ商館長ドゥーフの仲介的役割等を取り上げ、鎖国体制の限界を論じた。
	メディア造形と環境デザイン (3) 一新 GP への挑戦と学科改編—	黒川威人	2008年度、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に、美術学科が申請した「白山100の魅力創造で芸術教育の改革推進」を紹介し、不採択ながらも進行中のコース再編等の改革への取組を紹介した。
	「潮風の旋律」	権田宜子	藍染め
	不規則な空白を含む時系列断片データからのテキスト復元 一単語配列アルゴリズムの改良—	瀬戸就一 杉森公一 川辺弘之 下村有子	初心者学生ボランティアによる不完全な入力データから講義ノートを復元する支援システムを提案し、実用には5~6人の入力者が必要であることを示した。
	ジョナサン・タートルローの「ジオツーリズム」論	中谷重之	ジョナサン・タートルローが提唱するジオツーリズムを取り上げ、地域固有の自然・文化・生活を守り高め、住民と旅行者双方に利益をもたらす持続可能な観光として紹介した。
	幼児教育学科におけるボランティア活動の意義と保育士養成の課題についての一考察 一保育士養成システムのパラダイム転換Ⅲから考える—	中村明成	本学学生のボランティア活動について、活動実践の記録を取り上げ、正課外活動のありかたについて、保育士養成協議会による「保育士養成システムのパラダイム変換」における保育士養成にかかる課題と重ねて検討した。
33	美を求めて 平成20年1月~20年10月新聞取材掲載の丹羽俊夫展	丹羽俊夫	2008~2009年10月までの期間における作品展として、取材を受けて新聞記事となった49点を集約して紹介した。
	夏の金沢における各種の街路樹形態と歩道の気温の関係	能 雄司 平下政美	金沢市において、日向と日陰の歩道における気温・湿度を観測した結果、街路樹のある歩道は無い歩道より気温が低く、直射日光を遮るため両側植栽や落葉広葉樹の導入等の有効性を論じた。
	実習経験の有無で異なる学生が抱く重症心身障害児(者)のイメージ 一重症心身障害児(者)の理解を促す学習方法の検討 part2—	舞谷邦代	介護福祉士を目指す本学専攻科学生に対し、重症心身障害児(者)の施設実習後のイメージ変化を分析した結果、期間の長短で有意差は見られず、時間の長さよりも関わりの方深さ重要性について論じた。
	「鶴冠子」軍事思想研究初探	三浦哲志	中国・戦国時代の思想家である鶴冠子が記したとされる「鶴冠子」について、構成および思想上の特徴を整理し、軍事思想史上の価値について論じた。
	実感することで始まる学びの楽しさ 「学びのサイクル」でのアプローチ	森田ゆかり	幼児教育学科学生の美術への苦手意識に着目し、五感を使った体験や失敗を肯定する活動、振り返りによる学びのサイクルを通して、意欲と自信が向上し、美術への否定的意識が大きく改善されたことを報告した。
	本学短期大学部におけるネットワーク・UNIX教育	矢澤建明	本学学生に対し、ネットワークに関する授業を実践し、問題解決能力や空間把握能力との関連性について論じた。
	介護学生の実習記録から分析した重症心身障害児とのコミュニケーション過程	山根淳子	介護福祉士を目指す本学専攻科学生5名について、重症心身障害児施設で介護実習を行った際の実習記録を分析し、非言語的コミュニケーションの学びを明らかにした。
	乳幼児をもつ保護者がゆとり感を得るための一試み ~子育て研究センター3年間の活動~	米川祥子	本学「子育て研究センター」の3年間の活動について、地域子育て支援フォーラムおよび子育て交流会の取組を紹介し、地域と大学をつなぐ役割について論じた。
	世界遺産 一観光と地域の視点から—	若月博延	日本の世界遺産について、白川郷と五箇山の比較から、登録は観光客増加や経済効果をもたらす一方、景観悪化や駐車場問題、住民の生活への負担も生じることを示し、持続可能な保護と観光の両立の重要性について論じた。
	時空間 PTV 再配置法における時空間係数の算出	井戸健敬	PTV(粒子追跡流速測定法)における離散的データの再配置にあたり、時空間係数(重み係数)を考慮し、さらに次の問題の解決を図る手法を提案して性能評価を行った。
	抄訳『イギリス救済法史』第一章ウェブ著	井上克洋	SIDNEY and BEATRICE WEBB 著『English Poor Law History』(1927刊、1963再版)の第一章「POOR RELIEF PRIOR TO 1597」の抄訳を試みた。
	人間の声 I 一声のメカニズム、各器官の構造と機能を理解し、大切な声を護り育てよう—	遠藤伊津子	人間の声の成長過程、声が出るメカニズム等を整理し、声の健康維持のための注意点を取りまとめた。
34	親権についての一考察(1)	大屋恵子	親権について、「子の利益」の観点から再検討し、単独親権制度の問題性や国家介入の不十分さを指摘し、共同親権の導入など子の権利を基軸とした親権法の再構築の必要性を提起した。
	社会福祉領域における権利概念と法学教育のあり方について(1)	岡野大輔	社会福祉実践の法化が進む中で錯綜する「権利」および「権利擁護」概念を整理し、福祉専門職に求められる法学教育として、実践的事例を踏まえた法学教育の構築の必要性を論じた。
	小学校でのミュージカル 一地域の民話を生き返らせる—	ガート・T・ウエスタハウト	ミュージカル
	開国に至るアメリカ・イギリス列強の外圧と内憂 ~オランダ語から英語学習事始めへ~	北川昭栄	日本が鎖国を解き、オランダ語から英語学習(教育)へ移行した背景を、英米による外圧と封建体制の内的矛盾から分析した。
	バックパッカーと新しい旅行形態 一概要と分類—	下口治美	バックパッカー旅行について、バックパッカー登場の経緯、定義や特性、分類を行い、新しい観光スタイルとしての研究の可能性について論じた。
	金沢・日本2009	東田修一	グラフィックデザイン

34	幼児教育学科における課外活動の現状と課題 —正課授業及び特化教育との関連性からの一考察—	中村明成	本学学生の課外活動について、活動実績の記録を整理し、正課の授業との関係や接続について検討した。
	実習Ⅰ②の目標「生活過程を理解する」は達成可能か —介護福祉士養成の新カリキュラムによる影響を考える—	舞谷邦代	介護実習における目標の一つ「利用者の生活過程を理解する」について、介護福祉士養成課程のカリキュラム改正に伴う実習時間の減少によって受ける影響を、学生の実習記録から分析し、今後の関与のあり方について論じた。
	『鶴冠子』近選篇の軍事思想	三浦哲志	中国・戦国時代の思想家である鶴冠子が記したとされる『鶴冠子』について、特に軍事に関する記述の多い「近選篇」を取り上げ、時代背景に触れつつその軍事思想について考察した。
	子どもの創造力を刺激する造形活動 —子どもの目・心になってデザインする—	森田ゆかり	附属幼稚園において実践した造形活動として、マリーゴールド染めと藍染めを取り上げ、その成果と今後の課題を取りまとめた。
	短大生による並列コンピュータシステムの構築	矢澤建明	学生の演習用教室に設置する40台のコンピュータを用いた並列コンピュータシステムの構築を、本学ビジネス実務学科のゼミナール活動として試みた。
	実習指導者の介護過程展開実習における指導内容 —指導内容の記述分析からみえた教育的・支持的かかわりの実際—	山根淳子	介護課程展開実習における実習指導者の役割について、学生2名の実習指導内容の事例から分析し、学生の実習意欲や介護に対する熱意の向上に指導者の影響が大きいことを示唆した。
	茶文化への道 —喫茶普及における中国と日本の比較—	林 文綱	中国と日本の喫茶普及の過程を比較し、中国では茶館が市民文化の拠点として喫茶と茶文化の普及を支えたのに対し、日本では茶道という精神文化を基盤に、高度経済成長期以降、家庭消費を通じて急速に普及した点を明らかにした。
	「染付干支唐草紋注器」	吉岡将式	陶磁器
	対人援助の基本技能（保育と介護の視点）	五十嵐峰子	生活体験や想像力が乏しいとされる学生を対象に記述調査を実施した結果、人権尊重、共感、気づき、コミュニケーションの重要性を概ね理解していたが、実践力との乖離が課題であり、演習や実習を通じた継続的な学びの必要性を指摘した。
	保育者養成における評価に関する試み —結果の質評価からプロセスの質評価へのシフトを視野に—	和泉美智枝 山田紀子	本学幼児教育学科における特化教育における成果評価の課題を検討し、結果の質評価から、「いま、ここ」の学びに着目したプロセスの質評価への転換を提案した。
人間の声 II 呼吸法について	遠藤伊津子	声の原動力となる呼吸法について、人間の骨格や正しい姿勢を整理し、足（脚）の使い方や息の流れについて解説した。	
イラストレーション・デザイン制作記録	オオタニユリ	イラストレーション・グラフィックデザイン	
社会福祉領域における権利概念と法学教育のあり方について（2）	岡野大輔	社会福祉領域で進む法化現象を背景に、福祉専門職に必要な法学教育のあり方として、権利擁護実践に資する実用的・実践的な「権利擁護・法学教育」を提唱し、基礎的法知識を福祉実践と結びつけた教育体系の重要性を論じた。	
100年前のソングポストカード	ガート・T・ウエスタハウト	20世紀初頭、イギリスとアメリカで印刷されたソングポストカードについて、ルーツ、出版社、特に Bamforth 社が発行したカードの分類、楽しみ方などを整理し、100年を超えて過去の人々の感情や時代の空気を垣間見ることができる資料であると論じた（英文）。	
大学生の迷惑感に関する分析 —個人特性と集団内の雰囲気等との関係—	加藤礼子	大学生が授業・部活動・アルバイトなどの集団場面で他者の行為をどの程度「迷惑」と感じるか（迷惑感）について、集団特性や個人特性との関連から検討した。	
幕末維新を駆け抜けた時代精神と国際情勢 —英語は日本を文明開化する道具だった—	北川昭栄	幕末から明治維新にかけて日本が独立と近代化を進めるなか、中浜万次郎ら英語に通じた先駆者の活躍や、西洋文明の受容における英語の重要性を示し、さらにラフカディオ・ハーンや夏目漱石の分析を通じて、西洋からの外圧が日本人の時代精神形成に大きな影響を与えたことを論じた。	
メディア造形と環境デザイン（4） —地域連携研究・教育へ—	黒川威人	本学美術学科において、「メディア造形コース」の立上げに際し、教育課程、施設設備、地域連携などにかかる改革と課題を取りまとめた。	
「十人十色の持ち味探し」	作内宣夫	本学美術学科の1年前期「基礎演習」において造形を担当し、最初の2日間において学生の能力を引き出すための方法論を、学生の作品とともに紹介した。	
創作パネルシアター「天狗にもろた嫁っこ」	佐々木賢二 水上和子 乙谷明代	パネルシアター	
外国人に人気の宿 —金沢ゲストハウス「ボンギー」の魅力—	下口治美	金沢市中心部にオープンし外国人旅行者に人気のゲストハウス「ボンギー」について、宿泊費、宿泊ルール、設備、料理、ゲストブックなどの工夫を紹介し、人気の秘訣と今後の可能性について論じた。	
私の観光哲学：「観光ビッグバン」が意味するもの	中谷重之	近代観光が発展し、観光ビッグバンの時代を迎えた今日、その政治的、経済的、社会的、歴史的意義を踏まえ、今後の日本の観光政策のあり方について提言を行った。	
幼児教育学科における課外活動の現状と課題 —特化教育（教育GP選定事業）との関連性から—	中村明成 山田紀子	本学学生の課外活動について、活動実績の記録を整理し、自らの責任で行う課外活動の経験による学びの深まりについて検討した。	
創作活動とリハビリ	丹羽俊夫	デイサービスセンターにおいて、利用者のリハビリを兼ねた創作活動の講師としての取組を取りまとめ、取材を受けた新聞記事とあわせて紹介した。	
女子学生の生活形態が血液性状・体脂肪に及ぼす影響	能 雄司 岡田 茂 平下政美 平下誠太郎	女子学生のBMI、体脂肪率、血液性状を調査分析した結果、BMIが正常範囲でも多くの学生で体脂肪率が高値を示し、適切な生活の教育・指導の必要性について論じた。	
アクリル絵具による作品制作記録	堀 一浩	自身の作品制作にかかる発想の展開、支持体や絵具の選択、作業時間などを取りまとめ、実際の制作過程の様子と合わせて紹介した。	
介護学生の独自性欲求が自己効力感や達成感に及ぼす影響	舞谷邦代	介護福祉士を目指す本学学生に対し、独自性欲求の4タイプの違いによる自己効力感や達成感、成長感への影響を調査した結果、自己中心型は常に高値、抑圧型は低値を示し、個人特性を意識した関わり的重要性について論じた。	

35	『鶡冠子』世兵篇の軍事思想	三浦哲志	中国・戦国時代の思想家である鶡冠子が記したとされる『鶡冠子』について、軍事に関する記述の多い「世兵篇」を取り上げ、その軍事思想について考察した。
	音楽表現の視点からの実習指導 一効果的な実習体験を目指しての試行一	水上和子	本学幼児教育学科の学生に対する実習前中後における音楽表現の指導について、指導内容と注意点を整理して論じた。
	子どもの創造力を刺激する造形活動 その2 一附属西南幼稚園「わくわくタイム」での試み一	森田ゆかり	附属幼稚園において実践した造形活動として、ボディペインティング等を取り上げ、遊びの意欲や遊びの発展を意識した関わりの重要性について考察した。
	格子QCD上での改良されたアーベリアン射影	矢澤建明	QCD(量子色力学)におけるクォーク閉じ込め問題に対し、特定のゲージ固定によってモノポールの存在を示して説明行うゲージ依存性問題について、アーベリアン成分の抽出方法を見直して数値計算を試み、その有効性を検証した。
	学生の実習意欲に影響を及ぼす実習指導者の働きかけと環境についての一考察 一7年前の調査と比較して見えた新しいカリキュラムに沿った介護実習指導一	山根淳子	介護実習において実習指導者に求められる指導内容や関わりについて、学生へのアンケート調査を実施して7年前のデータと比較した結果、学生にとって安心できる体制や、ロールモデルとなる指導者との出会いがより学習意欲を高めることを明らかにした。
	保育者養成段階における子育て支援意識醸成の試み 一保護者イメージの変化一	米川祥子	本学幼児教育学科において、保護者理解を高める授業を実践した結果、学生の保護者に対する肯定的イメージが高まり、子育て支援の基礎づくりとしての可能性について論じた。
	中国語の修飾について 一日本語との比較を中心に一	林 文綱	中国語における言葉の修飾について、文の構造、語順、語気の強弱の観点から、日本語と比較しつつ、その特徴を抽出して論じた。
	若者の観光行動阻害要因についての研究 (1)	若月博延	若者の観光離れの現状を踏まえ、観光行動を阻害する要因について、学生の意識調査を行った結果、おもにお金と時間の不足が挙げられ、また背景として情報不足やゆとり教育の影響等を考察した。
	パフォーマンスコーラスのお奨め 一童声(女声)合唱とピアノのための組曲「わらべうたよりあきかんうた」一	朝倉喜裕	舞台演出を加味した合唱表現「パフォーマンスコーラス」の試みとして、「あきかんうた」にパフォーマンスを加えて楽譜に記述し、各動作を解説し、実演後の評価をまとめた。
	36	漫画の表現技法を用いた非言語情報の可視化提案 一臨場感フォントとマンガ記号で「場の臨場感」を表現一	新井 浩 瀬戸就一 下村有子 杉森公一 川辺弘之
介護職の阻害要因 一介護のマイナスイメージ一		五十嵐峰子	高齢者介護の経験がほとんどない本学幼児教育学科の学生に対し、介護の現状に対するイメージを尋ねた結果、身体、排泄の介助、コミュニケーション、夜勤、給料など多くの観点においてマイナスイメージがあることを示した。
人間の声 III 発声法について (1)		遠藤伊津子	発声法について、欧米にはあって日本にはない発声教育の現状を指摘し、実践として、のどぼとけ、舌根、口の使い方を解説した。
親権についての一考察 (2)		大屋恵子	2011年の民法改正において、親権が「子の利益のため」であることが明示され、懲戒権の限定や親権停止制度が新設され、また未成年後見制度の拡充により親権制限下の子どもへの支援強化が図られた点について論じた。
社会福祉領域における権利概念と法学教育のあり方について (3)		岡野大輔	社会福祉領域における「権利擁護」概念について、権利擁護とはアドボカシーと同一視できるものではなく、侵害された権利の回復や救済を伴う行為・制度として捉える必要があり、法的視点に基づく明確化が実践力ある「権利擁護・法学教育」に不可欠であると論じた。
千代女紙芝居		ガート・T・ウ エスタハウト	紙芝居
我が国における英語教授の変遷に関する歴史考察 一幕末1856年から太平洋戦争終結1945年まで一		北川昭栄	日本における英語教授の変遷を、幕末から太平洋戦争終結までの約100年間で5期に区分して検証し、英語学習が政治や国民感情と深く関係していると論じた。
日本のゲストハウス 一宿泊スタイルの多様化一		下口治美	日本におけるゲストハウスについて、登場と変遷、特徴、部屋、施設設備や備品、規模、有名店等を紹介し、宿泊者へのアンケート調査から、出会いの場としての期待が大きいことを示した。
『観光英語』から始める英語学習 I		中谷重之	日本における英語教育の非実用性を憂い、初期英語教育に観光英語の導入を提案した。
幼児教育学科における課外活動の現状と課題 一特化教育(教育GP選定事業)との関連性から一		中村明成	本学学生の課外活動について、活動実績の記録を整理し、特に単位化に向けて、他短大の状況と比較し、可能性を検討した。
介護課程実習前後における学生の“特性的自己効力感”の変化及び、学生の気持ちの変化についての検討	舞谷邦代	介護福祉士を目指す本学学生に対し、介護課程展開実習の前後で特性的自己効力感(必要な行動を効果的に遂行できる自己感覚)の変化について調査した結果、実習後に、行動を完了しようとする意志が向上する傾向にあることを示した。	
『鶡冠子』天権篇の軍事思想	三浦哲志	中国・戦国時代の思想家である鶡冠子が記したとされる『鶡冠子』について、軍事に関する記述の多い「天権篇」を取り上げ、その軍事思想について考察した。	
音楽表現の視点からの実習指導 II 一効果的な実習体験を目指しての試行一	水上和子	本学幼児教育学科の学生に対する実習前中後における音楽表現の指導について、学生の満足度を調査した結果、実践力不足が不安の主要因であることが示され、指導方法の改善の必要性について論じた。	
古典技法(カマイユ技法)の応用における絵画制作と展開	本山二郎	絵画制作において、有彩色単色で下地を作成するカマイユ技法を用いるスタイルを、自身の制作過程とともに紹介した。	
子どもの創造力を刺激する造形活動 その3 一附属西南幼稚園「わくわくタイム」と「特化美術」の連携一	森田ゆかり	附属幼稚園において実践した造形活動として、ボディペインティングと紙粘土で遊ぶの活動を取り上げ、関わり方の記録、気づきの言語化、改善のサイクルにより、保育の学びの深化を試みた。	

36	格子 QCD におけるアーベリアン射影とゲージコピー	矢澤建明	QCD (量子色力学) におけるクォーク閉じ込め問題に対し、特定のゲージ固定によってモノポールの存在を示して説明を行うゲージ依存性問題について、MA ゲージ以外のアーベリアン射影には多大なゲージコピーが存在することを示し、これらの除去の手法について検討を行った。
	青年期におけるアスペルガー症候群の理解とサポート ―青年期のグループ活動が持つ意味―	山田紀子	アスペルガー症候群と診断された青年に対し、グループ活動を通じた支援の実践記録をまとめ、よりの確かな支援のあり方について検討した。
	保育者養成における学生の子どもの観醸成のための取組み (1)	米川祥子	本学幼児教育学科における「特化乳児保育」において、子どもの主体性を重んじた保育観を醸成する目的で授業を実践し、その成果検証を試みた。
	AR 技術を利用した仮想空間デザイン	和田絃樹	仮想空間デザイン
37	パフォーマンスコーラスの奨め ～パートⅢ～ ―児童(女声)のための合唱曲集「まどさんの詩によるみっつのうた」よりうめぼしモコンー	朝倉喜裕	舞台演出を加味した合唱表現「パフォーマンスコーラス」の実践にあたっての選曲や展開の留意点を整理し、楽曲「うめぼしモコン」にパフォーマンスを加えて楽譜に記述し、各動作を解説した。
	オノマトペ絵本「いってきます」	新井 浩	絵本
	「保育相談支援」技術の体系化に向けた教育方法	五十嵐峰子	介護福祉士養成課程のカリキュラム改正により新設された「保育相談支援」について、保育園と家庭をつなぐコミュニケーション技術を獲得するための授業を実践し、その必要性について論じた。
	「幼稚園における学校評価」 ―結果の質評価からプロセスの質評価へ・保育の内側からの検証―	和泉美智枝	幼稚園における学校評価における教育・保育の自己評価について、結果の質評価からプロセスの質評価へ転換して実践し、その有効性について論じた。
	人間の声 IV 発声法 (2) 構音、共鳴～発声エクササイズ～結び	遠藤伊津子	発声法について、構音(母音・子音のつくり方)、共鳴の仕組み、発声のためのエクササイズを解説し、内面の成長にもつながる「声=呼吸」の重要性について論じた。
	親権についての一考察 (3・完)	大屋恵子	2011年の民法改正の意義について、諸学説を挙げて検討し、児童虐待防止のための親権制度の見直しと国家介入のあり方を再構成した点とし、施行後の運用に注目しつつ、今後さらに検討が必要であると論じた。
	社会福祉領域における権利概念と法学教育のあり方について (4)	岡野大輔	社会福祉専門職業課程における「権利擁護・法学教育」について、権利擁護法制の整理と実務志向の法学教育の必要性を指摘し、具体的カリキュラム案を提示した上で、社会福祉専門職に求められる法的知識、予防的権利擁護能力、法律専門職との連携・調整力の重要性について論じた。
	よくばり天狗 4: ゴーストストーリーチャールズディケンズ「クリスマス キャロル」改作	ガート・T・ウエスタハウト	ミュージカル
	日本における雪の美学 ―日本デザイン美学の本質を求めて―	黒川威人	日本の美の原点は「雪」であるとして、雪をモチーフとした絵画、庭園、江戸文様、俳句、和歌などを取り上げて、日本人の精神性をあらわす象徴としての雪について論じた。
	オルガニスト2012	高野 實	絵画
	競技場面における心理的サポートの実践事例 ―大学男子バレーボールチームを対象として―	百海 智	大学男子バレーボールチームを対象に、心理検査・内省報告・試合分析を用いて、心的変化と知覚運動スキルの関係を検討した結果、知覚運動スキルの向上がパフォーマンス向上につながることを示唆した。
	大丸徹三自伝「ホテルと共に七十年」から見えてくる日本観光の壁	中谷重之	大丸徹三(1887-1981)の自伝「ホテルと共に七十年」を読み解き、日本における観光産業の脆弱性について論じた。
	保育士養成校学生の対象認識の変容についての一考察 ―課外活動との関連性から―	中村明成	本学学生の課外活動実績を整理し、参加学生への聞き取り調査から、人との出会いや関わりをなかで「ひと」の理解を深めている実態を示し、人間関係能力の向上の重要性について論じた。
	2年間の定期的有酸素運動が高齢者の循環器機能及び体組成に及ぼす効果	能 雄司	高齢女性3名を対象に、有酸素運動を中心としたエクササイズにより、循環器機能に及ぼす影響を調査した結果、1名では収縮期血圧が有意に低下し、循環器機能の改善に有効であることを示唆した。
	『鷓鴣子』武靈王篇の軍事思想	三浦哲志	中国・戦国時代の思想家である鷓鴣子が記したとされる『鷓鴣子』について、軍事に関する記述の多い「武靈王篇」を取り上げ、その軍事思想について考察した。
	音楽表現の視点からの実習指導 III ―効果的な実習体験を目指しての試行―	水上和子	本学幼児教育学科の学生に対する実習前後における音楽表現の指導について、前年度の反省を踏まえて演習を中心とした指導を行い、学生の満足度を調査した結果、指導に対する不安は大きく減少し一定の効果が認められたことを報告した。
	美術作品の画面構成から学ぶ興味を誘引する視覚効果	本山二郎	美術作品の画面構成として、主役の配置、シンメトリー構図(左右対称)とアシンメトリー構図(左右非対称)、顔や視線の3点から解説し、自身の作品における画面構成の取組事例を紹介した。
	遊びを生み出す子どもたち ―室蘭市・ピノキオ幼稚園「公開保育」―	森田ゆかり	全国教育美術展で多くの入選作品を出すピノキオ幼稚園(室蘭市)における公開保育・保育研究に参加し、子どもも大人も「他者との共有」が教育の基底にあると考察した。
	格子ゲージ理論でのアーベリアン射影のゲージコピー問題	矢澤建明	QCD (量子色力学) におけるクォーク閉じ込め問題に対し、MA ゲージ以外のアーベリアン射影について、ゲージコピーを除去して数値計算を行い、MA ゲージの場合に近い結果を得た。
介護実習Ⅱを終えた学生の学びについて ―気がかりな学生を中心に―	舞谷邦代	介護課程展開実習後に自己効力感が低下した学生7名について、実習振り返りシートに記載内容を分析した結果、自分の持ち味、らしさ、良さ、つよみを表現できなかったことが理由として抽出され、今後の支援のあり方について考察した。	
青年期におけるアスペルガー症候群の理解とサポート ―青年期のグループ活動が持つ意味(就労支援)―	山田紀子	アスペルガー症候群と診断された青年を支援し、就労に至った者5名の現状を確認し、発達障害者の就労支援の現状を踏まえ、支援におけるグループ活動が居場所としての意味をもつことについて考察した。	

37	介護福祉士養成教育の多職種連携・協働に関する実習での学び ―学生の学習機会と専門性の認識に焦点を当てて―	山根淳子	介護福祉士養成課程で求められる多職種連携の学びについて、実習後の学生にアンケート調査を実施した結果、連携の必要性や介護職の専門性に関する理解は深まったが、連携に参画する能力の養成は今後の課題とした。
	パフォーマンスコーラスの始め ～パートⅣ～ ―同声(女声)合唱組曲「小さな神様」より3つの小さなうた―	朝倉喜裕	舞台演出を加味した合唱表現「パフォーマンスコーラス」として、「3つの小さなうた」にパフォーマンスを加えて楽譜に記述し、各動作を解説し、加えてこの幾何学模様の表現の演出効果について考察した。
	保育士に求められる「保育相談支援」―保育士養成校に学ぶ学生の資質―	五十嵐峰子	保育士に求められる保育相談支援のあり方について、学生の意見を参考に検討し、保護者の意向や気持ちをしっかり受け止める姿勢の重要性について論じた。
	栄華の后妃	今村文男	絵画
	子の利益	大屋恵子	離婚後の共同親権制度について、日本の法律における単独親権原則の課題を指摘し、共同親権は子の福祉に資する可能性を持つとして、一方でDV等への配慮や制度的条件整備が不可欠であり、親子法や離婚法制全体の再構成の必要性を論じた。
	「金城ビジネス学会」を活用した考察力・発信力・チームワーク力の養成と評価方法の構築	岡野絹枝 矢澤建明 若月博延	本学ビジネス実務学科における「ゼミナール」の成果発表会「金城ビジネス学会」を通じて学生が獲得した能力について、学生の自己評価、教員による評価、能力測定テストのデータ等を基に分析し、チームワーク力や問題解決能力の向上が認められたことを報告した。
	就業力育成を目的とした取組事例の比較検討 ―就業力育成融合モデルの構築に向けて―	岡野大輔 加納輝尚 河合 晋 手嶋慎介	就業力育成のための学習プログラムとして、富山短大、岡崎女子短大、愛知東邦大、金城短大の取組事例を概観し、優れた点の融合モデルの構築に向けての考察を行った。
	100年前のアイルランドのソングポストカード	ガート・T・ウ エスタハウト	20世紀初頭、イギリスとアメリカで印刷されたソングポストカードについて、特にBamforth社が発行したアイルランドをテーマとする曲のカードを取り上げて紹介し、郷愁や亡命をテーマとする選曲が多いことを論じた(英文)。
	青年期におけるかわいそう感と共感性 ―「かわいそう」はよくないのか―	加藤礼子	学生の「かわいそう」と表現することへの抵抗感と共感性等との関連を検討し、約4割が表現に否定的であり、抵抗感には「失礼な態度」「哀れみ大切」「関心のなさ」に整理され、共感性は他者指向の態度と関連し、保育系学生は共感的配慮が高い傾向があることを明らかにした。
	風に伝えて	権田宜子	藍染め
	パノラマカメラによる聴覚障害者のグループディスカッション参加支援	瀬戸就一 川邊弘之 下村有子 南保英孝	聴覚障害者のグループディスカッションへの参加を支援するため、パノラマカメラを用いて、円座で座るメンバーの顔を切り出して拡大表示するシステムの構築を図った。
38	保育士養成校学生の対象認識の変容についての一考察 その2 ―実習及び課外活動との関連性から―	中村明成	本学学生の課外活動実績を整理し、実習後の学生レポートの記述内容と比較して、「ひと」の理解を深め保育者としての資質を高めるための、課外活動と実習との連携について論じた。
	幼児教育学科学生と専攻科学生が持つ高齢者・介護のイメージ	舞谷邦代	本学幼児教育学科と専攻科福祉専攻の学生を対象に、高齢者や介護に対するイメージについてアンケート調査を行った結果、高齢者のイメージは両者とも肯定的で、介護に対するイメージは幼児教育学科学生は否定的であり、専攻科学生は実習後に肯定的に転じる傾向にあることを示した。
	『鷓鴣子』兵政篇の軍事思想	三浦哲志	中国・戦国時代の思想家である鷓鴣子が記したとされる『鷓鴣子』について、軍事に関する記述の多い「兵政篇」を取り上げ、その軍事思想について、特に道家思想の影響が強いと考察した。
	保育現場における音楽表現活動Ⅰ ―効果的な音楽表現教育を目指しての試行―	水上和子	本学幼児教育学科学生に対し、幼稚園実習後、音楽活動表現活動の実施状況についてのアンケート調査を実施し、実施実態を把握した。
	「美術」との新たな出会い ―「とらわれ」からの解放・4か月の軌跡―	森田ゆかり	本学幼児教育学科において、「美術」の授業を受講後の1年生から提出されたワークシートの記述内容を分析し、美術に対する苦手意識の変化を読み取ってその要因を探った。
	学生による Google Earth 3D モデルの投稿	矢澤建明	本学ビジネス実務学科のゼミナール活動において、Google Earth 3D モデル制作に取り組み、6年間にわたって投稿した約20件を紹介した。
	青年期におけるアスペルガー症候群の理解とサポート ―青年期のグループ活動が持つ意味(生活アンケート調査より)―	山田紀子	アスペルガー症候群と診断された青年の自助組織「アスペの会石川」のメンバーに対し、現在の生活状況についてアンケート調査を実施した結果、就労の傍ら余暇活動も充実している様子が示されたことを報告した。
	自宅で高齢者を見取った家族の体験の意味と家族を支えたもの ―「家で死にたい」の希望に添えた三家族の思いから―	山根淳子	自宅で高齢者を見取った三家族との遺族にインタビューを行い、体験の意味と在宅での見取りを可能とした要因について探ったところ、人生を学ぶ機会としての意義は大きく、また要因としては本人の意思、家族の協力、サービスの機能、適切な病院の対応、家族や多職種間の信頼関係、他者からの励ましの6点を導出した。
	保育者養成における学生の子ども観醸成のための取組み(2) ―“子どもの主体性を育む保育”とはどのようなことか―	米川祥子	現職保育士113人に対し、子どもの主体性を育む保育について尋ねた結果、5種類の解釈を抽出することができ、特に育む過程に焦点をおいた解釈の重要性について論じた。
	アニメ・マンガ世代のための描画訓練システムの開発	和田結樹 井戸健敬	美術を学ぶ学生が、画を模写する能力と絵の表現力の向上を目的として個別練習できるシステムとして、デッサン評価プログラムを組み込んだアプリの開発を試みた。
	特化「音楽」共同研究報告 ―学生と幼児による合同舞台発表への取り組み―	朝倉喜裕 水上和子 坂本里香	本学幼児教育学科学生と附属幼稚園園児(年長組)による合同舞台発表を実施し、各楽曲のステージ配置や振り付け、照明、衣装などの概要を取りまとめ、実施後の達成度と今後の課題を合わせて報告した。
39	教授力向上のためのスピーチ評価システム ―これまでの研究と今後の課題について―	新井 浩 南保英之 下村有子 川邊弘之 瀬戸就一	音声認識技術を用いて講義音声から言語的・非言語的情報を抽出し、講義内容と雰囲気伝える自己学習システムを開発し、試作機を通じて講師の発話能力向上を確認した。

	「保護者と語ろう」からの学び ―保護者との対談から得た保育士の姿勢―	五十嵐峰子	本学幼児教育学科の学生が子育て中の保護者とグループワークを通じて語り合う機会「保護者と語ろう」を実施し、保育相談支援の資質を高める契機としての有効性を確認した。
	保育者に必要な音楽能力について	遠藤伊津子	乳幼児期の発達に影響を与える音や、発達を踏まえた音楽の活かし方を整理し、保育における音楽実践にあたって必要な心掛けを取りまとめた。
	能登里山里海いきものカードゲーム「NOT:0 (ノトゼロ)」―地域のためにクリエイターが出来ること―	大谷友理	カードゲーム
	家事労働を考える	大屋恵子	家事・育児・介護などの家事労働を「アンペイド・ワーク」と捉え、その歴史的背景と評価の困難さをフェミニズムの視点から検討し、家事労働の貨幣評価は、男女の不平等を可視化し、公正な分配と生きづらさの解消を目指すための手段であると論じた。
	ビジネス実務学科におけるキャリアデザイン教育の検証と考察	岡野絹枝 藤元宏一 瀬戸就一 井戸健敬	本学ビジネス実務学科において実践してきたキャリアデザイン教育の目標、取組内容およびその成果を取りまとめ、今後の課題として保護者との連携充実の必要性について論じた。
	狂言ミュージカル ―日本の伝統文化の新しい表現方法―	ガート・T・ウ エスタハウト	狂言をアレンジして制作した狂言ミュージカルについて、その上演記録を取りまとめ、日本文化の新しい発信方法としての可能性について論じた。
	保育士養成校学生を対象意識の変容についての一考察 その3 ―実習・課外活動との関連性 保育内容・人間関係キーワードからのアプローチ―	中村明成	本学学生の課外活動実績を整理し、学生レポートの記述内容と比較して、「人間関係力」の向上に向けて、課外活動と実習を通じた指導・支援のあり方について考察した。
	JWC/2 ―トイレの魔法使い―	ボヨ=ナマステ	漫画
	The Face Scale を用いた表情の自覚と自己効力感との関係	舞谷邦代	本学専攻科福祉専攻の学生に対し、フェーススケールを用いて実習前後および期間中の表情変化を測定した結果、実習の進行に伴い不安な表情が和らぎ感情への気づきが深まる傾向がみられ、笑顔を意識することで自己肯定につながる可能性を示唆した。
39	『鶺鴒子』軍事思想概説	三浦哲志	中国・戦国時代の思想家である鶺鴒子が記したとされる『鶺鴒子』について、各篇の軍事に関する記述を概観し、中国統一の手段として戦争の必要性を解く軍事思想には成立した時代背景の影響が見取れると考察した。
	保育現場における音楽表現活動 II ―効果的な音楽表現教育を目指しての試行―	水上和子	本学幼児教育学科学生に対し、幼稚園実習後、音楽表現活動において授業を通じた学習の活用状況を調査した結果、大多数の活動で活用されている実態が示され、事前指導の有効性を確認した。
	「夢中度」の視点から考える子ども理解 ―2歳児の自由遊びから―	村上知子	2歳児の自由遊びにおける「夢中度」について、子どもの活動を観察して、没頭の程度や背景要因から数値化を試み、結果、保育者間での共有と省察が深まり、特定の子どもだけでなくクラス全体の経験の質や保育の質向上につながる手がかりとしての有効性について論じた。
	こども文化を理解するための試み ―附属西南幼稚園・「生活の中から生まれた表現」展―	森田ゆかり	こどもの表現活動の指導にあたり「おとなの眼」を意識し優先する状況を反省し、附属幼稚園において、日常の中で何気なく表現されたものを展示し、こども文化を理解する試みとして取りまとめた。
	ヤン・ミルズゲージ理論におけるアーベリアン射影のワイル対称性問題	矢澤建明	QCD (量子色力学) におけるクォーク閉じ込め問題に対し、MA ゲージ以外のアーベリアン射影について、ワイル対称性を固定して数値計算を行い、MA ゲージの場合に近い結果を得た。
	自閉症スペクトラムの理解とサポート ―幼児期からの支援―	山田紀子	自閉症スペクトラムに対しては早期発見・早期治療が効果的であるという知見を踏まえ、3歳時に高機能自閉症と診断されたA氏の追跡調査の結果を振り返り、早期理解と早期サポートの重要性と困難さについて考察した。
	認知症高齢者グループホームの若手職員が利用者の看取りの体験から得たもの ―介護職として人生の最期に立ち会う意味―	山根淳子	看取りを経験した若手介護職員5名を対象に体験のインタビューを行った結果、ストレス、不安全感、前向きな感情を持ちつつ、自己研鑽や命について考える場として意義を感じており、所属する組織風土や教育の重要性を示唆した。
	保育者養成における学生の子ども観醸成のための取組み (3) ―「子どもの主体性を育む保育」を考える授業実践―	米川祥子	子どもの主体性を育む保育について、学生の理解を深めるため、実習記録をおもな題材とする授業を実践し、受講学生からのレポートや授業評価から成果を検証した結果、一定の学習効果を確認した。
	『金城ビジネス学会』を通じての産学連携が学生に与える効果 ―社会人基礎力を中心に―	若月博延 矢澤建明	本学ビジネス実務学科のゼミナール活動における産学連携活動の教育効果について、学生の自己成長評価から分析した結果、高度な産学連携を行うほど多くの社会人基礎力が向上し、今後のより客観的な基準を用いた測定の必要性について論じた。
	アニメ・マンガ世代のための描画訓練システムの開発 (第2報)	和田結樹 井戸健敬	美術を学ぶ学生が、画を模写する能力と絵の表現力の向上を目的として個別練習できるシステムとして、前年度使用した開発言語を変更し、引き続き開発を進めている状況を報告した。
40	パフォーマンスコーラスの奨め ～パートV-1～ ―児童/女声のための合唱曲集「あわていきものうた」より「かに」―	朝倉喜裕	舞台演出を加味した合唱表現「パフォーマンスコーラス」として、楽曲「かに」にパフォーマンスを加えて楽譜に記述し、各動作を解説し、実演後の奨励賞受賞により一定の評価を得たと考察した。
	美術学科学生のためのマンガを活用したアクティブ・ラーニングの実践	新井 浩 新矢光水 下村有子 川邊弘之 瀬戸就一	本学美術学科の学生に合うアクティブ・ラーニングの授業として、リレーマンガ、キャラクター共同制作、絵しりとりを考案・実践し、実施後、受講学生に自由記述で感想を尋ねた結果、「働きかける力」や「発信力」の向上が示唆されたことを報告した。
	幼児教育学科「リカレント教育」の実践と展望	和泉美智枝	本学幼児教育学科において「特化教育」を通じたリカレント教育について、導入経緯、受入れ状況、受講生の自己評価、教員による評価を取りまとめ、今後の方向性について考察した。

	保育者のための器楽指導	遠藤伊津子	保育者のためのピアノ指導について、幼児音楽の特性や音楽あそびの観点から踏まえた指導方法として、リズムによる教育、親しみのある教材曲目の選曲、創作演奏の取入れ等を試み、学生の意欲向上につながる可能性を示唆した。
	レアリアで中国語を学習する	王 玉	教科書でなく実物を資料とする学習方法(レアリア)を用いて、中国語を学習する方法を開発して示した。
	国際親善大使としての天狗 ―地域発信の演劇・アートプロジェクト―	ガート・T・ウエスタハウト	オリジナルミュージカル「よくばり天狗」の上演に合わせ、天狗の人形を世界各地を3か月旅をさせて日本に戻す天狗のワールドツアーを実施し、国際親善大使としての可能性を論じた。
	近年の高等教育政策におけるカタカナ語の使用状況について	加藤 博	近年の高等教育政策におけるカタカナ語の使用状況を調査し、無反省な使用により社会に不信感を与える危険性を指摘し、一定の抑制を考える必要性について論じた。
	保育士養成校学生の対象認識の変容についての一考察 その4 ―実習・課外活動との関連性 保育内容・人間関係キーワードからのアプローチ―	中村明成	本学学生の課外活動実績を整理し、学生レポートの記述内容と比較して、「一人のひととじっくりかかわる」経験の場としての課外活動の役割について論じた。
	私の作品 ―森羅万象 陶造形による形象・(線)織りなす世界と形	徳田明美	陶造形
	マスク装着に対する幼児教育学科学生の意識と実際	舞谷邦代	本学幼児教育学科学生に対して、マスク着用に対する意識と使用の実際について尋ねた結果、マスク着用により印象が低くなること、表情を隠すための使用に一定の理解を示していること、感染予防としては望ましくない使い方をしていること等を明らかにし、今後の指導のあり方を考察した。
	『呂氏春秋』義兵説の再検討	三浦哲志	中国・戦国時代の末期に編纂された『呂氏春秋』の義兵説を再検討し、民の救済を掲げる正義の戦争の実現にあたっては、一部の民を苦しめる侵略戦争も正当化されるとの軍事思想があることを明らかにした。
40	保育現場における音楽表現活動 Ⅲ ―効果的な音楽表現教育を目指しての試行―	水上和子	本学幼児教育学科学生が、実習における音楽表現活動の実施状況、満足度、使用した楽曲について調査し、今後の指導に資するデータを示した。
	保育現場における遊びの環境 ―実習生からみた自由遊び―	村上知子	本学幼児教育学科の学生に対し、実習を行った園での遊びの環境についてアンケート調査を実施し、自由遊びの意義や成果の見えにくさ、保育者のかかわりの重要性等について考察した。
	「小松市立空とこども絵本館」と「特化美術」の連携 8年間の記録	森田ゆかり	本学幼児教育学科における「特化美術」における「小松市立空とこどもの美術館」との連携活動について、8年にわたる実践記録を取りまとめ、保育現場としての絵本館の利用のあり方について考察した。
	油彩画 ―海外取材による作品の制作―	山下和子	絵画
	自閉症スペクトラムの理解とサポート ―幼児期からの支援 part Ⅱ―	山田紀子	自閉症スペクトラムの定義や行動特性を踏まえ、5人のサポート事例を取り上げて分析し、特に幼児期の関わりについて、保護者との連携の重要性について論じた。
	アクティブラーニングに関する教育史的観点からの考察 ―2つの教育観との関連―	吉岡利恭	本学幼児教育学科の学生に対し、アクティブラーニング型の授業を展開した後、授業への参画状況や学習の成果についてアンケート調査を行った結果、主体的・能動的な活動が知識の獲得や社会的能力の向上につながることを確認した。
	地域連携・貢献センター事業「金城親支援プログラム」の開発に向けての取組み	米川祥子 野田哲郎	本学幼児教育学科において、子育て中の親同士や子育て支援の関係者をつなぐファシリテーター育成事業に取り組み、3年間の実践記録を整理して取りまとめた。
	「金城ビジネス学会」を通じての産学連携が学生に与える効果 ―卒業生調査を中心に―	若月博延 矢澤建明	本学ビジネス実務学科のゼミナール活動における教育効果について、過去3年間の卒業生を対象に、社会人基礎力の必要性についての考えを調査した結果、特に「チームではたらく力」の重要性を認識している状況を明らかにした。
	アニメ・マンガ世代のための描画訓練システムの開発 (第3報)	和田絃樹 井戸健敬	美術を学ぶ学生が、画を模写する能力と絵の表現力の向上を目的として個別練習できるシステムとして、評価方法、模写方法、評価メニュー、課題画像にかかる課題に取り組み、引き続き開発を進めている状況を報告した。

付録4 「金城紀要」掲載投稿一覧 (41~49号)

号	タイトル	著者・作家	内容
	森の中	梶本良衛	木彫り
	ポスター「雪のように」	東田修一	グラフィックデザイン
41	聴覚障害学生支援のための環境音の可視化 ―マンガ技法を用いた展開―	新井 浩 南保英孝 下村有子 川邊弘之 瀬戸就一	聴覚障害者が周囲音を把握しにくい問題に対し、環境音を文字化する「オノマトペ可視化システム」の開発に向け、まず8種類の環境音の擬音化を試みた。
	幼児期の運動遊びに関する一考察 ―社会性に着目して―	石野友子	幼児の運動遊びの事例を分析し、意欲や達成感を育むなかで、仲間とのかかわりの影響が強く、集団中での遊びが社会性の発達につながっていると考察した。
	保育者のための器楽指導「ピアノメソッド」実践編	遠藤伊津子	保育者のためのピアノ指導実践について、基礎指導および具体的な楽曲指導をグレードに分けて示し、さらに練習チェックシートも示すことで、学生の自主練習を促す方法として紹介した。
	幼児教育学科学生のストレス反応と自己状態 ―講義での学生の自己理解促進も視野に―	柴田英登	本学幼児教育学科学生に対し、ストレス反応と5パターンのエゴグラム(自己状態)について質問した結果、ストレス反応はやや高く、平均的に緩やかなN型(献身パターン)プロフィールを示し、自己理解と自己成長を促す調査としての意義について考察した。

	ビジネス実務教育のための法学・経営学・会計学 —ビジネス実務教育における専門教育のための教材開発を通じて—	中原重紀 岡野大輔 奥村実樹 加納輝高	ビジネス実務を学ぶ者のための専門教育として、法学・経営学・会計学を取り上げ、それぞれの位置づけと教育のあり方を考察検討し、教材を開発した。
	保育士養成校学生の「子ども観」「人間観」形成についての一考察 —実習・課外活動との関連性「福祉的視座」からのアプローチ—	中村明成	本学学生の課外活動実績を整理し、学生レポートの記述内容と比較して、保育者としての「子ども観」や「人間観」の形成への影響について考察した。
	子ども・子育て支援新制度の課題 —「保育」「教育」から考える—	村上知子	2015年から施行された「子ども・子育て支援新制度」における「教育」と「保育」の概念について、成り立ちや法令上の定義、各種検討会議における解釈、現役園長の認識を調査し、概念整理のあいまいさ、現場における非分離感覚に加え、保護者の誤解に対する懸念等について論じた。
	保育現場での造形表現活動の課題	森田ゆかり	保育現場における造形表現活動の課題として、実習生およびリカレント生の言葉から、大人のリアルを押し付ける現場の課題を見出し、子どものリアルを尊重する保育者養成のあり方について論じた。
	ヤン・ミルズゲージ理論におけるアーベリアン射影のグリボフ問題	矢澤建明	QCD(量子色力学)におけるクォーク閉じ込め問題に対し、MAゲージ以外のアーベリアン射影について、MAゲージをゲージ配置の出発点として数値計算を行い、MAゲージの場合に近い結果を得た。
	遊びからの学び —子どもが遊びから学ぶということ—	山田紀子	遊びを通した子どもの学びについて、遊びの分類、保育における重要性、発達段階によって変化する遊びの特徴を踏まえ、事例分析を行い、運動能力、ルール理解、社会性などを身につけていくと考察し、経験の重要性と安全性の確保のあり方について論じた。
	パフォーマンスコーラスの奨め ～パートV-2～ —少年少女(女声)合唱のための「ふしぎなせかい」より「かとか」—	朝倉喜裕	舞台演出を加味した合唱表現「パフォーマンスコーラス」として、楽曲「かとか」にパフォーマンスを加えて楽譜に記述し、各動作を解説し、実演後の奨励賞受賞により一定の評価を得たと考察した。
41	協同学習を取り入れた英語授業 —授業外学習がグループ活動の積極性にもたらす効果—	蘭森喜美	協同学習を取り入れた英語授業について、事前学修を経たペア活動やグループワークの授業実践により、学生の学習意欲が高まることを確認し、学びの質向上につながる有効な方法であると論じた。
	幼児教育におけるアクティブラーニングの可能性 —「遊び発展型保育」を目指す保育実践から—	和泉美智枝	「遊び発展型保育」を目指す保育所の実践記録を読み解き、子どもの主体性を引き出すにあたって、保育者自身の主体的な成長意識の重要性について論じた。
	中国語のアクティブラーニングについて ビジネス実務学科の実践	王 玉	本学ビジネス実務学科の中国語の授業において、発音の上達、興味の醸成、達成感や充実感の向上を念頭に、アクティブラーニング型の授業を実践し、学生による授業アンケートの結果を通じて成果を検証した。
	幼児教育における英語指導教材：ミニ・ミュージカル	ガート・T・ウ エスタハウト	本学幼児教育学科の英語教育において、演技体験を伴う学習教材として4種のミニ・ミュージカルを紹介し、学習意欲や動機を高める教材としての可能性について論じた。
	幼児教育学科1年生が自覚する身体症状と生活スタイル —授業内アンケートの結果より—	舞谷邦代	本学幼児教育学科の学生に対し、自覚する身体症状と生活スタイルについてアンケート調査を行った結果、疲れ易さを感じる学生が約8割、また生活スタイルが整っていないと感じる者ほど物事に集中できず、片付け習慣が少ない傾向にあることを明らかにした。
	『淮南子』軍事思想初探	三浦哲志	中国・前漢時代に『淮南子』を編纂させた劉安について、史記および漢書を通じて、人物像および反乱計画を首謀し処刑された経緯について考察した。
	特化「音楽表現」共同研究報告 その2 —学生と幼児による合同舞台発表への取り組み—	水上和子 朝倉喜裕 西坂聖子	本学幼児教育学科学生と附属幼稚園園児(年長組)による合同舞台発表を実施し、実施に至る経緯、発表テーマ、各楽曲の構成、ステージ配置、振り付け、歌唱形態、照明等の概要を取りまとめ、発表の意義と今後の可能性について論じた。
	本学幼児教育学科学生版自己評価尺度作成の試み(1)	米川祥子	本学幼児教育学科学生に対し、授業受講後の学習の成果を測る自己評価尺度52項目の内容を分析した結果、向上心、社会性、自己表現、他者理解の4因子を抽出し、評価・測定項目を整理する必要性について論じた。
	日本は魅力的な医療観光国実現に向けての提案 海外の動向分析から日本の医療観光への改善	米田 迪	日本の医療観光の推進に向けて、世界の医療観光の現状、アジア各国の施策、日本の施策と現状を整理し、今後必要な対応として、医療ファシリテーターの育成・配置、相談体制や契約の明確化、医療保険の整備などを挙げた。
42	宙(そら)へ	上端伸也	陶器
	Relief	堀 一浩	絵画
	音楽の基礎理論と基礎技能の連携(音楽理論とピアノレッスンの連携) —保育現場における音楽理論の活用を視野に—	朝倉喜裕	本学幼児教育学科における授業「音楽理論」の実施にあたり、受講前の学生の理解度を踏まえ、保育現場における音楽表現の実践に結び付ける指導内容を確立して実践し、紹介した。
	聴覚障害者が危険に陥る事象とそれに付随する音	新井 浩 井戸健敬 南保英孝 下村有子 川邊弘之 瀬戸就一	聴覚障害者が気づきにくいとされる視野外の危険音の可視化に向けて、まず注意喚起音(自動車の警笛)と非日常音(スコップの落下音)を録音し、波形データの取得を試みた。
	「わらべうた・うたあそび」実践のすすめ —子育て、保育、音楽教育のために—	遠藤伊津子	保育者養成の音楽指導における「わらべうた・うたあそび」の実践について、乳幼児の発達段階に沿った実践、わらべうたの音楽的特性、実践における工夫、初期実践に適した曲等を紹介し、人間教育にもつながる重要性について論じた。
	ビジネス中国語と中国ビジネス —ビジネス中国語の特徴とその勉強方法—	王 玉	日本の商品を購入する中国人へのサービス向上に向け、ビジネス中国語の特徴と、文法表現や文型パターンを整理し、学習にあたっての留意点を検討した。
	成人のためのピアノ教育 —保育者養成校での初心者に対するピアノ読譜教育への試案—	澤田和美	成人のためのピアノ教育について、「階名」と「楽譜上の音符」と「鍵盤の位置」の結びつきを強化する教育法の有効性について考察した。

	保育者としての意義と役割 一必要とされる知識と品性の在り方(現場の思いと考察)一	酢谷温子	保育現場が求める保育者像について、石川県内19園を訪問し聞き取り調査を行った結果、高度な専門性と人間性の重要性が示され、保育者養成における授業「保育者・教職入門」のあり方を考察した。
	子どもの学びと環境 一遊びの中の学びを支える環境を考える一	田島千香子	子どもが遊びの中で学んでいることおよびその学びを支える環境や保育者の援助について、保育現場の4事例を取り上げて分析し、学びのプロセスの重要性、学びが広がり深まる環境や援助のあり方について考察した。
	保育士養成校学生の「保育観」「子ども観」「人間観」形成についての一考察 一実習及び課外活動における「配慮の必要な子ども」との出会いから一	中村明成 小西ふみ子	本学幼児教育学科学生に対し、実習や課外活動を通じた「配慮が必要な子ども」とのかかわりや、保育観、子ども観、人間観の容容について調査した結果、個の大切さの気づきとかかわりの難しさが挙げられ、理解を深める機会としての重要性について論じた。
	ビジネス実務学科におけるプログラミング教育の考察 一2020年度小学校プログラミング教育必修化を見据えて一	藤元宏一	本学ビジネス実務学科におけるプログラミング教育のあり方について、2020年度以降の小学校におけるプログラミング教育の必修化を踏まえ、重要度の高まり、IT技術の進展に合わせた教育内容、デジタルデバイド問題への対策、ゼミナールを通じた小学生へのプログラミング教育などの視点から多角的に検討した。
	器楽の課題と指導法研究(保育現場における実践を視野に) 一Two-Platoon Systemのねらいと成果一	水上和子 朝倉喜裕 小川佳苗 表 まり子 川岸香織 川下知美 川邊美香 黒崎菜保子 米谷昌美 澤田和美 塩田順子 高桑友香 田中昭子 藤野久美子 山崎真知子 山田ゆかり	本学幼児教育学科における器楽指導について、学生のピアノ保有率や学習経験の変化を踏まえ、またこれまでの指導とその成果を確認しつつ、ピアノ曲と弾き歌い曲を同時刻に指導する Two-Platoon System を導入し、学生の音楽学習アンケートを実施して今後の改善の方向性について検討した。
	学生の心と身体を自由にする「フィンガーペインティング」	森田ゆかり	本学幼児教育学科学生に対し、授業における造形あそび(特にフィンガーペインティング)の成果について、受講後の学生のワークシート等における記述を分析して心と体は自由になった様子を確認し、その要因として5点を挙げて考察した。
	ランダウゲージ固定によるアーペリアン射影とワイル対称性	矢澤建明	QCD(量子色力学)におけるクォーク閉じ込め問題に対し、MAゲージ以外のアーペリアン射影について、部分ランダウゲージ固定による数値計算の可能性を検討した。
42	教育実習における学生の問題点 一実習懇談会から見てくる学生の姿一	山田紀子 石野友子	本学幼児教育学科における教育実習の指導について、学生の実態と実習園の実態を踏まえ、教員と実習園の担当者が参加する実習懇談会における意見交換を通じて課題と今後の指導の方向性について検討した。
	オーストラリアの教育動向とペンリス市の幼児教育	吉岡利恭	オーストラリアにおける国家教育指針や教育行政組織および幼児教育のための質保証体制を概観し、特にペンリス市の幼児教育制度および具体的活動事例を調査し、子どもの自発性と教育者の意図性が重視されている点について論じた。
	日本の医療ツーリズムの国際化 一石川県における中国人対象の受入れ医療・健康ツーリズム戦略の提案一	米田 迪	近年注目される「医療ツーリズム」について、特に訪日客が増えつつある中国人の参加動機や仲介システム、マーケティング法および石川県への期待・関心を概観し、石川県における振興政策の現状を踏まえ、中国人を対象とした「医療・健康ツーリズム」戦略と実現方策を検討し提案した。
	幼稚園教育要領の変遷に関しての一考察 一児童文化に着目して一	石野友子	平成以降3度目の改訂となる幼稚園教育要領の変遷を概観し、変化の激しい時代の中で、子どもが遊びを通じて文化や伝統に親しむ重要性について論じた。
	発達障害における早期支援・早期療育を保育の場で実践するために 一ペアレントトレーニングとJASPERの概要一	上野幸子	保育の場において、保育士が、発達障害特性がある子どもを支援し、またその保護者のメンター的な役割を果たすための取組として、ペアレントトレーニングおよびJASPERプログラムを紹介し、その有効性について論じた。
	絵本の読み聞かせにおける自己評価能力の育成 一パフォーマンス評価を導入して一	太田淳子	本学幼児教育学科学生に対し、授業における絵本の読み聞かせに関する活動においてルーブリックによるパフォーマンス評価を導入し、評価項目・評価基準を事前に提示しやうえて授業を実施した結果、学生の自己評価能力の向上を示唆する結果が得られ、取組の有効性について考察した。
	幼児教育における英語指導教材2:歌	ガート・T・ウ エスタハウト	幼児教育における英語指導教育において、有効と思われる楽曲5曲を、活用法とともに紹介した。
	保育における「気になる子」への支援アプローチに関する一考察	柴田英登	保育現場における「気になる子」の支援について、応用行動分析学の有効性を論じ、行動を子どもと環境の相互作用として捉える視点は、保育者のリアリティ・ショック軽減や専門性向上に寄与し、養成課程のうちから客観的な枠組みを学ぶ重要性を指摘した。
	運動遊び指導に関する一考察 一これからの保育者養成校の学生の体力と意識一	百海 智	幼児の体力・運動能力の低下がすすむ中で、保育現場における課題、本学幼児教育学科の学生の体力と運動指導に対する意識を調査し、保育者自身が主体的に運動環境と指導力を高め、学生には運動の楽しさを実感させる学修体制の充実が必要であると考察した。
	明治期日本の幼稚園教育における領域「言葉」 一「説話」から「談話」へ一	三浦哲志	明治期の幼稚園設立当初の保育内容をひもとく、知育偏重の傾向があり、言葉の領域においても訓育・知育が重視され、想像力を高めたり自発性を促す重要性は認識されていなかった実態を明らかにした。
	「道徳性・規範意識の芽生え」をはぐくむ保育環境	村上知子	幼児期における「道徳性・規範意識」は、善悪の認識、ルール理解、気持ちの調整、葛藤やつまずきの体験から育まれることを論じ、そうした意識の芽生えを育むにあたっては、保育者の専門性や意図的・計画的な保育、PDCAサイクルによる継続的な関わりが不可欠であると考察した。

42	地域連携・貢献センター事業「金城親支援プログラム」の作成・実施とその成果についての検討	米川祥子	本学幼児教育学科において、子育て中の親同士や子育て支援の関係者をつなぐファシリテーター育成事業に取り組み、2015年度以降の3年間の実践記録を整理し、成果と今後の課題を取りまとめた。
	英語学習アプリのためのイラストレーション	新井 浩	イラスト
	ポスター「折形礼法」	横山真紀	グラフィックデザイン
	子どもの音楽表現の学習成果向上のために（高等学校と保育士養成校の連携を目指して）—高校生の音楽基礎知識と保育士養成校の音楽の相互理解を起点に—	朝倉喜裕 上野高裕	本学幼児教育学科における授業「音楽理論」について、県内高等学校生徒の音楽の基礎知識を調査し、その結果を踏まえて授業計画の改善案を作成した。
	絵本等の児童文化財の技術習得過程における自己評価能力の育成 —パフォーマンス評価とポートフォリオ評価法を導入して—	太田淳子	本学幼児教育学科学生に対し、授業における絵本、紙芝居、素話の技術習得について、ルーブリックによるパフォーマンス評価の事前提示およびポートフォリオ評価法による振り返りを行った結果、学生の自己を客観的に評価する能力の向上が見られ、取組の有効性について考察した。
	北陸先端科学技術大学院大学×社会福祉法人北仲福祉会×金城学園の三者包括協定に基づく「福祉・介護職の社会的ブランディング」プロジェクト共同研究の検証	岡野絹枝 中田泰子 東田修一 堀 一浩	本学における産学連携事業として「福祉・介護職の社会的ブランディング」事業を実施し、福祉・介護施設の従業員が着用するユニフォームデザインに取り組み、施策に至るまでの経緯を取りまとめ、成果を検証した。
	保育者養成課程における児童福祉施設実習に関する調査 —実習事前準備学習と実習学習尺度との関連を中心に—	柴田英登	本学幼児教育学科学生に対し、児童福祉施設実習について事前学習の内容、実習後の成果に関する自己評価についてアンケート調査を行った結果、事前学習は不足しており準備不足を課題として認識しながら成果に対する自己評価は高いという結果が得られ、学びの途切れが懸念されることを指摘した。
	保育者に求められる人的環境としての基礎理念 —心の声を聴ける保育者となるために—	酢谷温子	保育者養成課程において、保育者を人的環境と捉え、心の声を聴ける保育者の育成を念頭に授業を実践し、レポート等から学びの成果を検証し、有効性を確認した。
	高校での発達障害生徒の相談から見えてくる特別の支援を必要とする幼児・児童・生徒の課題 —中学校・小学校の児童期及び幼児期の育ちにつながるために—	中村明成	特別の支援を必要とする子どもについて、就学前から高等学校に至るまでの子ども・生徒の状況を事例紹介し、特に高校生徒の相談案件から、小・中学校生の頃から生きづらさを自覚している者が多く、より長い目で見た相談・支援の必要性について論じた。
43	「石川幼年美術の会」設立の背景および2年間のプロセス —スタッフの姿容—	森田ゆかり	「石川幼年美術の会」について、設立前夜の取組や有志が集ったスタッフ研修を経て、2017年の実践研究会開催、さらに2018年には第2回実践研究会開催に至るプロセスを整理し、参加者とスタッフの境界が緩やかな体制による運営形態を紹介した。
	金城大学短期大学の学修評価シートを利用した、全国大学実務教育協会資格の独自評価方法	矢澤建明	本学ビジネス実務学科が申請する全国実務教育協会に認定資格について、申請にあたり学習成果の自己評価と客観評価の提示が求められたことに対し、本学独自の学修評価確認シートを用いた方法を検討し作成した。
	自閉症スペクトラムを持つ人が抱える就労の困難さ —事例から見えてくること—	山田紀子	自閉症スペクトラムを持つ人の就労について、障害者雇用の現状を踏まえ、問題点として対人関係における不自然さ、環境刺激に対する敏感さ等があり、必要な支援と環境づくりの必要性について論じた。
	石川県における中国ビジネスの捉え方 —中国人観光客の拡大対策について—	王 玉	訪日する中国人観光客の拡大に対し、石川県の受け入れ体制として空き家の活用を提言し、また魅力としてはオールシーズンでの観光と一週間以上の滞在メニューがあることを挙げ、「撮影コンテスト」等を創出し SNS 発信を強化する施策を提言した。
	詩歌を題材とした30の狂言劇の要約（英日）	ガート・T・ウ エスタハウト	狂言には260の現行曲があり15カテゴリーに分類されているが、引用される詩歌の内容に即した新しい分類法を提案した。
	『史記』に見る降将の処遇	三浦哲志	『史記』において、楚の項羽が秦の章邯の降伏を認め、後に王位を与えた理由について、食料不足による早期終戦を図った説、章邯の有能さを認めた説等を検証した。
	保育者個人の学びから学び合う組織づくりへ —インタビュー調査を通して—	村上知子	保育に関する研修を受けた保育士へのインタビューから、学びへの意欲の強さに加え、組織全体の学びに広げようとする機運が示され、専門性の向上に向け集団での反省的実践の必要性について論じた。
	現在の「三歳児神話」の浸透度	米川祥子	三歳児神話（3歳までは母親が育児に専念すべきとの考え方）について、学生・保育者・保護者の認識を調査した結果、どの群も理想は3歳との回答が最多ではあるが、ネガティブな理由は少なく、神話の影響は薄くなっていると考察した。
	日本の医療ツーリズムの国際化 —石川県における医療ツーリズムの事態調査—	米田 迪	治療中心の医療ツーリズムから健康増進ツーリズムへの転換可能性について、特に石川県「浦田クリニック/スコール金沢」の事例分析を通じて、地域活性化に資する「ヘルス・ウェルネスツーリズムリゾート石川」形成の有効性を示唆した。
	大学事務職員養成システムのこれから —更なる充実を目指して—	坂口憲二 表 健生 加藤待子	大学職員を対象とするSDの義務化を背景に、本学において定めた「事務組織強化と職員の能力向上に関する計画」について、2年間の実績および成果を取りまとめ、更なる充実と強化の方向性について考察した。
44	EarthRingのブランディング	大場新之助	ブランディング
	金澤妖怪抒情	アマヤギ堂	絵画等
	保育者の専門性向上に関する一考察 —実践を通した子ども理解と評価に着目して—	田島千香子	保育者に求められる専門性について、子ども理解のための4つの視点（子どもの姿を捉える・気持ち理解・遊び理解・生活理解）から実践および評価事例を検討し、継続的な子ども理解への志向、自己省察の姿勢、組織的な点検評価体制の重要性について考察した。
	効果的な授業を目的とする副教材の活用 —保育者の基礎理念を習得するための通信—	酢谷温子	保育者養成校の授業において、社会人としての基礎的な能力や資質の向上を目的として作成した副教材について、具体例を紹介し、使用方法と成果を取りまとめ、その有効性を確認した。

44	日本の医療ツーリズムの国際化 一石川県における医療ツーリズムの実態調査Ⅱ一	米田 迪	日本における外国人診療の現状と課題を整理し、「浦田クリニック/スコール金沢」での職員アンケートを通じて実態を分析し、言語の壁や文化・宗教、保険制度の違いが大きな課題であり、特に医療通訳の必要性が高いことが示され、今後は多職種連携による体制整備が不可欠であると考察した。
	極東ロシアへの日本人観光客の可能性	若月博延	極東ロシアへの観光について、日本とロシアの関係、極東地域の概要と日本人に縁がある史跡、外国人訪問者数の推移、現在の航路と航空路の状況などを整理して取りまとめ、今後の発展の可能性について論じた。
	教育課程・全体的な計画についての一考察 一対話型のPDCAサイクルを目指して一	村上知子	2017年度の「幼稚園教育要領」「幼保連携型こども園教育要領」において記載された、「カリキュラムマネジメント」について、文獻的に意味内容を確認し、保育の質向上に向けて、園内対話と学び合いの組織風土づくりの必要性について論じた。
	青年期における自閉症スペクトラムを持つ人のグループ活動が持つ意味 一余暇活動から見えてくるもの一	山田紀子	自閉症スペクトラムを持つ人どうしのグループ余暇活動の事例を紹介し、活動場所が居心地の良い居場所となつて、互いに関わり合いながら成長する場としての有効性について考察した。
	日本語能力試験N1とN2を目指す特別授業 一中国人留学生を対象に一	王 玉	中国人留学生を対象に、日本語能力試験N1とN2合格を目指して実施した日本語学習プログラムとして、単語・フレーズ・文構造の学習方法、試験頻出問題対策等の実践記録を取りまとめた。
	「大杉ミュージカルシアター」25年の歩みと地域づくり	ガート・T・ウエスタハウト	自身が主催する「大杉ミュージカルシアター」の25年の活動実績を紹介し、活動を通して得られるさまざまな「調和」の意義を再確認した。
	「絵を読む会」黎明期の記録 一「石川幼年美術の会」の挑戦一	森田ゆかり	「石川幼年美術の会」が開催する実践研究会およびスタッフ研修において、これまで10回行った「絵を読む会」について、実践記録、進行マニュアル例、参加者の振り返り等を取りまとめ、今後の発展可能性について記した。
	「臥薪嘗胆」小考	三浦哲志	故事「臥薪嘗胆」について、「史記」において「嘗胆」の逸話はあるが、「臥薪」の逸話は存在せず、後世の創作である可能性が高いと論じた。
	ウエディングドレス	成瀬美子	衣装
	3Dホログラフィー技術を利用した作品制作	和田紘樹	CG (コンピュータ・グラフィックス) 作品
45	白雪姫と笠地蔵!? 一バイカルチャルバリンガルス物語一	ガート・T・ウエスタハウト 新井 浩 吉田摩美	ミュージカル
	高校での発達障害生徒の相談から見えてくる特別の支援を必要とする幼児・児童・生徒の課題その2 一中学校・小学校の児童期及び幼児期につながるために一	中村明成	特別の支援を必要とする子どもについて、就学前高等学校に至るまで現状と支援すべき点を取りまとめ、それぞれの時期の行動特性や発達障害の特性を織り合せてながら一人ひとりに対峙していく重要性について論じた。
	日本の医療ツーリズムの国際化 一日本のウェルネス・ツーリズムの現状と今後の課題一	米田 迪	近年注目されるウェルネス・ツーリズムについて、世界の市場規模と規模成長の要因、フランスの成功事例、日本における定義と11類型、認定制度、成功事例を取り上げ、今後の課題としては、官民協力体制による観光業の強化が重要と論じた。
	オンデマンド遠隔授業で「共感的関係」を生み出す試み	森田ゆかり 太田 望	コロナ禍で実施したオンデマンド授業について、対面授業と同様の共感的関係を生み出すための取組「感じる」プロジェクト」を考察して実施し、学生の振り返りから成果を確認し、通常の対面授業の点検の必要性について論じた。
	手取キャニオンロードのナショナルサイクルルート認定への可能性	矢澤建明	近年のサイクリングブームを背景とし、白山市にある自転車道「手取キャニオンロード」について、魅力と特長を整理し、国土交通省が認定するナショナルサイクルルート指定を目指すに当たっての課題と可能性について考察した。
	乳児保育担当者の戸惑いの内容	米川祥子	保育施設における乳児保育担当者の戸惑いについて調査した結果、保護者について、保育者同士の連携、子どもへの対応が多く挙げられ、これらの解消に向けての保育者養成のあり方について考察した。
	コロナ禍の保育計画 一子どもの遊びに着目して一	村上知子	コロナ禍における保育状況について、こども環境学会による調査および実習後の本学学生へのアンケート調査を比較参照した結果、遊び環境は大切にされているが行事は縮小傾向にあり、保育計画の再確認の必要性について論じた。
	保育者養成校における音楽表現活動の実態 一2つの実習後の調査結果から一	上野高裕	本学幼児教育学科学生に対し、実習園における音楽表現活動の実態についてアンケート調査を行った結果、教育実習ではピアノによる弾き歌いが多かったが、保育実習では手遊び歌が中心であり、今後の授業の進め方について考察した。
	伝承的な遊びに関する一考察 一保育者養成校における実践の記録一	石野友子	本学幼児教育学科学生に対し、伝承的な遊び8種の体験機会を持たせた結果、幼少期に経験がなくても興味を持ち、楽しさを覚え、保育への導入意欲を持つことが示唆された。
	自閉症スペクトラム障害を持つ人がコロナ禍で過ごす状況について 一事例から見えてくること一	山田紀子	コロナ禍において、自閉症スペクトラム障害を持つ者の自粛生活における活動について、7人から聴き取り調査を行った結果、仲間が集まる機会の喪失の苦しみと、顔を合わせての対話の切望が語られ、コミュニケーションの場の必要性について考察した。
非認知能力の教授方法についての一考察	柴田英登	近年、保育現場において重視される非認知能力について、保育者を目指す学生に対して講義を行うにあたり、理解促進のため概念モデルの作成を試みた。	
前漢初期の粛清 一異姓三王の事例について一	三浦哲志	前漢初期、劉邦によってほぼ同時期に粛清された楚王韓信、梁王彭越、淮南王黥布の3人について、「史記」と「漢書」の記述から、粛清は計画的ではなかった可能性について論じた。	
情報伝達マンガで伝える情報量に関するガイドラインの提案 一宝達志水町の魅力を伝えるマンガ作成の実践一	新井 浩 下村有子 川邊弘之	情報伝達を主眼においたマンガ制作において、適切な情報量と絵柄について検討の上ガイドラインを作成し、それに基づき、授業を通じて宝達志水町PRマンガを制作し報告した。	
46	油彩画の作品制作	本山二郎	絵画
	による山水	渡辺秀亮	立体作品

	鶴来の「はかりうり」自然食品店「マルストア」のプロモーションビデオ	大場新之助	プロモーションビデオ
	「One Day！」—金城 ミュージックフェスティバルでの学生による英語オペレッタ	ガート・T・ウ エスタハウト	オペレッタ
	日本語学習者の動機付けを高める方法に関する考察 —中国・台湾留学生を対象とする—	米田 迪	日本の大学で日本語を学ぶ学習者の動機付けについて、中国および台湾の留学生2名に対して半構造化インタビューを行った結果、確固たる目標、興味、努力、好ましい結果等の理想の自己イメージに繋がる要素が多く見出され、学習支援のあり方を考察した。
	保育者養成校における造形表現のオンデマンド遠隔授業で「共感的関係」と「対話的で深い学び」を生み出す試み —遠隔授業で学生生活が始まった1年生の事例—	森田ゆかり	コロナ禍で実施したオンデマンド遠隔授業において、写真のスライドショー等を用いて共感的関係を生み、対話的で深い学びに導くための授業を考案して実施し、学生の振り返りから、ICT活用の可能性について論じた。
	白山手取川ジオパークに新たなナショナルサイクリルートを	矢澤建明	白山麓を走る「手取キャニオンロード」を主とするサイクリングコースについて、ナショナルサイクリルートの指定を受けるべく、コースを設定して実走を試み、課題を整理した。
46	保育者養成校における造形表現の授業がもたらす成果の検証 —「幼児と表現A」での学生の成長—	太田 望	本学幼児教育学科の学生に対し、美術に対する好き嫌いを調査した結果、嫌いな理由として他者との比較から技術面・発想面に自信がないことを見出し、これらを解消するための授業題材を設定して実施したところ、学生の意識転換が確認でき、その有効性について論じた。
	マンガの自動音訳システムに有効な読み上げ手法の基礎調査	新井 浩 瀬戸就一 川邊弘之	視覚障害者支援のための自動音訳システム構築に向けて、基礎調査としてマンガ音訳に取り組み、セリフ等をデータ化し自動読み上げを試みた結果、オノマトペの読み上げは内容理解を妨げる傾向にあり、情報量を調整する必要があると論じた。
	保育者養成校で子育て支援に取り組む意義 —「KINJO おやこひろば」の試行と課題—	米川祥子 山田紀子	地域の未就園児およびその家族との交流をはかる本学「KINJO おやこひろば」の実施に向け、先行他大学の事例調査と4回の試行を経て課題を整理した。
	保育者が働きやすい環境とは？ 現場と保育者とのギャップ —現場の考えに着目して—	村上知子 改田陽子	保育者の早期離職について、幼稚園・保育施設を対象にアンケート調査を行い、また個別の保育者インタビュー調査を行った結果、離職者は理想と現実のギャップに対応できず離職を選ぶ傾向にあり、一方、園長等は原因を保育者側にあると捉える傾向があり、今後の保育現場の環境づくりの必要性について論じた。
	保育内容「人間関係」と非認知能力	柴田英登	保育内容「人間関係」について、人間関係は愛着や基本的信頼感を基盤に、協働性や感情調整などの非認知能力を育む重要な領域であることから、保育者養成において、学生自身の非認知能力を高める教育の重要性を論じた。
	3Dプリンターを用いた美術教育の実践的研究	和田絃樹	近年、低価格の3Dプリンターが販売されるようになったことを背景に、3Dプリンターの種類、利点、使用手順、作例を整理し、美術教育の授業における活用について検討した。
	こいこい祭イラストポスター	チハラアケミ	イラストポスター
	0・1・2 ART	森田ゆかり 大場新之助	展示パネル
	保育の担当制と子どもの人間関係の関連性	水上和子 川邊音生	特定の保育者が継続的に子どもを支援する「担当制保育」が、1歳児の人間関係の発達に与える影響について、10事例の観察記録から分析した結果、子どもは担当保育者との信頼関係を基盤として他者へ関係を広げていくことが示され、担当制保育は、人間関係を豊かにする可能性を持つと論じた。
	日本の医療ツーリズムの国際化 地域資源をウェルネスツーリズム資源へ	米田 迪	世界のウェルネスツーリズムの市場規模や人気の背景を整理し、日本での推進に当たって考慮すべき視点として、国際競争力、国内医療への影響の問題を挙げ、成功に向けての方向性として、観光衛生マネジメント体制の確立、真正性の高い質の向上、多分野の連携と高度人材育成の3点を提言した。
	Google Classroom ルーブリック活用とペーパーレス授業	矢澤建明	コロナ禍における遠隔授業の運営に当たり Google Classroom を導入し、データによる課題提供や課題提出、ルーブリック機能の活用、加えて授業資料のデータ提供も検討し、ペーパーレス授業に向けての検討を行った。
	舞台表現におけるデジタルパフォーマンス —美術学科 Kinjo Art Show 及びダンス部定期公演での活用—	新井 浩 廣瀬 元	舞台表現におけるデジタルパフォーマンスの活用範囲の拡大を背景に、本学が開催する美術学科の Kinjo Art Show やダンス部の定期公演における活用事例を検討し、その効果や問題点、今後の展望について考察した。
47	コーヒー販売におけるデジタルマーケティング —地元ロースターにおける活用例を考察—	廣瀬 元	近年のデジタルマーケティングの普及を背景に、コーヒー商材を扱う会社の販売現状を事例分析し、特にシニア層の取込みに際してのオンライン購入を支援するアナログ対応の重要性、今後のリアルとデジタルの利用配分の変容について考察した。
	保育実習における絵本の読み聞かせに関する一考察 —保育者養成校の学生の意識—	石野友子 喜多志穂美	本学幼児教育学科学生に対し、実習時における「読み聞かせ絵本」の経験内容についてアンケート調査を行い、自分の思いと子どもの姿とのずれ、絵本の読み込みが浅いことによる意図のずれ等の留意点について考察した。
	美川里海きときと祭に関する一考察 —調査から見えてきた新たなイベントの在り方—	若月博延	2022年に白山市美川地区で行われた「美川里海きときと祭」について、参与観察を行い、成功の要因として、イベント主体の世代交代とそれを支える組織体制が1つだったこと、内容を大幅に変更したことがあると考察した。
	天然藍の灰汁発酵建ての記録（1）	権田宜子	天然藍を使用した灰汁発酵建ての方法を検討し、8日間の実践記録を取りまとめた。
	古代中国の戦後処理	三浦哲志	古代中国（春秋時代から戦国時代末期、楚漢戦争まで）における戦後処理について、「史記」を中心に文献調査した結果、春秋時代には敗者に対する寛大な戦後処理が多かったが、戦国時代には捕虜将軍の登用のほか、略奪、破壊、虐殺等が非難されない状況であったことを確認した。
	短大生向けの成年教育について考える —「現代社会と法」の授業を通して—	中村裕行	成年年齢が18歳に引き下げられたことを背景に、短大学生に対する成年教育のあり方について、特に参政権、契約、犯罪に関するトピックスの授業における取り扱いの必要性について論じた。

47	保育者養成校で子育て支援に取り組む意義 —おやこひろば参加者の効用と課題—	山田 紀子 米川祥子 金城 子育て 支援センター メンバー	地域の未就園児およびその家族との交流をはかる「KINJO おやこひろば」を本学において開設し、参加保護者および参加学生からの意見を集約し、今後の課題として、学びと体験の場としての充実を挙げた。
	保育と SDGs —領域「環境」に着目して—	村上知子	保育現場や幼稚園教諭等の養成課程における SDGs の取り扱いについて文献調査を行った結果、領域「環境」に関する内容が多いものの、養成課程の教科書には SDGs の記載がなく、今後の取り入れの必要性について論じた。
	英語の物語としての狂言	ガート・T・ウ エスタハウト アライヒロシ	本学における英語教育において、狂言を題材とし、台本を物語風に編集し作成した英語教材等を紹介した。
48	ご縁をつなぐ、お塩「貂塩アフリナ」。ひとつひとつ、想いをこめ、パッケージデザインと、プロモーションビデオの制作。	大場新之助	パッケージデザイン
	「小松城の女」	今村文男	絵画
	大杉ミュージカルシアターの歌の世界	ガート・T・ウ エスタハウト	作曲
	グラフィックデザイン 0terat 金澤 2022 テーマ「藤」ポスター	大谷友理	グラフィックデザイン
	保育者養成校における領域「表現」に関する考察 —歌唱活動から結びつく音楽表現—	上野高裕	幼稚園教育要領の領域「表現」、特に音楽表現活動について、養成校では技能中心の指導や総合性の欠如が課題であり、月齢別発達を踏まえ、音楽を楽しむ体験を通して感性や創造性を育てる実践の重要性について論じた。
	いしかわ里山里海サイクリングルート・白山手取川ルートの NCR 認定への可能性	矢澤建明	石川県がナショナルサイクリングルート指定を目指す「いしかわ里山里海サイクリングルート」について、このうち特に「白山手取川ルート」の実走検証を行い課題を整理し、「手取キャニオンロード」の優位性について論じた。
	認定 NPO 法人「おやこの広場あさがお」での活動 「0,1,2 歳児のアート体験」について、齋藤亜矢著「ヒトはなぜ絵を描くのか」をもとに考察する	坂井亜也子	人が画を描く理由について、芸術認知科学的な考え方、子どもの絵や造形活動から考察し、自分を知り、自分の世界を他者に伝える面白さについて論じた。
	保育実習における絵本の読み聞かせに関する一考察 (2) —保育者養成校の学生の意識—	喜多志徳美	本学幼児教育学科学生に対し、実習時における読み聞かせ絵本に関するアンケート調査を行った結果、実習後は、年齢や発達、活動の流れ、読む時間や文章量などを踏まえた専門的視点で選書する傾向が強まったと論じた。
	日本における外国人留学生就職の現状と課題 —外国人留学生の就職に関する実態調査 I—	米田 迪	少子高齢化による労働力不足が深刻化するなかで、留学生の就職が進まない要因について、現状や課題を整理し、留学生へのインタビューを通じて調査し、情報不足や日本語能力不足の課題について論じた。
	0・1・2ART その 2 —「子どもを見る力」を育む授業・研修のあり方を探る—	森田ゆかり	「0・1・2ART」のコンテンツを授業や研修で活用し、子どもを見る力の育成に有効であったと考察した。
	『鵬冠子』武霊王篇の成立について	三浦哲志	中国・戦国時代の思想家である鵬冠子が記したとされる『鵬冠子』における「武霊王篇」の成立について、文献的に調査した結果、趙の思想家が軍事的に有名な武霊王に仮託して執筆したものと推察した。
	子どもの遊びからの学び —0 歳、1 歳、2 歳の遊びと学びに着目して—	村上知子	本学幼児教育学科の学生に対し、0 歳、1 歳、2 歳の遊びに関するアンケート調査を行った結果、特に低年齢の子どもの遊びから学びを見つけにくい傾向を見出し、子どもの遊びを見る目を養成する必要性について論じた。
	秘書検定準 1 級合格者による高校生面接対策講座の実践報告	坂上牧子	秘書検定準 1 級合格者の本学ビジネス実務学科学生が、高等学校の生徒に対して実施した面接対策講座について、その内容や受講生の感想、指導役の学生へのアンケートなどを通じて、良好な成果を確認した。
	乳幼児期になぜ絵本が大切なのか —絵本の読み聞かせの研究発表を通して—	山田紀子	乳幼児期における絵本の重要性について、保育現場での実践と公開保育の事例を通して検討し、保育者自身が楽しんで読むことで、子どもが安心感と信頼の中で言葉や表現を自然に吸収する役割をもち、絵本読みの取組は、子どもの主体性や想像力、自己肯定感を育てると論じた。
	長町中学校プロジェクトマップの制作 長町中学校開校記念イベント長町中ソニック 2023	和田絃樹	長町中学校で実施したプロジェクトマップについて、制作過程を紹介し、成果と課題を挙げた。
	本学幼児教育学科における新入生対象教育についての検証	米川祥子	本学幼児教育学科において実施している入学前教育について、参加した学生に対するアンケート調査を行った結果、仲間づくり等には成果を上げているものの一方で乗れない学生への配慮の必要性について考察した。
	七夕短冊にみる短期大学生の願いごと分析	加藤 博	本学において七夕の笹飾りに吊るされた短冊を収集し記載内容を分析した結果、学業とは無関係の「推し活」「恋愛・結婚」に関する希望が多く、これらの教育活動への取組みの必要性について論じた。
はくさんに しんかんせんがやってきた —北陸新幹線陸送の記録絵本制作—	石野友子	北陸新幹線車両の陸送写真を撮影し、物語性を加えて絵本として制作し、幼稚園児に読み聞かせを行った様子や今後の完成に向けた展望を取りまとめた。	
写実油彩画の色彩計画 —ナチュラルハーモニーの活用—	本山二郎	写実的な油彩の作成において、ナチュラルハーモニーによる混色効果を確認し、また色数を限定したナチュラルハーモニーにより自然な作品が描けるかどうかを検証した。	
49	刻々	北川由希恵	絵画
	溢れる時	渡辺秀亮	モニュメント
	大杉ミュージカルシアターのミニ芝居	ガート・T・ウ エスタハウト	ソングストーリー

49	保育者養成校における領域「表現」に関する考察 —造形活動を通して、表現の面白さを知る—	坂井亜也子	保育や養成校における領域「表現」の造形に関する指導について、大人感覚を持ちつつ子どもの感覚を呼び戻し、夢になっただけで終わらず、表現を楽しむ互いに認め合って育ちに関わる重要性について論じた。
	石川県における持続可能な経済発展のための戦略的アプローチ —石川県留学生受入れによる経済効果に関する考察—	米田 迪	石川県における留学生受入れによる経済効果について、県内留学生のアルバイト収入と生活費消費の現状から経済効果を類推し、長期的には地域の国際化に寄与し持続可能な発展につながると論じ、留学生受入れを推進する政策を提言した。
	前屈運動と逆さ運動の効果と運動意識への影響 —保育者養成校の女子学生を対象として—	百海 智	本学幼児教育学科学生へのスポーツ授業において「前屈運動」と「逆さ運動」を取り入れ、変化や成果を確認した結果、体の柔軟性と体幹バランスの強化につながり、また達成感などの心的満足度にも好影響があったと考察した。
	「遊び・探索から始まり、表現が生まれる」ことを実感する授業づくり —「している事」から学ぶ教育を目指して—	森田ゆかり	本学幼児教育学科の授業において、造形遊びから造形表現が生まれるプロセスを実家できる演習プログラムを作成し、学生の振り返りからその成果を確認した。
	白山市文化遺産の観光活用の可能性 —加賀一向一揆を例に—	若月博延	白山市における文化遺産「鳥越城」の観光資産としての可能性について、歴史的経緯、保存と活用の現状、地域住民の思い等を整理し、ワカモノの力による活性化の必要性を論じた。
	VR ヘッドセットを使用した物体認識の可能性	和田絃樹	VR (仮想現実) ヘッドセットを利用し、視覚情報を拡張する技術の開発を試み、応用可能性について考察した。
	青年期の自閉症スペクトラム症の人たちが余暇活動を行う意味について —NPO 法人アスベの会石川の活動を通して—	山田紀子	自閉症スペクトラムを持つ人の支援組織「NPO 法人アスベの会石川」における活動を振り返り、特に余暇活動支援を通して互いを支え合う気持ちが育ち就労につながる過程について考察した。
	本学幼児教育学科入学生への「楽しいです」の要因を探る	米川祥子	本学幼児教育学科新入生に対し、学校生活の「楽しい」の要因についてアンケート調査を行った結果、学びへの意欲、クラスの間関係の影響が示唆され、支援のあり方について考察した。
	保育者養成校で子育て支援に取り組む意義 —保育者養成校の学生の意識—	石野友子	地域の未就園児およびその家族との交流をはかる「KINJO おやこひろば」において、参加学生に対して取組の意義についてアンケート調査を行った結果、実習以外に多くの親子と関わる機会としての意義が記され、活動の有効性を確認した。
	保育者養成校の学生が感じる実習記録の困難感に関する一考察	喜多志穂美	本学幼児教育学科学生に対し、実習記録の記述における困り感についてアンケート調査を行った結果、適切かどうかの不安感を持つ割合が大きく、考える力と書く力の習得によって軽減できる可能性について論じた。
	本学幼児教育学科の新入生研修についての再検討	三浦哲志	新入生研修に参加した本学幼児教育学科1年生に対し、望ましい研修形態についてアンケート調査を行った結果、人間関係づくりを主とする短時間研修が望まれており、今後の対応の必要性について論じた。
	明治期の教育事情 —金城遊学館創設の時代背景を探る—	中村裕行	金城遊学館創設の時代背景として、明治期の教育政策を振り返り、公教育の補完的な学校としての色合いと、創設者の女子教育普及に対する志が呼応した様子について考察した。
	子どもの遊びからの学び 2 —0歳、1歳、2歳の遊びと学びに着目して—	村上知子	本学幼児教育学科の学生に対し、実習終了後、0歳、1歳、2歳の遊びに関するアンケート調査を行った結果、前年度と同様、特に低年齢の子どもの遊びから学びを見つけにくい傾向を見出し、子どもの遊びを見る目を養成する方法を再検討の必要性について論じた。

\* タイトルは本文中の記載を優先した。ただし、本文にタイトル記載ないものは、目次の記載を採用した。  
 \* 著者・作家名は原則本文中の記載を採用した。

## 引用文献

- 1) 松村圭一郎 (2019) : これからの大学. 春秋社. 89-97.
- 2) 高橋愛典 (2022) : 私, 紀要の味方です —学術コミュニケーションの促進に向けて—. 商経学叢, 68 (3), 131-153.

第50号記念企画 「白山市 地域とのかかわり」





## 地域文化コンテンツ デジタル紙芝居制作の試み

### — 加賀藩と金沢城下の暮らし —

新井 浩\*

## A Practical Exploration of Digital Kamishibai for Presenting Regional Cultural Content: Life in the Kaga Domain and the Castle Town of Kanazawa

ARAI Hiroshi

本稿で紹介する一連のイラストレーションは、加賀藩の初代藩主・前田利家の生涯を物語形式で描いたデジタル紙芝居のために制作したものである。

筆者は2023年頃から、石川県の歴史や地域の物語を映像コンテンツとして伝えるデジタル紙芝居の制作に携わってきた。これまでに『羽咋市歴史物語・妙成寺編』『宝達清水町歴史物語』『宝達清水町歴史物語ジュニア』『能美市歴史物語』『金沢の歴史文化講座』といったシリーズを担当し、約120点のイラストレーションを制作してきた。

制作体制は、企画・脚本を杉島啓文（ラジオかなざわ）、監修を東四柳史明（金沢学院大学名誉教授）が担当し、内容面の信頼性を支えている。音声出演には、落語家の月亭方気、アナウンサーの綿谷尚子、俳優・パフォーマーの大輔、中元ミレイなど、石川県ゆかりの表現者が参加し、物語に臨場感と地域性を与えている。筆者はキャラクターデザイン、構図、背景などイラスト全般を担当し、視覚表現と物語の統一を意識して制作を進めた。

歴史題材を扱う映像コンテンツでは、衣装・建築・風俗などの考証に基づく正確性が不可欠である一方、視聴者が親しみを感じられるキャラクター表現や画面構成も重要となる。本シリーズでは、資料調査による正確性を保持しつつ、温かみのあるビジュアル表現によって物語への没入感を高めることを目指した。

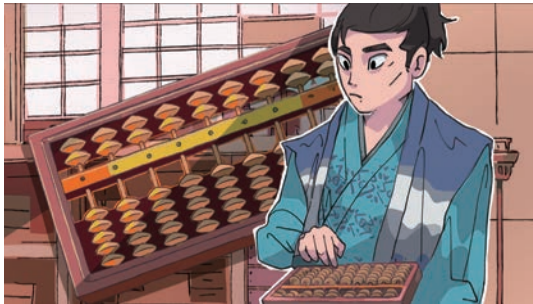
地域文化コンテンツでは、制作後に多くの人にどのように届けるか、ということも大きな課題である。教育現場や地域等で継続的に活用してもらうため、動画やマンガとしての魅力をさらに高めていく必要がある。物語性をもつコンテンツは多数のイラストレーションを要するため、少人数体制の制作において、限られた枚数で効果的な動きを生み出すリミテッド・アニメーションとしての工夫が欠かせない。現在は一枚絵を軸に構成を組み立て、必要に応じて動くパーツを追加しているが、動きを前提とした画面設計を行い、より効率的な制作プロセスを整えることが今後の課題である。

---

\* 金城大学短期大学部美術学科



うつけの大将・織田信長との出会い



儉約家でそろばん巧者の利家



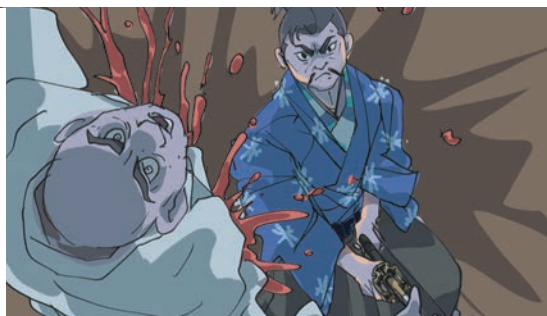
槍の又左衛門としての武勇



12歳のまつ、利家のもとへ



拾阿弥事件：利家の最大の失敗



同朋衆・拾阿弥を衝動的に斬殺。



浪人時代：困窮とまつを支え



桶狭間の戦い：復活をかけた参戦



美濃・森部の戦い：首獲り足立六兵衛と一騎討ち





荒子城主へ：家督相続と戦場の働き



一向宗：石山本願寺との激突



能登一国を得て国持ち大名へ

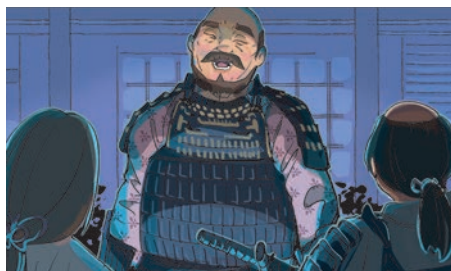




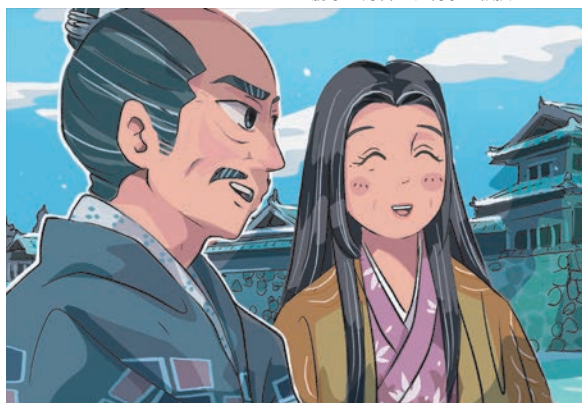
本能寺の変～賤ヶ岳の決断：利家最大の岐路



勝家が秀吉か、利家が板挟みに



金沢へ：百万石の礎が完成  
利家とまつの長い旅路であった





## 「おやこの広場あさがお」でのアート体験

## — 23年間の変遷と不変 —

森田 ゆかり\*

Art Experiences in “Oyako no Hiroba Asagao”:  
Transformations and Continuities Over 23 Years

MORITA Yukari

## 要旨

認定 NPO 法人おやこの広場あさがお（白山市）におけるアート体験は、NPO・企業・行政との連携により開始され、23年間継続してきた。その間、企業や行政の担当者の交代、「おやこの広場あさがお」の二度にわたる移転、本学幼児教育学科のカリキュラムや実習時期の変更など、さまざまな変化と困難があった。それでも、その都度実状に応じた工夫を重ねながら活動を継続してこられたのは、0, 1, 2歳児にとっての豊かな学びの場であると同時に、保護者にとっての気づきの契機となり、学生にとっても地域と大学を往還しながら専門性を涵養する実践的な学びの機会となるという、変わらぬ意義が共有されてきたからである。

本稿では、地域に根ざした連携実践の23年間の変遷をたどるとともに、乳幼児期の学びと学生の専門性の涵養という観点から、その根底にある不変の価値について整理する。

## I はじめに

認定 NPO 法人おやこの広場あさがお<sup>1)</sup>（白山市）と、本学幼児教育学科との共同企画『ちびっこアート体験』（以降『アート体験』と記す）は、2003年に始まり23年間続いている【表1】。学生は、子育て支援施設「おやこの広場あさがお」を利用する0, 1, 2歳児を中心とする子ども、その保護者と、ペンや絵の具での遊びを通して年間複数回交流してきた。

2003年から2005年までは、1, 2年生が夏季休暇中にボランティア活動として参加した。2006年からは、おもに「特化美術」（2016年から「特化美術表現」、2020年から「特化造形表現」、2025年から「特



【写真1】絵の具で遊ぶ  
2歳児（2006.8）

\* 金城大学短期大学部幼児教育学科

化言葉・造形フィールド) 履修の2年生が授業の一環として参加し、単にイベント支援の体験ではなく、子どもの「あそび」から思いや発達をよみとり記録し、対話を経て「見える形」(発表・展示)にまとめる学びを重視するようになった(『金城紀要第48号』参照)。

中町商店街中程にあった複合商業施設・ジョイモールの閉鎖、それに伴う「おやこの広場あさがお」の2度にわたる移転などにより、実施場所は転々とせざるを得なかった。一時的な対策として、松任文化会館ロビーや、本学2階渡り廊下で実施したこともあった【写真2,3,13,14,15】。

また、本学幼児教育学科のカリキュラムや実習時期の変更により、夏季休暇中に『アート体験』を設定できなくなったこと、近年、子育て支援施設を利用する子どもが0歳児中心になったことなど、状況は年々変化してきた。

それでも、その時々の実状に合わせて工夫し、結果的に23年間も続けてきたのは、0,1,2歳児、保護者、学生が、「おやこの広場あさがお」という場で『アート体験』を通して関わることに大きな意義を感じていたからである。

0,1,2歳児にとってのアートは「あそび」であり、作品をつくることが目



【写真2,3】松任文化会館ロビーでの『アート体験』の様子

【表1】『ちびっこアート体験』実施状況

年	実施月/回数	実施場所
2003	8月/6回	松任賑わい交流館「プラスあさがお」展示室(松任市中町・ジョイモール内/2005年、市町村合併により松任市は白山市に移行)
2004	8月/8回	
2005	8月/6回	
2006	8月/6回	
2007	5,8月/6回	
2008	5,8月/6回	
2009	5,8月/5回	おやこの広場あさがお(白山市中町・ジョイモール内)
	11月/1回	
2010	5月/1回	松任賑わい交流館 会議室
	8月/3回	松任賑わい交流館「プラスあさがお」展示室
2011	5月/1回	松任文化会館ロビー(白山市古城町)【写真2,3】
	12月/1回	おやこの広場あさがお(白山市西新町・サンライフ松任内)
2012	5月/1回	金城大学短期大学部2階渡り廊下
	12月/1回	おやこの広場あさがお(白山市西新町・サンライフ松任内)
2013	7,11月/2回	おやこの広場あさがお(白山市殿町に新設移転【写真4】)
2014	4,5,7,11月/5回	
2015	5,7,11,12月/6回	
2016	5,7,12月/4回	
2017	5,12月/5回	
2018	5,12月/5回	
2019	5,11,12月/4回	コロナ禍で実施なし
2020	コロナ禍で実施なし	
2021	コロナ禍で実施なし	
2022	4,7月/8回	【写真4】
2023	4,7月/2回	
2024	5,7月/2回	
2025	4,7月/2回	



【写真4】

的ではない。「何かを上手に描かせなければ」、「みんなと同じことをさせなければ」というとらわれから大人が解放されると、子どもは安心して自らペンや絵の具に手を伸ばし、全身の感覚を駆使して新たな世界を感じ、あらわしていく。小さな子どもにとっては「生きることそのものがアート・あそび」であることを、学生や保護者は感じ取り、あそび・表現の原点を実感することとなる。

本稿では23年間の取り組みの変遷をたどりながら、時が経ても変わらない大切なことについてまとめておきたい。

## II 白山市のNPO、企業、行政との連携

2003年は筆者が本学に着任した年である。松任市（現白山市）経済振興課から、子ども対象のワークショップとその作品展を開催したいという相談が持ち込まれたのは5月であった。経済振興課課長、おやこの広場あさがお事務局長、キリンビール北陸工場担当者の3者と本学で面談した。

以下のような要望があった。

- ・企業主催の「キリンアートコンクール」<sup>2)</sup>で募集する造形作品の展覧会に、子どもの作品展を併設することにより市民の鑑賞者を増やしたい。
- ・ワークショップの対象は、「おやこの広場あさがお」を利用する0歳から3歳の子どもを想定している。
- ・作品製作を指導する学生ボランティアを募りたい。
- ・学生も企画に加わり、ワークショップは数日開催し、子どもや保護者と一緒に作品をつくってほしい。

「作品製作を指導」という要望に対し、筆者は次のように質問した。「作品展のために絵を描かせようとするのではなく、小さな子どもが自ら描きたいように描いた絵、大人の眼から見るとぐちゃぐちゃな、絵の具で遊んだ痕跡のようなものを展示しても構いませんか」。

3者から賛同・共感の声があり、実験的に6日間のワークショップおよび作品展を開催することが決定した。経済振興課課長T氏、おやこの広場あさがお事務局長K氏とは意気投合し、その後もよきパートナーである。

学生にとっても本学にとっても、願ってもない魅力的な提案であった。授業で学んだ知識・技能の実践、当時はほとんど機会のなかった0,1,2歳児との関わり、保護者との関わり、子育て支援施設との連携（子育て支援について考えるきっかけ）、企業・行政との連携、ボランティア、地域貢献など、即座に思い浮かんだだけでも多くの要素が含まれていた。



【写真5, 6】実現した「コンクール応募作品」と「子どもたちの表現」の併設展示。楽しいイベントに学生も参加した。（2003・1年目）

### Ⅲ 実験的にスタートした一年目

8月に6日間連続で実施したが（午前の部2時間・午後の部2時間）、夏季休暇前にボランティアを募集すると2日間で適正人数に達し、のべ65名の学生がボランティアとして参加した。『アート体験』当日は連日多数の親子が参加し、毎日参加する親子もいた。

予想以上に子どもたちは夢中になり、遊んでいる時の表情や、描きたいように描いた絵は魅力的であった。「来年もやりましょう」という声が自然に担当者間で交わされた。

4者で面談した際、「小さな子どもが自ら描きたいように描いた絵を展示」と筆者は口にしながら、子どもの力を見くびっていた。一日目、1歳の子どもに対して「デカルコマニー（合わせ絵）ならお母さんと一緒にできるだろう」と思い、画用紙に絵の具をポタポタと垂らして見せたのだが、ある子どもが筆者から刷毛を奪い取り、豪快に一人で描き始めたのである。他の子どもも筆や刷毛に手を伸ばし、

どんどん描き始めた。嬉しい誤算であった。手を動かすと画用紙の上に色や形が生まれることが不思議で、面白く、嬉しく、どんどん手や体を動かしたのだろう。心の動きがいきいきとした線から伝わってきた【写真7,8,9,10,11】。

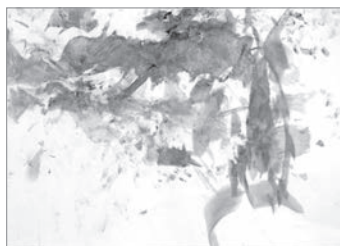
一方で、予想していたことではあるが、「作品をつくらせよう」とするお母さんの思いが、子どもの思いより先行してしまう点が気になった。お母さんにとって作品とは、大人の眼から見てきれいで形の整ったもの、記念になるものだった。

特に、紙粘土を使った作品づくりにお母さんが熱中してしまった。子どもが紙粘土の感触を楽しみ、手や指を動かすたびに形が変化していく不思議さ、面白さを体験できるよう「あそび」に誘ったつもりであったが、多くの子どもが手型・足型を残すための「記念品づくり」をさせられることになった。

子どもの心の準備ができていないうちにお母さんが「させよう」としたため、泣いてしまう子ども、二度と手を出そうとしない子どももいた。しかし、お母さんの一生懸命さ、楽しそうな表情、満足した様子を見ると制止の声掛けはできず、当初のねらいとは違ったが親子での共同製作を見守ることになった。



【写真7】『アート体験』の様子（2003）



【写真8,9,10,11】子どもの表現  
（左上8か月、右上1歳、左下2歳、右下3歳・2003）

大人の眼から見て「きれいで形の整った作品」をつくらせようとする思いが、子どもの思いより先行してしまうのは、子育て支援施設に限らず、保育者にとっても永続的な課題である。また、個人差はあるものの、保護者が無意識のうちに子どもの手に付いた絵の具をすぐに拭いてしまうのも、課題のひとつである。

## IV 変化

### 1) 保護者の意識

一年目の苦い経験を踏まえ、翌年からは紙粘土での遊びはやめ、子どもの思いが尊重されるような声かけを心掛け、保護者向けのメッセージを手渡すようになった。『アート体験』への願いが集約されている。（右に載せたのは2025年度のメッセージである。23年間ほとんど変わっていないが、近年0歳児の参加が増えたことに対応している。）

保護者の意識は少しずつ変わってきたが、4年目の『アート体験』で特に大きな変化を感じた。初めて参加した保護者も含め、子どもの遊び・行為そのものを楽しみ、「その痕跡が作品」と捉えているように感じられた。

子どもが遊びこんでいる姿を見たお母さんたちが「こんなことが楽しいんだ」と気づき、子どもが「試している」ことに付き合い始めた。リピーターのお母さんの存在も大きかった。

子どもがいつもとは違う環境を受け入れ自ら手を伸ばすまで「待つ」ことが出来るようになり、子どもの遊ぶ様子

#### 水で洗い落とし易く、安全性の高い絵の具・ペンで遊んでみませんか？

アートは「もの」とかわり「感じる」ことから始まります。ペンやえのぐで紙に描かなくても大丈夫！大人にとっては当たり前のことも、小さな子どもにとっては初めての体験であり、どれほど不思議で、感動的なことなのかを想像してみましょう。

例えば、ペンのケースを見た時に、どのような反応をするでしょうか？興味を示し、自分から手を伸ばし、触ろうとすることも、子どもにとっては「あそび」です。最初は、ペンをケースから出し入れしたり、並べたりして遊ぶかもしれません。両手に持って遊んでいるうちに、たまたま音が出ることを楽しむかもしれません。そのような体験も大切にしたいものです

#### お子さんの気持ちと相談して、いつでも気楽にご参加ください。

子どもだけではなく、ほとんどの保護者の皆さんにとっても初体験です。ともにドキドキワクワクしながら、子ども一人ひとりが「どんな気持ちでいるのかな？」「何を見ているのかな？」「何を楽しみ、試しているのかな？」「肩や肘や手や指がこんなに自由に動くようになったんだ」という眼差しで、ゆったりと楽しめるひと時になれば嬉しいです。

手を動かして遊んだ痕跡が、今、この年齢の時にしかつけない形・色になってあらわれ、からだの発達や心の動きが見えてきます。

あまり遊ばなかった子どもにも、子どもなりの「わけ」があるはずです。いつもと違う環境を観察したり、人の顔を見ることの方が楽しかったのかもしれませんが。お友達が遊ぶ様子をじっくり見て、心の準備をしている子どももいます。そのような気持ちも大切にしたいと思います。

を一緒に楽しみ、子どもが想定外のことをし、服がかなり汚れることも予想したうえで、それをも温かく見守っていただける気持ちの余裕が生まれてきた。また、保護者自身も服が汚れることにそれほど抵抗がなくなり、汚れてもいい服装で参加するようになった。

## 2) 参加学生《ボランティア → 授業の一環》

Iで記したように、2003年から2005年までは、1、2年生が夏季休暇中にボランティア活動として参加した。2年目からは、前年参加した2年生が、活動中の子どもの弟や妹（乳児）の見守りと1年生の支援をしたが、2年生の目配り、必要に応じた動きの早さに1年生は刺激を受け、良いモデルになった。

2005年度から1年次夏季休暇中に「保育現場体験学習」、「集中講義」などが追加されたため、2年生が活動の中心になった。2006年度からは2年生の「特化教育」が始まり、「特化美術」を選択した2年生が授業の一環として参加し、活動の核になった。支援の体制は安定した。

## 3) 会場《広い特設スペース → 「おやこの広場あさがお」の「いつもの空間、」

### 実施時期《夏季休暇 → 夏季休暇以外の平日》

2011年は大きなターニングポイントになった。Iで記したように「ジョイモール」が閉鎖したのである。前年まで2階の広い展示スペースを『アート体験』の会場として使用してきたが【写真12】、この年から使えず、「おやこの広場あさがお」も移転することになり利用できない期間があった。

松任文化会館ロビーや本学2階渡り廊下などで、それまでの形を何とか踏襲しつつ【写真2, 3, 13, 14, 15】、サンライフ松任内に移転した「おやこの広場あさがお」内で実施する形も模索した。



【写真12】『アート体験』の様子（2006）



【写真13, 14, 15】本学2階渡り廊下での『アート体験』の様子（2012）

【写真1, 3, 12, 15】に見られるような、ダイナミックな遊びに対する疑問も少なからず感じていた。子どもにとっては気持ちが解放され没頭できる貴重な体験、保護者にとっても子どもへの理解を深める貴重な体験ではあるのだが、次第にイベント色が強くなり、子ども一人ひとりの思いを十分にしているだろうかという疑問である。「ジョイモール」閉鎖を機に、一過性の体験ではなく、子ども、保護者、学生にとって日々の生活や学びとつながる体験の在り方を探りたいと考えた。

2012年12月からは、授業の一環として平日午前、「おやこの広場あさがお」の「いつもの空間」で実施する形に変更した。床はカーペット敷きであり、遊び方、環境の設定も変更した【写真16】。子ども一人ひとりとじっくりと関わることができるようになったが、参加できるのは「特化美術」（2016年から「特化美術表現」、2020年から「特化造形表現」）を履修している2年生に限られ、ボランティアが参加できない、学生間で継承されないという課題も生まれた。



【写真16】2018年に新設移転した「おやこの広場あさがお」での『アート体験』の準備の様子（2023）

#### 4) 子どもの低年齢化

近年は育児休業制度も整い、育児明けに職場復帰するお母さんが増えてきた。そのタイミングで子どもも保育施設に入園するため、「おやこの広場あさがお」を利用するのは育児休業中のお母さんと0歳児が多い。遊び方や支援の在り方、学生が学ぶ内容も、これまで以上に0歳児を意識するようになった。

## V 23年目の今・これから

### 1) 23年目の今

2006年度から始まった「特化」の授業は、2025年度から大きく転換し「KINJO 特化 こどものあそび探究<sup>+</sup>」となったが、「おやこの広場あさがお」での『アート体験』はまさに「あそび探究」であり、「特化言葉・造形フィールド」の柱となり体系化されている。

「おやこの広場あさがお」での『アート体験』を柱とする学びの体系（2025年度の場合）

- 4月 「レジジョ・エミリア」の幼児教育から学ぶ  
環境・子どもの主体性・3つのD（ドキュメンテーション、ディスコース、デザイン）  
について理解する。記録をもとにグループで対話し、学びを「見える形」にする。
- 4月 「おやこの広場あさがお」施設見学  
子育て支援施設について知り、環境を見る。
- 5月 「おやこの広場あさがお」で『アート体験』1回目
- 7月 「石川幼年美術の会・スタッフ研修会」に参加 「遊び・表現をよむ会」で発表  
『アート体験』の記録をもとに、関わった子どもの遊びや表現についてグループ内で発表  
保育者からの質問に答え、意見を聞き、体験は学びへと繋がる。
- 7月 「おやこの広場あさがお」で『アート体験』2回目

- 10月～ 『子どもが絵を描くとき』（磯部錦司著）講読  
実習や『アート体験』、「遊び・表現をよむ会」での体験と言葉が結びつき整理される。
- 10月 「金城祭」 **作品+ドキュメンテーションの展示 「見える形」にする**  
『アート体験』での作品、子どもの様子（写真）、記録からの抜粋を同時に展示することにより、子どもが何を感じ、どのように遊び、探求をしていたのか、学生がどのように関わったのかを分かり易く伝える。
- 11月 「第8回石川幼年美術の会・実践研究会」に参加 「遊び・表現をよむ会」で発表  
**『アート体験』の記録をもとに、関わった子どもの遊びや表現についてグループ内で発表**  
7月の「スタッフ研修会」で発表した経験などが活きる。
- 11月 プロジェクト活動 3、4人グループでテーマを決めて探究活動  
0,1,2歳児対象の教材研究をテーマにしたグループは、「おやこの広場あさがお」で実践しまとめる。

## 2) これから

2023年10月、筆者は「0・1・2ARTひろば」という団体を設立した。本学幼児教育学科のカリキュラム変更を機会に、2003年から『アート体験』の企画に携わっている筆者と「おやこの広場あさがお」事務局長が中心となり、『アート体験』の目的とノウハウを引き継ぎながらも、持続可能で、より開かれた形、子どもや学生にとってよりよい体験の場になるよう願ったことである。

IV 3) で課題として挙げたが、2012年以降、授業の一環として平日午前に実施する形に変更したことにより、参加できるのは限られた2年生になり、他の学生はボランティアとして参加する機会を失った。また、カリキュラムの都合で、成長著しい0,1,2歳児が、一年のうち4月と7月の2回しか体験の機会がないのは勿体ない。授業の一環として参加する学生にとっても同様である。

「0・1・2ARTひろば」では、2024年度から企画している『0・1・2ART体験「ペン・えのぐ」であそぼう!』を5月から翌年1月の間に6回、土曜日に設定した。学生以外に、0,1,2歳児の「アート・あそび」に興味をもつ保育者のボランティア参加が予想以上に多く、活動の質を高めている。また、土曜日開催に伴い白山市以外からの参加、お父さんと子どもの参加、家族での参加が増え、本学教員以外の指導者の層も厚くなった。

授業の一環として4月、7月に実施していた『アート体験』はそのまま残り、「0・1・2ARTひろば」企画と合わせると、子ども、保護者の参加の機会は8回に増えた。「0・1・2ARTひろば」企画と区別するために、2026年度からは『KINJOアート体験』と名称変更する予定である。2025年度からは『0歳のあそび 身近な「もの」であそぼう!』も年間6回実施している。

『ちびっこアート体験』の目的とノウハウはこのように引き継がれ、大きな広がりを見せている。

## VI 変わらないこと

### 1) 子どもが安心できる環境、ペンや絵の具などの「もの」に興味を持ち「遊んでみたい」と心動く環境づくり

『アート体験』では作品をつくることが目的ではない。「やってみよう」という思いを安心して試すことができる環境をつくる過程で、子どもを真ん中に、学生、保護者、教員が育ち合ってきた。子どもの周りには大人が、「あそび」を通して「子ども」というものを知ろうとし、子どものよき理解者になることが、何よりも子どもにとって幸せなことだと考えている。

『アート体験』に限らず、0, 1, 2 歳児にとっては「未知の世界」との出会いが多い。描くこと以前に、子どもが、見て、触って、(月齢によっては) 口で触れ、ゆっくりゆっくり「もの」と関わり、感じながら、確かめながら、知ろうとしていくこと、世界を広げていくことを大切にしたい【写真17, 18, 19】。



【写真17】 ペンを箱から出し入れし遊ぶ（0歳・2022）



【写真18】 ペンで描く真似をして遊ぶ（0歳・2022）



【写真19】 作品は残らないけれど、これもアート！（2歳11か月・2022）

### 2) 余計なことはしない

いろいろな子どもがいて、その時々のお気持ちがある。子どもは気が向くと近づいてきて「もの」とかかわり始める。教員や学生は子どもの興味を探り「もの」を追加したり片づけたりする。「やりたいこと」を次々と試し、没頭していく子どももいれば、別の遊びに心が移り、遊び終わるとまた戻ってくる子どももいる。始まるタイミング、終わるタイミングも子どもに委ねる。

一人ひとりの「リズム」「いろいろ」「その時々」に応じていると、自然に何もかもが大人の思い（既成概念）からはみ出していき、大人にも化学変化が起こる。

### 3) 「おやこの広場あさがお」の『アート体験』の文化

参加する学生は毎年変わるが、「おやこの広場あさがお」の『アート体験』には歳月をかけて培われた文化のようなものがある。スタッフや保護者の方々が、子どもだけではなく、学生にとっても「安心して試すことができる」環境を自然につくりだしている。保護者の子どもへの関わりが学生の学びになる。ありがたいことである。

## Ⅶ 結び

『アート体験』をきっかけに、学生が「おやこの広場あさがお」の行事に参加し、親子が大学を訪れることが自然に始まった。今では、親子が学内を歩き、学生食堂で昼食を楽しむ光景も日常となっている。

NPO・企業・行政との連携により始まった本実践は、担当者の交代や市町村合併など大きな変化を経ながらも、立場を異にする関係者による協働の歩みを重ね、今日の基盤を築いてきた。現在は「おやこの広場あさがお」と本学による連携として継続しているが、発足当初の思いを原点として持ち続けたい。「連携」を目的として始まったのではなく、それぞれの立場からの熱意と挑戦、創造する意志が接点を生み、連携をかたちづくってきたのである。その原点にこそ、本実践の不変の価値がある。

## 注

- 1) 2002年4月開設。石川県白山市に拠点を置く子育て支援団体で、親子が安心して集える居場所を提供し、単なる子育て広場ではなく、地域全体で子育てを支えることを目的としている。特に「親子ショートステイ」や「ホームスタート」など、全国的にも注目される取り組みを展開している。
- 2) 1993年に松任市（現白山市）竹松町にオープンしたキリンピアパーク北陸の庭園ゾーンには、地域の彫刻家の作品の他に、1994年から開催していた「庭園彫刻コンクール」（2003年より「キリンアートコンクール」に名称変更）の優秀作品が毎年追加設置され、ガーデンミュージアムとして来場者に親しまれた。「キリンアートコンクール」では造形作品のマケット（模型）を募集し、市内で巡回展示。2003年より巡回展示の際に『ちびっこアート体験』で生まれた子どもたちの作品も併せて展示した。

## 引用文献・参考文献

- 1) 森田ゆかり（2007）：企業・大学・行政・NPOによる協働事業「みんなおいでよ！ちびっこアート体験」4年間の記録概要 子ども・保護者との美術活動を通して育ててきたもの。金城紀要第31号。金城大学短期大学部
- 2) 森田ゆかり・大場新之助（2022）：0・1・2ART。金城紀要第47号。金城大学短期大学部。
- 3) 森田ゆかり（2023）：0・1・2ART その2 - 「子どもを見る力」を育む授業・研修のあり方を探る -。金城紀要第48号。金城大学短期大学部

本稿で掲載している写真は、子どもの保護者および学生から使用の許可を得ているものです。

# 観光資源としての手取キャニオンロード自転車道とその可能性の再発見

矢澤 建明\*

## Rediscovering the Potential of the Tedori Canyon Cycling Road as a Tourism Resource

YAZAWA Tateaki

### 要旨

白山市の手取キャニオンロード自転車道は、白山手取川ジオパークの貴重な資源でありながら、観光地としての認知度が低い。本研究は、本学のゼミナール活動を通じた2年間の地域連携に基づき、その観光資源としての潜在的可能性を検証した。活動の結果、ハード面の課題（車止めポール）やソフト面の課題を見出し、e-BIKE ツアー企画やイベント協力で非サイクリスト層へのPRの有効性を実証した。最も重要な提言として、白山市の「自転車活用推進計画」未策定という政策的な課題を特定し、市議会議員への働きかけを行った。

## I Introduction

白山市の手取キャニオンロード自転車道<sup>1)</sup>は、白山手取川ジオパーク<sup>2)</sup>「川と峡谷のエリア」の景観を体感できる貴重な観光資源でありながら、その認知度は地元サイクリストに留まり、潜在的な観光資源としての価値が十分に生かされない現状にある<sup>3)</sup>。一方で、授業やゼミナール活動で毎年のように利用させてもらっている手取キャニオンロードをハード面・ソフト面において、より良いものにしていきたいと考えていた。

本稿は、大学コンソーシアム石川の「地域課題研究ゼミナール」<sup>4)</sup>における2年間の学生の活動に基づき、手取キャニオンロードの現状を整理し、観光資源としての可能性を最大化するための提言を教員側の視点から行うことを目的とする。

## II 研究方法

### 1) 2024年度の活動

前述の通り、大学コンソーシアム石川の「地域課題研究ゼミナール」<sup>4)</sup>に採択をいただいた。「地

---

\* 金城大学短期大学部ビジネス実務学科

域課題研究ゼミナール」とは、まず地域の方・団体から課題解決をしたいテーマをあげてもらって、それに応募するという形で審査の机上に登るしくみである。連携団体である e-CRUTTTO 様は、2024年4月に白山市鶴来駅前にオープンしたレンタサイクルショップであり、開業するにあたり、「若者目線・よそ者目線」の意見もほしいとして、テーマをあげられた。前述の通り、筆者は「アウトドア演習」という授業で手取キャニオンロードサイクリングをとりいれていたり、ゼミナールとしても手取キャニオンロード活性化について活動していたりと、方向性が完全にマッチしていたこともあり、これらのことが評価されたのか採択にいたった。

2024年度は、まずは学生に手取キャニオンロードを e-BIKE で体験してもらおうという観点で活動を行った。活動の一覧は「図表 1」のとおりである。

図表 1 2024年度活動一覧

	日付	活動内容	学生参加人数
1	4/20(土)	旧加賀一の宮駅手取キャニオンロード美化活動 (6/8、10/26)	7
2	6/8(土)	e-CRUTTTO ツアー1 (明神壁トレッキングを含む)	2
3	6/29(土)	サイクリングルート・周辺観光地の下見 (鳥越一向一揆歴史館など)	8
4	7/7(日)	e-CRUTTTO ツアー2	7
5	9/12(木)	白山市観光連盟サイクリングツアー参加の方にインタビュー	2
6	10/9(水)	サイクリングガイドとの会議	8
7	10/13(日)	ほくてつ電車まつり・サイクリングガイド体験	5
8	10/15(火)	サイクルトレイン体験・インバウンド調査	4
9	10/21(月)	手取キャニオンロード・e-bike 環境調査	7
10	10/23(水)	サイクリング協会会長の講話・打ち合わせ	8
11	10/26(土)	サイクリストへのアンケート調査 (手取キャニオンロード)	7
12	11/2(土)	GEORIDE HAKUSAN (雨天のため中止)	8
13	11/3(日)	GEORIDE HAKUSAN コース走行	1
14	11/21(木)	サイクリングガイドオンラインミーティングに参加	1
15	11/26(火)	石川県庁道路整備課訪問	4
16	12/11(水)	地元の方との会議	8
17	12/20(金)	金沢でのインバウンドニーズ調査	4
18	1/14(火)	白山市鳥越支所訪問	2
19	1/14(火)	白山ジオライド推進協議会会長訪問	2
20	2/6(木)	金城大学短期大学部ビジネス実務学科産学連携ゼミナール発表会	8
21	2/22(土)	大学コンソーシアム石川「地域課題研究ゼミナール支援事業」報告会	8

上記のとおり、数多くの活動を行ったが、活動していくうちに見えてきた課題もあった。特に、手取キャニオンロード内の「車止めポール」の問題が、活動していく中での発見であった。

## 2) 2025年度の活動

引き続き、「地域課題研究ゼミナール」に採択をいただき、2年目の活動を行った。2024年度のゼミナール学生は卒業したが、新年度の学生に引き継がれ、新しい視点での活動となった。2024年度は「車止めポール」問題にフォーカスすることになったが、2025年度は新たな視点として「手取キャニオンロード」知名度向上、及び行政へのはたきかけに注力することになった。2025年度引き継がれた当初は、道路上の車止めポールといったハード面を学生の力でどうにかするのは難しいという意見となり、それよりは、県外の方やサイクリスト以外へのPRを重視すべきという方向性になった。そのため、以下に示すような「山城サミット・鳥越センゴクフェスタ」への協力・PRや、県外の商工会議所青年部の方へのPRなど、普段サイクリングをしない方へのPRを重視した。活動の中で、見えてきた課題があり、行政への働きかけなども行った。

1年間の活動は「図表2」の通りである。

図表2 2025年度活動一覧

	日付	活動内容	学生参加人数
1	5/10(土)	旧加賀一の宮駅手取キャニオンロード美化活動1	9
2	5/18(日)	GEORIDE HAKUSAN エイドステーション協力・アンケート	11
3	5/21(水)	インバウンドサイクリングツアー取材・アンケート	11
4	6/14(土)	旧加賀一の宮駅手取キャニオンロード美化活動2・草刈	3
5	6/28(土)	手取キャニオンロード〜一里野までのルート視察・鳥越城視察	10
6	7/5(土)	e-BIKE 体験で獅子吼高原・一里野ゴンドラ比較	9
7	8/5(火)	山城サミット用に鳥越城跡へのサイクリング体験	2
8	9/15(月)	山城サミット白山大会・鳥越センゴクフェスタ (受付・PR・アンケート)	9
9	10/4(土)	日本商工会議所青年部北信越大会・ジオサイクリングツアーに協力(雨で中止) PR活動のみ実施	10
10	10/12(日)	ほくてつ電車まつり・PR・サイクリングガイド・アンケート	7
11	10/20(月)	昨年度提案サイクリングツアー案のトレース (後半雨でまわれず)	11
12	11/5(水)	ナショナルサイクルルート勉強会	10
13	11/9(日)	旧加賀一の宮駅手取キャニオンロード美化活動3(落ち葉掃き) まちのりBYUUN・サイクルトレイン体験(サイクルトレインは雨で中止)	2
14	11/12(水)	10/20にできなかった部分のサイクリングツアー案の確認	11
15	11/19(水)	石川県サイクリング協会理事長との意見交換	11
16	1/8(木)	白山市議との意見交換	2
17	2/6(金)	金城大学短期大学部ビジネス実務学科産学連携ゼミナール発表会	11
18	2/21(土)	大学コンソーシアム石川「地域課題研究ゼミナール支援事業」報告会	11

### Ⅲ 結果

#### 1) 2024年度の活動から

##### ・手取キャニオンロード周辺の独自調査、イベント参加

白山ろくや手取キャニオンロード、白山手取川ジオパークについて理解を深めるため独自で周辺の見どころ調査を行った。まずは、本学集中授業「アウトドア演習（手取キャニオンロードサイクリングが含まれる演習）」になるべく多くのメンバーが参加し、手取キャニオンロードのサイクリングを体験した。また、6/29に手取キャニオンロードのルート外である一里野や鳥越一向一揆の里、獅子吼高原を視察した。

さらに、手取キャニオンロードを含むはじめての本格的サイクリイベント「GEORIDE HAKUSAN」にエイド協力員として、さらには参加者として参加をする予定であったが、残念ながら悪天候で中止となってしまった（11/2）。選手として参加予定だった学生が実際のコースを自転車で走って検証も行った（11/3）。

##### ・e-CRUTTTO 様のツアー体験

独自調査と並行して、e-CRUTTTO 様のツアーを体験させていただいた。

① 6/8. 過去の先輩の活動から、鳥越城跡の眺望に興味があったが、2022年豪雨・2024能登半島地震の影響で立ち入りができない状況だった。その点をサイクリングガイドの提案で、同様の眺望が楽しめる明神壁トレッキングを含むツアーを我々向けに作っていただいた。このように自転車道沿い以外にも魅力的な観光資源が存在することがわかった（図表 3）。

② 7/7. 一般向けに提供されているスタンダードな「滝めぐりコース」に参加させていただいた。

たまたま、一般の方の参加がなく、我々だけだったことから金城学園の白山美術館もツアーコースに入れていただいた。白山ろくのことをよく知らない人はマップ情報を元に単に手取キャニオンロードを走るだけだが、サイクリングガイドのおかげで手取キャニオンロード以外のコースも案内していただいた。



図表 3 明神壁トレッキング（筆者撮影）

##### ・学生独自のサイクリングツアー案の提案

学生目線でのツアー案も考案した。手取キャニオンロード周辺は、当然白山手取川ジオパークの「山と峡谷」のエリアであることから見どころ満載であるが、若者には「絶景」が心に響くはずだと考え、絶景にこだわったツアー案としてみた（2025年度へ引き継ぎ）。

### ・手取キャニオンロード利用者へのインタビュー調査

前述の「GEORIDE HAKUSAN」の大会参加者に「手取キャニオンロード」についてのアンケート調査をする予定であったが、悪天候で中止となり、想定していたアンケート数が激減してしまった。しかし、10/26をはじめとしていくつかの場面でサイクリストに声をかけ、35名の方からお話を聞くことができた(図表4)。手取キャニオンロードは県内からサイクリングに来る方が多いこと、車止めポールについては半数以上(54%)の方が不便と感じていた(図表5)。



図表4 手取キャニオンロードアンケート調査

### ・北陸鉄道利用調査、インバウンドニーズ調査

手取キャニオンロードへのアクセスとして金沢から鶴来を結ぶ北陸鉄道関連についても調査をした。まずは「ほくてつ鉄道まつり」に協力し、アンケート調査と鶴来駅近辺のミニサイクリングツアーガイドの補助を行った。ミニサイクリングツアーの集客はあまりよくなく、鉄道ファンとサイクリングは必ずしも結びつかないと考えられたが、北陸鉄道は自転車をそのまま電車に乗せて運べる「サイクルトレイン」というサービスを行っていることから可能性はあると考えた。金沢側終点である野町駅近くには観光客が数多く訪れる「にし茶屋街」があり、現地でのインバウンド調査として外国人の方にアンケート調査を行った。白山の知名度は皆無だったが、手取キャニオンロードの写真を見た意見は全員好意的だった。



図表5 サイクリストへのアンケート

### ・車止めポール問題について意見交換

さまざまな活動から、手取キャニオンロードのハード面の課題である「車止めポール」と「止マレ」表示が連続する問題がわかった(図表6)。県道である「手取キャニオンロード」が優先されないのは明らかにおかしい。この点について、石川県サイクリング協会理事長、石川県道路整備課、地元在住の方、白山市鳥越支所所長、石川県警といった方々と意見交換を行った。後述のとおり、すぐにも問題が解決するわけではないが、問題提起にはなると考えている。



図表6 手取キャニオンロード・車止めポール

## 2) 2025年度の活動から

### ・手取キャニオンロード周辺の独自調査・昨年度提案ツアーのトレース

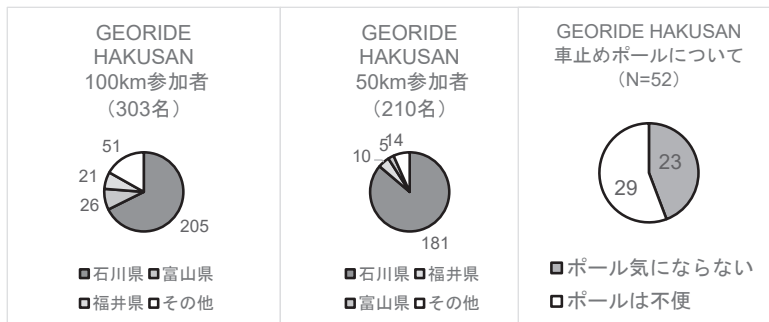
2024年度の活動で提案された「学生目線で考えたサイクリングツアー」については、提案時期が冬だったため、2024年度のゼミでは実施していない。そこで、2025年度はぜひとも実施しようとしたが、天候不順などで、完全にトレースする日程がとれなかった。10/20に実施したサイクリングモニターツアーでも、天気予報に反して午後には雨が降り出し、後半の獅子吼高原に行くことは断念した。ただ、別日に加賀一の宮駅からパーク獅子吼へのサイクリングも実施しており、日を分けてではあったが、トレースはできたと考えている（図表7）。

<b>2024年度</b> <b>学生目線で考えたサイクリングツアー案</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 9:00 e-CRUTTTO</li> <li>・ 10:00 白山比咩神社</li> <li>・ 11:00 鳥越城（絶景）</li> <li>・ 12:00 一揆そばで昼食</li> <li>・ 13:00 御仏供杉</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 13:30 不老橋（絶景）</li> <li>・ 14:00 綿ヶ滝（絶景）</li> <li>・ 15:00 下野園地</li> <li>・ 16:00 獅子吼高原ゴンドラ（絶景） 島集落・軽食</li> <li>・ 17:00 e-CRUTTTO</li> </ul>
<b>2025年度 ツアー案実施</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 9:00 e-CRUTTTO</li> <li>・ 9:30 旧加賀一の宮</li> <li>・ 10:30 鳥越城（絶景）</li> <li>・ 11:10 一揆そばで昼食</li> <li>・ 12:00 御仏供杉</li> <li>・ 12:15 不老橋（絶景）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 12:30 綿ヶ滝（絶景）</li> <li>・ 13:30 下野園地</li> <li>・ 14:00 旧加賀一の宮</li> <li>・ +15分 獅子吼高原ゴンドラ（絶景） 島集落・軽食</li> <li>・ +30分 白山比咩神社</li> <li>・ +40分 e-CRUTTTO (17:00 到着可能)</li> </ul>

図表7 学生目線で考えたサイクリングツアー案および実地検証

### ・GEORIDE HAKUSAN への協力・アンケート調査

5/19に実施された GEORIDE HAKUSAN は、白山市で開催されたはじめての本格的サイクリングイベントである。エイドステーションの協力と、ゴール後のアンケート調査をゼミ学生が行った（若月ゼミ生にもエイド協力をお願いした）。参加者数としては、100km コースが303名、50km コースが210名と定員いっぱいであり、大盛況だった。参加者の地域の内訳は50km コースでは地元北陸三県からが多く、2024年度アンケートの手取キャニオンロードを訪れる人数比



図表8 GEORIDE HAKUSAN 参加者アンケート

と同様であったが、100km コースの参加者は、県外からの参加者も多かった。同時に、ゴール後にアンケートを取り、100km コース約300名のうち65名から話を聞くことができた。昨年度懸案となった「車止めポール」問題も尋ね、ポールについて回答してくれた52名中、29名が不便に感じており、2024年度路上アンケートとよく似た結果であった（図表 8）。

#### ・全国山城サミット白山大会・鳥越センゴクフェスタでの e-BIKE ツアー

9/15に行われた鳥越センゴクフェスタは、手取キャニオンロード近く鳥越城跡のふもとにある道の駅「一向一揆の里」に、全国の山城関係者が集うイベントである。会場では、県内外自治体自慢の山城紹介ブースが出展され、地元グルメや郷土芸能ステージなど盛りだくさんの内容であった。中でも、鳥越城跡へのバスツアー見学が目玉となっていたが、この鳥越城跡に e-CRUTTTO 様の e-BIKE で登るツアーを提案した。鳥越城跡への登りは急こう配で通常の自転車ではとても登れるものではないが、電動アシストのスポーツタイプである e-BIKE であれば、しかも道の駅から15分ほどのサイクリングなので、初心者でも気軽に楽しめると考えた。鳥越城跡は、2022年の豪雨・2024年の能登半島地震で、長く登城不可であったが、2025年6月末より道路が再開通し、ゼミのフィールドワークでも訪れている場所である。また8月には、2名のゼミ学生が e-BIKE とノーマル自転車でサイクリングでの下見も行った。鳥越センゴクフェスタ当日は、ゼミ学生で集客・受付・e-BIKE の使い方講習などを担当してもらったが、集客活動をする暇がないほどの盛況で、多くのお客さまにお断りをしなければならぬほどであった（図表 9）。チラシ作成・缶バッジ贈呈など、PR は大成功だった。



図表 9 鳥越センゴクフェスタの様子  
(筆者撮影)

#### ・日本商工会議所青年部北信越ブロック白山大会

10/4に行われた日本商工会議所青年部北信越ブロック大会では、エクスカッションとしてのジオサイクリングツアーに協力をする予定であった。ただし、ジオサイクリングツアーは雨のため中止となった。当日は大会の受付ボランティアも学生が行ったので、その際に手取キャニオンロード PR チラシと鳥越センゴクフェスタで贈呈した缶バッジを参加予定者にあげることができた。

#### ・ほくてつ電車まつりミニサイクリングツアー

「ほくてつ電車まつり」ミニサイクリングツアーに2025年度も協力した。2024年度は鉄道ファンにサイクリングをしたいという方が想像以上に少なく、集客に苦労したが、2025年度は PR ポード・缶バッジなどを用意したおかげか、参加者は倍増した。参加者アンケートを利用して手取キャニオンロードを PR することもできた。

### ・ナショナルサイクルルート勉強会・サイクリング協会理事長との意見交換

手取キャニオンロードがより周知されるために、国土交通省が定める「ナショナルサイクルルート」<sup>5)</sup>に手取キャニオンロードが制定されないかという問いかけから、簡単な勉強会を実施した。また、石川県サイクリング協会理事長と意見交換することができた(図表10)。ナショナルサイクルルート自体は、民間のわれわれが直接働きかけることができるものではなく、現在は石川県が「石川里海里山サイクリングルート」<sup>6)</sup>というものを設定し活動している。ルート内には手取キャニオンロードも含まれているが、県としては、能登エリアも含んだ石川県全域を考えており、現在は能登半島地震の影響で難しいという状況であることがわかった。ただ、その中で見えてきた課題として、「自転車活用推進計画」<sup>7)</sup>というものを白山市が制定していないという問題がある。2016年に国会で「自転車活用推進法」<sup>8)</sup>が満場一致で採択された。自転車活用推進法の詳細は、参考文献を参照していただきたいが、環境負荷の低減・健康増進などを考慮し、自転車利用を増進しましょうという法律である。国としては、「自転車交通の役割拡大による良好な都市環境の形成」、「サイクルスポーツの振興等による活力ある健康長寿社会の実現」、「サイクルツーリズムの推進による観光立国の実現」、「自転車事故のない安全で安心な社会の実現」の4つの目標を掲げ、実施に取り組んでいる。この法律を根拠に、地方自治体にも地域の実情に応じた「地方版自転車活用推進計画」を策定するよう勧められており、石川県では「石川県」「金沢市」「小松市」が策定している。ところが、「手取キャニオンロード」がある白山市は現在手つかずの状態である。



図表10 サイクリング協会理事長との意見交換

### 3) 手取キャニオンロードの課題点

以上、2年間の活動から、学生が発見した「手取キャニオンロード」の課題は以下のとおりである。

- ① 手取キャニオンというほど峡谷の近くを走らない
- ② 自転車道上の車止めポール、止まれ標識の多さ、外国人向けの表記不足
- ③ 地元のサイクリストばかり(逆に地元の人しか知らない穴場なのでは? 地元には強い人気)
- ④ 白山市が「自転車活用推進計画」を策定していない。

## IV 考察

これまでに述べてきた、活動の結果から、考察をする。

- ① 「キャニオンというほど峡谷の近くを走らない」という点については、峡谷を感じられる部分は金名橋・対山橋くらいで、川の近くはほとんど走らない。もちろん、両側を山に囲まれたサイク

リングロードもすばらしいが、キャニオンというからには、もっと峡谷近くを通ってほしい。解決策としては、ガイドさんに提案してもらったような自転車道にしばらくはツアールートを設定することを考えた。手取キャニオンロード周辺に精通しているサイクリングガイドは、穴場となっている絶景を案内することができる。ゼミの活動でも明神壁というほとんど知られていない場所のトレッキングを体験させていただき、絶景を堪能することができた。

- ② 自転車道上の車止めポールおよび「止マレ」表示が連発する問題について、不便だけでなく、明らかに「車優先」という点がおかしい。この点について、さまざまな方にお話をきくことができた。ただし、問題の解決には、手取キャニオンロード設置時の経緯を知っている方がすでにほとんどいないこと、現在あるものを変えるということについて地元、行政、警察といった方々がおたがいの顔色をうかがって動きがにぶいこと、など非常に難しいものがあった。この点については、声をあげ続けていくしかできない。ポールの不便さについては、安全のためにもサイクリングガイドツアーの推進が、現状の妥協点と考える。また、後述する「自転車活用推進計画」が、もし白山市で策定されれば、車止めポール問題は解決をするかもしれない。
- ③ 地元のサイクリストばかりという点については、魅力の発信をしていくほかない。2024年度アンケート調査を行った日には、2時間程度で30名を超えるサイクリストと遭遇することができた。それほど地元で愛されているわけだから、県外や国外の方に知られば必ず話題となる。その意味では、2025年度に初開催となった「GEORIDE HAKUSAN」は追い風となる。こういった本格的なサイクリングの大会は全国各地で行われており、多くの県外の方に「手取キャニオンロード」「白山市」が知られるきっかけとなった。さらに、「手取キャニオンロード」は初心者にもやさしいコースであることから、鳥越センゴクフェスタやほくてつ電車まつりといった、サイクリストではない方々へのPRも重要である。鳥越センゴクフェスタのe-BIKE ツアー参加者22名のうち約半数が「手取キャニオンロード」を知らない方々だった。また、参加者のうち、普段からサイクリングをしている方は1名しかいなかった点を考えれば、今までにない層にPRできたといえる。また、学生目線でのツアー案も考案した。手取キャニオンロード周辺は、当然白山手取川ジオパークの「山と峡谷」のエリアであることから見どころが満載であるが、若者には「絶景」が心に響くはずだと考え、絶景にこだわったツアー案とし、2025年度に実地検証を試みた。約40kmで意外と長時間であったが、体力のある方なら問題なくまわることがわかった。
- ④ 白山市が「自転車活用推進計画」を策定していない点については、残念であるとはしかいいようがない。白山市には「手取キャニオンロード」という「核となる自転車道」と、e-CRUTTTOや白山市観光連盟でのレンタサイクルという「民間の拠点」がある。それにもかかわらず、白山市が「自転車活用推進計画」を策定していないのはおかしいという結論に至った。そこで白山市議会議員でもある池元勝議員を訪問し、白山市でそのような可能性があるのか、あるならば是非とも策定するように働きかけをしてもらおうと意見交換を行った。池元議員は、自身もサイクリングをされる方で、白山ジオライド推進協議会メンバーでもある。学生からの要望に関しては、十分に理解をしていただき、市議会に提案するとおっしゃっていただいた。

## V 結論

手取キャニオンロードは、現在でも県内サイクリストに愛されており、ユネスコ世界ジオパークという世界的にも通用する資源を背景に、県外・海外からのサイクリストを呼び込むポテンシャルを十分に持つ。本研究（ゼミナール活動）は、地域課題の発見に留まらず、行政への提言（自転車活用推進計画の策定）という具体的なアクションにつながった点で、その意義は大きい。

今後、白山市政版の「自転車活用推進計画」が、サイクルツーリズムと白山手取川ジオパークでの体験を核として策定されれば、手取キャニオンロードのハード・ソフト両面での課題解決に政策的に推進され、観光資源としての可能性がさらに拡大されるだろう。

## VI 謝辞

本稿は、2024年度・2025年度のゼミナール学生の活動を元にしたものです。学生の皆さん、山下くん、井上くん、中谷さん、白崎さん、長谷さん、山崎さん、中川くん、竹林くん、坂田さん、坂川さん、西谷さん、塩川さん、松原さん、義原さん、吉田さん、船本さん、石垣さん、亀田くん、小坂くん、ありがとうございました。e-CRUTTTOの越村様には多大なる協力をいただきました。他にも、石川県サイクリング協会の岡本様、白山商工会議所青年部の古瀬様、鳥越資料館館長の小阪様、白山市議会議員の池元様、白山ジオライド推進協議会の皆様、大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。皆様ありがとうございました。

## 引用文献・参考文献

- 1) いしかわ大規模自転車道（一般県道 手取川自転車道線）  
<http://www.pref.ishikawa.jp/douken/jitensya/map/5canyon-map.pdf>
- 2) 白山手取川ジオパーク <https://hakusan-geo.jp/>
- 3) 中日新聞 2022年11月25日「ジオパークで自転車観光を白山のライド推進協コース提案」
- 4) 大学コンソーシアム石川「地域課題研究ゼミナール支援事業」  
<https://www.ucon-i.jp/newsite/jigyuu/chiikikadai/index.html>
- 5) 国土交通省ナショナルサイクルルートホームページ  
[https://www.mlit.go.jp/road/bicycleuse/good-cycle-japan/national\\_cycle\\_route/](https://www.mlit.go.jp/road/bicycleuse/good-cycle-japan/national_cycle_route/)
- 6) いしかわ里山里海サイクリングルート  
<http://www.pref.ishikawa.jp/michi/cycling/cycling-web/cycling.html>
- 7) 自転車活用推進計画  
[https://www.mlit.go.jp/road/bicycleuse/good-cycle-japan/jitensha\\_katsuyo/](https://www.mlit.go.jp/road/bicycleuse/good-cycle-japan/jitensha_katsuyo/)
- 8) 自転車活用推進法  
<https://www.mlit.go.jp/road/bicycleuse/pdf/about.pdf>

## 地域を支える若者グループの一考察

### — 鳥越ワカモノの会を事例に —

若 月 博 延\*

## A Study of Youth Groups Supporting Local Communities: The Case of the Torigoe Wakamono no Kai

WAKATSUKI Hironobu

### 要旨

本研究は、白山市を事例として、地域活動を支える若者グループの役割と可能性を検討した。地域イベントが量的に維持される一方で担い手の疲弊が進む現状を踏まえ、地域への帰属意識と活動の積極性を軸とした分析枠組みを提示した。とくに「鳥越ワカモノの会」を中心に、インタビュー調査と参与観察を通じて、地元若者グループが自律性と持続性を両立し得る条件を明らかにした。さらに、大学生集団や青年団、地域おこし協力隊等との関係性に着目し、地域活動の持続には主体間の関係設計が重要であることを示した。

### I はじめに

白山市は2006年に1市2町5村が合併して誕生した自治体であり、旧市町村単位の歴史的・文化的背景を色濃く残している。合併後も、各地域では従来からの祭りや行事、住民主体によるイベントが継続的に実施されており、地域アイデンティティの維持や住民間の結束に一定の役割を果たしてきた。とくに山ろく地域においては、小規模ながらも多様な行事やイベントが数多く存在し、地域文化の継承という点で重要な意味を持っている。

一方で、これらの活動を支える担い手の確保は年々困難になっている。イベント運営に関わる人材は限られており、同一人物が複数の行事において異なる役職や立場で関与するケースも少なくない。その結果、週末ごと、あるいは毎週のように複数のイベントが重なる状況が生じている。加えて、地域住民の高齢化が進行する中で、体力的・時間的な負担は特定の担い手に集中し、活動の継続そのものが困難になりつつある。

このように、白山市における地域イベントは量的には維持されているものの、その運営基盤は脆弱化しており、担い手の疲弊が顕在化している。本研究は、こうした現状を踏まえ、地域活動を支える若者グループの役割と可能性について検討することを目的とする。

---

\* 金城大学短期大学部ビジネス実務学科

## II 問題

2012年、当時、白山市観光連盟の設立準備資料の中に、白山市内で行われている祭りやイベントを網羅的に調査した資料があった。その資料は紛失してしまい今となっては確かなことが確認できないが、記憶では1年間に150を超える祭りやイベントが実施されていることが書かれていた。1年を52週として計算すれば、年間を通じて毎週3件以上の祭りやイベントが開催されている計算となり、これは地方自治体としては極めて高い水準である。これらの行事は、地域文化の継承や住民の交流促進、さらには観光振興の観点から重要な役割を果たしてきた一方で、当時からその運営を支える担い手不足が喫緊の課題として指摘されていた。それから10年以上の歳月を経て、状況はさらに切迫してきていると想像に難くない。

先行研究において、祭りとイベントの違いについて、祭りは地域社会の内部から生成される儀礼的实践として理解されてきたのに対し、イベントは特定の目的を達成するために計画的に実施される一時的行為として整理されている(ターナー、2020)。また、とある文化人類学者は、端的に祭りには「神」が存在し、イベントには「神」が存在しないと表現している。すなわち、祭りは宗教的・象徴的意味を内包し、地域社会の精神的基盤を支える行為であるのに対し、イベントは機能的・目的合理的な性格を有するものとされてきた。

しかしながら近年では、祭りとイベントの境界は曖昧化している。伝統的な祭りが観光振興や地域活性化を目的としたイベントとして再構成される一方、当初はイベントとして始まった行事が地域慣行として定着する事例も少なくない。こうした混在状況の下では、祭りが本来有してきた「やめることのできない行為」としての性格と、イベントに求められる成果志向や運営効率とが重なり合い、限られた担い手に過度な負担が集中する構造が生じている。

祭りおよびイベントはいずれも、地域住民を元気づけ、地域の活性化や交流人口・関係人口の拡大に寄与する側面を有している。そのため、これらを単純に縮小・整理することは容易ではない。その課題を解決するために、近年では大学や外部組織と地域が連携し、多くの若者が祭りやイベントの担い手として地域に関与する動きが広がっている。能登地域では、震災以前から高齢化・過疎化の進行により祭りの規模縮小や中止が相次いでいたが、2018年以降、「能登・祭りの環」インターンシップや奥能登チャレンジインターンシップといった取り組みが展開され、石川県の大学生たちが地域行事を支える仕組みが形成されてきた。2024年の震災以降は、復興サポーターとして学生の参加がさらに拡大している。

一方で、地域には外部からの支援者だけでなく、地域内で継続的に活動する若者も存在する。具体的には、「地元青年会議所」や「地元青年団」といった組織化された集団に加え、「地域おこし協力隊」のように外部から来て地域に定着しつつ活動する若者、さらには特定の組織に属さず自発的に地域に関与する「地元グループ」といった多様な形態が確認される。しかし、これらの若者集団が地域社会の中でどのような役割を担い、どのように持続的に活動していくのかについては、十分に整理・検討されているとは言い難い。

今後、祭りやイベントを単に維持するか否かという議論にとどまらず、それらを支える若者グループの在り方や関係性をいかに構築していくかは、地域社会の将来を左右する重要な課題である。本研究は、この問題意識のもと、地域を支える若者グループの役割と可能性を明らかにすることを目的とする。

### Ⅲ 方法

#### 1) インタビュー調査

本研究では、「地元グループ」として「鳥越ワカモノの会」(以下、ワカモノの会)の代表にインタビューを行った。白山市内でも山ろく地域で活動する所属組織を持たないグループがどのような経緯で集まり、活動を開始し、現状どのような活動を行っているか、今後の展望などの聞き取り調査を行った。

なお、本研究ではインタビュー調査に際し、調査目的や成果の公表方法を事前に説明し、自由意思による同意を得た。氏名等の個人情報は公開せずデータは匿名化の上、研究目的に限定して適切に管理した。

#### 2) 参与観察

2016年より、ゼミナール活動として、ワカモノの会に協力して、「鳥越一向一揆まつり」(以下、一向一揆まつり)に参加している。2019年以降は、まつりの中心団体である「鳥越一向一揆まつり協力隊」の委員として参画し、参与観察を続けてきた。

### Ⅳ 結果

#### 1) 鳥越ワカモノの会

2015年、石川県白山市旧鳥越村の出身者を中心として、「ワカモノの会」が設立された。本団体は、地域人口の減少や高齢化が進む旧鳥越村において、若者の立場から地域活性化に寄与することを目的として結成されたものである。設立当初は、10~20代の地元出身者が参加し、現在も T 氏が初代代表を務めている。

設立から10年以上が経過し、構成員の平均年齢は上昇しているものの、メンバーの地域に対する愛着や貢献意識は依然として強い。近年では、地元学校への訪問を通じた地域 PR 活動や、団体活動の意義を伝える取り組みを行い、次世代を担う若者の参加促進にも努めている。

活動初期においては、地域で開催される各種イベントに参加団体の一つとして関与し、模擬店の出店やキャンドル装飾の企画・実施などを通じて存在感を示してきた。現在では、団体メンバーが「大日川清流フェスティバル実行委員会」の委員長や運営、「一向一揆まつり実行委員会」の主要メンバーを務めるなど、地域イベントの中核的役割を担う存在へと発展している。このことから、ワカモノの会は、参加型地域活動を基盤に、地域運営へと関与の段階を深化させた若者組織の一事例であると位置づけられる。

## 2) ワカモノの会の誕生

### 2-1) ワカモノの会設立前の状況

鳥越ワカモノの会が設立される以前、旧鳥越村においては、地域の衰退に対する危機感から「若者に地域で活躍してほしい」という声が地元住民の間で挙がっていた。こうした要請を背景に、町内の若者に対して参加を呼びかける動きが生じ、数回にわたりワークショップ等の場が設けられた。これらの取り組みを通じて、地域活動への関心を共有する若者同士の関係が形成され、その延長線上でワカモノの会が発足するに至った。

設立当初の組織の性格は、かつて鳥越地域に存在していた青年団に近いものであった。鳥越では過去に青年団が活動していたが、構成員の減少等を理由にすでに解散しており、ワカモノの会はその空白を埋める形で誕生したともいえる。初期メンバーは、代表である T 氏の同級生を中心とした年齢の近い集団であり、多くは保育園や小学校時代からの友人関係にあった。

### 2-2) 設立後の変化

設立当初、ワカモノの会のメンバーは20歳前後であったが、設立から約10年が経過し、結婚や出産といったライフステージの変化に伴い、会への関与の度合いには個人差が生じている。地域に対する思い自体は依然として強いものの、設立当初に見られた「地域を何とかしなければならない」という切迫感は次第に和らぎ、現在では「楽しみながら関わる」という意識が共有されるようになっている。

また、メンバーの中には、ワカモノの会の存在を契機として鳥越地域に定住し、住宅を構えながら地域活動を継続している者も確認された。

## 3) ワカモノの会の活動

### 3-1) イベント活動

現在、ワカモノの会は主に4つの地域イベントに関与している。

「一向一揆まつり」は、もともと旧村単位で運営されてきた行事であり、上部組織として町会長協議会が位置づけられ、事務局機能は現在のサービスセンターが担っている。運営は複数の部会によって構成されているが、そのうち3つの部会において、ワカモノの会のメンバーが部会長を務めており、実質的な準備および当日の運営を担っている。

「大日川清流フェスティバル」については、企画運営および事務局機能の双方をワカモノの会が担っており、同会が主体となって実施されている。

また、「鳥越文化祭」および「新そば祭り」については、模擬店の出店という形で参加している。

### 3-2) メンバーのリクルート活動

新規メンバーの勧誘は、地元の飲食店等で若者を見かけた際に声をかける、あるいは既存メンバーの知人や旧知の若者に働きかけるといった、非公式かつ緩やかな方法で行われている。積極的な勧誘活動は行っておらず、現在、実際に活動に参加しているメンバーは約15名程度である。過去に参加していたメンバーも含めれば人数はさらに多いが、正式な引退制度は設けられておらず、その時点で活動可能な者が中心となって関与している。

#### 4) ワカモノの会のリーダーシップ

##### 4-1) イベント参加の意思決定

どのイベントに関与するかについては、代表を中心とした比較的トップダウン型の意思決定がなされている。一方で、具体的な関与の方法や役割分担については、メンバー間で意見を共有しながら調整が行われており、運営レベルでは一定の合意形成プロセスが確保されている。

##### 4-2) 今後のグループの活動

会の設立から約10年が経過する中で、メンバーは鳥越地域の衰退を完全に食い止めることは難しいとしつつも、一定程度その進行を緩和できているとの認識を示している。今後については、これまでの思いや活動経験が後輩世代に引き継がれていくことを重視している。

規約上は30歳で引退と定められているが、現行メンバーからは引き続き活動への参加を求める声もあり、実際には柔軟に運用されている。現在、最年少のメンバーは19～20歳であり、世代的にも当面の活動継続が可能な状況にある。

#### 5) 「ワカモノの会」と若月ゼミの関係

若月ゼミと鳥越地域との関係は、2014年に端を発する。2014年当時、白山市役所鳥越支庁の職員が若月ゼミを訪れ、学生との協働による地域活性化の可能性について意見交換が行われた。提案内容は、若者人口の減少および地域の高齢化により支庁周辺の賑わいが失われつつある現状を踏まえ、花植えなどの軽作業を通じて学生と地域が関わる事業を検討したいというものであった。この時点では、具体的な事業化には至らず、関係は情報交換の段階にとどまっていた。

翌2015年には、若月ゼミの学生が一般来訪者として初めて一向一揆まつりを訪れているが、この段階においても、ゼミとしての組織的関与は見られなかった。両者の関係性が大きく変化したのは2016年である。2016年に、ワカモノの会のメンバー2名が若月ゼミに所属したことを契機として、ゼミと地域との関係は新たな段階へと移行した。

当該学生は、ワカモノの会の一員として一向一揆まつりの運営に深く関与しており、当時、松任地区を中心に白山市内の複数のイベントに参画していた若月ゼミに対し、一向一揆まつりへの参加を要請した。これを受け、若月ゼミは同祭りへの関与を開始することとなった。当時、一向一揆まつりには金沢工業大学学友会をはじめ、金沢市内の複数大学が協力しており、祭りの主要企画の一つである「万灯華」においては、約1万本のろうそくを会場内に設置する作業が行われていた。この作業は人員を要するものであり、多くの学生が動員されていた。

その中で、若月ゼミはワカモノの会と協働し、ろうそくオブジェの設置および管理を担当した。正式な役割分担が文書化されていたわけではないが、若月ゼミの学生は、単発的に参加する他大学の学生とは異なり、準備段階から継続的に関与していた点に特徴がある。

以降、若月ゼミは一向一揆まつりに対し、原則として毎年関与を継続してきた。新型コロナウイルス感染症の影響により、活動内容や実施形態に変更が生じた期間もあったが、ゼミは「一向一揆まつり応援隊」として、主に子ども向け体験ブースの出店を担当してきた。この約10年間の継続的関与の中で、まつりの運営主体は次第に鳥越ワカモノの会のメンバーが中心となる体制へと移行していった。

さらに、若月ゼミは一向一揆まつりにとどまらず、同じくワカモノの会が主導する地域イベントである「大日川清流フェスティバル」など、鳥越地域における他の行事にも参加しており、ゼミと地域との関係は複数のイベントを通じて重層的に形成されていることが確認された。



図1 2016年一向一揆まつり



図2 2025年一向一揆まつり

## V 考察

### 1) 分析枠組みの妥当性

本研究で提示した図3は、地域に関与するグループを「地域への帰属意識」と「活動の積極性」という二軸によって類型化したものである。この二軸は、先行研究においてしばしば個別に扱われてきた「心理的帰属」と「行為主体性」を統合的に捉える点に特徴がある。

地域参加研究において、活動量の多寡と地域への内面的コミットメントは必ずしも一致しないことが指摘されており（パットナム、2006）、本枠組みはそうした理論的知見を視覚的に整理するための分析装置として一定の妥当性を有すると考えられる。

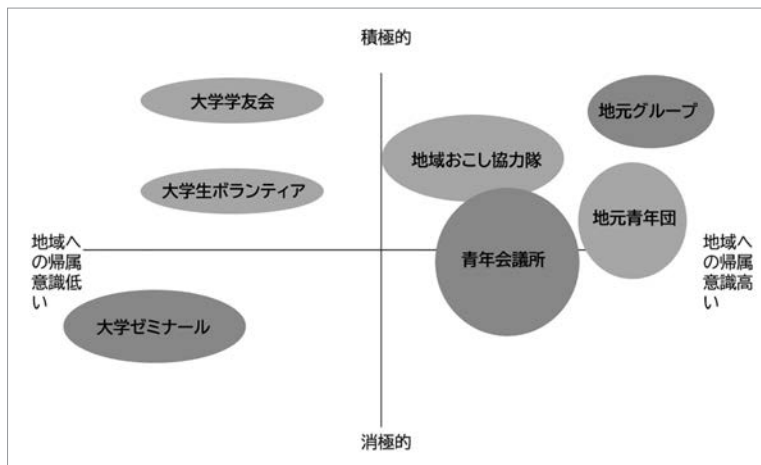


図3 地域に関与するグループ類型

## 2) 地元グループの理想形

### 2-1) 地元グループの理想と現実

図3において右上象限に位置づけられた「地元グループ」は、地域への高い帰属意識と自発的な行動主体性を併せ持つ存在として、本研究の分析枠組みにおいて最も理想的な地域参加主体として評価しうる。

地元グループは、行政組織や制度化された団体とは異なり、外部から課される明確な役割規定や評価基準に拘束されにくい。そのため、地域課題に対して柔軟かつ即応的に関与することが可能であり、活動内容や関与の度合いを自律的に選択できる点において、高度な自由度を有している。このような性格は、地域社会における内発的発展の担い手として重要な条件を満たしていると考えられる。

一方で、一般的には、この自由度の高さは、同時に構造的な脆弱性を内包している。すなわち、制度的裏付けや公式な役割期待を欠くがゆえに、地域社会から「継続的に頼ることのできる主体」として認識されにくい可能性がある点である。活動の継続は構成員個人の意欲や時間的余裕に強く依存しており、担い手のライフステージの変化や人的流動性の影響を受けやすい。

このことは、地元グループが短期的には高い機動力と創発性を発揮しうる一方で、長期的には地域社会における役割の固定化や責任の集積が困難であるという、二重の性格を有していることを示唆している。

したがって、地元グループを地域の担い手として位置づける際には、その自律性を損なわない形で、他の主体（行政、地域おこし協力隊、大学等）との関係性を構築し、活動の継続性を間接的に支える仕組みが不可欠である。

### 2-2) ワカモノの会の自律性

ワカモノの会について検討すると、これまでの議論を踏まえると、地元グループが有する理想性と潜在的脆弱性の双方を内包しつつも、後者を一定程度克服している事例として位置づけることができる。同会は2015年の発足以降、10年以上にわたり継続的に活動しており、現在では地域における主要な祭りやイベントの主たる運営主体の一つとして認識されている。この点は、地元グループが組織的縛りを受けないながらも「地縁」を裏付けに地域社会から「頼ることのできる主体」として信認を獲得しうる可能性を示している。

ワカモノの会の特徴としてまず挙げられるのは、活動が義務や役割遂行としてではなく、「楽しみながら行う実践」として共有されている点である。構成員は鳥越地域に居住する若者に限らず、就業や結婚を契機として一時的に地域外に居住する者も含まれているが、その多くが祭りやイベントの時期には地域に戻り、運営に深く関与している。このことは、地元グループにおける帰属意識が必ずしも地理的居住に限定されない、可動かつ関係的な性格を有していることを示唆している。

さらに、ワカモノの会は、従来慣行に安住することなく、新たな提案を積極的に行ってきた点に特徴がある。具体的には、ICTを活用した情報発信や運営手法の改善など、外部的知識や技術を柔軟に取り入れながら、従来の祭りやイベントの在り方を更新している。このような実践は、地元グループがしばしば指摘される「内向き性」や「保守性」に陥ることなく、地域活動に創発性をもたらしていると評価できる。

以上の点から、ワカモノの会は、誰にも拘束されない自律的な活動形態を維持しながら、結果として地域の主要な担い手として機能している稀有な事例であると評価しうる。同会の実践は、地元グループが内発的発展の担い手として持つ潜在力を具体的に示すと同時に、その持続性を確保するためには、活動を「義務化」せず、「楽しさ」や「自発性」を中核に据えることが重要であることを示唆している。

### 3) 地域内部集団（青年団、青年会議所）の内発性

一方、図3の右下に位置づけられた地元青年団および青年会議所は、地域への帰属意識が高いにもかかわらず、活動の積極性が必ずしも高いメンバーばかりではない集団として評価した。

これらの集団は、地域社会の歴史的文脈や人的ネットワークに深く埋め込まれている一方で、役割の固定化、担い手不足、構成員の生活環境の変化といった要因により、組織としての活動の持続性や革新性に制約を受けやすい。

とくに青年会議所は、一定の資源動員力を有しながらも、活動が任期制や個人のキャリア段階に強く依存するため、長期的な地域変革主体としては不安定な性格を有する点が示唆される。

### 4) 大学関連組織の位置づけ

図3の左側に配置された大学学友会および大学生ボランティアは、活動の積極性は高い一方で、地域への帰属意識が相対的に低い集団として位置づけられている。

これらの集団の活動は、教育課程、学内制度、短期的プロジェクトと強く結びついており、参加動機も学修成果や経験獲得といった個人的合理性に依拠する傾向が強い。その結果、地域社会への関与は一定の成果をもたらすものの、活動終了後の関係継続や地域内部への定着には限界が生じやすい。

この特徴は、先行研究において指摘されてきた「外部動員型参加」あるいは「一時的参加」の概念と整合的であり、大学生の地域参加が持つ構造的制約を示唆している。

### 5) 地域おこし協力隊の媒介的機能

地域おこし協力隊が右上象限に配置されている点は、本研究における重要な知見である。

地域おこし協力隊は、制度的には外部人材でありながら、一定期間地域に居住し、行政的支援を背景に活動を行うことで、地域への帰属意識と行動主体性の双方を獲得しやすい立場にある。

この点において同集団は、地域内部集団と外部参加者を接続する媒介的主体、すなわちブリッジング型ソーシャル・キャピタルの担い手、あるいは境界連結者として機能しうる存在であると解釈できる。しかし、現状では鳥越地区に地域おこし協力隊はいないので、新たに協力隊を募集するか、境界連結者としての役割を地域外の第3者か地域の既存の組織が代理して機能していくことが求められる。

### 6) 大学ゼミナールの制度的性格

図3において大学ゼミナールは、地域への帰属意識および活動の積極性の双方が相対的に低い位置に配置されている。しかし、この配置は、大学のゼミナールが地域活動に対して消極的であるこ

とを意味するものではなく、その制度的性格を反映した結果として理解されるべきである。

大学のゼミナールにおける地域連携活動は、教育課程の一環として設計されており、活動の目的は地域課題の解決そのものよりも、学生の学修成果や教育的効果に重きを置いている。そのため、活動期間は限定的であり、また地域社会への継続的関与や責任の引き受けは、意図的に回避される傾向にある。

このような性格は、大学が本来有する「教育研究機関としての中立性」および「学生の可動性」を担保するために不可欠な条件であり、大学のゼミナールが地域内部主体と同様の帰属意識を持たないことは、制度的には合理的であるといえる。さらに短期大学ではゼミナール活動が1年間という限定的な活動となるため、地域のことをようやく理解した時期に活動が終わるという制度上の問題も指摘できる。

したがって、大学ゼミナールは地域活性化の直接的担い手というよりも、地域社会に対して一時的・限定的な知的資源および人的資源を供給する補助的主体として位置づけることが適切である。

## 7) 集団間関係に着目した理論的含意

以上の分析から明らかなのは、地域活性化において重要なのは、単一集団の強化ではなく、異なる象限に位置する集団間の関係構築であるという点である。

すなわち、

- ・高い行動力を持ち帰属意識の高い「地元グループ」
- ・高い行動力を持つが帰属意識の弱い「大学生集団」
- ・高い帰属意識を持つが行動がまばらな「地元青年団」「青年会議所」
- ・両者を媒介しうる「地域おこし協力隊」

これらの相互接続のあり方こそが、地域活動の持続性と深化を左右する主要因であると考えられる。この知見は、地域政策を「主体別施策」から「関係設計型施策」へと転換する必要性を示唆するものである。

加えて、本研究の事例分析からは、これらの集団の中でも、とりわけ「楽しみ」を共有しながら活動している「地元グループ」が、地域を実質的に盛り上げる力を発揮している点が示唆される。「地元グループ」における活動は、義務的な役割遂行や外部からの要請によって駆動されるものではなく、構成員同士が活動そのものを楽しむことを前提として成立している。その結果、参加の継続性が確保されやすく、ライフステージの変化を経ても緩やかな関与が維持されている。

このような「楽しみの共有」に基づく活動は、地域貢献を目的化するのではなく、結果として地域に賑わいや活力をもたらす点に特徴がある。すなわち、楽しさを媒介とした自発的参加は、担い手に過度な負担を課すことなく、活動を日常生活の延長線上に位置づけることを可能にしている。この点において、楽しみを共有する「地元グループ」は、地域活動の持続性と内発性を同時に高める実践主体として評価しうる。

以上を踏まえると、地域活性化においては、単に若者を動員する施策や役割を割り当てる仕組みを整備するのではなく、活動に関わる主体が「楽しめる関係性」を構築できる環境をいかに設計するかが重要となる。この視点は、地域政策を「関係設計型施策」へと転換する必要性を、情緒的側面から補強するものといえる。

## VI おわりに

本研究は、白山市を対象に、地域活動を支える若者グループの位置づけと役割について検討してきたが、いくつかの限界を有している。

第一に、本分析は「地域への帰属意識」と「活動の積極性」という二軸による定性的な配置に基づくものであり、これらの概念を測定可能な指標として十分に数量化していない点が挙げられる。白山市内には旧市町村単位の歴史的背景や生活圏の違いが存在しており、帰属意識の在り方も地域ごとに異なる可能性があるが、本研究ではその差異を定量的に把握するには至っていない。

第二に、白山市内の各地域が置かれている制度的条件の違いを十分に考慮できていない点である。たとえば、観光連盟や行政支援の関与度、祭りやイベントの規模、地域おこし協力隊の配置状況などは地域ごとに異なるが、これらの制度差が若者グループの活動形態や持続性に与える影響については、今後の検討課題として残されている。

第三に、本研究は若者グループの活動を一時点で捉えた分析にとどまっており、参加主体の時間的変化、すなわち活動への参入、役割の変化、離脱といったプロセスを十分に捉えていない。白山市では、進学や就職、結婚を契機とした若者の流動性が高く、地域外居住と地域活動参加が併存する事例も見られることから、時間軸を取り入れた分析が不可欠である。

今後は、さらに白山市内の若者グループを対象としたアンケート調査や関係者へのインタビュー調査を通じて、帰属意識や活動動機に関するパラメータを明確化するとともに、時系列的な視点から若者グループの持続性を検証する必要がある。これにより、本研究で提示した分析枠組みの実証的妥当性を高めるとともに、白山市における地域活動の持続的展開に資する知見を蓄積していくことが今後の課題である。

## 引用文献・参考文献

- 1) ヴィクター・W・ターナー著、富倉光雄訳（2020）：『儀礼の過程』、筑摩書房
- 2) Donald Getz (2008) : 'Event tourism' , "Tourism Management" 29 (3) , Elsevier
- 3) ロバート・D・パットナム著、柴内康文訳（2006）：『孤独なボウリングー 米国コミュニティの崩壊と再生』、柏書房
- 4) 若月博延（1999）：「イベントと地域の関わりー市民レベルのイベントと行政レベルのイベントの比較を通してー」、『流通経済大学大学院社会学研究科論集』第6号
- 5) 若月博延（2025）：「白山市文化遺産の観光活用の可能性ー加賀一向一揆を例にー」、『金城紀要』第49号、金城大学短期大学部
- 6) 公益社団法人ふるさと回帰・移住交流推進機構（2024）：地域おこし協力隊活動領域マップ (<https://www.iju-join.jp/section/chaosmap/>) 2025.11.5取得
- 7) 黒田由彦（2013）：『ローカリティの社会学ーネットワーク・集団・組織と行政』、ハーベスト社

# 加賀一の宮アートプロジェクト

## — 芸術的制作と地域連携の実践報告 —

大場新之助\*

### Kaga Ichinomiya Art Project: A Report on Artistic Practice and Regional Collaboration

OHBA Shinnosuke

## I はじめに

本稿では、令和5年度に実施された「加賀一の宮アートプロジェクト」について報告する。本プロジェクトは、石川県白山市の加賀一の宮地区に焦点を当て、金城大学短期大学部美術学科の2年生が中心となって地域の魅力をアートによって可視化し、地域活性化に寄与することを目的としたものである。

## II プロジェクトの概要

### 1) 立ち上げの経緯と関係者の連携

本プロジェクトは、白山市鶴来地区の地域団体「鶴来まちづくり協議会」および観光ガイドボランティア「ようござった」の協力のもと、美術学科の教員・学生が協働して取り組んだ地域連携型アートプロジェクトである。

プロジェクト初期段階では、多田建築設計室代表で鶴来まちづくり協議会委員の多田哲則氏や、観光ボランティアガイド「加賀白山ようござった」会長の磯部雄三氏との話し合いの中で、地域の見どころや文化資源の洗い出しを行い、「旧加賀一の宮駅」を中心とした展示計画が形作られていった。特に神主町の歴史的価値や、公民館の有形文化財登録に向けた取り組みも並行して進行した。

### 2) 全体スケジュール

- 7月13日：磯部氏による事前研修（歴史レクチャー）
- 8月24日：現地研修（正式参拝、巫女舞の鑑賞、6班に分かれて加賀一宮地区の見所を巡回）
- 10月～：制作期間（各コース別での作品制作）
- 11月10日：旧加賀一の宮駅にて展示、お披露目会を開催

---

\* 金城大学短期大学部美術学科

### 3) チーム構成と役割分担

本学美術学科の7コースの学生は以下のような制作に取り組んだ。

- 油画・日本画コース、マンガ・キャラクターコース：駅舎の格天井パネル（34点）
- デザイン・ビジネスコース：見所マップ、プロジェクトロゴ
- ファッション・スタイリストコース：神主・巫女の衣装解説パネル
- インテリア・コーディネートコース：神主町公民館の建築解説パネル
- ゲーム・映像コース：観光紹介動画
- 染色・陶芸コース：陶芸作品（傘立て）

## Ⅲ 制作物の内容と表現手法

本章では、学生たちが制作した作品について、どのような地域情報をもとにどのように表現したのかを、コース別に紹介する。



図1 格天井アート 中央はプロジェクトロゴ



図2 左が見所マップ。右側机に持ち帰れるリーフレットタイプも設置。右上 QR コードから観光紹介動画が観られる。



図3 左が公民館の建築解説 右が神主・巫女の衣装解説

### 1) 格天井アート（油画・日本画コース、マンガ・キャラクターコース）

旧加賀一の宮駅の格天井には、地域の観光名所・歴史的資源をモチーフにしたアート作品(600mm角)が34点設置された。学生たちは「見どころ解説」や「磯部氏提供の資料」に基づいて名所を選び、それぞれの感性で絵画・イラストとして描写した。(図1)

### 2) 見所マップ、ロゴ（デザイン・ビジネスコース）

天井アートに対応する地図を制作し、訪れた人が地域を巡りながらアートを楽しめる工夫を加えた。また、プロジェクトを象徴するロゴマークも開発し、ポスターや広報ツールに展開した。(図2左)

### 3) 神主・巫女の衣装解説（ファッション・スタイリストコース）

白山比咩神社で実際に使用されている神主と巫女の衣装について、その形状や配色、文様の意味、役割などを調査し、文化的背景も含めて紹介する解説パネルを制作した。衣装に込められた宗教的・象徴的な意味を視覚的に伝えることで、観光客にとって神社文化への理解を深める一助となることを目指した展示である。(図3右)

### 4) 公民館の建築解説（インテリア・コーディネートコース）

地域に残る木造の歴史的建築「神主町公民館」について、建築様式や空間構成、使用素材などの特徴を建築家の多田氏から教わり、その価値を伝える解説パネルを制作した。地域の暮らしに根ざした建築物の魅力を来訪者に伝えることを目的とし、観光客だけでなく地域住民にとっても身近な建物の文化的価値を再認識する契機となる展示を構成した。(図3左)

### 5) 観光紹介動画（ゲーム・映像コース）

「ようござった」の観光ガイドをもとに、加賀一の宮地区の魅力を紹介する映像を制作した。撮影から編集まで学生が担当し、観光客の視点に立って構成された本映像は、白山市観光協会の公式ウェブサイトにも掲載され、広く活用されている。(図2右)

### 6) 陶芸作品（染色・陶芸コース）

観光客が訪れる休憩施設である旧加賀一の宮駅舎の玄関先を想定し、実用性と意匠性を兼ね備えた傘立てを陶芸で制作した。ただし、大型の作品となったため、焼成段階で亀裂が入り展示することはできなかった。

#### IV 教育的効果と学生の学び

本プロジェクトにおいては、学生が地域の文化や歴史に直接ふれ、フィールドワークを通じて感じ取った魅力を作品として表現する過程そのものが、貴重な学びの機会となった。

事前には「ようござった」の観光ガイド磯部氏によるレクチャーや、歴史資料の提供が行われ、学生たちはそれを基に各コースでテーマを設定した。特に8月24日の現地研修では、美術学科の常勤教員7名が引率し、6つのグループに分かれて神主町や白山比咩神社の見どころを巡った。



図4 学内での事前研修



図5 現地研修

その中で学生たちは、「どんな表現なら地域の人にも親しみやすいか」「観光客にとってわかりやすい伝え方は何か」といった問いを持ち、作品に反映させていった。例えば、神主・巫女の衣装を解説したパネルでは、専門知識をかみくだいて図解し、地域の文化をやさしく伝える工夫が見られた。



図6 お披露目会でのプレゼンテーション



図7 お披露目会での記念撮影

また、11月10日のお披露目会においても、学生たちがプレゼンを担当することで、自らの学びを他者に伝える経験を得た。発信力やチームワーク、社会とのつながりを実感する機会にもなったといえる。

## V 地域への波及効果

本プロジェクトは、地域の歴史的・文化的資源をアートとして再編集することで、加賀一の宮地区に新たな視点をもたらした。

展示の中心となった旧加賀一の宮駅は、すでに有形文化財に登録されているが、その後の活用は限定的であった。今回、駅舎の格天井にアートパネルを設置し、駅舎内部を美術展示空間として活用したことで、来訪者の関心を集めることに成功した。

さらに、地域住民や行政関係者が参加したお披露目会では、多くの関係者が足を運び、プロジェクトの意義を確認する場ともなった。また、映像やマップなどの副次的な制作物が、地域案内の補助ツールとしても機能し、観光資源の発信力を高める一助となっている。

神主町公民館についても、建築パネルの展示を通じて文化財登録への機運が高まるなど、地域の資産価値を再認識するきっかけとなった。美術の力を通じて、まちの魅力を“見える化”したことが、本プロジェクトの大きな成果である。

## VI 課題と今後の展望

本プロジェクトは、美術学科の教育活動としてだけでなく、地域資源の掘り起こしや観光資源化にもつながる取り組みであった。一方で、スケジュールの厳しさや予算の確保といった課題も存在しており、今後の持続的な展開には工夫が求められる。

展示から1年以上が経過した現在でも、「もう少し長く展示してほしい」との声が地域住民や関係者から寄せられており、2025年度も展示期間を延長し、同年11月30日まで継続されることが決定した。これは、アートによる地域活性が一過性のイベントではなく、継続的なまちづくりに貢献できる可能性を示している。

また、観光ガイドである磯部氏をはじめ、現地案内に携わった方々の協力によって、地域の魅力が来訪者にわかりやすく伝えられるようになった。今後は、こうした方々との継続的な対話を通じて、展示の効果や反応を定点的に把握し、地域側の視点からプロジェクトのあり方を柔軟に発展させていくことが望まれる。

さらに、制作物の一部を他の地域イベントや観光施設で活用するなど、波及的な展開も検討したい。アートを通じた地域との関わりは、学生にとっても“学びの場”であると同時に、地域にとっても“発信の場”となりうる。今後も美術と地域が出会う場として、このようなプロジェクトを育てていく必要がある。

## Ⅶ 地域からの声：観光ガイド磯部氏へのヒアリング結果

「加賀一の宮アートプロジェクト」について、観光ガイド「ようござった」の磯部氏から得られた主要な意見をまとめた。磯部氏は、プロジェクトの意義と地域への波及効果を高く評価している。

### ・プロジェクトへの初期印象と協力の動機

磯部氏は、建築家である多田氏の地域活性化への熱意と地域に対する強い思いに共感し、観光ガイドとして地域活性化に貢献できるならと協力を決めた。若い学生たちがアートで地域の魅力を表現することに、新たな可能性を感じたという。

### ・学生との関わりと制作物への評価

学生たちについては、事前研修や現地研修で地域について「深く踏み込んで」質問する真摯な姿勢を見せたことに感銘を受けた。完成した作品(格天井アート、見所マップ、解説パネルなど)は、短期間にもかかわらず地域や歴史、町並みを「しっかり捉え」、「非常にうまくまとまっている」「コンパクトにまとめられている」と高く評価した。また、学生が地域文化に触れて作品にする経験は、将来にわたる貴重な学びになると期待している。

### ・地域案内での活用と観光客の反応

磯部氏は、本プロジェクトの成果が観光ガイドの活動において「プラスアルファ」の案内材料となっていると強調した。特に「格天井アート」や「見所マップ」は頻りに観光客に紹介されている。作品を通して、観光客は既存の観光地を「こんな見方があるのか」「若い感性は違う」といった新たな視点や感動を得ているという。地域住民からもプロジェクトに対する好意的な反響が寄せられた。

### ・展示延長と今後の展望

展示期間が1年間延長され、2025年11月30日まで継続されたことについては、後輩学生の「教材」となり、地域に実存する作品を見に行くきっかけになるため、「いいことだと思う」と肯定的に捉えている。今後も同様のプロジェクトがあれば積極的に協力する意向を示した。

### ・さらなる有意義な展示への提案

少数精鋭でのテーマ深掘り：一つのテーマをより深く掘り下げた制作に取り組むことで、作品の質を高められる可能性がある。

対象エリアの拡大：白山比咩神社周辺だけでなく、鶴来町内の別の魅力的なエリア（例：鶴来町内から別院、金劔宮へ至るルートなど）に焦点を当てる。

地域経済との連携：近年増加している鶴来町の若い世代の起業家たち（過去3～4年で30～40店舗増）に焦点を当て、彼らを惹きつける町の魅力を深掘りし、インタビューやマップ制作を行

うことを提案した。鶴来町は古くから商業都市として栄え、人と人との「持ちつ持たれつ」の関係が根付いており、交通の要衝としての地の利や、落ち着いた雰囲気、常に水の音が聞こえる環境、そして地域の祭り（ほうらい祭りなど）が多くの人を惹きつけ、町の活気を支えていると分析した。

磯部氏は、本プロジェクトが学生の実践的な学びを促し、地域の魅力を可視化することで観光振興に大きく貢献したことを高く評価しており、継続的な取り組みを通じて、地域と若者の交流が深まり、さらなる地域活性化につながることを期待している。

## Ⅷ おわりに

本稿で報告した「加賀一の宮アートプロジェクト」は、金城大学短期大学部美術学科の学生にとって、石川県白山市加賀一の宮地区の豊かな歴史・文化にアートを通じて触れる実践的学びの機会であった。学生たちは地域との対話やフィールドワークを通じ、社会とのつながりを実感する貴重な経験を得た。

本プロジェクトは、地域にも具体的な波及効果をもたらした。観光ガイドの磯部氏へのヒアリングからは、制作されたアート作品群がガイド活動の「プラスアルファ」となり、観光客に新たな視点や感動をもたらしていることが明らかになった。これは、美術の力が地域の魅力を「見える化」し、その価値を再認識させる契機となったことを強く示唆している。

展示期間が2025年11月30日まで延長されたことは、本プロジェクトが一過性に留まらず、継続的な地域貢献へと発展する可能性を示すものである。磯部氏からは、「少数精鋭でのテーマ深掘り」、「鶴来町内の対象エリア拡大」、そして近年増加する「若手起業家との連携」といった、今後の地域連携をさらに深める具体的な展望も提案された。

金城大学短期大学部美術学科は今後も、学生の実践的な学びを促進しつつ、地域と美術が出会う場を創出し、学生の成長と地域の活性化が相互に促進される取り組みを継続・発展させていく。本プロジェクトで得られた知見と地域からの声は、持続可能な地域連携モデルを構築する上での重要な礎となるだろう。

## 参考資料

- 1) 「加賀一の宮 見どころ解説（観光案内用資料）」ようござった（2023）

本稿で掲載した写真は学生から使用の許可を得ている。



## 「KINJO おやこひろば「たんぱりん」」と白山市のつながり

米川祥子\*

### The Relationship between the KINJO Parent-Child Plaza Tanbarin and Hakusan City

YONEKAWA Shouko

#### I はじめに

2019年3月に金城大学こども福祉学科（現：子ども教育保育学科）と短期大学部幼児教育学科両学科の連携事業として「『金城の保育』大短連携プロジェクト」を立ち上げ、2022年4月に「金城子育て支援センター（KINJO Childcare Support Center）」を開設した。同年5月から、本センターの中核となる「KINJO おやこひろば「たんぱりん」」（以下「たんぱりん」と表記する）を開設した。

「たんぱりん」開設が4年目を迎え、実施も軌道に乗り、毎回利用者が予約でいっぱいになる状況である。学内においても、授業利用やオープンキャンパス等の広報活動利用が増え、存在感を増している。

学内においては存在感を増している「たんぱりん」であるが、本来「親子ひろば」とは地域貢献の取り組みであり、今回は「たんぱりん」の地域貢献や地域連携の部分についてまとめたものである。

#### II KINJO おやこひろば「たんぱりん」について

##### 1) KINJO おやこひろば「たんぱりん」活動概要

- ① 開設時間：原則週1回（木曜日10:00～13:00）

毎月1週目のみ、午前（10:00～12:00）・午後（13:00～15:00）開設。

学生の試験期間、長期休み期間（夏休みなど）は閉設。

- ② 運営形態：【スタッフ】チーフ1名、スタッフ2名（他、登録スタッフ2名）

\*皆、保育士有資格者

【利用者】未就園児と保護者。予約制12組まで。

【利用料金】無料

地域支援の目的で行う。大学独自事業。

学生・教職員はボランティアとして参加。

---

\* 金城大学短期大学部幼児教育学科  
金城子育て支援センター長

③ 実施状況

<例：2025年度 6・7月の取り組み>

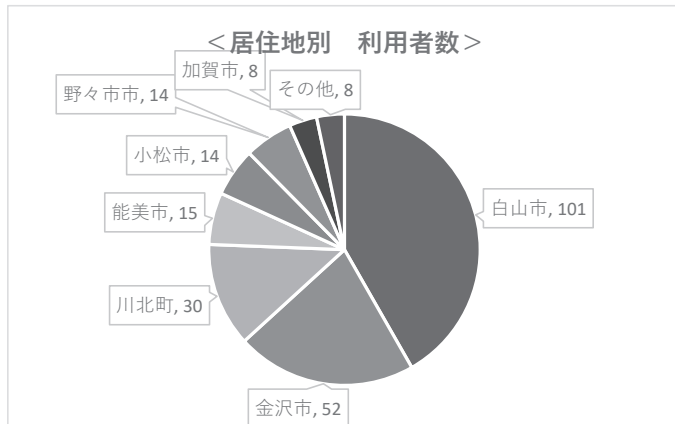
月日	企画	担当	利用組数(組)	学生参加数(名)
6月5日	午前：ふれあい遊び 午後：ふれあい遊び	スタッフ	A.M. 8組 P.M. 3組	A.M. 大学生2名 P.M. 大学生4名
6月12日	わらべうたあそび	スタッフ	8組	
6月19日	ファーストシューズの選び方	医療健康学部 小島先生	11組	大学生2名 短大生1名
6月26日	バランスボールでリフレッシュ	スタッフ：劔村	9組	大学生2名
7月3日	午前：七夕飾りを作ろう 午後：七夕飾りを作ろう	スタッフ	A.M. 12組 P.M. 8組	A.M. 大学生3名 P.M. 大学生4名
7月10日	子どもの体調不良時の対応	看護学部 金谷先生	9組	大学生3名 短大生3名
7月17日	ふれあい遊び	スタッフ	14組	大学生1名 短大生5名(特化米川)

毎回、10時30分から「お集まりの会」になり利用者同士の紹介がなされ、その後30分程度の企画が実施される。「企画」は、スタッフの特技を活かしたものや本学教員の専門分野から利用者のニーズに合わせた内容を行っている。「学生参加」については、事前に学生がセンター担当教員に申込みをして人数を調整している。大学生は卒業研究に活かしたり、短大生は「子育て支援」の授業の一環として参加したりしている。今年度は、保育者養成の学科の学生だけではなく、看護学部の学生が親子の関与観察の目的で参加したり、美術学科のインテリアコーディネートコースの学生が「ひろばの環境構成」を考案し家具製作を行ったりして、「たんぱりん」に関わった。

2) 利用者について

2025年度 4月～11月の7か月間（8月は開設なし）の利用者は103組（のべ242組）。利用者の居住地は以下の通り。

市町名	のべ組数(割合)
白山市	101 (42%)
金沢市	52 (21%)
川北町	30 (12%)
能美市	15 (6%)
小松市	14 (5%)
野々市市	14 (5%)
加賀市	8 (3%)
その他	8 (3%)



### Ⅲ KINJO おやこひろば「たんぱりん」と白山市のつながり

#### 1) 白山市施設開放誌への掲載

白山市内には、官民合わせて多くの子育てひろばがある。毎年行政が市内の子育てひろば情報をまとめた情報誌を発信しているが、そこに本学「たんぱりん」も載せてもらっている（資料1参照）。

#### 2) 白山市「ひろば担当者会議」への参加

行政が主体となり、市内の「ひろば担当者会議」（研修も兼ねる）という組織を構成しているが、そこにも本学「たんぱりん」は参加している。年4回の集会有り、毎回「たんぱりん」からはスタッフ1～2名が参加している。研修の中には、「金城大学「たんぱりん」を見学する」という回があったり、本学教員が研修講師になる回があったり、本学「たんぱりん」スタッフが4カ月健診に出向いて白山市内子育てひろば広報活動に協力したりする回があったりした。

また、この研修会はひろば間の情報交換の場になっており、市内のひろばスタッフ同士が顔の見える関係になることができる。これは、利用者のニーズに合わせた他のひろばを紹介したり、つなげたりできる取り組みにつながっていくであろう。

### Ⅳ 今後の課題

本学のおやこひろば「たんぱりん」は、開設4年目を迎え、スタッフも充実して利用者からの評判も良く、運営が安定してきている。「大学内にある子育てひろば」という特徴をもつ「たんぱりん」は、親子同士はもちろん親子と学生がつながる場であり、つながることによって利用者も学生もエンパワメントされる。特筆すべき点としては、利用親子が学校側からの授業や事業の協力要請に対して、積極的に応えてくださることである。“学生養成のためになるのであれば”とひろば開設日以外の授業や学内事業にも積極的に参加してくださる。オープンキャンパスで訪れる高校生や乳児や保護者と関わったことのない学生に対して、利用保護者は乳児との接触や会話を上手にリードしてくださるので安心してお任せできるのである。その結果、入学希望者からは「学内におやこひろばがあるという環境に魅力を感じた」という言葉や、学生からは「保護者って怖くないんだ」「やっぱり保育の仕事したい！」と保育への意欲的な発言が多くみられるようになり、本取り組みが保育への動機づけ向上に寄与したことが示唆された。

以上のように「たんぱりん」は保育者養成校である本学にとって大変有益な取り組みである。一方で、その運営費は本学独自事業としてすべて学内で賄っている。昨年視察した共立女子大学では、本学同様大学独自事業であるが、一部千代田区から「保育者養成校による地域子育て支援事業」という補助金給付を受けたり、利用者から利用料金（1回200円）を取り運営費の一部にまわしたりしていた。本学でも今後、近隣市町や協定先から得られる補助金制度があれば利用が可能かどうか検討していく必要があると考えられる。

### いしかわにこにこ広場

(いしかわこども園内)

源兵衛町288  
TEL 2777-1011  
(直通)2777-8225

＊開院日時  
月～金 9:00～14:00



### ひろばへ遊びにおいで!

「ひろば」は、お父さんと一緒に遊べる場所です。お家のように温かな雰囲気の中で、子育ての仲間を増やしながら、親子でゆったりとした時間を過ごせます。子育て中の悩みや不安も、気軽に相談することができ、季節の行事や親子でのふれあい遊びも楽しむことができます。

### 西柏ふれあいひろば

(西柏こども園内)

西柏町8-1  
TEL 276-5436

＊開院日時  
月～金 10:00～15:00



### 恋愛スマイルひろば

(恋愛保育園内)

成町418-2  
TEL 276-0070

＊開院日時  
月～金 9:00～14:00



### げんきっこ広場

(福祉ふれあいセンター内)

倉光8丁目16-1  
TEL 274-8137

＊開院日時  
月～金 8:30～13:30



### 子育てひろば Let's 繋

(繋こども園内)

田中町182  
TEL 276-8521

＊開院日時  
月～金 9:00～14:00



### 恋愛スマイルひろば

(認定こども園恋愛内)

村井町2  
TEL 276-0008

＊開院日時  
月～金 9:00～14:00



### KINJO おやこひろば「たんぱりん」

(金城大学短期大学部内2F)

五箇町1200  
TEL 276-4400(代)

＊開院日時  
毎週木曜日 10:00～15:00



### はまなすスマイルひろば

(はまなす保育園内)

相川町1262  
TEL 276-1105

＊開院日時  
月～金 9:00～14:00



### ～利用者の声～

いろいろな人と出会うことができ、子どもはもちろん親にとっても心のよりどころです。子ども同士遊びを通して、いろいろと経験し親子共に成長できます。広場で友だちがたくさんできました。家でできないダイナミックな遊びを思う存分楽しめます。実家に来ているみたいになりリラックスできます。

### 誰でも、いつ行ってもいいの？

どなたでも遊びに来て下さいね。お父さんやおじいちゃん、おばあちゃんも大歓迎です。開設している時間ならいつでも気軽に遊びに来て下さいね。

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	開所時間・備考
げんきっこ広場 (福祉ふれあいセンター)	9日 離乳食講座 14日 赤ちゃんとタッチ(足形)	2日 赤ちゃんとタッチ(コミュニケーションケア) 17日 お誕生会	4日 セツのついで 16日 赤ちゃんとタッチ(モビール)	5日 げんきっこミニ講座 (産前産後ケア) 16日 赤ちゃんとタッチ(モビール)	9日 お誕生会 21日 お誕生会	9日 お誕生会 15日 赤ちゃんとタッチ(足形)	月～金 8:30～13:30 ※行事は予約が必要ですが毎月身体計測を行っています (10:00～11:00)
恵愛スマイルひろば (認定こども園恵愛)	9日 ふれあいあそび 13日 シアターあそび	3日 絵本と仲よし 16日 親子でつくろう 17日、18日、19日 鳥17日、18日、19日	8日 水あそび 他11日15日 22日 親子でつくろう 他23日、24日、25日	5日 水あそび 他8日20日29日 18日 親子でつくろう 他19日、20日、21日 26日 ベビーマッサージ	2日 ふれあいあそび 9日 布あそび 22日 親子でつくろう 他24日、25日、29日	9日 ミニミニ運動会 21日 親子でつくろう 他22日、23日、24日 28日 ベビーマッサージ	月～金 9:00～14:00 行事は予約が必要です。 毎月1回の子育て※お誕生会※おやこひろば※おやこひろばの敷地芝生(第3条)※
悠愛スマイルひろば (悠愛保育園)	12日 コスモスポーツクラブ 親子体操	2日 コスモスポーツクラブ 親子体操	1日～4日 セツかざり 1日 コスモスポーツクラブ 親子体操	6日 コスモスポーツクラブ 親子体操	1日 コスモスポーツクラブ 親子体操	6日 コスモスポーツクラブ 親子体操	月～金 9:00～14:00 ※身体計測はいつでもできます。
成町418-2 276-0070	14日(水)園庭であそぼう	11日 感熱遊びをしよう	16日 すずんアーツ遊び	17日 園庭であそぼう	10日 手形足形で遊ぼう	15日 マラカスをつくろう	
西柏ふれあいひろば (西柏こども園)	15日10:45～ ★しゅぼんだまであそぼう	5日・6日 ★おひるわアート 26日～ 短冊を作ろう	10日 ★ベビーマッサージ	9日 ★フリースタート 28日★ リトミック	16日 ★ママヨガ	(未)★ミニミニ運動会	月～金 10:00～15:00 毎月最終木曜日 身体測定 毎月第一金曜日 はじめてひろばねんねこ ★要予約
西柏町8-1 276-5436							
子育てひろばLet's 繋 (繋こども園)276-8521 南沢町土地区南沢車庫跡地内 1階3号室	7～9日 文の日のプレゼントを作ろう 16日 おはなしの会 23日 趣味シニア※要予約	移転のため閉鎖期間あり (未定)	2～4日 セツ飾りを作ろう 11日 乳幼児安全の話 18日 おはなしの会	1日 趣味シニア※要予約 9日 おはなしの会	3～5日 せきさの日のプレゼントを作ろう 12日 趣味シニア※要予約 19日 おはなしの会	3日 わらべうた 17日 趣味シニア※要予約 24日 おはなしの会	月～金 9:00～14:00 毎月 誕生会、製作 毎月水曜日 保健相談 毎月最終水曜日 身体計測
いしかわにこにこ広場 (いしかわこども園)	15日 歯科相談 16日 フットヘッドケア★	13日 ベビーマッサージ★ 18日 園庭であそぼう	7日 セツの会 16日 ベビー親子体操	6日 保健相談 21日 絵の具であそぼう	10日 バランスボール★ 17日 みょうどんうた	8日 ハロウィン製作 14日 園庭であそぼう	開放時間 9時～14時 毎月 身体測定 ★要予約
源兵衛町288 277-1011	26～28日 手形足形アート	25日 バランスボール★	18日 水あそびおもちゃ作り	27～29日 手形足形アート	24日 フットヘッドケア★	14日 ベビーマッサージ★	連絡先直通:277-8225
はまなすスマイルひろば (はまなす保育園)	14日 作ってかざろう 21日 お話なあに?	11日 新聞であそぼう 18日 おもしろシアター	9日 おはなしなあに? 16日 感熱あそび 20日 作ってかざろう(七夕)	6日 フールあそび 20日 作ってあそぼう	6日 おはなしなあに? 17日 感熱あそび	8日 スタンプあそび 15日 体を動かしてあそぼう	月～金 9:00～14:00 第1水曜日 身体測定
相川町1262 276-1105	28日 作ってあそぼう	25日 作ってかざろう(七夕)	30日 作ってかざろう	27日 おもしろシアター	24日 楽器であそぼう	22日 作ってかざろう(ハロウィン)	
子育て広場まっとう (松任児童館内)	15日 みんなで遊ぼう 23日 ★親子リズム遊び	6日 ★親子リズム遊び 13日 みんなで遊ぼう	4日 ★みんなであそぼう 18日 ★みんなであそぼう 19日 ★みんなであそぼう	29日 みんなで遊ぼう	5日 ★ベビーリズム 12日 ★親子リズム 18日 ★みんなであそぼう ★ミニ運動会	23日 みんなで遊ぼう	火～日 9:30～18:00 月曜休館日 (祝日の場合ははその翌日) ※予約が必要です
古城町305 276-1170	30日 ★えいごであそぼう	20日 ★栄養のお話と試食	18日 ★ママのためのフットセラピー				
おやこの広場							
あさがお		月～土 9:30～16:00(※水、土は15:00まで)開設しています。ご利用の際は、ホームページをご覧ください。お気軽にお問い合わせください。					
KINJO おやこひろば 「たんぱりん」 (金城大学短期大学部内2F)							
笠間町1200 276-4400							毎週木曜日10:00～13:00開放します。※毎月第1回目の木曜日は、10:00～12:00、13:00～15:00の2部開催を予定しています。大学の先生方による講座も企画しています。また、学生が参加しお子さまと遊んだり、絵本を読んだりいたします。金城大学のホームページ、インスタグラムなどをご覧下さい。お気軽にお問い合わせください。お電話でのお問い合わせも受け付けております。【毎月1組以上の予約となります。事前予約制があります。キャンセルされる方もいますので、当日おいでにならない場合はホームページにて個別のうえ、お電話やメールでお問い合わせください。また、行事によっては場所を変えているので、予約人数の変更があります。

★行事予定は都合により変更または中止になる場合があります。詳しくは各施設へお問い合わせください。

# 白山市及び能美市における学生ボランティア活動

## — 三浦ゼミと地域間交流研究会 —

三浦哲志\*

### Student Volunteer Activities in Hakusan City and Nomi City: The Miura Seminar and the Regional Exchange Research Group

MIURA Satoshi

#### I はじめに

筆者は、かつてコロナ禍以前の時期に、学生と共に三浦ゼミもしくは地域間交流研究会として、白山市山間部や能美市において地域間連携・地域活性化や自然・農業体験を目的とした活動を10年以上にわたって行っていた。幼児教育学科を中心に多くの学生が集まり、様々な学外団体と提携して、数多くのイベントを開催・経験することができ、大きな成果があったと考えている。

しかし、当時は学内外への広報活動が今ほど盛んではなく、活動の詳細が周知されていたとは言えない。また、活動終了から年数が経過することで、筆者自身の記憶も薄れてきた。今回、『金城紀要』50号記念として白山市関連の活動が特集されることを良い機会とし、長年の活動をまとめて紹介したい。また、長年、ボランティア活動を企画・運営・引率してきた人間として、学生ボランティア活動について得られた知見を述べたい。これが本報告を執筆するにいたった動機である。

執筆時点で確認可能な過去の記録等を参照しながら正確を期して執筆するが、表で示した活動記録のうち一部の回については、資料保存上の制約により現時点では参加人数等の詳細な数値が不明になっている箇所がある。また、年度ごとの表記形式の違いが存在すること、様々な考察については筆者の経験によるところが大きいことをあらかじめお詫びしておきたい。

本報告に記載した地域連携活動は本学学生及び地域住民の任意参加によるもので、活動内容は個人が特定されない形で記述する。

#### II 白山市山間部における地域間連携活動

##### 1) 2010年度 大学コンソーシアム石川 地域貢献型学生プロジェクト推進事業

前期授業が開始されて間もない頃、本学幼児教育学科に白山市内の子育て支援NPO団体である「おやこの広場あさがお」から、白山市観光推進課と連携して開催される、白山市山間部にある中宮集落での交流イベントへの学生ボランティア参加依頼があった。学科内での調整の結果、筆者が学生

---

\* 金城大学短期大学部幼児教育学科

を引率して参加することになった。これが長きにわたって活動することになったきっかけである。

とは言え、初めてボランティア参加するイベントと言うことで、活動内容を具体的に説明することさえできなかったため、学生の反応は鈍く、ボランティア募集を開始して1ヵ月以上経っても応募者は現れなかった。最終的に、幼児教育学科の1年生4人が参加してくれた。

学生募集と並行して、大学コンソーシアム石川が募集する地域貢献型学生プロジェクト推進事業に、白山市との提携の下で「『山のじいちゃん・ばあちゃん』世代間交流事業」として選択されたことで委託料を受け取ることになり、活動に必要な資金を確保することができた。応募に際して、団体としての名称が必要であったため、幼児教育学科にはゼミナール制度が存在しなかったが、仮に三浦ゼミを名乗った。

#### ・活動目的

白山市の幼稚園・保育園等や自治体・団体との連携の下、幼児教育学科の学生がその専門性を活かしながら様々なボランティア活動に参加することで、幅広い社会経験を積み、地域や将来の仕事への理解を深める。また、衰退する地域の活性化、地域間及び世代間の交流に貢献する。

#### ・活動日程、参加者数

日 時		参加者数		場 所
		親 子	学 生	
8月7日	9:30~15:00	13組 大人18人・子ども23人	4人	中宮地区集会所・周辺
11月20日	9:30~15:00	14組 大人19人・子ども24人	4人	中宮地区集会所・周辺
2月26日	8:30~16:00	参加人数不明		中宮地区集会所・周辺

#### ・活動内容

8月7日	昆虫探し、町並みの散歩、流しそうめん、昼食、集会所で地域住民と交流
11月20日	焼き芋、町並みの散歩、昼食、集会所で地域住民と交流
2月26日	雪遊び、昼食、集会所で地域住民と交流、自由行動（雪遊び、お風呂等）

これらの活動目的及び内容は、改善を加えながら次年度以降の事業も受け継がれることになった。

## 2) 2011年～2012年度 石川県 地域連携促進事業

筆者は、この地域連携活動を前年度限りと考えていたが、継続されることになった。さらに、2011年度から開始された石川県地域連携促進事業に採択され、「白山市山間部における世代間交流事業」として2年間にわたって補助金を受けることになった。

前年度の実績から学生への活動内容の説明が十分に行えたこと、補助金によって人件費の支払いが可能になったことも影響したのか、活動参加学生が4名から2学年合計で12名へと大きく増加することになった。

本事業の採択決定後、石川県庁にて谷本知事や県庁幹部出席の下、採択された事業関係者による

プレゼンテーションの機会があった。他大学の学長等が出席する中で、本学は筆者と学生2名が参加した。県庁で県知事相手にプレゼンテーションをし、テレビや新聞で報道される経験は学生にとって極めて珍しく貴重なものである。担当した学生の保護者には非常に驚かれ、かつ後々まで感謝されることになった。

・2011年度 活動日程、活動内容、参加者数

日時	内容	参加者数
5月21日	世代間交流イベント	参加人数不明
7月9日・10日	里山体験事業	39人(親子28人、スタッフ3人、学生8人)
8月6日	世代間交流イベント	48人(親子37人、スタッフ4人、学生7人)
10月10日	親子日帰りキャンプ	85人(親子71人、スタッフ3人、学生11人)
10月18日	意見交換会	17人(親子10人、スタッフ2人、学生5人)
11月27日	世代間交流イベント	41人(親子28人、スタッフ1人、学生12人)
12月23日	クリスマス会	250人(参加者225人、スタッフ4人、学生21人)
1月22日	世代間交流イベント	39人(親子29人、スタッフ2人、学生8人)
2月29日	意見交換会	参加人数不明
2月3日	雪だるま祭り	参加人数不明
3月3日	活動成果報告会	参加人数不明

2011年度は、昨年に引き続いて行った季節ごとの中宮地区での活動に加え、関係者が集まって活動について話し合う意見交換会を開いて活動の反省と改善を図った。

また、おやこの広場あさが主催のクリスマス会に協力し、例年以上の規模で開催することができた。

更に、やはり白山市の斡旋によって、白峰地区の雪だるま祭りに参加し、与えられたスペースで学校をPRする雪だるま制作を行った。この活動は以後、コロナ禍の開始による雪だるま祭り自体の中止まで継続することとなる。

最終的に、本学に事業関係者を招いて成果報告会を行って、1年の活動を総括した。さらに活動時の写真を使って活動を記録・記念するアルバムを制作し、関係者に配布した。

・2012年度 活動日程、活動内容、活動場所

日時	内容	場所	提携団体
5月12日	世代間交流事業	白山市中宮温泉	おやこの広場あさがお
7月21日	世代間交流事業	白山市木滑地区	蝶屋保育園、里山保全プロジェクト
7月28日・29日	お泊まり会	白山市中宮地区	おやこの広場あさがお
8月20日	世代間交流事業	白山市白峰地区	白山市立松任西幼稚園
10月8日	世代間交流事業	白山市中宮地区	蝶屋保育園、里山保全プロジェクト
10月	意見交換会	白山市内	活動関係者
11月25日	世代間交流事業	白山市中宮地区	おやこの広場あさがお
12月23日	クリスマス会	白山市内	おやこの広場あさがお

1月	世代間交流事業	白山市中宮地区	おやこの広場あさがお
1月25日	活動検討会	白山市内	活動関係者
2月7日・8日	雪だるま祭り	白山市白峰地区	雪だるま祭り実行委員会
2月17日	世代間交流事業	白山市木滑地区	蝶屋保育園、里山保全プロジェクト
3月12日	事業成果報告会	金城大学	活動関係者

2012年度も前年同様の活動を継続したが、活動地区が中宮地区以外にも広がり、提携団体も増加したことで、活動回数は更に増加した。また、活動参加学生も2学年合計で22名へ増加し、活動ごとの人員確保に支障が無くなった。

この2年間の問題として、人件費つまり日当の存在が挙げられる。活動資金が以前より増加したため、外部の関係者から学生まで、活動に参加した人間全員に時給計算で日当が支払われていた。日当が学生から歓迎される一方、日当が無くなった2013年度は前年度から継続して参加する学生が減少した。有償で行っていた活動を無償で継続することへの心理的抵抗感は容易に理解できる。

### 3) 2013年度 白山市 世代間交流事業

石川県地域連携促進事業が終了し、再び応募した地域貢献型学生プロジェクト推進事業が不採択になったことで活動の継続が危ぶまれたが、白山市の支援の下で「白山市世代間交流事業」として前年同様の活動を実施できた。

### 4) 2014年度～2016年度 大学コンソーシアム石川 地域貢献型学生プロジェクト推進事業

この3年間は続けて地域貢献型学生プロジェクト推進事業に採択された。以下のように事業名は毎年変わっており、それに応じた単発のイベントも随時開催していたが、主な活動内容は前年までとほぼ同様であったので、詳細については割愛する。

年 度	事業名
2014年度	父親の子育て支援
2015年度	親子のふるさとの魅力体験
2016年度	白山ろくの交流人口の拡大

この時期の最も大きな変化は、それまでの三浦ゼミという名称の任意団体から、新たに筆者が顧問を務める地域交流研究会という名称の大学公認サークルとなったことである。これによって、大学から援助金を受け取ることができ、公的資金に依存する不安定な財務体質から脱却することができた。

また、参加学生の増加とサークルとしての意識から、例年通りの交流事業以外にもサークルとしての独自の活動が行われるようになった。白山麓の食や伝統文化に触れる活動を日帰り旅行や合宿で行ったり、白山で捕獲されたイノシシ肉を猟師から仕入れ、イノシシ料理の模擬店を金城祭に出店したりした。

今、三浦ゼミ・地域間交流研究会の活動を振り返って、この時期が一番、活動回数の面でも内容

の面でも充実した活動ができていたと言える。例えば、交流事業で流しそうめんをする時は前日に地域住民の案内で山に入って竹を切り出し組み立てる、金城祭でイノシシ料理を出す時は事前に白山麓の民宿に行って調理法を学ぶ、と当時の学生は事前準備から努力していた。交流事業当日、白山市の担当者と地域住民が用意したプログラムを客として消化するのではなく、交流事業の主催側として主体的に提携団体の方々と関わることは学生にとって貴重な経験となった。

このように、年々、活動を拡大し、内容を充実させていた三浦ゼミ・地域間交流研究会であったが、長年続けてきた交流事業から急に離れることになった。その後、この交流事業は地域貢献型学生プロジェクト推進事業から外れ、我々が初参加した頃の活動回数・内容へと縮小していった。白山市の関連予算が削減された後でも本学から必要経費を支出しながら継続していたが、いよいよ今年度で終了するとのことである。長年関わった人間としては非常に残念であるが、この事業の遂行には、学生ボランティアの参加以前に白山市役所と地域住民の理解と協力が必要不可欠である。我々の活動時より更に高齢化・過疎化が深刻になっている白山市山間部において、交流事業の継続が困難であると判断されたのはやむを得ない。

### Ⅲ 能美市における農業体験支援活動

2017年、地域間交流研究会は、7年にわたって続けてきた交流事業から離れ、新たに取り組むべき事業を探ることとなった。その中で学生ボランティアを探していた能美市農政課と話がまとまり、能美市の地域振興作物（加賀丸いも、国造柚子）を応援する活動を行うことになった。

具体的には、丸いも収穫体験の応援、国造柚子生産者との話し合い、国造柚子祭りの手伝い、蜂蜜収穫体験を行った。そして金城祭では、丸いもを使用したお好み焼き、柚子蜜ソーダを販売する模擬店を出店した。既製品を出す模擬店が多い中、地元の質の高い農産物を使った料理は非常に好評であった。

また、この時期には、百万石まつりやサマーフェスティバル白山の補助といった一般的なボランティア活動にもサークルとして参加し、短大部幼児教育学科だけではなく大学社会福祉学部子ども専攻の学生も参加していた。

このように新しい活動を中心に再出発し、さかんに活動していた地域間交流研究会であったが、2020年に始まったコロナ禍によって一切の行事が中止されたことで、全ての活動が凍結されることとなった。しかもコロナ禍は年度をまたいで継続し、活動再開の目途が立たなかつたため、新メンバーの募集もなかなか行えず、せっかく参加してくれた学生にも活動の機会を提供できなかった。そのような状況の中、長年かけて築き上げてきた地域との関係も薄れていった。

結果的に、2022年度を以て、13年続いた三浦ゼミ・地域間交流研究会は活動を終了した。

## IV 学生ボランティア活動の課題

以上のようなボランティア活動の経験を踏まえて、教員が学生ボランティア活動を運営していく時の課題について考えたい。

### 1) 参加学生の募集と参加意欲の維持

短大部の学生は基本的にアルバイトで多忙であり、ボランティア活動の呼びかけに応じる学生は少数にとどまる。また、一度参加した学生が次も参加する保証はない。そのため、教員側には活動のたびに参加学生を募る必要がある。しかし、活動のたびに参加学生が変わるのでは経験やノウハウが蓄積されないため、同じ学生集団が卒業まで活動を継続してくれることが望ましい。正規のゼミナール活動や授業の一環としてボランティア活動を行う場合は学生に活動参加の義務が生じるが、そうでない場合は学生サークルという枠組みを作るのが有効である。さらにその学生サークルを大学公認団体とすれば、補助金を得て経費負担を軽くすることができる。

ただ、サークルに学生を集めるには、学生が入りたいと思う魅力的なサークルのイメージを打ち出し、学内に積極的に広報する必要がある。また、大学公認の学生サークルとなると、経費申請・活動報告・経費精算など様々な手続きが必要となり、顧問の教員、責任者を務める学生の負担が増すことになる。筆者個人としては、任意団体の三浦ゼミとして個人的に声をかけて学生を集めて運営していた頃の方が、大学公認団体の地域間交流研究会になった後より負担が軽かった。活動の安定か、負担の軽減か、どちらを優先するかは、担当教員の個人的事情と活動の頻度によって判断すべきだと思われる。

### 2) ボランティア活動のPR

多くのボランティア活動は、イベントを主催する学外団体の求めに学校側が応じて、学生が募集され派遣される形式である。イベントが新聞やテレビ等で報じられ、主催する学外団体が紹介されたとしても、学生ボランティアの存在まで紹介されるとは限らない。学生ボランティア活動を学生の経験として捉えるだけでなく、学校のPRの機会としても利用するなら、主催者の立場で関わる必要がある。

三浦ゼミ・地域間交流研究会としても、活動の途中からは学外団体に提案・提供される活動をこなすだけでなく、自分達で新しい活動を生み出すとすることを意識していた。ただ、そのためには意欲的かつ継続的に参加する学生の存在が必須であり、年度ごとの参加学生の意欲や資質に活動内容が左右されることとなった。筆者としては、普段から学生をよく観察し、これと見込んだ学生にはこちらから声をかけるなどしていたが、当然ながら、そのような学生は他の教員・活動からも必要とされるので、人材の奪い合いが発生することもあった。

また、イベントに参加する学外の人々へ存在をPRするため、ボランティア活動参加学生は金城大学短期大学部幼児教育学科の三浦ゼミ・地域間交流研究会であることが伝わるオリジナルのポロシャツやパーカーを着るようにしていた。

このように、学外へのPRについてはある程度配慮していたつもりであるが、今考えれば学内へのそれは不足していた。筆者が1人で担当する外部団体との提携事業で、しかも学内予算を使用し

ていなかったため、学内にPRする必要を感じていなかったからである。これだけの規模・内容の活動に参加した学生達が、学内的にはあまり知られず、何ら評価されずに終わったのは筆者の責任である。

### 3) 活動資金の獲得と使用法

学生ボランティアは、謝礼はもちろん交通費や製作費などの必要経費さえも出ないことが多い。そのため、指導教員がそれらの費用を用意する必要があるが、学外団体が主催する活動への協力のために学内の経費を使用することは手続き的に困難である。三浦ゼミ・地域間交流研究会が、盛んに活動していたほぼ全ての期間において公的資金を獲得し、長期間の活動にも関わらず学内の予算にほとんど頼らずに済んだのは非常に幸運であった。

一方、公的資金の獲得はやはり、申請・報告・精算といった一連の義務を伴う。活動期間中、毎月の交流活動より負担であったのが、これらの事務作業であった。獲得した学内外の資金の使用法にも毎年、頭を悩ませた。毎年、様々な消耗品費、活動時の交通費、オリジナルのポロシャツ・パーカーの制作費に資金を支出し、それらの事務作業は筆者が一手に担っていた。学生サークルであったことを考えると、資金の使途や清算作業については顧問ではなく学生が主体的に判断するべきで、それも学生の経験に繋がったのではないかと反省している。

また、前述のように、多額の資金を獲得し、人件費として日当を支出できるようになると活動をアルバイトとして捉える学生が集まることになる。日当が出るイベントには参加するが、日当が出ない打合せや準備には参加しないと言う学生もいて、日当関係なく参加する学生との間で活動に対する姿勢に違いがあった。このような事態を避けるために、やはり、学生の学外での活動に関してはボランティアとして統一し、一貫して運営するのが適当であろうと思われる。

### 4) 引率教員の負担

本来、学生ボランティア活動は学生が主体で行われるべきものである。理想は、先輩学生が関係団体と連絡を取って活動を主導し、後輩学生に経験や指示を伝え、教員は顧問として活動を見守るという形であろう。しかし、短期大学部では先輩と言っても2年生のみで、しかも幼児教育学科の2年生は実習で多忙である。そのため現実には教員が関係団体との窓口となり、活動前には学生を集めて指示を与え、活動当日には学生を引率する必要がある。さらに、学生の参加意欲を高めるためには、活動前後の学生への働きかけも必要不可欠である。筆者の場合、全ての学外イベントに自ら参加するだけでなく、様々な形で学生へ差し入れを行ったり、サークルとしてのイベントを企画したりしていた。加えて、そのようなイベント時には大量の写真を撮影して、パソコンでの編集も行うことで、少しでも学校のPRになり学生の思い出となるものを残そうと努めた。

本来、学生ボランティアの引率は、教員として授業・研究・校務より負担が軽い業務であるはずだが、筆者の場合は逆転現象が起きていた。公的資金を支給されて、複数の学外団体との提携で行われる活動であったため、絶対に成功させたいと言う意識があったからである。そして、それが実現可能だったのは、当時の校務が今ほど繁多ではなく、筆者が独身で、時間的余裕があったからである。現在の筆者の状況では、当時のように盛んに活動することは困難であり、コロナ禍を契機に長年続いた活動が衰退・終焉したのは残念ではあるが、良いタイミングだったとも言える。

このように、学生ボランティア活動の活発化は、引率教員の負担増大に繋がるジレンマもはらんでいる。関与する教員を増やせば一人当たりの負担軽減にはなるが、教員同士の連携という別の課題が生まれる。また、大学に持ち込まれるボランティア活動の案件が多数ある中、特定の活動に複数の教員が関わるのは非効率的でもある。

結論として、学生主体の学生ボランティア活動を授業外で継続していくためには、短期大学の学生だけでなく大学生の参加が必要であると思われる。既に学内には大学生・短大生共に参加するボランティアサークルが存在しているが、2020年頃の地域間交流研究会もそのような状態を目指しており、大学生が在籍していた時期もあった。ただ、筆者が短大部の教員で大学生との関係が薄かったこともあって、大学生が継続して参加する状況にはならなかった。

## V 活動を振り返って

コロナ禍によるボランティア活動の中断と地域間交流研究会の消滅から3年が経ち、筆者がかつてのボランティア活動を思い返すことも少なくなっていた。今回、機会を得て過去の記録を参照し、活動を振り返ると、様々な気づきがあった。

まず、第一に、この活動は筆者を様々な点で成長させ、変えたということである。活動開始の2010年は、筆者が東京から石川に戻り、本学に着任して3年目である。当時、筆者は学外とは一切関係が無く、担任以外の学生ともほとんど交流はなかった。石川出身で石川在住であるにも関わらず、自宅や学校以外の地域はほとんど知らなかった。

しかし、この活動によって一気に学外団体や学生との関りが増えた。特に、活動に参加した歴代の学生とは担任する学生以上の関係を築くことができた。また、学外団体とのボランティア活動や公開の場での成果発表会は、準備期間から当日に至るまで、参加する学生だけでなく指示・引率する筆者自身の経験にもなった。加えて、白山市山間部や能美市に通い続けることで県内の地理や特産物にも詳しくなった。

第二に、そのような長期間にわたる充実した活動にも関わらず、我々は年月や障害を超えて継続するものを残せなかったということである。前述のように、コロナ禍によるイベントとボランティア活動自体の中断・消滅があり、さらに地元自治体の予算削減、地域の過疎化が加わって、我々が主体的に取り組んだ数々の活動は既に消滅したか、消滅寸前の状況にある。地域の活性化と地域間・世代間交流を謳っていた活動だったが、私や学生など関わった人間への無形の影響を除いて、一体、どれほどの効果があったのか、今となっては疑問が残る所である。学内においても、学外においても、もっと賢明で有効な、他の手段があったのではないかという反省は尽きない。

第三に、この活動に取り組めたことに対して感謝しているということである。確かに活動の準備と当日の引率は負担であったが、専門外の学科に所属する自分の立ち位置や役割に悩んでいた当時の筆者にとって、意欲ある学生と行う活動はとても充実感があった。地域と連携して行うボランティア活動は、参加する教員や学生の意欲だけではなく、学校側の事情、地元自治体の予算、地域住民の意欲が揃わないと成立しない。それらが揃っていた時期に偶然、筆者にボランティアの担当が回ってきたことは、今思うと誠に幸運なことだった。

最後に、長年の活動の中で関わった数多くの学外関係者、不慣れな事務作業で助けられた歴代の本学事務局担当者、ボランティア精神にあふれた歴代の参加学生達に感謝し、本報告を終わりたい。

## 参考文献

- 1) 平成22年度 地域貢献型学生プロジェクト推進事業報告書  
「山のじいちゃん・ばあちゃん」世代間交流事業  
([https://www.ucon-i.jp/newsite/jigyuu/gakusei-project/gakuseiproject\\_pdf/6-22.pdf](https://www.ucon-i.jp/newsite/jigyuu/gakusei-project/gakuseiproject_pdf/6-22.pdf))
- 2) 平成26年度 地域貢献型学生プロジェクト推進事業報告書  
「父親の子育て支援」  
([https://www.ucon-i.jp/newsite/jigyuu/gakusei-project/gakuseiproject\\_pdf/26/C-8.pdf](https://www.ucon-i.jp/newsite/jigyuu/gakusei-project/gakuseiproject_pdf/26/C-8.pdf))
- 3) 平成27年度 地域貢献型学生プロジェクト推進事業報告書  
「親子でふるさとの魅力体験を支援」  
(<https://www.ucon-i.jp/newsite/27C5.pdf>)
- 4) 平成28年度 地域貢献型学生プロジェクト推進事業報告書  
「白山ろくにおける交流人口の拡大」  
(<https://www.ucon-i.jp/newsite/28C4.pdf>)



## 金城美術 × 白山ロータリークラブ — 地域の特性を活かした作品制作 —

堀 一 浩\*

### KINJO BIJUTSU × Rotary Club of Hakusan: Creating Works that Leverage Local Characteristics

HORI Kazuhiro

#### 要旨

近年、美術の分野においても社会的課題をリサーチし、提案／解決する取り組みを求められることが多くなった。本学美術学科においても従来から「地域美術演習」という必修授業の中で地元である石川県、白山市を中心とした地域を見学／取材し課題制作に取り組んできた。その状況の中で白山ロータリークラブ（以下 RC）から白山市の特性を活かした事業の共同プロジェクトの提案があった。

白山市は女流俳人・加賀の千代女（1703～1773）の出生地である。「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」の俳句で知られ、松任駅近くには「千代女の俳句館」を開設し、毎年「千代女全国俳句大会」も開催されており、市をあげて PR に取り組んできた経緯がある。この千代女をキーワードに、学生ならではの新しい視点によって地域の物産・自然・歴史などを、アート・デザインによって発信するための共同プロジェクトを始めることとなった。

#### I 第1期（2014～16年）

千代女は地元松任であっても「尼さん」「老人」の比較的地味なイメージが定着しているため、まずは固定化されたイメージを一新し、自由で新しい千代女の提案を行う方向性を話し合った。

また本学では、それまで美術を展示するだけでなく販売するアートショップの展開を検討していたため、千代女をモチーフとしたグッズ販売を学生自らが企画提案し行うこととなった。

学生にとっては千代女は決して馴染みのある歴史上の人物ではなかったため、まず千代女を学ぶことからスタートした。千代女が終生過ごした真宗大谷派聖興寺において、住職である中野素様から歴史的な背景や、伝わっている人となりなど講和を受け、同寺に併設されている資料館を見学した。また俳句づくりを体験するために白山市俳句協会のご指導により俳句教室も体験した。この研修は以降のプロジェクトでも実施されることとなった。

---

\* 金城大学短期大学部美術学科

その後、学生は日頃の作品制作と並行して約2ヶ月をかけて千代女の課題に取り組んだ。

コースの特性などを活かした作品は地元 JR 松任駅の駅舎内や、JR 金沢駅もてなしドームを会場としてアートショップを開催し、展示販売を行うとともに市民に魅力を発信する機会となった(図1)。

また聖興寺を会場とした「プロジェクションマッピング in 聖興寺」を毎年開催することになった。これは千代女をモチーフとした映像を境内や堂内の建築にマッピングして上映し、プロの演奏家と即興演奏によるコラボレーションも行った(図2)。



図1 JR松任駅でのアートショップの様子



図2 プロジェクションマッピングのチラシ

## II 第2期 (2017～19年)

プロジェクトを継続する話し合いの中で、「現代に合った千代女像」を発信するため「千代女のキャラクター化」を進めることとなった。おりしも全国的ではいわゆる「ゆるキャラ」が人気を博しており、熊本県の「くまモン」や彦根城の「ひこにゃん」など多くのキャラクターが取り上げられており、千代女も学生デザインによるキャラクター化をすることで親しみやすく、また認知度を上げられるのではないかと考えた。当時はア



図3 採用されたキャラクター

イドルグループのAKB48も人気があり、「キャラクターがたくさんあっても良いのではないか?」「そ

れぞれがお気に入りのキャラクターが見つけれられるのではないか？」との意見のもとに毎年6体のキャラクターを、3ヶ年にわたって合計18体のキャラクターを制作することとした(図3)。

美術学科2年生全員により千代女の勉強会を行った上でデザインを行い、ショッピングモールのアピタ松任や、千代尼通り商店街のイベントで展示し、市民から人気投票を募った。投票数の多かった作品の中から本学教員とRC会員により最終審査を行って選ばれたキャラクターは白山市の企業や商工会議所などに無償で使用できるものとして提供された。3年間で選ばれたキャラクターを印刷したクリアファイルを作製し、白山市内の小学生全員に配布され、子供達にもPRすることができた。

### Ⅲ 第3期 (2020～22年)

第2期で制作した千代女キャラクター18体を使用し、商品やイベントなどの提案を行うこととした。作品の中からは、白山市が発行するSDGsパンフレットに採用され配布された。また金沢カレーとして全国展開しているゴーゴーカレー様とのコラボレーション企画として「千代女ゴーシチゴカレー」が実際に販売されることとなった。会場としてイオンモール白山での展示も行い、多くの市民に発信することができた(図4、図5)。

22年度のプロジェクトでは、シミュレーションや架空としての提案ではなく、実際の企業や団体から実社会で使用して頂くことを前提とした依頼を募ることを企画した。このプロジェクトは本学にとっては学生が実社会と学びを結びつけることが目的の一つであり、何より千代女を広く社会へ知っていただくことが原点にあった。これを実現するため、RC所属会員に呼びかけ、関係する企業や団体などから使用の希望を募った。その結果、4団体から6案件の依頼を受け、学生は各自が1件ずつ企画提案を行った。実際にロゴマークやグッズのデザインに採用され、商品化に至った。



図4 イオンモール白山での展示の様子



図5 ゴーゴーカレーとのコラボレーション

#### IV 第4期 (2023～)

23年に白山手取川ジオパークがユネスコ世界ジオパークの認定を受けこれをテーマに作品制作に取り組むことを決定した。このジオパークについてもまずは基礎知識を得るための研修会を行うことにした。白山市からジオパークの専門員を派遣していただき、白山から日本海に至る自然や風土、地質、人の営みなど説明をいただき、その価値と意義を学ぶことができた。夏季休暇を利用して全学生が白山麓、手取川流域の要所をガイドしていただきながら実地見学し、コースごとにジオパークをモチーフとした作品制作を行った。

24年度はジオパークのキャラクターを制作することとし、前年度同様、事前研修・現地見学を経て1年生全員が制作し、白山市役所ロビーでの展示および市民からの投票を行った上で最終審査を行い、1点のキャラクターを選定した(図6、図7)。

25年度は前年度選定されたキャラクターを使用し、1年生全員によるポスターや企画提案、イラスト制作などを行った。



図6 ジオパークキャラクター  
ちゅんた



図7 獅子吼高原から鶴来地区を眺める

#### V おわりに

2014年から11年間にわたり、白山ロータリークラブとの共同事業として地域の活性化の一助として、アートが社会にできることを模索しながら取り組んできた。白山市にはまだ多くの魅力的なヒト・モノ・コトが埋もれていることが確認できるプロジェクトとなっている。しかしその魅力を多くの人に届けることは難しいのが現状である。アートにはそれを新しい角度から見直し、再発見し、提案するチカラがあると信じている。

今後一層、アートが社会から求められる役割は大きくなっていくであろう。自己表現/自己満足に止まらず、今後も学生の学びの一環として、また幅広い視野を獲得するための経験として各種団体との協働を推し進めていきたい。

# はくさんに きいろいしんかんせんがやってきた

## — 白山市での読み聞かせ活動の取り組みと新幹線の写真絵本制作 —

石野友子\*

### “The Yellow Shinkansen Comes to Hakusan City”: Picture Book Reading Initiatives in Hakusan City and the Creation of a Shinkansen Photographic Picture Book

ISHINO Tomoko

## I はじめに

金城大学短期大学部から白山の見える方角を望むと新幹線の線路高架を見ることができ、ヒューっとすべるような音とともに北陸新幹線のパンタグラフがちらりと見える。北陸新幹線は2024年3月16日に敦賀まで延伸し、以来定期運行されている。そこで、本学キャンパスからほど近いJR西日本白山総合車両所へ車両が運搬される様子に着目し、その過程を記録した写真絵本『はくさんにしんかんせんがやってきた』を2023年11月に試作し、2024年3月に完成させた。本稿では、この絵本を用いた「読み聞かせ」活動を実施し、その実践結果について報告を行うと共に、「読み聞かせ」と「鉄道」をキーワードとした白山市における一連の地域連携活動を紹介する。

また、本学キャンパス近隣には、2024年3月13日に新幹線のテーマパーク「トレインパーク白山」がオープン、多数の来場者を集めている。2025年には、電気軌道総合試験車（通称「ドクターイエロー」）の旧型車両がトレインパーク白山の敷地内に設置される運びとなった。そこで、この「黄色い新幹線」車両の運搬・搬入の様子を記録するため、写真絵本『はくさんに きいろいしんかんせんがやってきた』を制作した。本稿では、この写真絵本の制作経緯と教育・地域連携にかける思いを解説し、併せて縮刷原稿を付記する。

## II 白山市での絵本の読み聞かせ活動

### 1) 白山市立松任図書館での読み聞かせ

白山市立松任図書館では、定期的に「おはなし会」が開催されている。対象者は乳幼児、幼児、小学生であるが、保護者を含めた多様な参加者が集う場となっている。本学幼児教育学科では、2018年より毎月第一土曜日11:00から11:30まで、学生および教員が参加し、絵本の読み聞かせを実施している。活動内容は、季節や行事を踏まえて選定した図書を中心に構成されている。

---

\* 金城大学短期大学部幼児教育学科

トレインパーク白山のオープン時や10月の「鉄道の日」に関連する時期には、白山市内における鉄道関連イベントと連動し、特に「でんしゃ」に関連する絵本を取り上げた。「でんしゃ」「鉄道」「新幹線」に関する絵本は数多く出版されており、乳幼児向けのファンタジー作品から、車両の構造や地理的背景を詳細に解説した絵本まで、多岐にわたる。北陸新幹線の通り過ぎる様子は図書館からも見る事ができるため、これらの絵本は子どもたちからの人気が高い傾向にある。

また、本活動ではパネルシアターも取り入れている。「おおきなかぶ」の演目の最後に北陸新幹線を登場させたり、白山市市制20周年を記念した内容を盛り込んだりするなど、パネルシアターの特性である自由な演出を活用し、参加者が白山市に関心を持てるような工夫を凝らしている。

写真絵本『はくさんに しんかんせんがやってきた』完成後は、このおはなし会でも活用している。「でんしゃのえほん 大集合!」といったテーマ予告(写真1)を行った際には、鉄道に関心を持つ親子連れが多く集まる傾向が見られた。同書は白山市立松任図書館、石川県立図書館、金城大学図書館に蔵書されており、特に白山市立松任図書館では一般利用者への貸し出しも行われ、利用実績が確認されている。

## 2) トレインパーク白山での読み聞かせを中心とする連携活動

トレインパーク白山においては、オープン前から連携計画を策定し、様々な協働事業を実施してきた。幼児教育学科の専門性を活かした企画として、ここでも「絵本の読み聞かせ」が特に人気を博している。オープン周年イベント時(写真2)や、今年度実施した「トレパー×金城」連携企画(写真3)では、夏休み期間中に読み聞かせ会を開催し、好評を得た。

特筆すべき点として、写真絵本『はくさんに しんかんせんがやってきた』の読み聞かせにおいては、子どもたちだけでなく、むしろ大人(保護者等)が共感や関心を示す様子が多く観察された。また、同書はパーク内の5階および3階に常設展示されているが、子どもたちが自発的に展示棚から取り出して閲覧する姿が頻繁に見受けられており、展示資料としての有効性が確認されている。

3月2日の「おはなしかい」は

**でんしゃのえほん 大集合!**

松任図書館2階おはなしの一む 11:00~11:30



北陸新幹線敦賀開業(3/16)にちなみ、電車がでてくる絵本を集めました。

金城大学短期大学部  
幼児教育学科の  
学生・教員が  
読み聞かせをします。



写真1 松任図書館ポスター

写真2 トレインパーク白山ポスター

写真3 読み聞かせ

## 3) 幼稚園・こども園・保育園との絵本を通したつながり

写真絵本『はくさんに しんかんせんがやってきた』の制作後、学生の実習や将来的な保育現場での活用、ならびに子どもたちとのかかわりの一助となることを目的として、白山市内の幼稚園、こども園、保育園に本書を贈呈した。贈呈先の教育・保育機関からは、園児たちが絵本を楽しんでいるという報告や、トレインパーク白山を訪れた子どもが「(この絵本は) こども園にある」と発言する事例が確認されており、保育現場での活用が浸透していることが示唆される。

また、今年度はトレインパーク白山を訪問する園を対象に、『はくさんに しんかんせんがやってきた』を用いた読み聞かせと北陸新幹線に関する解説を行う試みを実施した。参加した園児たちから「ここ、知ってる」「（近くを）通ったよ」といった自発的な発言が聞かれ、この活動が、園児たちが自身の居住地域や身近な事象に関心を持つきっかけを提供できたものと考えられる。

#### 4) 「いいとこ白山鉄道まつり」「JR 西日本白山総合車両所」での絵本読み聞かせ企画

「いいとこ白山鉄道まつり」への参画は今年度で3回目となり、企画「てつどうとしょかん」の内容も充実してきた。本学図書館には絵本も含め鉄道関連の蔵書が多数存在するが、イベント会場での管理の都合上、展示資料は個人蔵書のみ限定した。自由に閲覧できるコーナーを設けたところ、親子連れが共に楽しむ様子や、子どもたちが自発的に手に取って閲覧する姿が観察され、参加者の関心を集めることができた。読み聞かせに関しては、今年度は会場が広大なステージイベント会場であったため、主に大型絵本を中心に選書し、マイクを用いて実施した。特に『はくさんに しんかんせんがやってきた』は、26センチ×26センチのアルバム状の大型本であるため、広い会場においても視認性が高く、効果的に活用することができた。

また、今年度はJR 西日本白山総合車両所との連携も実現し、同所主催の「一般公開」イベントへの出展依頼を受けた。ここでは、写真絵本に使用した写真を用いた「缶バッチ作り体験コーナー」や「絵本の読み聞かせ」といった企画を実施した。多くの来場者が足を止めて関心を示したものの、イベントの時間的制約が厳しかったため、じっくりとした読み聞かせよりも、絵本の中から写真を抽出して展示するなど、時間効率を考慮した展示方法や運営の工夫が必要であるという課題が認識された。

### Ⅲ 「はくさんに きいろいしんかんせんがやってきた」制作過程と解説

#### 1) 制作までの経緯

第Ⅱ章で既述の通り、『はくさんに しんかんせんがやってきた』は多様な場面で活用されてきた。トレインパーク白山への電気軌道総合試験車（通称「ドクターイエロー」）の展示計画を知った際、続編として『はくさんに きいろいしんかんせんがやってきた』を制作することを着想した。展示される車両は、従来使用されていたT4編成の引退に伴い、愛知県の「リニア・鉄道館」に展示されていたT3編成を譲り受けるものである。興味深いことに、リニア・鉄道館の最寄り駅は「金城ふ頭駅」であり、この車両が「金城ふ頭駅」から「金城大学」近隣の地へ移設されるという経緯は、地域的なつながりとして象徴的であると考えた。

#### 2) 解説

今作も前作と同様に、金沢港に到着した船舶から車両を陸揚げし、トレインパーク白山へ搬入・収蔵するまでの一連の場面を収録している。本のタイトルに含まれる「はくさん」は、トレインパーク白山、白山市、そして白山を遠望できるこの地域一帯の土地を意味する重層的な意図を含んでいる。作中では、「ドクターイエロー」の車両をあえて「黄色い新幹線」という呼称で表現した。

表紙デザインは、先頭車両のアップ写真を配置し、前作表紙の北陸新幹線と同イメージで統一感を持たせた。中表紙の写真は、金沢港大浜埠頭にて、見晴台から見た船から揚降される車両を捉えたものである。撮影時はあいにくの天候不良で白山は見えなかった。冒頭の2～3ページでは、トレインパーク白山から見える北陸新幹線や、白山の形を模した松任駅舎、そして対照的な存在として古い蒸気機関車（SL）の写真を配置した。「ドクターイエロー」の機能や、なぜ白山市内の線路を走っていないのかといった点については、子どもたちが自ら疑問を持ち、知的好奇心を持って探究することを促すため、あえて解説を控えている。4～11ページは、金沢港大浜埠頭での陸揚げ作業および陸送の様子を記録している。前作と共通のアンクルや表現を用いることで、両作品間の対比構造を意識させている。12～17ページは、トレインパーク白山前における設置作業の様子を中心に構成した。撮影時の6月の梅雨の晴れ間における芝生の鮮やかな緑色が印象的な場面である。「黄色い新幹線」という色彩に着目させることで、子どもたちの色彩への関心も喚起できるよう意図した。18～20ページでは、車両設置完了に伴う「喜び」の感情を視覚的に表現した。裏表紙には、作業完了後によく姿を現した白山の風景を配している。車両を覆っていたシートが外され、黄色い新幹線が姿を現す場面は、「サナギが蝶になったような」あるいは「レインコートを脱いだような」、といった多様なイメージを想起させるものであり、子どもたちの豊かな発想に期待するものである。

#### IV おわりに ～今後の展望～

白山市は「鉄道のまち、白山」を掲げ、「第2次白山市教育振興基本計画」では「ジオ育」「食育」「読育」の三育を推進している。絵本の読み聞かせ活動が、子どもたちを育み、人と人をつなぎ、豊かな感性を育むことにつながるよう願っている。本研究は、白山市およびトレインパーク白山との連携活動のおかげで、「はくさんに しんかんせんがやってきた」として結実し、続編となる「はくさんに きいろいしんかんせんがやってきた」の制作へとつながった。

写真撮影および写真使用に関し、白山市諸担当課をはじめ、その他関係者各位にご理解とご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。そして、これらの絵本を手にとって読んでくださる方々、さらに、新幹線に携わるすべての方々に、心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

#### 引用文献・参考文献

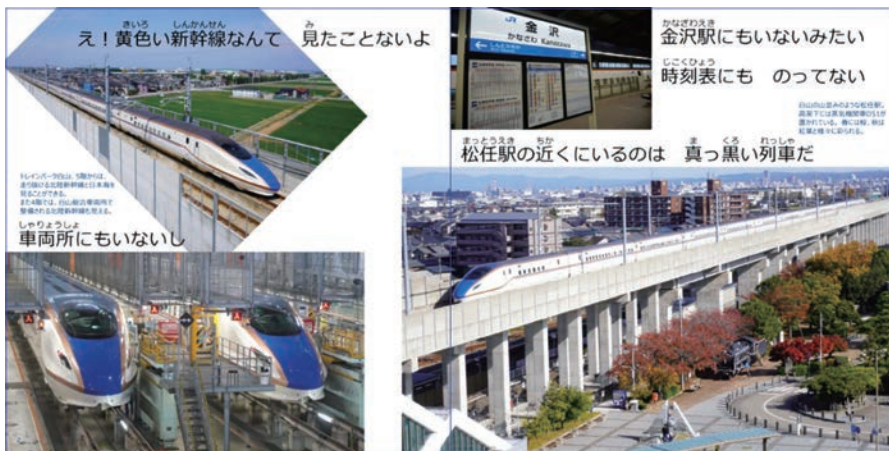
- 1) いしのともこ (2024) : はくさんに しんかんせんがやってきた. 金城大学短期大学部.
- 2) 溝口イタル (2013) : しあわせのドクターイエロー. 交通新聞社.
- 3) 鎌田歩 (2021) : せんろをまもる! ドクターイエロー. 小学館.
- 4) トレインパークにドクターイエローがやってくる! 白山市立高速鉄道ビジターセンター  
トレインパーク白山. (<https://train-park.com/event/ドクターイエロー/>) .2025.11.2取得
- 5) 白山市. 白山市教育振興基本計画. 第2次白山市教育振興基本計画.  
(<https://www.city.hakusan.lg.jp/bunka/kyoiku/1002093.html>) .2025.11.15取得



表紙：トレインパーク白山に設置されつつある車両。



①中表紙：船から揚げる車両を大浜見晴台より臨む。



②トレインパーク白山5階、4階から。 ③金沢駅新幹線ホーム、松任駅前駐車場屋上から。

石野：はくさんに きいろいしんかんせんがやってきた



④金沢港大浜埠頭に船が到着した。

⑤先頭車両 1 両のみが船から揚げて降ろされた。



⑥車輪を積んだ車が先に出発した。

⑦朝日を浴びながら、トレインパーク白山に到着。

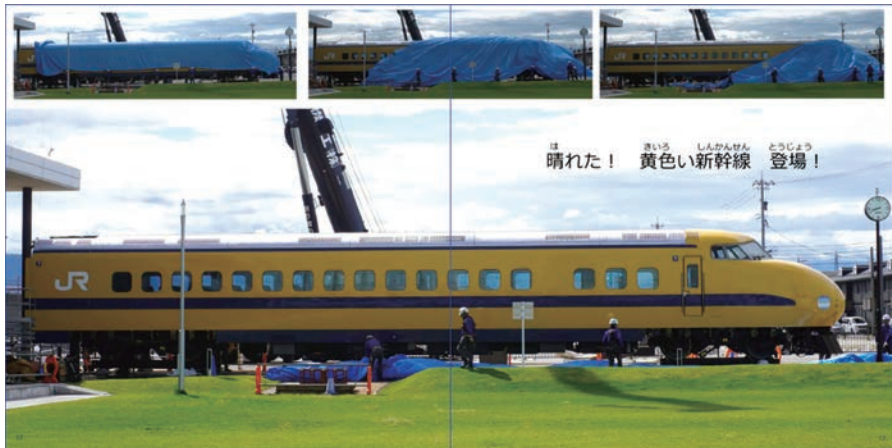


⑧日本海に沈む夕日を見ながら陸送を待つ。

⑨シートをかけたまま深夜に金沢港を出発する。



⑩ゆっくりと慎重に、西念交差点を右折する。 ⑪午前4時前にトレインパーク白山に到着した。



⑫⑬前日の雨が止んだ朝、ブルーシートを作業員が息をあわせてはずした。



⑭天井部分にパンタグラフを取り付けている。 ⑮様々な作業が5日間の休館日の間に行われた。

石野：はくさんに きいろいしんかんせんがやってきた



⑯バラスト（石）の上に線路がひかれている。 ⑰最後の数メートルを関係者一同で押して入れた。



⑱除幕式を経て一般公開された。 ⑲公開前の作業中の朝の様子。北陸新幹線が走り抜けていく。



⑳日没後、月の出と黄色い新幹線。この日は満月。 裏表紙：設置された新幹線越しに見える白山。





## 金城紀要第50号表紙デザイン案

大場新之助\*

### Design Proposal for the Cover of Kinjo Bulletin No. 50

OHBA Shinnosuke

#### 要旨

本稿では、金城紀要が第50号という節目を迎えるにあたり、筆者が担当した表紙デザインの制作過程と、その背景にある考え方について報告する。50号という重要な号であることを踏まえ、できるだけ多様な視点から検討を行うため、まずは数多くのアイデアを意識的に生み出すことから取り組んだ。これは普段の授業でも学生に伝えている「量から質を生む」発想法に基づくもので、アイデアを出す役割、形にする役割、選定し提案する役割をそれぞれ別の人格として演じるように進める方法である。こうした多面的な視点の切り替えによって、テーマを俯瞰しながら取捨選択できる点に教育的な価値を感じている。

制作過程では、まず多数のスケッチや試作を行い、そこから12案を選び出して紀要編集委員会と加藤学長へ提示した。本稿の次頁では、その12案を一覧として示し、それぞれのこだわりを一言で表したキャプションとともに紹介する。

最終的に採用されたデザイン案は、制作の終盤に生まれたアイデアであり、力みすぎないおらかな仕上がりととなった。また、今号から紀要がWEB上でも閲覧できるようになるという情報を踏まえ、表紙が小さなアイコンとして表示されても「第50号」であることが一目で分かるよう、視認性に配慮した構成とした。

素材面では、これまでの40号台とは異なる印象を与えるため、シンプルなデザインと相性の良い、ざらりとした質感を持つグレーの用紙を採用した。これは、節目となる号にささやかな変化と刷新感をもたらす意図によるものである。さらに印刷方法においては、「金城紀要」「No. 50」の文字をスミ刷りとし、それ以外の文字部分にはニスを使用した。手に取った際、光の角度によってわずかに輝くように仕上げることで、小さな驚きと特別感を表現し、記念号にふさわしい存在感を目指した。

---

\* 金城大学短期大学部美術学科

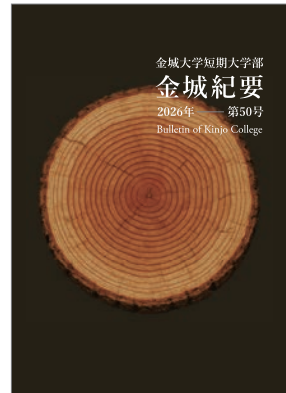
● 第50号 金城紀要 表紙案一覧



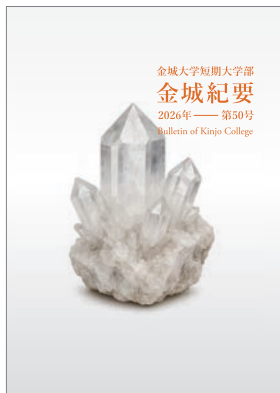
A



B



C



D

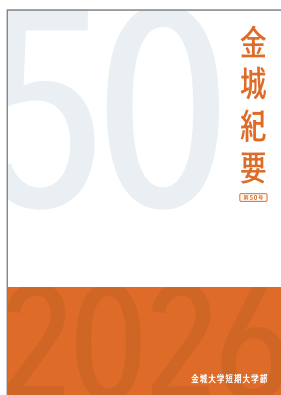


E



F

- A. フリザムの箔押しで50周年にふさわしい、めでたい感じを表現した
- B. 「0」の箇所がくり抜かれていて、見返しページに文字をレイアウトした驚きのあるデザイン
- C. 50年の歳月を感じさせる「年輪」をモチーフにした
- D. 学長の水晶コレクションを撮影、大地の結晶である水晶と、研究者の知恵が凝縮した紀要を関連付けた
- E. 「愛のある研究」をイラストで表現 ペンのインク溜まりにご注目ください
- F. アスリのアイコンのようなシンプルでキャッチーな表現



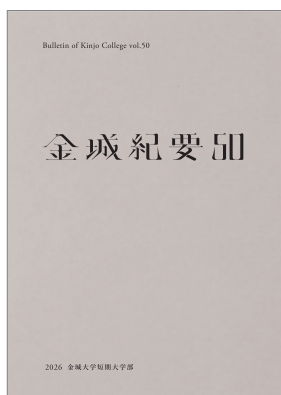
G



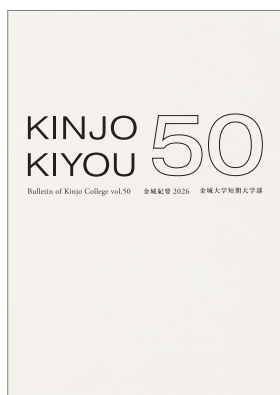
H



I



J



K



L

- G. 50と2026はニスでキラッと光る表現 シンプルさと大胆さのあるレイアウトを目指した
- H. 無骨な感じで50周年を祝うマークをデザインした
- I. 標本に貼られるラベルのようなイメージ
- J. 鋭さと緻密さをイメージしたオリジナル書体を用いて 古風なレイアウトの中に新しさと個性を取り入れた
- K. ローマ字読みにしてみると軽やかさがある
- L. 画面全体を文字が覆う大胆なデザイン 小さくても読めるのでWEB上での視認性が良い 採用案



## 金沢民景

山 本 周\*

### **Kanazawa Minkei**

YAMAMOTO Shu

解説： 石川県金沢市の住民が作り出した風景を収集し、本にまとめる活動。  
文： 伊藤宏、岩崎木綿子、酒本健実、佐藤優子、高山英男、高村美緒、  
中川俊之、西端省吾、Olivier Mignon、山本周、吉村生、頼安ブルノ礼市  
デザイン： 神子澤知弓

---

\* 金城大学短期大学部美術学科



## 対象（モチーフ）との対話を通じた、日本画制作

坂井 亜也子\*

### Japanese Painting Production through Dialogue with the Motif

SAKAI Ayako

#### I はじめに

私が日本画を制作する過程で最も大切にしていることは、写生を通じた対象（モチーフ）との対話である。対象（モチーフ）との対話とは、写生を通して色、形、線に置き換えながら、観察だけでは気が付かないような、匂いや肌触り、対象（モチーフ）を包む空気感、表情の変化などを読み取ることである。そのように写生を繰り返すことで、愛おしさ、尊敬、慈愛などの感情が芽吹き、私と対象（モチーフ）との関係は深まっていく。対話を通して芽生えた感情は実感として心に残り、写生を終えて本画に移った後も、その実感を頼りに偽りなく正直に描きたいと思っている。本著では「無花果の木」を題材とし、対話を通して芽生えた異なる感情を元に描いた2作品を挙げる。

#### II 作品解説

『蒼無花果図』 六曲一隻 紙本金地着色 (2024年制作)

この作品の無花果の木は、自宅近くにある家の庭に生えている。この木の規則正しく伸びる枝の様子や、漂う甘い果実の香り、青々と光る葉に魅力を感じた。写生を始めたのは2024年6月下旬頃からで、初夏の陽射しが照らす中、太陽に向かって伸びる枝々と大きな葉に圧倒されると共に、匂を目前に堂々とした生命力に感服した。屏風地の金は、写生時に感じた圧倒的な存在感を照らし出す。横に枝を伸ばしていたこの木には、横長の屏風の形態がよく馴染む。しっとりとした肉厚の葉や果実の質感に着目し、顔料、金泥、墨を用いて描いた。

『余香』 1900×1800mm 雲肌和紙、染料、墨、天然顔料、金箔 (2025年制作)

この作品は、『蒼無花果図』とは異なる木であり、通い慣れた道路脇に生えている。晩秋の匂が過ぎた頃、無造作に伸びた枝から生える葉には、瑞々しさを残したものと、枯れかけ色が変わっていくものが混在している。匂を終えて静かにその年の役目を終えたかのように散っていく姿を眺めていると、慰労と賞賛の気持ちが湧き、あたたかな気持ちでその姿を写そうと決めた。終わりを受け入れているようなその姿に、一見切なさを感じるのだが、来春の芽吹きに期待をするような明

\* 金城大学短期大学部幼児教育学科

坂井：対象（モチーフ）との対話を通した、日本画制作

るさも感じられるよう、天然顔料や金箔を用いて鮮やかさや輝きを取り入れ描いた。果実は少なくなっているが、その葉や枝から僅かに甘い香りが漂っていることから、『余香』と名付けた。



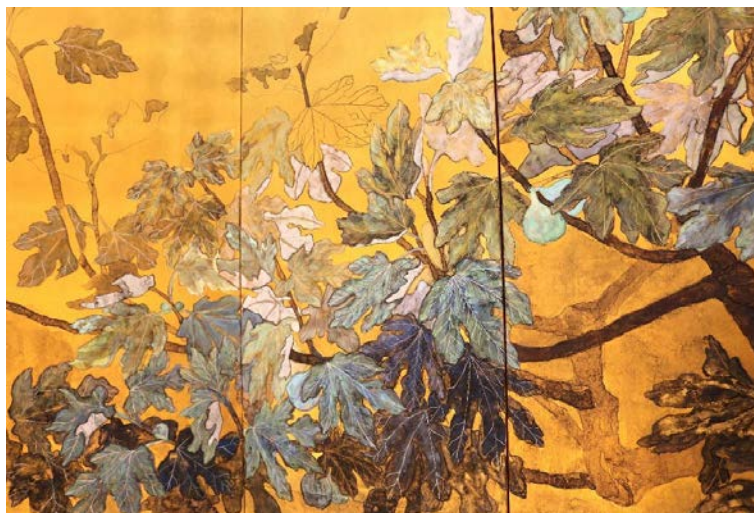
蒼無花果図

Blue Figs

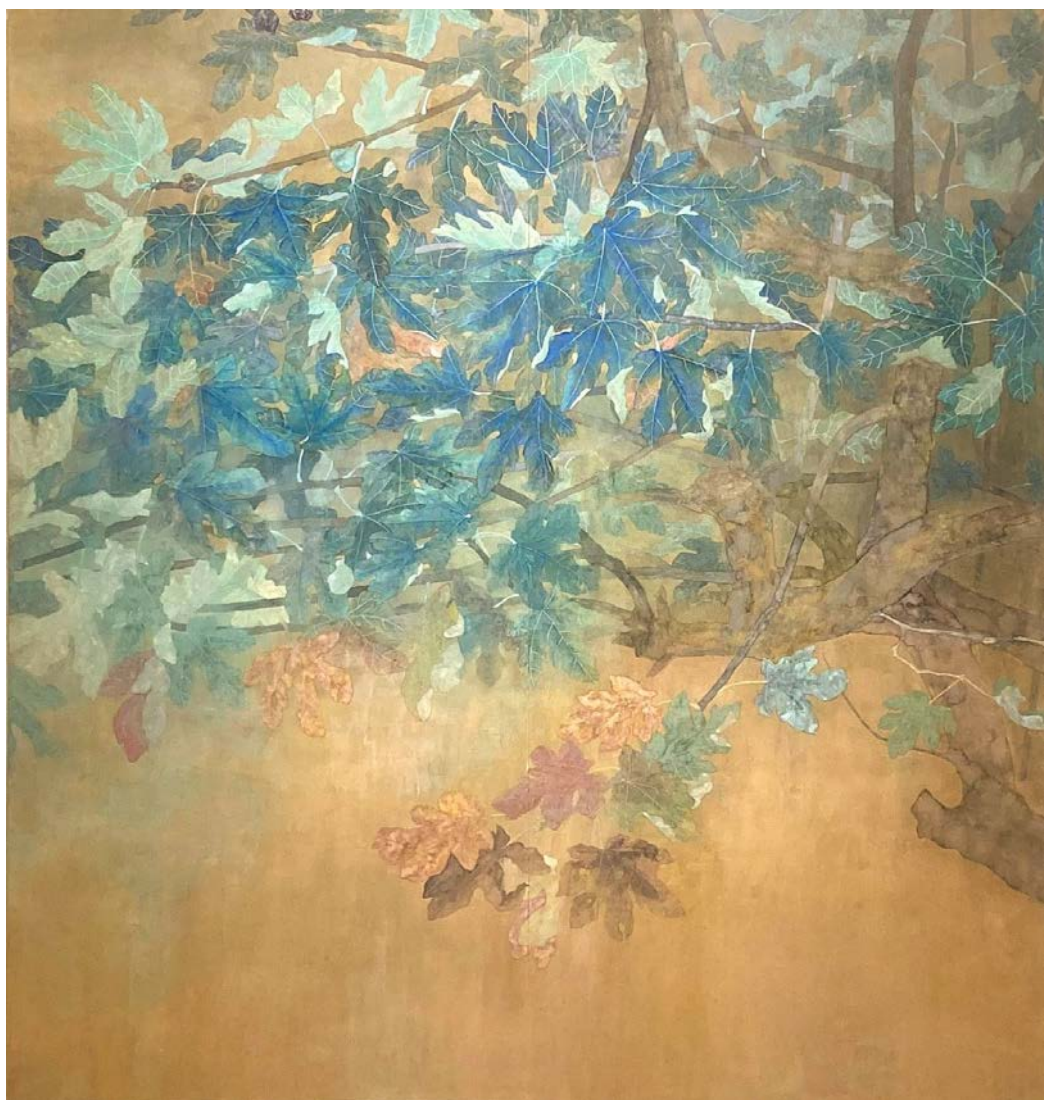
六曲一隻

紙本金地着色

2024



「蒼無花果図屏風」部分



余香

The scent lingers

1900×1800mm

雲肌和紙、染料、墨、天然顏料、金箔

2025



# 地域資源発信における機能マンガと AI 支援

## — 概念的枠組みと初期分類 —

新井 浩<sup>\*1</sup>・井戸 健敬<sup>\*2</sup>・瀬戸 就一<sup>\*2</sup>

### Functional Manga and AI-Assisted Support for Regional Resource Communication: A Conceptual Framework and Preliminary Classification

ARAI Hiroshi, IDO Takehiro, SETO Shuichi

#### 要旨

「機能マンガ」は、地方の偉人紹介や地域の魅力発信をはじめ、教育、行政手続き、福祉、防災、地域振興などを対象とし、情報伝達を主目的とする表現であり多くの可能性を持っている。しかし、その制作フローは制作者や現場の経験に依存する 경우가多く、体系的な整理や共有は十分に行われてこなかった。行政、研究者、教育機関など多様な関与者が共通の方向性を持つためには、合意形成を支える共通の基準が求められる。本研究は、機能マンガを地域発の情報表現として位置づけ直すことを目的とし、個人の感性に依存しないチーム制作および現場活用に耐える実践的モデルの基盤構築を目指す。本稿では、機能マンガの事例を収集・整理してジャンル分類を行い、作品内の情報量を可視化することで、今後のデータベース化に向けた方法論を提示する。

#### I はじめに

日本では近年、地方都市の魅力発信と地方創生が大きな課題となっている。東京一極集中が続く中、各地域では若年層の定着を視野に入れた地域ブランディングが模索されている。地域の物語性を活かしたコンテンツツーリズムは、この二十年で定着し<sup>1)</sup>、地域を舞台としたアニメーション映画はその代表的な事例である<sup>2)</sup>。一方で、大規模な企画に限らず、比較的小規模な予算で地域の価値や行政手続きなどの情報を丁寧に伝えるマンガも数多く制作されている。マンガは娯楽的表現であると同時に、図や絵を用いて情報を分かりやすく伝えることに適した情報伝達手法である。

竹宮 (2010) は、従来の娯楽的マンガとは異なり、広告マンガや学習マンガのように「機能を最大限に活用し、説明効果を高め」「ニュートラルに情報を整理・伝達する」作品群を「機能マンガ」

\*1 金城大学短期大学部美術学科

\*2 金城大学短期大学部ビジネス実務学科

と定義し、その独自の可能性を指摘した<sup>3,4)</sup>。機能マンガの対象領域は、地方の偉人紹介や魅力発信にとどまらず、教育、行政手続き、福祉サービス、防災、地域振興など多岐にわたる。

本研究は、この「機能マンガ」の概念を理論的基盤としつつ、教育現場での制作実践を踏まえて再構成することを目的とする。具体的には、情報を正確に伝えることと読みやすさを両立させる制作プロセスを整理し、実制作の現場で活用可能な枠組みを提示することを目指す。

## II 機能マンガ制作の意義と合意形成の課題

機能マンガには学習用途など比較的商業化しやすい領域がある一方で、行政、福祉、防災、地域振興といった分野では収益化が難しく、教育機関が制作に関与するケースが多い<sup>5)</sup>。こうした取り組みは、成果物の社会的活用にとどまらず、制作者が報酬を得ながら実地の制作経験を積めること、地域を題材とした能動的な学習機会となること、さらには大学等の地域貢献につながる点で、実務と教育の双方において意義が大きく、これまで



図1 機能マンガの例

で金城大学短期大学部でも機能マンガの制作に取り組んできた(図1)。しかしながら、制作フローは現場ごとの経験に依存しがちで、体系的な振り返りは十分に行われていない。制作現場では、監修者や行政担当者と作画を担う制作者との間で意図や動機が共有されず、進行が停滞することがある。原案側は情報を多く盛り込みたいと考える一方、学生や若手制作者は物語性や絵柄の魅力を重視しやすく、焦点が一致しにくい。この背景には、作品に含める情報量の基準が共有されていないこと、個人の力量に依存した制作では限られたページ数に限界が生じやすいこと、読者の前提知識が多様であることなどが挙げられる。したがって、チーム分業と合意形成を支える共通の物差しが求められる。

本研究の中心的な問いは、機能マンガに含まれる情報量を定量的に測定し、プロジェクト進行の共通基準として提示できるかという点にある。将来的には、プロット制作段階においてページ数と情報量の関係を調整する工程に生成 AI を組み込み、制作支援に活用することを視野に入れている。

## III 機能マンガの分類と情報量の可視化

1) 本研究において機能マンガを整理・比較するためには、今後のデータベース構築を見据えた観点からあらかじめ定めておく必要がある。そこで筆者は、手元にある機能マンガ関連作品30冊を対象として、試行的に分類項目および計測項目を設定し、予備的な整理を行った(表1)。これは、将来的により多くの事例を蓄積する際にも活用可能な枠組みを準備することを目的とするものである。なお、表1は、分析対象として構築したデータベースの一部を例示的に抜粋したものであり、

表1 機能マンガの分類

No.	発行	分類1	タイトル	分類2	表現形式	教養トーン	本文ページ数(p)	解説ページ数 (p)	値段 (yen)	作者	サイズ(mm)
1	小学館	学習漫画	日本の歴史 源平の戦い 6巻	偉人・人物紹介	物語型	落ち着いた	160	42	913	あおむら純 (マンガ家)	150x220
2	スポーツ庁	教養マンガ	スポーツで地域活性化 熊本国際車椅子テニス大会	地域・組織の取り組み	物語型	感動	60	10	無料	小林円美 (学生)	148x210
3	中央公論新社	教養マンガ	ドミトリーともきんす	偉人・人物紹介	対話型 プレゼン型	落ち着いた	128	26	1320	高野文子 (マンガ家)	180x257
4	マガジンハウス	教養マンガ	行動経済学まんが ヘンテコノミクス	学問・理論紹介	ショートコント型 プレゼン型	ギャグ	160	24	1650	高橋秀明 (アートディレクター・イラストレーター)	180x235
5	厚生労働省	実用マンガ	これってあり?知って役立つ労働法Q&A	社会課題・啓発	ショートコント型 導入型	ユーモア	36	18	無料	未記載	148x210
6	石巻市/講談社	教養マンガ	マンガでわかる石巻・SDGsを学ぶ本	社会課題・啓発	プレゼン型 対話型	ユーモア	40	8	無料	Muslim(マンガ家・イラストレーター)	148x210
7	農林水産省 中国四国農政局	教養マンガ	日本の食糧・農業の現状 vol.1	社会課題・啓発	体験型 プレゼン型	優しい	28	8	無料	藤田真希 (学生)	148x210
8	石川県六水町	学習漫画	マンガでわかるさとの偉人 不屈の武将 良 運慶	偉人・人物紹介	物語型	感動	116	10	無料	テハラケミ (マンガ家)	128x182
9	宝達志水町	実用マンガ	宝達志水町 移住・子育て編	地域の魅力発信	物語型 体験型	落ち着いた	36	5	無料	Harina Taku (同人)	148x210
10	石川まんが祭り実行委員会	実用マンガ	熊登渡漫紀行	地域の魅力発信	物語型	感動	38	12	無料	坂本祥世 (マンガ家)	148x210

全件を掲載したものではない。機能マンガは、その概念や範囲が必ずしも明確に定義されていない。そこで本研究では、当初から厳密なジャンル区分を設定するのではなく、実際の作品を収集したうえで、内容や特徴に応じた自由記述的なタグ付けを行った。付与されたタグは、後に集約・整理することで、ジャンルや方向性の傾向を抽出している。分類1では、「機能マンガ」を大枠とし、その目的や想定読者に応じていくつかの下位区分を設定した。具体的には、子どもの教育的学びを主な目的とする「学習マンガ」、大人の知的好奇心や文化的理解を促す「教養マンガ」、生活や職業に役立つ知識・技能の習得を目的とする「実用マンガ」、そして公共的な情報伝達そのものを主目的とする「機能マンガ」に分類した。分類2では、各作品が扱う内容の傾向に着目し、テーマや題材に基づいておおまかな内容分類を行った。

さらに、表現形式についても分析を行い、プレゼンテーション型、物語型など、語り口や構成の違いを整理した。また、表現トーンについては、ギャグの表現、ユーモア路線、感動を喚起するタイプなど、読後感に関わる要素を分類した。加えて、判型、価格、ページ数、制作体制といった書誌的・制作的要素についても記録している。

2) 次に、各作品に含まれる情報量およびその配置傾向を把握するため、ページ数、コマ数、吹き出し数、文字数といった要素を計測した(表2)。本表は、分析方法を示すために、対象作品のうち一例について試行的に計測を行った結果を示したものである。

これらにより、一つのマンガの中にどの程度の情報が含まれているのか、またそれらがどのような分布で配置されているのかを定量的に捉えることを試みた。

図表におけるグラフ左部の英字表記は、作品内における「印象的なコマ」の出現傾向を計測したものである。具体的には、コマが大きく感情表現が強く表出しているものをL\_E\_high、コマは大きい感情表現が比較的弱いものをL\_E\_low、情景描写や説明を主目的とした大きなコマをL\_Cと分類した。本研究では、原稿横幅いっぱい、かつ縦が原稿高の3分の1以上を占めるコマを「大コマ(L)」と定義し、それ以下のサイズを「中コマ(M)」とした。またSはセリフを伴わないコマを指し、オノマトペや感嘆詞のみで構成されるものも含めている。

文字数については、登場人物が発話するセリフと、ナレーションや説明文とを区別して計測した。

表 2 文字とコマ等の計測

シーン 番号	L_E_high	L_E_low	L_C	M_E	M_C	S	ページ数	コマ数	吹き出し	四角 (モノローグ)	文字数 (セリフ・心の声)	文字数 (情報・説明)	オノマトペ	描き文字	
1		1					8	2+1/3	9	2	0	8	0	15	0
2					1			1+1/3	8	13	0	201	0	0	0
3	2						2	3+1/3	21	22	6	232	219	16	3
4								1+2/3	9	13	3	146	64	0	0
5	1						3	2+1/3	13	21	0	223	0	12	0
6	1			1	1		1	3+1/3	18	31	2	359	41	4	0
7			2					2+1/9	9	13	7	167	119	0	0
8		1		1			14	3+8/9	24	16	2	153	62	23	0
9	1		1	1			3	2+5/6	15	21	5	299	125	8	0
10			1				2	1+1/6	7	0	6	0	175	0	0
11						2		1+1/3	8	9	0	162	0	4	0
12			1					2/3	3	3	1	46	4	0	0
13		4					3	2+2/3	12	14	4	146	112	0	0
14			2				3	2+1/3	12	12	3	127	76	2	0
15			3				3	3	15	13	6	146	247	5	0
16				2			3	2	14	17	0	229	0	6	2
17				1			5	2	14	9	0	202	0	4	0
18							1	1	5	5	3	63	72	0	0
19	1		2	1			11	3+1/2	17	15	1	86	33	10	0
20	1		1	1			2	2+1/2	12	19	0	236	47	6	0
21	1		2	2			1	3	16	17	5	221	279	0	12

中には詳細な説明内容をセリフ形式で提示している作品も存在するが、本研究では「話者の発話として提示されているか」「情報を列挙・説明する文として提示されているか」という基準に基づいて分類した。さらに、描き文字については、手書きによるセリフに限らず、物語進行には直接関与しないものの、キャラクター性の強調や状況理解を補助する要素として機能するため、別項目としてカウントを行った。

#### IV 分類・計測結果からみる機能マンガの傾向

本研究では、収集した30冊の機能マンガを対象に、五つの観点から分類・整理を行い、いくつかの共通した傾向を確認した。

1) 題材としては、偉人や人物紹介、地域の取り組みを扱った作品が多く、表現形式としては物語型やプレゼンテーション型が中心であった。また、機能マンガに分類した作品の多くは、無料配布を前提とした小型冊子であり、学生や行政による制作事例が目立った。この点から、機能マンガが教育や啓発を主目的として制作されていると判断できる。ラベリングおよび作品分類の結果をもとに、本研究では各題材を「学習」「教養」「実用」「機能」という四つの方向性に整理した。たとえば、「偉人・人物紹介」や「歴史」を扱う作品は、教育的学びに資する点から「学習マンガ」と位置づけた。また、「学問・理論の紹介」は、知的好奇心や文化的理解を促す点から「教養マンガ」とした。さらに、「職業紹介・キャリア」や「知識・技術の伝達」は、生活や仕事に直結する情報を扱うことから「実用マンガ」と整理し、防災マニュアルや行政広報、福祉・医療制度などを題材とする作品については、公共的な情報伝達そのものを目的とする「機能マンガ」と位置づけた。

さらに、機能マンガに用いられる題材は公共性が高いものが多く、過度に強いエンターテインメント性を付与することが難しい。そのため、作品の魅力を高める手法としては、物語的演出を強調するよりも、絵柄や表現における可愛らしさや親しみやすさ、読みやすさといった要素を前面に出

すことが有効であると考えられる。作品の長さや制作主体にも一定の傾向が見られた。比較的ページ数の多い作品では物語型が採用されることが多く、プロのマンガ家や企業案件によって制作される例が目立つ。これらの作品は内容に厚みがあり、読み応えのある構成となっている。一方、学生による制作では、制作期間やページ数の制約から、プレゼンテーション型や導入型の構成が多く見られた。ただし、今後、学生チームがAIの支援を活用することで、より長尺の物語マンガを制作できるようになれば、新たな表現や展開が生まれる可能性がある。

ジャンル別に見ると、歴史や科学のように読者が一定の前知識を持っている分野は手に取られやすく、商品化や展開もしやすい傾向がある。一方で、地域情報などのニッチな題材は、読者の関心を喚起しにくいという課題を抱えている。このような題材においては、どのように読者の興味を引き、主体的な読書へと導くかが、今後の重要な検討課題である。

2) 次に、事例研究としてno.2「飯塚国際車椅子テニス大会」と、no.6「石巻・SDGsを学ぶ本」の二作品を取り上げ、各作品における情報量およびその分布の傾向を分析した。

no.2は、市の取り組みを広報することを目的とした教養マンガに分類され、全60ページからなる物語型・感動型の作品である。全文字数は5,259文字であり、比較的ページ数の多い構成の中で、感情表現や情景描写を重視した語りが展開されている。一方、no.6も同様に市の取り組みを広報する教養マンガとして分類されるが、全40ページ・全7章構成のプレゼンテーション型・対話形式を採用し、ユーモアを基調とした表現が特徴である。全文字数は8,597文字と、no.2よりもページ数が少ないにもかかわらず、文字情報量は多い。

このように、同じ行政施策を題材とした教養マンガであっても、物語型の作品ではページ数が多くなる一方で文字情報量は抑えられ、プレゼンテーション型の作品ではページ数が比較的少なくても文字情報量が多くなる傾向が確認された。この二作品は、「物語によって伝えるマンガ」と「プレゼンテーションによって伝えるマンガ」という対照的な情報提示の方法を示しており、機能マンガにおける情報量配置と表現戦略の違いを検討する上で、有効な比較事例である。

図2および図3は、各作品における印象的なコマの分布を可視化したものである。横軸はエピソードの進行を示しており、右に進むにつれて物語が展開していく。両作品を比較すると、「大きなコマ」の役割および「沈黙のコマ (S)」の位置づけが、全体構成に大きく関与している点に明確な差異が認められる。

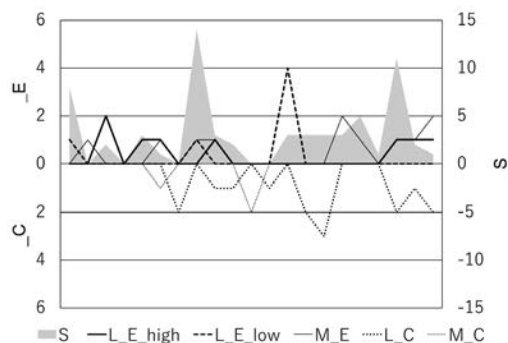


図2 no.2の印象的なコマの分布

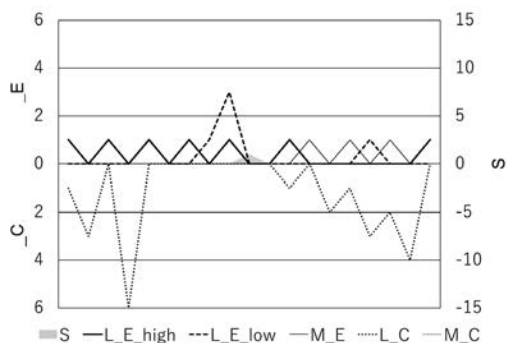


図3 no.6の印象的なコマの分布

No.2「飯塚国際車椅子テニス大会」では、沈黙のコマ(S)が物語の流れの中に積極的に組み込まれており、感情の高まりや余韻を担う重要な構成要素として機能している。特に、感情表現を強く伴う大コマ(L\_E\_high)に加え、中程度のコマであっても表情や動作を細やかに描写した感情表現のコマが随所に挿入されており、読者の感情移入を促す構成となっている。一方、No.6「石巻・SDGsを学ぶ本」では、大きなコマが多用されているものの、その多くは感情表現ではなく、状況や背景を整理して示す情景・説明用の大コマ(L\_C)である。これらのコマは章ごと、あるいは話題の転換点に定期的に配置され、情報理解を支える視覚的な区切りとして機能している。また、沈黙のコマはほとんど見られず、ほぼすべてのコマに説明文や対話が付随している点から、連続的かつ効率的な情報提示を重視した構成であることが分かる。

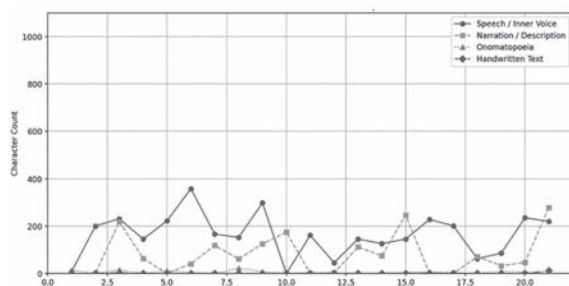


図4 no.2の文字数の分布

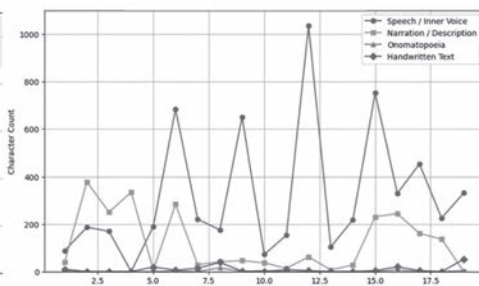


図5 no.6の文字数の分布

図4・図5は、各作品における文字数の分布をシーン単位で可視化したものである。

No.2では、セリフの文字数が全体に比較的均等に分布しており、説明文は物語の節目に限定して配置されている。物語型作品では、情報伝達と同様に感情表現が重要な役割を担っており、物語のクライマックスにおいて感情が高まる場面では、あえて文字数が抑えられていることが確認できる。

一方、No.6「石巻・SDGsを学ぶ本」では、セリフおよび説明文の文字数が頻繁に大きなピークを示しており、シーンごとに集中的な文字情報が投入されている。沈黙のコマはほとんど見られず、対話や説明による連続的な情報提示を重視したプレゼンテーション型の構成である。ただし、大量の情報を提示する前後には文字数の少ないコマが配置されており、読者の理解を助けるための「間」や、マンガ的なリズムが意識的につくられていることがうかがえる。

## V まとめ

本研究では、機能マンガを対象として、分類・計測・可視化という観点から基礎的な整理を行った。まず、30冊の作品を収集し、題材・目的・表現形式・表現トーンなど複数の観点から分類を試行した。その結果、「学習」「教養」「実用」「機能」という四つの方向性に整理でき、今後データベース化を進めていくためのジャンル分けおよびタグ付けの方針を示すことができた。

またページ数や文字数といった量的指標に加え、コマの大きさ、感情表現、沈黙のコマといった構成要素を計測し、マンガにおける情報量の分布や流れを可視化する手法を提示した。事例研究として取り上げた二作品の比較からは、同じ行政施策を扱う教養マンガであっても、物語型とプレゼ

ンテーション型では、情報量の配置、コマ構成、沈黙の扱いに明確な違いがあることが確認された。

今後は、情報量の計測対象をさらに増やし、分析の精度を高める必要がある。また、可視化された構成や情報配置が、実際に有効なマンガ表現であるかを検証するため、作品評価や読者反応を含めた検討も求められる。

## 謝辞

本研究は、JSPS 科研費（課題番号：25K15603、基盤研究（C））の助成を受けて実施した。

## 参考文献

- 1) 谷村 要「コンテンツツーリズムにおける「コンテンツ化」を起動させるリアルな構成要素—「物語消費」・「キャラ」論からの理論的検討—」『大手前大学論集』第22巻, pp.63-80, 2022.
- 2) 五十嵐 大介「アニメ聖地巡礼者の全体像把握に関する研究—大規模インターネット定量的調査から—」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』第39巻, pp.80-85, 2024.
- 3) 小川 剛・都留 泰作「『機能マンガ』の構築に向けて—神戸大学との共同研究〈アスベストマンガ制作〉を通して—」『京都精華大学紀要』第39号, pp.75-101, 2011.
- 4) 竹宮 恵子「『機能マンガ』の創作と提言」『21世紀倫理創成研究』第5号, pp.36-47, 2012.
- 5) 竹内 美帆・三上 功「実践的なマンガ制作の教育効果—地域連携としての「中山久蔵物語」事業の事例から—」『星槎道都大学紀要』第6号, pp.57-70, 2025.



## 天然藍の灰汁発酵建ての記録 (2)

権田 宜子\*

### Record of Lye Fermentation with Natural Indigo (2)

GONDA Yoshiko

#### 要旨

藍染めの灰汁発酵建てについては、紀要22号と23号で記録として残し、その後については23年を経て令和4年に紀要47号にまとめた。そして令和7年9月に再び藍を建てることから、この機会に天然藍を使用した灰汁発酵建ての方法について改めてふれ、同じ方法や材料で仕込んでも発酵の仕方が毎回違う藍の様子について詳細に記していく。

#### I はじめに

藍については、糊を型紙に置き重ねて染めてみたのが最初の作品であるが、3回目の出品である第39回日本現代工芸美術展では、藍で斑雲絞りにした上に波を抜染糊で色を抜き、その白く抜けたところに化学染料で色彩を入れる作品を発表した。一般的に藍染め作品は藍色のみで、藍以外の色を入れないのが暗黙の了承のようであったが、私はどうしてもそこに色彩が欲しくて作品を仕上げてみた。結果として工芸展に入選したことで、この表現について了承を得られたように感じた。そして、そのとき日本現代染織ドイツ展(2000年)への選抜があり、自作が30数名の中に入り、初めての海外としてドイツでの展示の機会を得た。選抜にあたったドイツ人であるメンヒェングラートバッハ美術館の館長は、今回の藍の表現が他との違いを感じたことを後ほど中井貞次先生(日本芸術院会員)からお聞きした。それが自信となり、今日まで藍を基にした表現技術を研鑽してきた。ただ、藍を扱うには簡単そうに見えて難しく、毎年同じ色を出してくれるとは限らないことから、今年度の藍染について仕込みから完了まで、天然藍の灰汁発酵建ての経過についてのすべてを記録していくことにした。

---

\* 金城大学短期大学部美術学科

## II 準備

藍には木灰が重要な役目となっており、その時の発酵から発色に至るまで影響が大きい。木灰については堅木が良質の灰汁と言われているが、この堅木としてはブナやクヌギ、ナラというブナ科の落葉性の広葉樹が良質と言われているが、樹木を伐採して木炭や木灰を製造する業者は限られており、ちなみに前は静岡の木灰を使用したが、今回は藍熊染料店から取り寄せ、四国産の堅木（クヌギ等）から出た木灰であるとのことであった。大量に使用する藍染めの業者においては、土佐清水市の鯉節工場で出る木灰を使用しており、姥目樫（うばめがし）という備長炭の材料でもある木の灰で安定供給をしている。

前は田中直染料店から木灰を購入し、灰の材料はクヌギ・ナラ類と明記されており、木灰汁 pH 測定値も pH11.8～12.2 と強いアルカリ液が採取できる結果となったが、今回は下記の表にあるように木灰汁 pH 値が全体的に低くなったため、それが藍の発酵から発色に至るまでどのように影響していくのかを記していきたい。

令和 7 年度・4 年度 木灰汁 pH 測定値

採取番号	R7 pH 値	R4 pH 値
No 1	pH 11.6	pH 12.2
No 2	pH 11.59	pH 12.1
No 3	pH 11.50	pH 11.8
No 4	pH 11.38	pH 11.8
No 5	/	pH 11.9
No 6		pH 11.8



藍を仕込むためには、木灰汁の他に、薬（すくも）・生石灰・ふすま・みりん・清酒が必要であり、今回は一部につき商品の銘柄を変更した。

みりんと清酒についての糖分や発酵菌が発酵にとっては栄養となり、藍の還元を促す重要な役目となる。みりんについて、これまでは岐阜の白扇酒造であったが、今回は愛知の角谷文次郎商店「三納味醂」の本みりんを使用した。有機もち米と有機米麴、有機米焼酎で米の旨味を発酵の力で引き出されており、糖度が濃厚となっている。

清酒については地元白山市鶴来地区にある蔵元・菊姫の「山麩仕込」を使用した。藍建てには学校の水を沸かして木灰汁に投入しており、やはり地元の白山手取川ジオパークによる自然の伏流水からの清酒を藍の発酵に補い利用するのは、理にかなっているのではないかという考えである。特に山麩仕込みを使用するのは、製造工程で乳酸菌をもとに麴の力でデンプンが糖に変化し、その糖から酵母が働きアルコール発酵した清酒で、有用菌の力が多いことから選んでみた。この菊姫は日本酒の旨さは山麩からくるものとして、かたくなに山麩仕込を守っている地元の老舗であり、このような酒造会社の商品を大切に使いたい。

### Ⅲ 藍の発酵

#### 1) 仕込み作業

令和7年9月11日 気温29℃

今年度も薬12kgで藍を仕込むことにした。形山榮依子先生（現代工芸美術家協会 本会員）のご息で藍染め作家の形山晃士朗氏によると、薬が10～11kgくらいであると過去にも建ち上がりが弱く、維持するのにも不安定な様子が見受けられたことから、安定した発酵を求めるのであれば12kgを勧められた。

これを仕込み初参加の大場新之助先生（金城大学短期大学部 美術学科）と一緒に金槌で粉碎してタライに入れ、木灰汁 No4と薬を混ぜて柔らかくしておいた。1時間後、タライから取り出した薬をボール状にまとめ、硬い場合には木灰汁 No4を少しずつ加えながら表面に艶が出るまでよく練る。その薬ボールを少し割って、藍甕の中に入れて積み上げていく。多少崩しておいた方が後から攪拌棒で混ぜやすいからである。

木灰汁 No3/20ℓ、木灰汁 No2/40ℓの合計60ℓを4回ほどに分けてステンレスの大鍋に入れ、45℃まで温めて投入する。薬のボールを攪拌棒で崩しながらよく攪拌する。

本みりん 2合 (360cc)、清酒 2合 (360cc)を投入し、攪拌してpHを測定する。

pH9.5 ※これを初発のデータとする

木灰汁のpHは昨年より低めであったが、今回の藍液はpHがさらに低めであった。ここでは、前回とその前の回と同様に、生石灰を入れて仕込みから藍液のpHを上げたりせず、これを初発のデータを今回の基準とし、後は藍が発酵してくるのをひたすら待つことにする。

#### 2) 第1日目

令和7年9月12日 気温28℃ 室温25℃

まだ、薬を感じさせる生き生きとした匂いがする。液面はなだらかであるが、小さな泡が所々に残っている。

pH8.1 31.6℃ (液温)

仕込んだ翌日は、清酒やみりんという発酵を促すものに加えてふすまを投入して、藍の栄養価を高めることをする。ふすま3合を片手鍋に入れて、そこに木灰汁 No1を入れてよく混ぜる。弱火にかけ、ゆっくり木ヘラをまわしながらふすまが柔らかくなり、液面がトロットとするまで炊く。この時沸騰させない頃で糊化してきたら、いったん火からおろし、そこに生石灰1合を少しずつ小分けして入れ、木ヘラで底からよく混ぜる。これを藍甕に投入し、かき混ぜ棒で攪拌する。

pH8.6 30.1℃ (液温)

pHが下がってきて発酵が進んでいるが、ふすまという栄養で発酵させるとともに、生石灰を加えることでアルカリ度を上げておく。この作業は、一般的には元石（もといし）と呼ばれている。前回も説明したが、仕込み一日でここまでする方法が一般的なようだが、筆者は形山榮依子先生から藍の仕込みを教えていただいた方法に添って2日間に分けて行っている。

液の表面は黒褐色で、半透明な泡が浮遊している。攪拌後しばらくすると、紫の斑点が液面に認められる。

PM5:00 攪拌して pH を測定する。

pH8.8~8.7      29.8℃ (液温)

攪拌後には、黒褐色で泡状の浮遊物 (20cm × 15cm) が消えないで残っている。液の表面も平坦でなく、泡の粒が残り粘りを感じるようになってきた。仕込みから藍が建ち上がるまでは、朝と夕方の 2 回攪拌する。建ち上がりさえすれば、一日 1 回混ぜることになる。

### 3) 第 2 日目

令和 7 年 9 月 13 日 気温 31℃ 室温 26℃

朝、藍甕の蓋を開けると液面には紫色の斑点が点々と浮かんでいる。昨日、混ぜた後にできた黒褐色の泡がなくならずに残っていた。

AM10:40 攪拌して pH を測定する。

pH8.7      28.0℃ (液温)

攪拌しているとだんだん棒が重くなり、藍の液が平坦なさらっとした最初に比べるとトロっと粘りが出てきたように感じる。混ぜた後の液の表面は、泡が消えずにはっきり残ってデコボコして、液の色も黒褐色になってきた。

PM5:30 攪拌して pH を測定する。

pH9.4      24.5℃ (液温)

朝同様に蓋を開けると皮膜が液の表面全体を覆っているが、それが銀色から紫色が加わり変化してきた。黒褐色の液は午前とあまり変化がなく、細かい半透明な緑色の泡が広がって高さはない。発酵が進んでくるのをひたすら待つ。

### 4) 第 3 日目

令和 7 年 9 月 14 日 気温 26℃ 室温 26℃

発藍の兆しとして、液面に所々かすかに流れるような紫色の膜が見られるようになった。紫の皮膜はぽつんと点で浮かんでくるが、やがて面となって液全体に広がっていく。

AM8:55 攪拌して pH を測定する。

pH8.3      27.8℃ (液温)

混ぜている最中に攪拌棒が非常に重くなってきて、液の色も茶色になってきた。この茶色については藍液が発酵し還元が進んでいることである。その証拠に、混ぜた後に液が静かになると空気に触れることで茶味から元の黒褐色に戻る。このことは発酵が進むと顕著になる。前日より泡が液面に残るようになってきたが紫金色よりも緑色の泡が多く、大きさも 15cm × 20cm と小さくて高さも低い。

PM6:30 攪拌して pH を測定する。

pH8.2      27.8℃ (液温)

今日は曇りで気温が上がらず涼しく感じられた。蓋を開けると液の表面全体を覆っている紫金色の皮膜の厚みが増してきているような気がする。発酵が進むと pH は低下し始めるが午前とあまり

pHの値に変化がなく、攪拌しても泡が小さい。発酵の兆しがあるので、慌てずさらに進行して行くのをひたすら待つ。

## 5) 第4日目

令和7年9月15日 気温31℃ 室温26℃

昨日より液面の皮膜がさらに紫金色になって全面に広がり、厚みも増してきたようである。

AM10:45 攪拌してpHを測定する。

pH8.1 27.6℃ (液温)

攪拌し始めてからしばらくすると棒がぐっと重たくなり、昨日とは時間的にも重さが早く来た。混ぜた後の液面には、青紫色の泡が残るようになってきた。表面にもポツポツと起伏が消えずに残ってpHも低下してきており、順調に発酵が進んできている。

### 【中石入れ】

午前の攪拌時にできた青紫色の泡がしっかり残っており、液面を見ると気泡が大小あり、消えずに存在している。泡立ちの様子から発酵が進んできた兆しがあり、ここで中石入れをすることにした。中石とは発酵の途中で生石灰を入れることで、藍の微生物は増殖しながら酸素を分泌し酸化が進行するので、この時期に生石灰を投入しアルカリ化させることで発酵を安定させ腐敗を防ぐ要素となる。

PM4:30 攪拌してpHを測定する。

pH8.0 27.6℃ (液温)

木灰汁No1をステンレスの鍋に入れ、そこに生石灰1合を投入する。それを火にかけ木ヘラをゆっくり回しながら弱火で温める。注意しなくてはいけないのは、沸騰させないことである。湯気が上がってきたら火から下ろし、藍甕の中にゆっくり入れる。投入後攪拌してpHを測定する。

pH10.5 28.5℃ (液温)

攪拌し始めてしばらくすると棒がかなり重くなり、紫銀色の泡も大きなものが残るようになり、大きさも25cm×30cm程となった。液面の気泡も増えて、そのままを保っているが、高さは低く感じる。

## 6) 第5日目

令和7年9月16日 気温29℃

教室内の温度はこのところ26℃であるが、このところの異常気象で気温が下がらないせいか藍の発酵が例年に比べると進行が早いように感じる。匂いがアンモニア臭に少しずつ変化してきた。

AM9:40 攪拌してpHを測定する。

pH10.0 27.6℃ (液温)

攪拌後には青紫色の泡に高さも出てきた。今回は午後には嵩上げをする。昨日の夕方はpH10.5であったので、下がり方が激しく発酵が進むのは暑さのせいだろうか。

### 【嵩上げ①】

木灰汁を藍甕に投入し、液内での密度が過密にならない環境で発酵を促すために嵩上げを行い、全体の量を毎日少しずつ上げていく。前回は木灰汁の液温を上げるために温めて投入したが、今回は気温が高く、液温も例年と比べて高くはないので、そのまま甕に投入することにした。

木灰汁 No2 10ℓ、木灰汁 No3 10ℓ 合計20ℓ

この木灰汁をバケツに入れて、直接藍甕に投入する。

PM2：35 攪拌して pH を測定する。

pH9.9 27.3℃ (液温)

泡立ちも安定して藍の華となり、液面にしっかり残るようになった。この日は大場先生も攪拌に加わり、液面には大きな青紫色の泡が残って全体の半分くらいを占めるようになった。

### 7) 第 6 日目

令和 7 年 9 月 17 日 気温 33℃

藍甕の蓋を開けると前日の泡もしっかり残っている。季節は 9 月であるが気温が 30℃ 以上なので、いつもより発酵が進んでいるせいか全体的に pH が低く感じる。

AM8：35 攪拌して pH を測定する。

pH9.7～8 27.5℃ (液温)

### 【嵩上げ②】

木灰汁を藍甕に投入し、全体の量を少しずつ上げて昨日より増やしていく。

木灰汁 No3 10ℓ、木灰汁 No1 10ℓ 合計20ℓ

この木灰汁をバケツに入れて、直接藍甕に投入する。普通木灰汁 No1 は貴重なので嵩上げでは使わないが、今回は木灰汁を No4 までしか取れなかったことと初発の pH が低かったため、全体の pH を上げるために木灰汁 No1 を投入することにした。

PM4：20 攪拌して pH を測定する。

pH9.7 28.0℃ (液温)

混ぜた後に泡が高さも 5 cm 以上とこんもりと膨らみ、青紫色が濃く全体の半分以上を占めた濃厚な『藍の華』となってきた。アルカリをあげるために木灰汁 No1 を投入したが、今日は暑くて現在も外気は 31℃、室温も 27℃ と発酵が進みやすい状況である。

### 8) 第 7 日目

令和 7 年 9 月 18 日 気温 25℃

藍甕の蓋を開けると一面に紫金色の皮膜が昨日より広がり、色も増してきたように感じる。前日の泡も『藍の華』としてしっかり残っている。昨日までの暑さは昨夜から降り始めた雨のお陰で気温が 25℃ と落ち着いてきた。

AM9：00 攪拌して pH を測定する。

pH9.6 27.6℃ (液温)

### 【高上げ③】

昨日までに高上げを2回したが、全体的にもう少し増やしておきたい。

木灰汁 No3 10ℓ、木灰汁 No1 10ℓ 合計20ℓ

PM4:30 攪拌して pH を測定する。

pH9.6 27.1℃ (液温)

今日は一日中雨が降り、現在の外気も23℃とずいぶん涼しくなってきた。そのせいか液温は下がってきたが、混ぜると藍液が茶味かかった色となり、青紫色の『藍の華』も15cm くらいの高さで残るようになり、順調に発酵が進んでいる様子から、布を染めるのが楽しみである。

### 9) 第8日目

令和7年9月19日 気温27℃

昨日からの雨も止み、やっと涼しい朝を迎えられるようになった。藍甕の蓋を開けると赤紫色の皮膜が勢いよく広がっている。攪拌すると茶味がかかった液になってきたが、混ぜるのを止めた時に黒褐色に戻るので、メリハリが出てくると発酵がしっかりしてきている。このような気温の低下が発酵の安定した今だから大丈夫だが、これが中石前の建ち上がりくらいにあると過去に発酵が遅くなる時があった。今回は天候が上手く藍の発酵状況に合ったようだ。これは、大切なことである。

AM8:50 攪拌して pH を測定する。

pH9.5 26.5℃ (液温)

### 【止め石】

最後の作業として、活発な藍の発酵を緩やかにするために生石灰を投入して藍液のアルカリ度を上げておく。このことは、普通液のアルカリ値が高ければ止め石は行わなくてもよいが、今回の藍はアルカリ値が低いので、この機会に pH11~12 くらいまでに上げておきたい。

PM4:20 攪拌前に pH を測定する。

pH9.4 26.3℃ (液温)

木灰汁 No1 をステンレス鍋に入れて、生石灰1.5合を入れて温めたものを甕に投入する。

PM4:40 攪拌して pH を測定する。

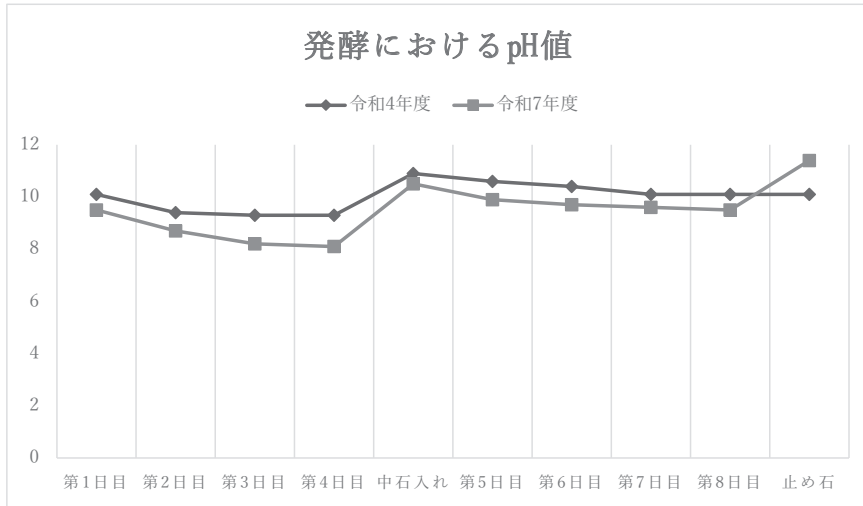
pH11.4 26.4℃ (液温) ※最終データ

この pH を今回の仕込み最終データとする。このアルカリ値が発酵により少しずつ低下していくであろうが、pH を平均値の11~12までに持ってこられて安心した。

仕込みから朝と夕方の2回攪拌してきたが、建ち上がったので、一日1回混ぜることにする。今回の藍は、生石灰を入れるとアルカリ値が跳ね上がるので、投入する際には分量を慎重に見極めないで発酵の勢いに影響が出るので注意しないとイケない。

ここ数年間、真夏日が9月まで続くようになり、今年に至っては10月中旬くらいまで暑さを感じる日々が続いた。前回の記録と比べると藍建て期間における気温の上昇を感じる。私が藍を仕込むのは金城大学短期大学の美術棟にある染色演習室であるが、建ち上がってくるまでは冷房を入れず自然な環境の中で発酵してくるのをひたすら待っている。ただ、清酒工場と違って室温管理を

しているわけではないので、だんだん気温が高くなっていく環境での発酵が大丈夫なのか、変化はあるのか、このことについては今後も発酵の経過観察を記録し、その変化を見守っていきたい。



#### IV まとめ

今年度の藍については、材料の木灰を取り寄せるのに苦労した。前回の木灰汁は質が良く pH 値も高い木灰汁が採取できたことから発酵も順調に進んだが、今年は仕込みの最初から pH 値も低く 9.5 から始まったので、全ての作業において pH が低い状態で発酵が推移した。前々回も四国の備長炭を通販で取り寄せて使用し、最初から pH も低い木灰汁しか採取できなかったことから、沈んでいくはずの薬の藍葉が液中に浮いて布に大量に絡みついくような状態があったが今回は見られなかったので、発酵自体は順調であったと言える。

しかし、今回の段落ちでは、染まる速度が例年より非常に遅く色が薄かったことについて、発酵の段階で何が要因したのか疑問である。この状態を「染まりが悪い」というのだが、仕込みからの材料や作業を思い起こしてみると気になったのが、薬の状態で葉っぱより茎の多さが目立ったことである。藍にとって葉に含まれるインディカンが木灰汁のアルカリ溶液でロイコ体に還元すると水溶性となり、酸化によってインジゴ=藍色となるので、重要な藍葉の量が例年より少なく感じられたことが原因ではなかろうか。この疑問を発酵の記録とし、今後の作業に活かしていきたい。

#### 引用文献・参考文献

- 1) 野田良子、新谷則子 (1997)：月刊染織 *a* No193 藍建て・藍染めの記録 ポリ容器による醗酵建ての実際
- 2) 佐藤卓 (2022)：デザインの解剖 = 藍染 < BUAISOU >

### 令和7年度 天然藍の灰汁発酵建ての経過



菜をタライに入れる



菜に木灰汁を混ぜる



仕込み



第1日目 午前



第1日目 午後



第2日目 午前



第2日目 午後



第3日目 午前



第3日目 午後



第4日目 午前



第4日目 午後



中石入れ



第5日目 午前



第5日目 午後



第6日目 午前



第6日目 午後



第7日目 午前



第7日目 午後



第8日目 午前



建ち上がり

令和7年度 藍染め 段落ちの色標

染色濃度として、発酵した藍の色の染まり方がどのように推移していくかを可視化するため、四国大学の『藍建て・藍染めの記録』で記載されている段落ち試験と同じ方法を取り、綿布と絹布を1分浸染した後、2分空気酸化を所定の回数を繰り返し、日程の間隔をとって各3回実施した。

	◆綿(ブロード60番)		◆絹(綾織)		◆麻
	11月3日	R4 11月23日	11月3日	R4 10月30日	11月3日
1分浸染					
2分空気酸化					
2分浸染					
4分空気酸化					
3分浸染					
6分空気酸化					
4分浸染					
8分空気酸化					
5分浸染					
10分空気酸化					
6分浸染					
12分空気酸化					
7分浸染					
14分空気酸化					
8分浸染					
16分空気酸化					
9分浸染					
18分空気酸化					
10分浸染					
20分空気酸化					

このように染まっていく色の変化を明確に示すことで、藍は毎回建ち上がるが色には個性があり、人間にも体調があるようにその日ごと染まる速度から色も違うことを記録しておきたい。そして、同じ日に染めたとしても素材が綿布と絹布、麻布とでは藍の染着が違うことを示しておく。

どの布に染まりやすいかが毎回の課題であり、布についても天然繊維やオーガニックコットンなど自然にある素材や無農薬のものを藍は好むようだが、これらについては年々入手が難しくなっているのが現状である。人間も藍も体調に良いものを求めるものは同じであるような気がする。

今回の藍は染まる速度が遅く、令和4年度のものと比較するとその違いは歴然としている。ただし、濃い藍色を求めるならば、染める回数を増やすことで同じ色を目指すこととなる。

## 幼児期の音楽教育を支える教科書比較

### — 掲載楽曲の比較分析から —

上野高裕\*

## Comparing Textbooks for Early Childhood Music Education: Comparative Analysis of Featured Songs

UENO Takahiro

### I はじめに

筆者は令和2年度より幼児教育学科において、領域「表現」の音楽領域に関する授業を担当している。子どもが歌うこと、楽器を奏でること、身体を動かすことなど、表現する力を育むための教育方法について学生と共に検討している。授業では音楽の理論、音楽表現の基礎、実践的な演奏や歌唱指導などを行い、保育現場で即戦力となる保育者養成を目指しているのである。本学に入学してくる学生の音楽的理解力は実に多様である。幼い頃よりピアノを続けている者、中学校入学まで続けていた者、養成校に入学が決まり習い始めた者、またピアノは習ったことはないが音楽が好きで軽音楽部、吹奏楽部などの部活動に所属していた者、音楽は嫌いではないが苦手意識を持つ者など個人差が大きい。そのため、1年次で開講し筆者が担当している「幼児と表現B」では、まず音楽に苦手意識をもつ学生が抵抗感を抱かずに学べるよう、基礎から丁寧に学べる環境づくりを行っている。音楽表現に関する授業では、最低限必要な楽典の知識を継続的に展開しながら歌唱活動を行っている。歌を歌うことは幼児の音楽表現の基盤となる活動であり、声という誰もが持っている身近な手段を使って自己表現することを可能にしているのである。歌唱活動では、音楽の三要素である「リズム・メロディ・ハーモニー」の気づきを促し、音楽的資質や表現意欲を育むことを重視している。そのため、保育者が子どもの声の状態に合わせて歌い方を工夫したり、無理なく楽しめる環境をつくる指導力の育成も、重要な要素なのである。

保育の中で日常的に歌われる歌全般をできるだけ多く学生に伝えたいと考え、様々な教科書や楽譜の中から楽曲を選曲しているが、同一の楽曲でも主に調性、テンポ、伴奏型の違いが見られる楽譜が多く存在することに気付いた。ピアノ実技に関する授業では、学生一人ひとりに合わせて楽譜を選び取り組ませることは可能だが、クラス単位の授業ではどの楽譜を選択し授業で展開するかは判断しづらい。

本稿では、筆者が担当する授業で使用している保育者養成課程向けの音楽教科書2冊を比較し、収録楽曲の分析を通して、本学の学生に適した楽曲および楽譜の特性について検証する。

---

\* 金城大学短期大学部幼児教育学科

## Ⅱ 領域「表現」に関する音楽関連科目

### 1) 教科書採択の経緯

筆者が本学幼児教育学科で担当する科目の中に、領域「表現」に関する「幼児と表現 B」と「保育内容 表現 B の指導法」がある。講義形式で音楽の基礎知識や手遊びなど、音楽表現の指導法に関する内容である。弾き歌いや伴奏法といった専門技術の習得のためのピアノ実技に関しては、「子どもの音楽表現演習」という科目で、非常勤講師を含めた教員による細やかな個別指導によって行われている。前述の科目を担当して 6 年目となるが、当初は、授業内容に応じて様々なテキストや楽譜集から楽曲を選定し、授業に取り入れていた。しかし、教材の系統性や学習内容の統一を図るため、4 年前より教科書を使用している。保育士養成課程で音楽に関連する科目の手助けとなるべき教科書及び参考書の種類はそれほど多くはないが、その中から各教科書を精査し、神原雅之 鈴木恵津子 『改訂 幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育』教育芸術社 2018 年（以降、18 年版）を使用している。この教科書は、大きく 2 つの部分で構成されており、前半では、幼児期における生活と遊び、そして音楽活動との関連を理解するための基本的事項についての分かりやすい解説がある。また後半には、乳幼児の生活や遊びの中で触れたい事柄を想定し、各月に相応しい楽曲を取り上げている。

音楽表現活動を行うとき、保育者の魅力的な歌声や子どもたちが憧れる楽器の演奏によって、子どもの表現力が更に豊かに育つだろう。そのような保育者になるには、楽譜が読めることも必要なのである。譜表と音名に始まり、リズムや拍子、音程、音階、調を中心とした音楽理論を核として授業を展開するならば、その分野の教科書を使用するだろう。しかし、2 年間の学びを終え即戦力として保育現場で活躍を期待する学生には、最低限の音楽基礎知識と、歌遊びや歌唱表現の構成力、表現力、展開力を身に付ける方がより実践に繋がると考え、現在の教科書採用に至ったのである。

### 2) 旧版の構成と検証

授業を進める中で、教科書に掲載されている楽曲について、譜面上の問題から指導が難しいと感じることがあった。原調のままでは音域が広く歌唱が難しかったり、伴奏が複雑で演奏が困難な場合には、移調譜や簡易伴奏譜を掲載している教科書を活用して対応していた。何種類もの楽譜を見ているときに、現在使用している教科書の旧版とも言える、同出版社から刊行されていた教科書に出会った。『幼児の音楽教育 表現◆音楽 幼稚園・保育所・幼稚園課程・保育士養成課程用』教育芸術社 2001 年（以降、01 年版）である。2001 年に第 1 刷が発行され、本学でも音楽関連科目の中で使用していた。各月に相応しい楽曲を取り上げている形式は同じだが、比較してみると掲載楽曲の数、調性の違い、生活の中で歌われる楽曲の扱い方など、現在と異なる部分が多く同じ楽曲でも伴奏型の違いなどが多く見られた。そこで、2 冊の教科書で各月ごとに取り上げている楽曲を比較し検証する。12ヶ月分の楽曲を全て取り上げると膨大な数になるため、今回は 4 月に掲載されている楽曲の検証を行った。

【表1】

幼児の音楽教育（2001年） 4月に掲載されている楽曲一覧<sup>1)</sup>

曲名	速度	調号	拍子	音域
音階の歌	♩ = 約88~132 楽しく	C	2/4・3/4・4/4	c~c <sup>1</sup>
ことりのうた	♩ = 100~108	C	4/4	c~c <sup>1</sup>
チューリップ	♩ = 84~92	F	2/4	f~d <sup>1</sup>
おはながわらった	♩ = 80~84 楽しく、きれいに	F	2/4	c~c <sup>1</sup>
春の小川	♩ = 104	C	4/4	c~c <sup>1</sup>
春がきた	♩ = 120	C	4/4	c~e <sup>1</sup>
めだかのがっこう	♩ = 108	D	4/4	d~d <sup>1</sup>
えんちょうせんせい	Andante (♩ = 72~76) ゆったりと、楽しそうに	C	4/4	c~c <sup>1</sup>
きょうからお友達	♩ = 84 楽しく	F	2/4	f~d <sup>1</sup>
おはようのうた	(♩ = 86~92)	C	2/4	c~d <sup>1</sup>
アチャ パチャ ノチャ	♩ = 120~132	G	4/4	g~d <sup>1</sup>
さよならのうた	(♩ = 86~92)	F	2/4	f~d <sup>1</sup>

幼児のための音楽教育（2018年） 4月に掲載されている楽曲一覧<sup>2)</sup>

曲名	速度	調号	拍子	音域
チューリップ	♩ = 84~92	D	2/4	d~h <sup>1</sup>
ちょうちょう	♩ = 80~88	D	2/4	d~a <sup>1</sup>
春がきた	♩ = 116~126	C	4/4	c~e <sup>1</sup>
めだかの学校	♩ = 104~112	C	4/4	c~c <sup>1</sup>
おはようのうた	♩ = 84~92	C	2/4	c~c <sup>1</sup>
朝のうた	♩ = 100 楽しく	C	2/4	c~d <sup>1</sup>
せんせいとおともだち	♩ = 126 軽快に	C	4/4	c~c <sup>1</sup>
おかたづけ	♩ = 108~112	F	4/4	f~c <sup>1</sup>
おててをあらいましょう	♩ = 100~104	C	4/4	c~a <sup>1</sup>
おかえりのうた	♩ = 126	C	4/4	c~c <sup>1</sup>
さよならのうた	♩ = 112ぐらい	C	4/4	c~c <sup>1</sup>

### Ⅲ 4月に扱われている楽曲

#### 1) テンポについて

掲載曲は18年版が11曲、01年版は12曲取り上げている。新年度の始まりと共に、4月は進級の季節である。乳児クラスを中心に、5月の連休明け頃までは子どもたちが落ち着かないため、生活の歌が多く掲載されている。18年版では7曲、01版は4曲の生活の歌があり、その中で《おはようのうた》のみ同一楽曲であるが、異なる伴奏型が用いられている。

01年版では、《音階のうた》という楽曲が最初に掲載されている。全4曲からなりそれぞれが短い楽曲だが、テンポ指定も曲ごとに、♩ = 約88から♩ = 約132と幅広い。子どもの年齢に応じて、工夫し楽しく遊ぶ中でテンポ感、リズム感、拍子感を育て、自然に無理なく音を覚えさせることを「ねらい」とした楽曲である。18年版では、《チューリップ》を筆頭に、季節の歌が3曲続く。このように、階名唱や符点のリズムを強調させた教育的な楽曲が時代と共に扱われなくなり、園での生活の中で、その場面に応じた生活の歌が歌われるようになったのである。

季節の歌は18年版では4曲、01年版は6曲あり、《チューリップ》、《春がきた》、《めだか

の学校》の3曲が共通している。《春がきた》の原曲はテンポ指定が♩ = 120であり、01年版【譜例1】は原曲の指定通り♩ = 120で書かれている。しかし18年版【譜例2】は、♩ = 116~126と書かれており、テンポ指定に幅を持たせていると判断できる。

【譜例1】《春がきた》 01年版のテンポ記述

♩ = 120

*mf*

1 はるがきた はるがきた  
2 はながさく はながさく

【譜例2】《春がきた》 18年版のテンポ記述

♩ = 116~126

*mf*

1 はるがき た はるがき た ど こ に き た く  
2 は ながさ く は ながさ く ど こ に き た く  
3 と りがな く と りがな く ど こ で き た く

同じような事例は《めだかの学校》でも見られた。原曲は♩ = 108位<sup>4)</sup>、と書かれており、01年版【譜例3】は♩ = 108と限定しているが、18年版【譜例4】は♩ = 104~112と書かれている。このように楽曲ごとに原曲のテンポ指定を調整することで、保育者は子どもたちの様子に応じて、一つのテンポにこだわらず、余裕を持って歌うことができると判断できる。

4月に掲載されている全ての楽曲のテンポを平均してみると、18年版が、♩ = 約103に対し、01年版は、♩ = 約94であった。速度記号<sup>5)</sup>と速度標語<sup>6)</sup>に置き換えてみると、♩ = 103 やや快活に *Allegretto*、♩ = 94 中ぐらいの速さで *Moderato* と言える。時代の変化が加速する中で、人々の生活感覚や価値観の変化が楽曲の内容や表現にも表れている可能性があるかと判断できる。

【譜例3】《めだかの学校》 01年版のテンポ記述

♩ = 108

*mp*

1 めだかの がっこうは  
2 めだかの がっこうは  
3 めだかの がっこうは

*mp* (2・3番は*mf*)

【譜例 4】〈めだかの学校〉 18年版のテンポ記述

2) 調号について

掲載曲の調号は【表 1】の通りである。18年版は、ハ長調 8 曲、二長調 2 曲、へ長調 1 曲であった。01年版は、ハ長調 6 曲、二長調 1 曲、へ長調 4 曲、ト長調 1 曲である。臨時記号を持たないハ長調が、18年版では 8 曲、01年版は 6 曲とほぼ同じと言えるが、ト長調を含む 4 つの調号を掲載した01年版に対し18年版は、大半がハ長調の楽曲で構成されており、より歌唱しやすく、伴奏も演奏しやすいように配慮されたものと判断できる。

2 冊に共通する楽曲、〈チューリップ〉の原調【譜例 5】はへ長調である<sup>3)</sup>。01年版【譜例 6】は原調のまま掲載されているが、18年版【譜例 7】は 3 度下に移調した、二長調で掲載されている。

【譜例 5】〈チューリップ〉の原調記述

原調で歌唱する際、旋律の最高音は  $d^1$  であり、音域的にも無理のない設定となっている。しかし、歌唱上の困難が少ない楽曲であるにもかかわらず、二長調に移調されているのは、子どもたちが歌唱をする際の音域への配慮によるものと判断できる。また、鍵盤楽器で伴奏をする際、主要三和音で構成された伴奏型のため、和声的にも安定した響きがあり、曲全体に明るい印象を与えていると判断できる。

【譜例 6】〈チューリップ〉 01年版の調号記述

## 【譜例 7】《チューリップ》 18年版の調号記述

《春がきた》は、2冊とも原調のハ長調で掲載されている。この楽曲は、後半の部分が1小節ごとに小節内の最高音が高くなっており、歌唱する際の最高音はe<sup>1</sup>まで達する。数多くの子どもたちのうたの中でも、最高音がe<sup>1</sup>まで達している楽曲は非常に少ない。この楽曲の場合は、半音高く移調すると最高音はf<sup>1</sup>まで達し、子どもにとって歌うのは困難である。また、半音低く移調すると、最低音はh<sup>1</sup>になるが、調号が5つあるロ長調になるので、伴奏が極めて難しくなる。以上のことから、この楽曲は原調のまま掲載するのが望ましい。後半にかけて徐々に強く盛り上がり、最高音に達する構成となっているため、春の到来の喜びを表現するのにふさわしいと判断できる。

《めだかの学校》の原調はニ長調で、01年版は原調で採用されている。2冊の中には、簡易伴奏や原曲に近い伴奏パートを再現した本格伴奏を採用している楽曲もあるが、この曲は原曲のままである。一方、18年版ではハ長調に移調されているものの、伴奏型は原曲の形態を保持しており、簡略化は見られない。ニ長調から1度低いハ長調に移調することで、より歌いやすく、また臨時記号もないことで、伴奏もしやすいように配慮されたものと判断できる。

### 3) 伴奏型について

01年版に掲載されている、《ことりのうた》、《おはながわらった》、《めだかの学校》、《えんちょうせんせい》の4曲は、作曲者による原曲の形態のまま掲載されており、鍵盤楽器による伴奏演奏に際しては高度な演奏技術を要する構成となっている。この種の楽曲については、教育的配慮や演奏容易化を目的として簡易伴奏に編曲された楽譜も流通しているが、本稿では原曲の伴奏形態を保持した楽譜を用いているのである。

子ども向けの歌や童謡の多くは前奏が存在しない楽曲が多い。01年版は掲載されている5曲に前奏が存在しない。18年版も同じく5曲に前奏がない楽曲を掲載している。そのため養成校では、楽曲の終結部の4小節を演奏後、曲冒頭に戻って再度演奏することにより、前奏としての機能を持たせる指導を行っている。子どもに歌わせる際は、前置きなく楽曲を始めるより4小節程度の前奏がある方が教育的効果も高いのである。

《おはようのうた》は、8小節の前奏が存在する01年版が原曲だと思われる。ハ長調の主和音を基調とし、符点のリズムを特徴とする前奏だが、18年版ではこの前奏が削除された簡易伴奏を採用している。原曲は2/4拍子に従い、1拍ずつ分散させた主要三和音が中心の伴奏型であり、1オクターヴの音域を用いた動きや、符点16分音符を含むリズムパターンが使われている。また、終結部の3小節は、主旋律が下行音型で構成される一方で、伴奏型は同一のリズムパターンを維持しつつ上行音型を形成しており、両旋律の対比的な動きが特徴的である。このため、01年版は伴奏演奏に際して優れた演奏技術を要することから、18年版では簡易伴奏を採用したものと考えられる。

伴奏型は、8 部休符を主旋律と合わせ、主要三和音を 1 拍半弾く。前奏は終結部の 4 小節を演奏し、符点のリズムや下行音階等も見られないのである。

#### IV まとめ

実習を目前に控えた学生の多くが実習中の課題として楽曲の楽譜を受け取ってくる。持ち帰ってくる楽譜のほとんどは、園で長年使われてきたであろうと予想される譜面で、調性や伴奏型が複雑で、ピアノ演奏が苦手な学生にとっては、演奏が難しいと感じられるものも含まれている。実習前の学生は、実習先から提示されたものはその通りに演奏しなければならないという思いが強く、授業で使用した教科書の中に課題と同じ楽曲で、より演奏しやすい楽譜が載っていることに気が付かない。

現在、子ども向けの歌や童謡には演奏し易いように配慮された楽譜が多く流通している。本稿では新旧 2 種類の教科書に掲載されている楽曲の楽譜を比較し、テンポ、調号、伴奏型を中心に【表 1】「4 月に掲載されている楽曲一覧」の楽曲分析を行った。01 年版の楽曲は曲ごとに差はあるものの、全体的に伴奏が複雑で、実際に弾くと難しく感じることが多い。伴奏が凝っている楽曲もあるため、保育現場では演奏しにくいと感じる。18 年版は伴奏型が決して容易になったわけではないが、主要三和音で弾く伴奏型が多く、より歌いやすい調性に移調した楽譜を中心に構成されていることに気付く。鍵盤楽器で伴奏しながら歌唱活動を行う際、保育者は個々の力量に合った楽譜を選んで用いるだろう。子どもの年齢や声質などに合った楽譜を選ぶことに加え、保育者が演奏する伴奏が、子どもにとって心地よい響きがすると感じさせることも重要である。幼児期における音楽体験は、後の音楽への親しみや音楽的感性を育むとともに、豊かな情操をもつ子どもを育てる役割を果たすことから、保育者養成校における音楽領域教育の重要な役割となる。

#### 引用・参考文献

- 1) 森田百合子・山本 敬・秋山 衛 (2001)『幼児の音楽教育 表現◆音楽 幼稚園・保育所・幼稚園課程・保育士養成課程用』教育芸術社 P20
- 2) 神原雅之 鈴木恵津子 (2018)『改訂 幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育』教育芸術社
- 3) 堀内敬三・井上武士 (1958)『日本唱歌集』岩波文庫 P216
- 4) 中田喜直 (1961)『新しく選んだ童謡曲集』カワイ楽譜 PP.12-13
- 5) 楽曲と演奏する速さを示す記号。メトロノームを使う際は、単位となる音符を決め、それが 1 分間にいくつ演奏されるかを示す。
- 6) 楽曲の速度を指示する言葉。絶対的な速度を示すものではなく、演奏者の主観による他、時代によっても変化している。



## 保育内容「言葉」の領域に関する一考察

喜多志穂美\*

### A Study of the Concept of “Language” in Child Care and Education

KITA Shihomi

#### 要旨

保育所保育指針における領域「言葉」は、1989年の改定を機に、正しい言葉を習得する指導的な捉えから、言葉を通じたコミュニケーションとして捉えられ、言葉を交わす喜びや楽しさを重視する方向へと転換された。本稿では、その歴史の変遷をたどり、領域「言葉」の今後の動向を考察する。また、保育者の専門性のさらなる向上が求められる今、子どもの言葉を育む立場となる学生（若者）の言葉環境の変化や意識についても現状を理解し、指導を模索していくことが必要であると考え、合わせて考察した。

#### I はじめに

保育所保育指針は1965年（昭和40年）に策定後、子どもを取り巻く社会の変化と、それを背景としたさまざまな保育課題に対応すべく、4度の改訂および改定がなされてきた。1989年以降保育内容領域「言語」は、領域「言葉」に名称が変更となった。この背景には、乳幼児期に言葉を育むことについての保育や幼児教育における考え方や捉え方に大きな方向転換があったとされている<sup>1)</sup>。

それまでは、子どもが正しい言葉を獲得するにはどうしたらよいか、あるいは生活に必要な言葉を正しく使うことなど、正しく適切にできるようにすることに重点が置かれ、小学校以降の教科に向けて指導するための一貫性が意識されていた。しかし、1989年以降の領域「言葉」では子ども自身の活動の中から、“生きた言葉”を育てることを目指すあり方へと転換された。正しく適切にできることではなく、言葉を使う喜びや言葉を交わす楽しさを味わえるようにすることに重点が置かれ、言葉は「話す」「聞く」の一方から、双方向のコミュニケーションとして捉えられるようになった。子どもが乳幼児期に能動的に環境にかかわって言葉を獲得していく過程が、発達心理学や医学などの学問上からも明らかになってきたことがその背景として考えられる<sup>2)</sup>。

「言葉」の基盤には単に言葉に関する知識だけでなく、言葉に関わる経験が重要であるとされている。文化審議会<sup>3)</sup>によると、言葉は「知的活動の基盤」「感性・情緒等の基盤」「コミュニケーションの基盤」という3つの大きな働きがあると整理され、「言葉」の基盤は思いを伝えたい、話した

\* 金城大学短期大学部幼児教育学科

いと思える人との安心できる関係性の中で育ち、日々の生活の中で伝えたいこと、話したいことが、心の中に生まれていくことが言葉を使う意欲に繋がっていく。保育は環境を通して行うものであることから、「言葉」の基盤を育む環境が非常に重要であると考えられる。現代の社会状況を見ると、少子化、地域の過疎化、通信機器の発達によるコミュニケーションの不足、多様なメディアの普及、科学技術の進展による経験の希薄化、生成 AI の普及による論理的思考力の低下などが指摘されている。言葉の環境の変化は著しく、子どもたちの言葉を育てる環境は極度に貧しくなっている<sup>4)</sup>とされている。急速に変化する先行きの見えない時代であるからこそ、これまでの保育所保育指針や保育内容の変遷から、領域「言葉」が今後目指す考え方について理解を深めていきたい。子どもの体験格差や実体験不足が社会課題とされる中、今後さらに保育の重要性が認識され、保育者に対する期待はますます高まっていくことが予想される。そのため、子どもの言葉を育む立場となる学生（若者）の言葉の環境の変化についても包括的に捉え、その影響について考察していくことが必要であると考ええる。

保育内容の領域「言葉」の研究動向について調査した南陽<sup>5)</sup>によると、調査対象である62件のうち研究種類で最も多いのは「理論研究」が35%（22件）、2番目に多いのが「実践研究」で34%（21件）であった。3番目に多いのは、「調査研究」で15%（9件）を占め、「事例研究」は10%（6件）、「歴史研究」は3%（2件）であった。研究対象をみると、その対象は「文献」、「保育者養成校の学生」、「子ども」、「保育者」、「子どもと保育者」、「その他」の6つに分類されており、「保育者養成校の学生」を対象とした研究が34%（21件）で「文献」と同率で最も多かった。保育は環境を通して行うことから、未来の保育者である学生の「言葉」に対する意識も、子どもにとっての言葉環境として影響を及ぼすものであると考ええる。

そこで本研究では保育所保育指針における保育内容「言葉」の領域において、その歴史の変遷を中心にたどり、学生（若者）の言葉環境や意識について合わせて検討し、保育内容「言葉」の領域に関する動向や保育者養成校での課題について考察することを目的とする。

## II 研究方法

1965年から2018年の保育所保育指針に至るまでの保育内容「言葉」の領域を中心に、その歴史の変遷を調査し整理することで、改訂および改定の要点や社会背景について整理する。

現在の学生の「言葉」を取り巻く環境を調査すべく、文化庁による「令和7年度国語に関する世論調査」から、若者の「言葉」に対する意識や、理解の現状について検討する。

## III 結果

### 保育所保育指針の変遷

#### (1) 保育所保育指針とは

保育所保育指針<sup>6)</sup>は保育所保育の基本となる考え方や保育のねらい及び内容など保育の実施に関

わる事項と、運営に関する事項について定めたものである。一定の保育の水準を保ち、さらなる向上の基点となるよう、保育所保育指針において、すべての保育所が抛るべき保育の基本的事項を定めている。全国の保育所においては、この保育所保育指針に基づき、子どもの健康及び安全を確保しつつ、子どもの一日の生活や発達過程を見通し、それぞれの保育内容を組織的・計画的に構成して保育を実施することになる。

## （2）保育所保育指針の変遷および、主な社会の変化

保育所保育指針は1965年厚生省から刊行された。「幼稚園教育要領<sup>7)</sup>」が法的拘束力を持っていたのに対し、「保育所保育指針」は保育所における保育内容の充実・向上のために参考にするべきものという位置づけであった。1990年の改訂では、少子化、核家族化などの子育てに関わる社会の状況が大きく変化し、乳児保育や延長保育など保育の需要が多様化した。1999年の改訂では、女性の社会進出を背景に、保育所は地域の子育て支援を担うことが求められるようになり、保育の専門性がさらに問われるようになった。

また、1998年の児童福祉法の改正により、名称の表記は「保育士」に統一された。2003年には保育士資格が法定化され、局長からの「通知」だった保育所保育指針は2008年の改定に際して大臣による「告示」となり、拘束力、規範性を有するものとなった。その後、保育士不足、待機児童の増加が社会問題となり、2015年に「子ども・子育て支援新制度」が施行された。待機児童問題を解決すべく、認定こども園制度が普及した。2017年の改定では、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領<sup>8)</sup>の内容について同じ教育を受けていくことを基本とし、より一層の整合性が図られた。2023年には「こども家庭庁」が創設され、こどもと家庭の福祉・保健その他の支援、こどもの権利利益の擁護の一元化、年齢や制度を超えた包括的支援の実現、就学前の育ちの格差是正、こども・子育て当事者の視点に立った政策の実現を理念として掲げている。(表1)

表1 保育所保育指針の通知・告示と主な社会の変化

年	刊行・通知・告示	主な社会の変化
1965（昭和40年）	保育所保育指針 厚生省策定 幼稚園教育要領の教育内容との 整合性を図る目的	1955年～1973年 高度経済成長 1960年代～女性の社会進出が徐々に進展 核家族化が徐々に進展
1990（平成2年）	保育所保育指針通知 養護的機能を明確化	保育士業務に「保護者支援・指導」が追加 少子化、児童虐待問題・相談件数の増加
1999（平成11年）	保育所保育指針通知 地域子育て支援の役割を明記	1998年「保育士」に名称統一 2000年 児童虐待防止法制定
2008（平成20年）	保育所保育指針告示 保育所の役割を明確化 局長「通知」から大臣の「告示」	2003年「保育士」の国家資格化 2006年 認定こども園制度の開始 待機児童問題の深刻化、少子化対策の推進
2017（平成29年）	保育所保育指針告示 内容の整合性を図る目的 就学前教育・保育の一貫性強化	2015年 子ども・子育て支援新制度の施行 幼保連携型認定こども園の普及が加速 2023年 こども家庭庁創設

文部科学省「幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領について」資料2<sup>9)</sup>を参考に筆者が作成

## 保育内容「言葉」の領域の変遷

### 領域とは

乳幼児期の子どもにとって、心身の発達の基礎となる体験として必要な事項を、保育内容の基準として示したものである。現在の保育所保育指針において、保育内容は「養護」と「教育」に大別されており、「教育」に関わる保育内容を発達の視点として「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つに区分し、理解しやすく示したもので、子どもの発達を見る側面とも言われている。

### (1) 保育所保育指針（昭和40年）

策定当初の保育内容は幼稚園教育要領と同様の形で6領域が採用されており、2歳までを「生活」「遊び」の2領域とし、2歳を「健康」「遊び」「社会」の3領域、3歳を「健康」「社会」「言語」「遊び」の4領域、4歳以上は「健康」「社会」「言語」「自然」「音楽」「造形」の6領域としていた。

保育内容の区分に関しては、子どもの活動は総合的に行われているため、その領域に限った取り扱いは適切ではないと言及はあるものの、領域ごとに「望ましいおもな活動」が設定されており、小学校の教科別教育のような認識から領域別の指導が懸念された。

「言語」に関することとして、4歳児の保育のねらいでは、「(6) ことばを交わし合う機会をじゅうぶんに与え、聞くこと・話すことが豊かになるようにする。」と示され、5歳児の保育のねらいでは、「(6) いろいろな場で聞くこと、話すことができ、日常生活に必要な言葉が正しく使えるようにする。」「(7) 童話、絵本、放送などを見たり聞いたりしてその内容がわかるようにさせる。」と示された。また、6歳児の指導上の留意点では「ことばの指導にあたっては、子どもが正しく美しい言葉を使う意欲をもち、ことばを使って思考力を伸ばすよう留意すること」が示された。このように指導上の留意点が明確に示されており、小学校教育に向けた一貫性を意識した指導性の強い内容であったことがうかがえる。

### (2) 保育所保育指針（平成2年）

1989年（平成元年）に幼稚園教育要領が「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域に改訂されたことを受け、保育所保育指針の保育内容も1990年（平成2年）の改訂で3歳以上児について5領域に変更となった。また、保育内容の年齢区分は、6か月未満児、6か月～1歳3か月、1歳3か月～2歳となり、乳児の年齢区分が細分化された。保育所の養護的機能が明確化され、「生命の保持」「情緒の安定にかかわる事項」が全年齢に示された。

「言葉」に関することとして、4歳児のねらいでは「(13) 人の話を聞いたり、自分の経験したことや思っていることを話したりして、言葉で伝える楽しさを味わう。」と示され、5歳児のねらいでは、「(12) 様々な機会や場で活発に話したり、聞いたりして、生活の中で適切に言葉を使う。」「(13) 絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして、その内容や面白さを楽しみイメージが豊かになる。」と示されている。指導上の留意点は配慮事項と改められ、6歳児の配慮事項では、「(1) 生活や遊びの中で、言葉の充実を図り、言葉を使って思考することや自分の考えを伝え合う喜びを味わえるようにし、言葉に対する関心が高まるように配慮する。」と示された。このように、言葉で表現する楽しさ、伝え合う喜び、絵本や物語に親しみ心を通わせるという3つを柱とした内容について幼稚園教育要領との整合性を図っている。

### (3) 保育所保育指針(平成11年)

1999年の改訂では、女性の社会進出による乳児保育の需要の高まりを受け、保育所の養護的機能の充実と、核家族化による地域社会の子育て支援機能の低下を受けて、保育所が地域社会の子育て支援を担うことが求められるようになった。3歳未満児は、応答的な関わりの中で育つものとして「担当制」が盛り込まれ「保育士の姿勢と関わり方の視点」が保育の内容に項目として追加された。

「言葉」に関することとして、指導上の留意点は表現に一部変更はあるものの、内容自体に大きな変更はなかった。言葉を交わそうとすることへの意欲を育成する視点が踏襲されており、心を動かす体験を通して言葉を育んでいこうとする保育の方向性が見て取れる。また、言葉に対する興味・関心だけでなく、自ら言葉を使おうとする力の育成に焦点が当てられた。

### (4) 保育所保育指針(平成20年)

2008年の保育所保育指針は告示化された。また2003年には、保育士資格が国家資格化され、より専門性の高さと質の保証が求められるようになった。

「言葉」に関することとして内容自体に大きな変更はなかった。「伝え合う」という表現が引き続き用いられ、言葉を交わそうとすることへの意欲を育む視点が示されており、双方向のコミュニケーションとして言葉の重要性が強調された。また、子どもが自ら心を動かす体験を通して、言葉を育んでいこうとする保育の方向性が継承されている。自ら考える教育の中で子どもの「生きる力」を育むことが提唱され、保育所保育指針にも「生きる力の基礎」として文言が盛り込まれた。

### (5) 保育所保育指針(平成29年)

2017年の改訂では、環境を通して養護および教育を一体的に行うものであることを基本として掲げ、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において整合性を図った。また、幼児期に育みたい資質・能力は乳児保育の3つの視点、1歳以上3歳未満児および3歳以上児の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」を3本柱として明記し、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を示した。これらは幼児教育を行う施設として共有すべき事項とし、小学校教育への円滑な接続の重要性を記載し、接続の強化を図った。

「言葉」に関することとして、「言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現に触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること」とし、言葉を獲得するだけでなく、子どもが主体的に環境に関わり活動する中で、言葉や言葉に対する感性を「豊かに育む」ことについて示された。

## 言葉としての国語

国語の果たす役割と国語の重要性について文化審議会は、母語としての国語という観点から、「個人にとっての国語」「社会全体にとっての国語」「社会変化への対応と国語」の3点に整理した。

また、個人にとっての国語が果たす役割は、「知的活動の基盤」「感性・情緒等の基盤」「コミュニケーション能力の基盤」として、生涯を通じて個人の自己形成にかかわる点にあると考えを示した。

## 国語に関する世論調査

文化庁による「国語に関する世論調査」<sup>10)</sup>は「現在の社会状況の変化に伴う日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する」ことを目的として平成7年から継続的に実施されている。本稿では、文化庁がホームページに記載している令和7年度の調査を参照した。まず、調査項目の以下6点を取り上げる。いずれも他者とのコミュニケーションを軸として、SNSに関連する内容について多く設定されていることがわかる。これは言葉の主な活用場がSNSになっている現状を示し、その影響や課題について検証する必要性について、調査側の意図がうかがえる。

### (1) 令和7年度「国語に関する世論調査」調査項目（文化庁による調査結果を抜粋）

1. 言葉の使い方に対する意識
2. SNSを利用しているか
3. SNSの普及による、社会における文字や語句、言葉の使い方への影響
4. SNSによるコミュニケーションの質を社会全体で高めていく上での課題
5. SNSでのコミュニケーションの質を高めるために気を付けたいと思う点
6. 敬語の必要性

### (2) 16歳～19歳における調査結果（抜粋）

1. 自分自身の言葉の使い方に「非常に気を使っている」「ある程度気を使っている」と回答した割合は80.9%で、どのように気を使っているかを尋ねたところ「改まった場で、ふさわしい言葉遣いをする」が93.2%と最も高く、次いで「敬語を適切に使う」が75.0%であった。
2. SNS（LINE、X、Facebook、Instagram、等）は98.1%が使用しており、利点として「気軽にやり取りできる」が最も高い割合で86.0%であった。また、SNSで一対一又は仲間内でのメッセージの送信等で戸惑うこととして、「相手の感情が分かりにくい」が最も高く75.0%であった。
3. SNSでのコメントや投稿等で感じる利点（不特定多数対象）として、「趣味や価値観が似ている人たちと交流しやすい」が88.2%で最も高く、SNSの普及による「社会における文字や語句、言葉の使い方への影響があると思うか」という問いに89.7%が影響ありと回答した。その影響について87.5%が「略語が増えること」、71.9%が「短い言葉でのやりとりが増える」と回答した。
4. SNSによるコミュニケーションの質を社会全体で高めていく上での課題として、「人を傷つけたり挑発したりするような言葉がよく使われている」が72.9%で最も高かった。
5. SNSでのコミュニケーションの質を高めるために気を付けたいと思う点では、「人を傷つけたり挑発したりするような言葉を使わない」が76.8%で最も高く、次いで「誤解を招くような言葉を使わない」が75.7%であった。
6. 敬語の必要性について「必要である」と回答したのは、95.3%であった。また、どの世代においても90%を超える割合であった。

## IV 考察

保育所は児童福祉施設の一つとして位置づけられ、保育を必要とするすべての子どもたちの心身共に健やかな成長と発達を図ることを目的とした施設である。保育は安心できる環境の下で、乳幼児期にふさわしい生活の場を提供し、養護および教育を一体的に行うことを特性としている。保育内容を展開するにあたり、保育者は一人ひとりの子どもとの応答的なかわりの中で「言葉」だけでなく「言葉にならない言葉」を交わしながら、言葉の基盤を育てている。保育内容領域「言葉」の変遷をたどると、一方向であった「言語」が双方向への「言葉」へと変化し、他者との関係性の中で言葉を交わす喜びや楽しさ、意欲を育てていこうと進化する保育の道筋が見えてきた。子どもたちが自ら環境にかかわって活動し、その瞬間に心の中に沸き起こる思いが、表情や行動、あるいは言葉そのものとなってあらわされる。その「言葉」がなんとも愛おしく感じられるのは、そこに言葉が生きているからではないか。小椋は、『「生きた言葉」になるためには、言葉が示す対象にまつわる情動的な、または行動面での子どもの経験を含んだ多様なイメージと記号（言葉）が結びついているということが重要である<sup>11)</sup>。』と述べている。それらを結びつけることが保育の専門性であるとすれば、保育者自身の言葉の感性が、子どもに「生きた言葉」を届けるために最も重要であると考えられる。感性とは、受け止めたことを自分なりの意味や表現にしてつなげる行為であり、相手あるいはその対象を理解しようとする心があって磨かれるものであると考える。

国語に関する調査結果からは「改まった場でふさわしい言葉を使う」「敬語を使う」といった相手への意識が見える。この意識は「自分がどう見えるのか」ではなく「相手を理解しようとする気持ち」に起因しているかどうか重要であろう。また、SNSの利点として「気軽にやり取りできる」「趣味や価値観が似ている人たちと交流しやすい」点が挙げられており、不特定多数の中での発信においては、自らの言葉に対する責任感や不安感はそこまで強くないように見える。一方、一対一あるいは仲間内での発信の際には、「相手の感情が分かりにくい」ようで、関係性の中にある予測不能な不安感から気持ちのゆらぎがあるように思える。SNSの言葉には「生きた言葉」の要素である言葉、行動、情動のいずれかに弱さがあるのではないかと。他者に自分の言葉を受け止めてもらう経験や、他者の言葉を受け止める経験の中で、その基盤が育まれていくのは学生も乳幼児期と共通しているように思う。学生自身が学びの中でそれを実感し、その上で自己発揮できるように支援することが、言葉の感性を磨く土台として重要であることを心に留め、今後の指導に活かしたい。

## 引用文献・参考文献

- 1) 秋田喜代美・三宅茂夫・砂上史子（2020）シリーズ知のゆりかご子どもの姿からはじめる領域・言葉. みらい. 37
- 2) 野崎美幸・戸田雅美・秋田喜代美（2010）保育内容「言葉」. ミネルヴァ書房.179-188
- 3) 文化審議会（2023）これからの時代に求められる国語力について.（情報取得2025.11.30）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/002.htm)
- 4) 馬見塚昭久（2022）保育学生のための「幼児と言葉」「言葉指導法」. ミネルヴァ書房. 1

- 5) 南陽慶子 (2017) 保育内容「言葉」に関する研究の動向と特質. こども教育宝仙大学紀要. 9 (1) 14-16
- 6) 厚生労働省 (2018) : 保育所保育指針解説. フレーベル館. 2-3
- 7) 文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.
- 8) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) : 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説. フレーベル館.
- 9) 文部科学省 (2024) 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領について (情報取得 2025.11.30)  
[https://www.mext.go.jp/content/20240125-mxt\\_youji-000033604-3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240125-mxt_youji-000033604-3.pdf)
- 10) 文化庁 (2025) 国語に関する世論調査  
[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/kokugo\\_yoronchosa/pdf/94274201\\_02.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/94274201_02.pdf) (情報取得 2025.11.30)
- 11) 小椋たみ子・遠藤利彦・乙部貴幸可 (2019) 赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育 (第3巻) 言葉・非認知的な心・学ぶ力. 中央法規出版. 6-7
- 12) こども家庭庁. 過去の保育所保育指針  
<https://www.cfa.go.jp/policies/hoiku/shishin-h20> (情報取得 2025.11.30)

# 乳幼児の非認知能力

## — 非認知能力を育成する保育者 —

村上知子\*

### Non-cognitive Abilities of Infants and Young Children: Childcare Workers Who Develop Non-cognitive Skills

MURAKAMI Tomoko

#### I はじめに

今はVUCAな時代と言われている。VUCAとは、Volatility(激動)、Uncertainty(不確実)、Complexity(複雑)、Ambiguity(曖昧)という4つの頭文字を並べてつくられた造語で、予測が困難な現代社会の状況を示した言葉である。

予測が困難な現代社会であるため21世紀に必要な資質・能力を育てる保育・幼児教育について理解し、学生に伝えていく必要性を感じている。その新しい考え方の一つが平成29年の幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂(定)から、よく聞かれるようになった「非認知能力」である。生きる力を身につけるために幼児期に育みたい資質・能力の3つの柱の「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」がこの非認知能力に深い関係がある。非認知能力は目に見えにくい力であるため、見えにくいがために、どのように育成していけばよいか、育てているのかを判断することが難しい。そのためその育成方法をもっと明らかにし、非認知能力を可視化していく必要があると考えている。

令和7年度の幼児教育学科の入学生がPROGテストを行った。テスト後に行われた結果説明会の中でリテラシーは学力のことであり、コンピテンシーについては一人ひとりの強みであると説明されていた。内容からこのコンピテンシーも非認知能力であると考えられる。大人として成長していく中で、自然に強みが強化されていく可能性もあるが、自分の強みを意識して、学び続けていくほうがより効果が高いのではないだろうか。

保育・幼児教育でも、非認知能力を意識し、可視化していくことができれば、子どもの非認知能力をより高めることができるのではないか。そのためには、どのように可視化していけば良いかを研究していきたい。

---

\* 金城大学短期大学部幼児教育学科

## Ⅱ 非認知能力について

非認知能力についての日本の研究の中で佐々木晃（2018）「0～5歳児の非認知能力」<sup>1)</sup>と東京大学 Cedep2021年度文科省委託調査<sup>2)</sup>から非認知能力について考えていきたい。

### 1) 佐々木晃「0～5歳児の非認知能力」<sup>1)</sup>

佐々木晃（2018）は、「0～5歳児の非認知能力」の著書の中で、非認知能力を3つの力に分けている。すべての非認知能力の成長のきっかけとなる「気付く力」、身体的能力とも深い関係がある「やりぬく力」、他者との関係の中で育つ「人間を理解し関係を調整する力」である。その3つの力がお互いに刺激し合いながら伸びていく。「気付く力」には認知能力も深く関係し、「やりぬく力」には体力・器用さ・巧緻性も重要な要素であり、「認知能力」と「非認知能力」はどちらも重要な力であると述べている。

表1 非認知能力の3つの力

気付く力	やりぬく力	人間を理解し関係を調整する力
<ul style="list-style-type: none"> <li>・好奇心</li> <li>・驚嘆する心（感動）</li> <li>・探究心</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情動をコントロールする力</li> <li>自信や自尊心</li> <li>期待と楽観性</li> <li>・課題の達成に向かう力</li> <li>やる気（目標への情熱）</li> <li>がんばる力（忍耐力）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異質なものととの出会い</li> <li>・異質なものへの興味や関心</li> <li>・他者との交流</li> <li>・関係性をつくる</li> </ul>
すべての非認知能力の成長のきっかけ	身体的能力とも深い関係がある	他者との関係の中で育つ
3つの力はお互いに刺激し合いながら伸びていく		

（出所：「0～5歳児の非認知能力」<sup>1)</sup>を元に筆者が作成）

すべての非認知能力のベースとなるのが、気付く力であり、好奇心や気付きから、驚嘆する心や探究心に広がり、その活動の中で、やりぬく力や人間を理解し関係を調整する力に広がっていく。その過程の中では、保育者の見守りや援助が重要になってくる。

### 2) 東京大学 Cedep2021年度文科省委託調査<sup>2)</sup>

「非認知能力」は、自分を大切にし、自分を高めようとする力、周りの人とうまくやっていく力、自分の感情をうまくコントロールする力など、「認知能力」以外の心の力であり、「認知能力」は読み書き計算など、「頭の良さ」や「IQ」で表現される心の力であると示している。

この委託研究では2020年度 Cedep「乳幼児期の非認知能力」についての意識および取り組みに関する調査（幼稚園、保育所、こども園などの園対象調査および、保護者対象調査）では、非認知能力を育む取り組みの具体的な内容や効果が未検討だったため、「非認知能力に関する園の取り組み」ヒアリング調査を行っており、その調査で得られた78の具体的な取り組みを分類している。

表 2 非認知能力に関する園の取り組み

大分類	小分類（ヒアリングの語りから抽出）	
自己に関わる心の力	主体性	自発的・自主的に考え行動する力
	興味	ものごとに興味をもって取り組む力
	感受性	五感を通して環境から刺激を受けたり感動したりする力
	想像性	イメージを表現したり形にしたりする力
	粘り強さ	最後まであきらめずに取り組む力
	自信	物事に対して「自分是可以する」と信じる力
	思考力	目標に向かってどうすればよいかを自ら考える力
社会性に関わる心の力	協同性	共通の目標に向かって他者と協同する力
	思いやり	他者を助け、他者の利益のために行動する力
	社会との関わり	社会の一員として行動する力
非認知能力を支える基盤	アタッチメント	子どもが安心できる保育者との関係
	記録	園での子どもの育ちや経験の記録
	風土づくり	園における温かく支援的な雰囲気づくり
	研修	保育者の学びやスキルアップ

（出所：東京大学 Cedep2021 年度文科省委託調査 「非認知能力に関する園の取り組み」 ヒアリング調査から、大分野と小分野（ヒアリングの語りから抽出）のみを表に作成した）

この調査では、非認知能力を支える基盤は、アタッチメント等の保育者が行う援助等になっている。確かに、保育者との愛着を基盤として情緒が安定し、安全な環境のもとで子どもが主体的に活動できるため大切な要素である。

### Ⅲ 幼児の非認知能力を育てる保育者を育成する

幼児期は、認知能力と非認知能力が絡み合って育成されていく。子どもの個人差も大きく、園の環境も違うため、マニュアルは存在しない。各園で認知能力と非認知能力を生活や遊びの中で育てていく大切さを意識して、保育の実践を見直すために保育記録や園内研修を活用し、園全体で非認知能力を育成できる保育者を育成していく必要があると考える。

### 1) 事例1 『つかまえた!!あれっ!?!』

下記の事例は、2025年10月にたちばなこども園で行われた加賀市保育実践研究会で公開されたものである。

筆者は、この研究会で講師を務め、たちばなこども園が研究を進めていく際にアドバイザーとして関わった。たちばなこども園では研究を行うにあたり保護者に研究の目的を事前に説明し承諾を得たうえで実施した。また、個人の識別が生じないように配慮している。

この紀要で使用するにあたり、加賀市とたちばなこども園に許可を得ている。

表3 事例 『つかまえた!!あれっ!?!』<sup>3)</sup>

<p>&lt;事例1&gt; 題名『つかまえた!!あれっ!?!』</p>	<p>0歳児</p>
<p>[背景]</p> <p>午睡後、日差しが強いためブラインドを閉めてあるが、その高さ、日差しの強さ、トンネルの位置など、いろいろな条件が重なると、カーペットに“赤い影”が出現することがある。その“偶然”を、こどもたちはどのように受け止めるのかな…と、思いつつ機会をうかがっていると、K児が“赤い影”に気づきやってきた。K児は高月齢で好奇心旺盛、すぐに行動に移す。</p>	
<p>エピソード記録（環境と援助を含む）</p>	
<p>K児が赤い影に気づき、そばに寄ってきてしばらく見ていた。寝起きなので、まだ少しぼんやりしていたが、だんだんと笑顔になり、様子を見ている保育者に気づくと、「おおっ!」と“赤い影”を指さし笑いかけた。そして、“赤い影”に顔を近づけると、虫でも捕まえるように、パッと手で“赤い影”を捕まえ、得意顔で手を開いた。があるはずの“赤い影”がないので、ハッと口を開き、保育者を見た。「あれっ!?!赤い影がないね」と保育者が言うと、“赤い影”を見て、指さして笑い、また、勢いよく“赤い影”を捕まえて手を開いた。ところが“赤い影”はまたいないので、保育者を見て笑った。</p> <p>「Kちゃん、赤い赤いなかった?」と言うと、今度は“赤い影”の上にゆっくりと手をのせて、止まった。が自分の手の甲が赤くなっていることに気づき、慌てて手を背中にくっつけて隠し、苦笑いのような笑みを浮かべた。そしてそっと手を出してみても、赤くないことがわかると、保育者を見て笑った。「あれっ!?!赤い赤いどこ行った?」と声をかけると、再び“赤い影”に触れ、今度はカーペットをむしり取るようにするが、そのたび自分の手に“赤い影”が映ると手を引っ込めては手を見て、赤くないのを確認しながら、また“赤い影”に手を伸ばすことを繰り返していた。</p> <p>その動作に合わせ、「つかまえた!!」「あれっ!?!いない」「Aちゃんのおててにいったかな!?!」など声をかけ笑っているとA児もやってきて、K児と同じ動作をして2人で笑い合いながら『あれ!?!』らしき言葉を発していた。保育者も一緒に顔を合わせ笑っているうちに、おやつ時間になり、一緒にその場を離れた。</p>	
<p>[考察]</p> <p>いつもはないものを見つけ“なんだらう?”と思ったら、触れたい、手に取りたい、遊びたい…という欲求が生まれ積極的に挑んでみたものの、“実在する物体”ではなく“影という現象”に戸惑う様子が伝わった。また、自分の手に赤い色がうつったことで、驚きと怖さも感じたのではないかと思われる。</p> <p>いろいろな方法、思いで影に挑み、自分の思い通りにはいかないもどかしさ、不思議さなど感じながら、保育者や友達と一緒に楽しめてよかった。</p>	



〔省察〕

0歳児という小さい年齢でも、“これは何だろう”“不思議だなあ”という『科学の心の芽生え』があり、そのタイミングを逃さずに、思いを共有することができてよかった。また、K児の行動、表情を見守り、思いを読み取りながらその都度、言葉に置き換えて声をかけることで、K児が安心した環境の中で“なんだかおもしろいぞ”と興味を持つことや、“なんとか捕まえたい”という意欲に繋がったのではないかと思われた。今後もこどもたちが安心して周りの様々な環境に好奇心を持ち、自らが意欲的にかかわりをもっていけるよう、信頼関係・愛着関係を築き、主体的に生きていく土台を作っていきたい。また、何度か同じように影で遊ぶことがあったが、いつも同じやり取りになっていたため、遊びが広がるよう保育者間でアイデアを出し合っていたらよかったと感じた。

(出所：加賀市保育実践研修会資料を元に筆者作成)

## 2) カンファレンスを通してみえてきた心の動き

表4 カンファレンスを通してみえてきた心の動き

子どもの行動・思い	心の動き	
これなんだろう？気になる！	興味・関心	
先生見て！おもしろいもの	保育者との共有	
つかまえてみたいなあ	好奇心	探究心の芽生え 試行錯誤 
どこにいった？！	疑問・不思議	
先生！ないね～？あった～ やっばりないね～？！	保育者との共感	
よしっ！つかまえてみよう！ 今度こそつかまえてみよう 次はゆっくり手をのせてみよう	試す	
あれ！？ない！？	うまくいかない	
手が赤くなっちゃった！ どうしようこわい	驚き・不安	
くっついてなかった	安心	
よかったあ	保育者との共感	
でも、やっばり触りたい！	意欲	探究心の芽生え 試行錯誤 
こわいけど…つかまえない	驚き・不安	
あ～くっついてなかった	安心	
楽しいね	友達と保育者との共有	
あ～おもしろかった！	充実感・満足感	次への意欲 新たな好奇心・探究心

(出所：加賀市保育実践研修会資料を元に筆者作成)

たちばなこども園では、園内研修でカンファレンスを行い、事例をもとに子どもの行動から思いを想像し、心の動きを読み解いている。0歳児であっても、好奇心や探究心がしっかり芽生えていることがわかる。このような豊かな愛着関係を土台に、自ら行動を起こし、様々な心の動きを子どもが感じる必要があると考える。

また、カンファレンスを通して、「心が見えてくる」という経験は保育者にとって必要であろう。日々の保育の忙しさの中で、子どもの行動や思いを見るだけで終わってしまえば、子どもの成長の芽を伸ばすことは難しい。子どもの非認知能力を育成する鍵は特定の保育者ではなく、若手から園長先生までが同じ目線で語り合い、保育者として向上心がもてる園の環境が必要である。

## V まとめ・今後の課題

乳児から、非認知能力は育っていく。話せなくとも、様々な心の動きがあり、好奇心や探究心もある。乳児期から、愛着関係を大切にし、子どもが安心して活動できる環境を用意し、丁寧に子どもの経験の意味を読み取っていくことで、非認知能力を育成することができると考えられる。

保育者は非認知能力に対する知識はもとより、保育記録や園内研修を活用して、園内の保育者全員で同じ目線で語り合い、学び合う必要がある。今からの時代、子どもの育ちを可視化して説明する力が求められる。見えない力を読み取る力を身につけていくために、養成校でどのような学びが必要であるかを研究をしていきたい。

最後に今回の研究ノートに、事例を提供していただいた、たちばなこども園に感謝し研究を発展させていきたい。

## 引用文献・参考文献

- 1) 佐々木晃 (2018) : 0～5歳児の非認知能力. チャイルド本社. 18
- 2) 東京大学 Cedep2021年度文科省委託調査. 非認知能力の育ちを支える幼児教育 園の取り組み事例集78 ([https://cedep.meclib.jp/cedepmext2021\\_casestudies/book/index.html#target/page\\_no=1](https://cedep.meclib.jp/cedepmext2021_casestudies/book/index.html#target/page_no=1)). 2025.12.7取得.
- 3) 加賀市 (2025) : 加賀市保育実践研究会. 8-9.

# 金城大学短期大学部紀要投稿規程

(趣旨)

第1条 この規程は、金城大学短期大学部紀要編集委員会規程第6条の規定に基づき、金城紀要（以下「紀要」という。）への投稿資格、投稿内容等に関し必要な事項を定めるものとする。

2 紀要は、金城大学短期大学部（以下「本学」という。）の専任教員及び非常勤講師の研究活動を総合的に反映した定期刊行物とする。

(投稿資格)

第2条 紀要に投稿できる者は、原則として本学の専任教員及び非常勤職員とする。ただし、筆頭著者以外で連名となっている共同研究者及び金城大学短期大学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）が特に認めた者は、この限りでない。

(投稿内容)

第3条 紀要に投稿できる論文等は、和文又は英文等の外国語による未発表かつ未投稿のものであって、次のいずれかに該当するもの（以下「論文等」という。）とする。

(1) 原著論文 新規性及び独創性があり、学術的又は社会的に価値のある研究成果を記述した論文

(2) 研究ノート 研究の中間報告又は実証的、技術的、事例的な問題についての有用な結果の報告等

(3) 芸術的創作 近年制作した作品に解説等を付したもの

(4) その他 内外の関係図書についての批評、著作権等をクリアした文学作品の翻訳その他前3号に該当しない原稿で、委員会が適当と認めたもの

(投稿申込み)

第4条 投稿しようとする者は、あらかじめ指定された申込期日までに所定の申込書に必要な事項を記入し、委員会に提出しなければならない。

(投稿数等)

第5条 筆頭著者として同一の紀要に投稿できる論文等の数は、1編に限る。ただし、委員会が特に認めた場合は、この限りでない。

2 投稿しようとする者は、あらかじめ指定された提出締切日までに別に定める論文執筆要領に従って原稿を作成し、委員会に提出しなければならない。

(倫理上の配慮)

第6条 研究の遂行に当たっては、倫理上の配慮がなされ、その旨が本文中に明記されていなければならない。

2 倫理上の配慮に関する審査の要否については委員会が行い、必要あるときは金城大学短期大学部研究倫理委員会の審査を受けなければならない。

(著作権)

第7条 紀要に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属する。ただし、紀要に掲載された論文等の電子情報は情報公開することを前提としており、著者はこれを承認しなければならない。

(所管)

第8条 論文受付等の事務は、図書館が行う。

(補則)

第9条 この規程に定めるもののほか、論文執筆要領等紀要の編集に関し必要な事項は、委員会において別に定める。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、教授会の議を経て学長が行う。

附 則

1 この規程は、平成27年5月26日から施行する。

2 金城大学短期大学部紀要投稿規程（平成24年10月23日改正施行）は、廃止する。

附 則

この規程は、令和2年3月27日から施行する。

令和 8 年 3 月 10 日 印刷

令和 8 年 3 月 10 日 発行

## 金城大学短期大学部紀要 第 50 号

発行者 金城大学短期大学部  
学長 加藤 博

編集者 金城大学短期大学部紀要編集委員会  
委員長 本山二郎  
委員 柴田英登・瀬戸就一  
砂田葉子・高田達也

発行所 金城大学短期大学部  
〒924-8511 石川県白山市笠間町1200番地  
TEL 076-276-4411

印刷所 田中昭文堂印刷株式会社  
〒920-0377 石川県金沢市打木町東1448番地  
TEL 076-269-7788

# KINJO BULLETIN

No. 50

March 2026

On the Publication of *The Kinjo Bulletin*, Issue 50: A Review of *The Kinjo Bulletin*, Issues 1–49  
..... KATO Hiroshi ..... 1

## **Special Project for the 50th Issue — Hakusan City: Community Engagement**

### **Artistic Productions**

A Practical Exploration of Digital Kamishibai for Presenting Regional Cultural Content:  
Life in the Kaga Domain and the Castle Town of Kanazawa ..... ARAI Hiroshi ..... 37

### **Articles**

Art Experiences in “Oyako no Hiroba Asagao”: Transformations and Continuities Over 23 Years  
..... MORITA Yukari ..... 43

Rediscovering the Potential of the Tedoru Canyon Cycling Road as a Tourism Resource  
..... YAZAWA Tateaki ..... 53

A Study of Youth Groups Supporting Local Communities: The Case of the Torigoe Wakamono no Kai  
..... WAKATSUKI Hironobu ..... 63

### **Notes**

Kaga Ichinomiya Art Project: A Report on Artistic Practice and Regional Collaboration  
..... OHBA Shinnosuke ..... 73

The Relationship between the KINJO Parent-Child Plaza Tanbarin and Hakusan City  
..... YONEKAWA Shouko ..... 81

Student Volunteer Activities in Hakusan City and Nomi City:  
The Miura Seminar and the Regional Exchange Research Group ..... MIURA Satoshi ..... 85

### **Others**

KINJO BIJUTSU × Rotary Club of Hakusan: Creating Works that Leverage Local Characteristics  
..... HORI Kazuhiro ..... 95

“The Yellow Shinkansen Comes to Hakusan City”:  
Picture Book Reading Initiatives in Hakusan City and the Creation of a Shinkansen Photographic Picture Book  
..... ISHINO Tomoko ..... 99

### **Artistic Productions**

Design Proposal for the Cover of Kinjo Bulletin No. 50 ..... OHBA Shinnosuke ..... 107

Kanazawa Minkei ..... YAMAMOTO Shu ..... 111

Japanese Painting Production through Dialogue with the Motif ..... SAKAI Ayako ..... 113

### **Articles**

Functional Manga and AI-Assisted Support for Regional Resource Communication:  
A Conceptual Framework and Preliminary Classification  
..... ARAI Hiroshi, IDO Takehiro, SETO Shuichi ..... 117

### **Notes**

Record of Lye Fermentation with Natural Indigo (2) ..... GONDA Yoshiko ..... 125

Comparing Textbooks for Early Childhood Music Education: Comparative Analysis of Featured Songs  
..... UENO Takahiro ..... 135

A Study of the Concept of “Language” in Child Care and Education ..... KITA Shihomi ..... 143

Non-cognitive Abilities of Infants and Young Children: Childcare Workers Who Develop Non-cognitive Skills  
..... MURAKAMI Tomoko ..... 151